

(堆積土) 木根等による攪乱が多い。堆積土は1・2・6層の三層が主体をなし、1・2層は黒褐色土で、前者はシルトを混入し、6層は土器片を含む黒色土である。隣接する31号竪穴住居跡の堆積土にくらべ砂もしくは礫の混入が少ない。

(壁) やや外傾する立ち上がりで、検出面まで20cm～30cmの高さをもつ。北壁東端で段状を呈するが崩壊または木根攪乱によると推察される。南壁No.2カマド寄りに段状の張り出し部分が認められる。

(床) 小礫混りの砂質地山土を床面としているが、生活面は黒色土や焼土が散在し汚れている。

(柱穴) P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>の柱穴状ピットがある。それぞれの規模はP<sub>1</sub>の径18cm×18cm、深さ10cm、P<sub>2</sub> 16cm×19cm、深さ19cm P<sub>3</sub> 24cm×27cm、深さ21cm P<sub>4</sub> 17cm×20cm、深さ10cm P<sub>5</sub> 21cm×25cm、深さ8cm P<sub>6</sub> 27cm×19cm、深さ10cm P<sub>7</sub> 20cm×24cm、深さ16cmあり、P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>は方形、他は円もしくは楕円形のプランとみられる。堆積土は何れも黒色か黒褐色土で柱痕は確認できない。配置的には、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は対角線上に対になり、P<sub>1</sub>—P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>—P<sub>4</sub>間は1.3mと1.1m、P<sub>1</sub>—P<sub>3</sub>、P<sub>2</sub>—P<sub>4</sub>間は1.5m、1.8mある。また、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>は東壁および西壁のほぼ中点を結ぶ線上にあり、1.8m・0.9mの間をもち、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>7</sub>は北壁と南壁の中点よりやや西寄りを結ぶ線上にあり、1.1m・1.2mの間をもち、以上の配列を基本に、更にその組合せも考えられるが明確にしない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 西壁の南端にNo.1カマド 南壁西端にNo.2カマドが位置する。No.1カマドは、燃焼部を若干掘りくぼめて構築した様相であるが明確ではない。左袖は遺存せず、右袖は、No.2カマドに類似し壁を利用したものかと考えられるが確証はない。煙道は約60cm西にのびる幅35cm、深さ15cmの溝状を呈し検出面から15cmの深さをもつ。

No.2カマド 南壁西端壁外に燃焼部があり床面より約10cmの段差をもち高くなる。間口45cm、奥行85cmが推定され、中央に須恵器環をふせてあり支脚に転用した可能性もある。左袖は壁に続け地山を削り出しその先端に黒褐色土とシルトによる構築部分を含み、右は地山壁である。煙道は燃焼部から緩傾斜で上がり長さ約50cm、幅30cm～50cm、深さ8cmほどで、先端にすぼみ煙出し部の変化はない。その遺存状況からNo.2カマドが新しいかと推察される。

(その他の施設) P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>のピットがある。P<sub>8</sub>は48cm×53cm、深さ5cmの規模で焼土を堆積土の主体とする。P<sub>9</sub>は35cm×45cm、深さ10cmの黒褐色土と上に焼土を堆積土とするピットである。位置とNo.2カマドとの重複状況から、No.1カマド期に属するものかとみられる。P<sub>9</sub>の所属は明らかでない。両ピットの性格は貯蔵穴の可能性はある。

No.2カマド東側の張り出し部は床面と10cm内外の段差をもつ、No.2カマド方向や左袖の削り

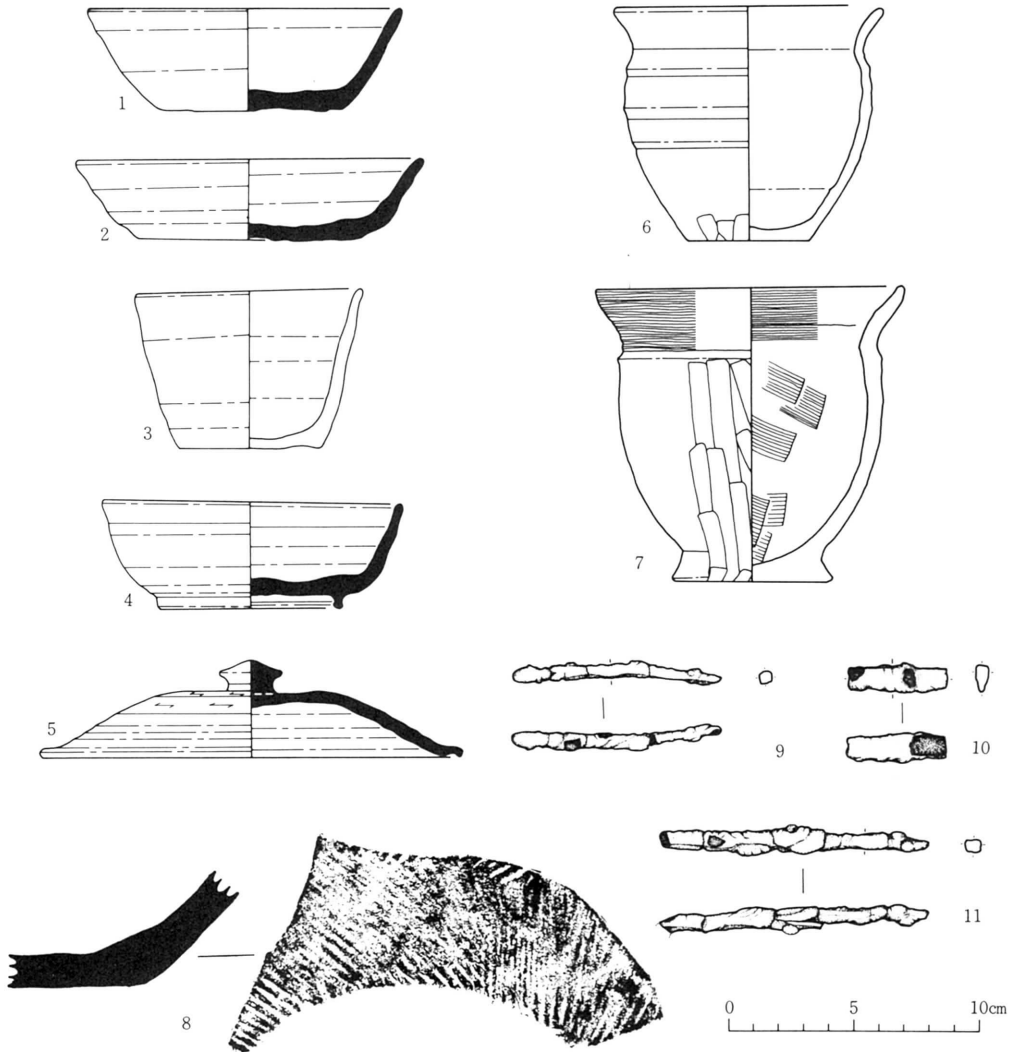
出し状況から、No.2 カマド構築時の掘りこみと推定するが性格は不明である。

出土遺物 (第41図 第28表)

坏形土器4点(台付坏1)、須恵器蓋1点、甕形土器2点、鉄製品3、須恵器拓影図1点、計11点の図示。

坏形土器No.1・2はA類坏。No.3はB類坏である。No.3の器種は本来的には猪口というべきものであろうが、分類区分上では坏として取り扱っている。

No.5は須恵器蓋である。16.8cm径、ツマミを含めた器高は3.9cm。胎土・焼成共良質である。甕形土器No.6・7は、2点共小型を呈する。No.6はロクロ成形。No.7は非ロクロの土師器で



第41図 32号(Lc33-2) 竪穴住居跡出土遺物

ある。後者は木葉底。

鉄製品は床面より5片出土している。図示したのは、そのうちの3点である。詳細は下表を参照されたい。

第28-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	132	A類	ヘラ切	無調整		12.5	7.4	4.1	1.7	3.0	59	
2	133	A類	ヘラ切	無調整		13.8	8.8	3.4	1.6	4.1	52	
3	134	B類	調整のため不明	木口利用のナデ	底部	9.0	5.6	6.4	1.6	1.4	75.5	底部外面に軽いナデ。内面口縁にカーボン付着。(床面上)
4		台付坏	ヘラ切			11.9	8.4 (脚径) 7.2	4.4 (脚高) 0.5				
5	—	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	(16.8)	(フマミ径) 2.5	(フマミ高) 1.3				(床面上)

第28-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
			口径	底径	器高	最大脚径	口縁部	体部	口縁部	体部	
6	136	土師器	10.8	4.7	9.4	10.0	ロクロナデ	ロクロナデ 下端ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	(床面出土)
7	137	土師器	(12.4)	6.5	11.9	10.6	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	(西カマド焼土内)
8	—	須恵器	拓影図。体部下端～底部片。平底。白橙色でやや軟質。内面、押圧痕にナデ。(堆積土)								

第28-3表 鉄製品一覽

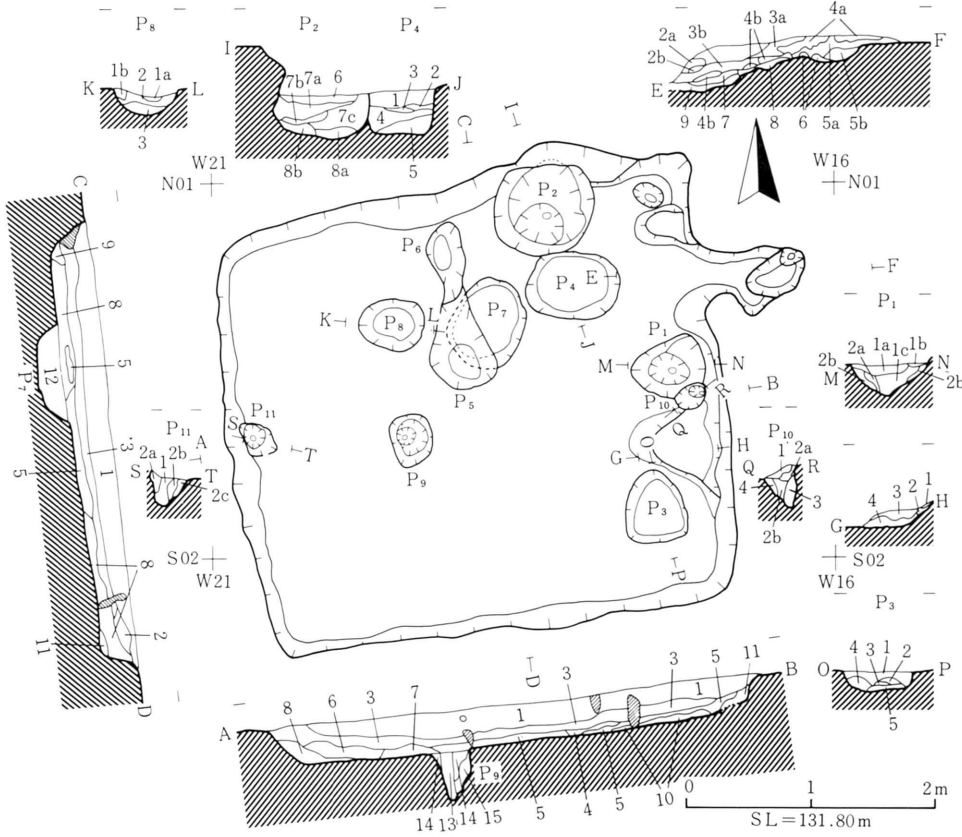
実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法量				断面形状	備考	
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
9	138	角釘	ほぼ完形品	不	良	84.0	5.0	5.0	4.0	方形	(床面)
10	—	刀子	刃部片	鑄の割に残りよし		39.50	10.50	5.0	3.55	楔形	(床面)
11	139	角釘	頭部欠失	やや不良		108.0	—	6.0	12.20	長方形	(床面)
—	140	刀子	刃部片	やや不良		49.20	—	—	4.45	楔形	(床面)
—	—	釘状	端部片	やや不良		56.80	—	—	3.40	長方形	(床面)

33号 (Lj21) 竪穴住居跡 (第42図 第29表 写真図版22・65)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西4m、南北3.5m、面積11.78m<sup>2</sup>で、やや東西に長い方形である。カマド方向軸はN-84°-Eとなる。

(堆積土) 1層の黒色土、3層の黒褐色土、5層の黒色土が堆積土の主体をなし、1層は混入物がほとんどなく、3層で粒状のシルトと炭を、5層では焼土とシルトの混入と土器片を包



A-B C-D

1	10YR 5/2	黒色土	混りはトスロなし
2	"	"	シルトが粉状で全般に
3	10YR 5/2	黒褐色土	" " 炭混る
4	10YR 5/2	黒色土	粒状の焼土を含む
5	"	"	焼土、シルト混入土器片含む
6	10YR 5/2	黒褐色土	黒色土シルト混合
7	10YR 5/2	"	"
8	10YR 5/2	黒色土	"
9	10YR 5/2	黒褐色土	黒色土シルト混合 焼土粒極少
10	10YR 5/2	黒色土	黒色土焼土混合 炭多量に含む
11	10YR 5/2	黒色土	黒色土シルト混合
12	5YR 5/2	極暗赤褐色土	シルト黒色土焼土混合 土器片含む、固い、P <sub>1</sub> 埋土
13	5YR 5/2	黒褐色土	炭、土器細片、やわい P <sub>1</sub>
14	7.5YR 5/2	"	黒色土シルト混合 炭含む
15	7.5YR 5/2	"	黒色土シルト混合 シルトブロック混入、炭 埋土

E-F

1	7.5YR 5/2	黒褐色土	粒状焼土、炭極少
2a	"	"	粒状焼土、シルト若干
2b	10YR 5/2	"	2a層より暗い
3a	7.5YR 5/2	"	黒色土シルト混合 焼土混入
3b	7.5YR 5/2	"	黒色土シルト混合 3a層よりシルト多、焼土少
4a	5YR 5/2	暗赤褐色土	焼土 部分的に赤褐色焼土あり
4b	"	"	焼土 4a層よりやや明、炭極少
5a	7.5YR 5/2	黒褐色土	"
5b	"	"	5a層よりやや明
6	7.5YR 5/2	灰褐色土	シルト
7	5YR 5/2	極暗赤褐色土	焼土
8	7.5YR 5/2	黒褐色土	炭を含む
9	"	"	焼土、炭を含む
9	"	"	黒色土シルト混合 炭極少

G-H

1	7.5YR 5/2	黒褐色土	"
2	10YR 5/2	褐色土	シルト
3	10YR 5/2	暗褐色土	シルト黒色土混合
4	7.5YR 5/2	"	シルト

I-J

1	7.5YR 5/2	暗褐色土	焼土シルト混合 焼土粒全般に混入
2	10YR 5/2	"	シルト 炭若干
3	10YR 5/2	黒褐色土	焼土シルト混合 焼土粒含む
4	7.5YR 5/2	"	シルト シルトブロック混入、焼土粒点在
5	10YR 5/2	"	焼土シルト混合 シルト多、粒状焼土、炭多量
6	10YR 5/2	黒色土	シルト シルトブロック点在
7a	10YR 5/2	黒褐色土	シルト 汚れている、焼土、炭を含む
7b	10YR 5/2	褐色土	シルト 炭、多量
7c	10YR 5/2	黒褐色土	シルト 焼土粒多数、炭含む
8a	10YR 5/2	"	焼土粒若干、シルト混在
8b	"	"	焼土ブロック含む

K-L

1a	7.5YR 5/2	黒褐色土	焼土黒色土混合
1b	"	"	焼土黒色土混合 焼土粒若干
2	7.5YR 5/2	暗褐色土	焼土シルト混合 焼土粒若干
3	5YR 5/2	暗赤褐色土	焼土 炭を含む

M-N

1a	10YR 5/2	黒褐色土	赤褐色焼土粒多数、炭含む
1b	"	"	焼土粒若干、粉状シルト混入
1c	"	"	シルト 炭若干
2a	10YR 5/2	"	黒色土シルト混合 炭若干
2c	10YR 5/2	"	黒色土シルト混合 2a層より明

O-P

1	5YR 5/2	黒褐色土	黒色土焼土混合 炭、土器片含む
2	7.5YR 5/2	暗褐色土	ブロック状シルト含む
3	7.5YR 5/2	黒褐色土	黒色土シルト混合 シルトの小ブロック含む
4	10YR 5/2	黒褐色土	まだら状に混在
5	"	"	焼土、炭若干

Q-R

1	10YR 5/2	黒褐色土	シルト 汚れている
2a	10YR 5/2	黒褐色土	シルト粉状に混入
2b	10YR 5/2	黒褐色土	2a層より明
3	"	"	焼土粒若干、非常にやわい
4	10YR 5/2	黒褐色土	シルト

S-T

1	10YR 5/2	黒褐色土	しまりなくボソボソする
2a	10YR 5/2	"	シルト粉状に混る
2b	"	"	" " 2a層より固い
2c	"	"	汚れたシルト混る

◎本根等による擾乱

第42— I 図 33号(Lj21)竪穴住居跡

含する。全般に単純な堆積を示すが一部木根等の攪乱がある。

(壁) 比較的良好な遺存であり、やや外傾し立ち上がり検出面までの高さは約30cmである。北壁東半の一部がP<sub>2</sub>構築のため若干北に張り出し、東壁南半には壁内にテラス状に張り出す施設がある。

(床) 地山シルト面をそのまま利用したほぼ平坦な床面を呈し、貼り床等は認められない。

(柱穴) P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>11</sub>が柱穴と推察される。P<sub>9</sub>は床面中央のやや西寄りに位置し、30cm×40cmの長方形の平面で深さ約40cmあり、径10cmほどの柱痕が認められる。P<sub>10</sub>は東壁中央に接し、20cm×25cmの楕円状平面形で深さ約35cm、P<sub>11</sub>は西壁中央に接し、径約25cmの円形で深さ25cmほどである。これらのピットは、東壁と西壁のほぼ中点を結ぶ線上にあり、P<sub>10</sub>とP<sub>9</sub>の間は2.4m、P<sub>9</sub>とP<sub>11</sub>間は1.2mとなる。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半の中央に位置し、燃烧部は若干の落ちこみがある程度で、右袖はほとんど遺存せず、シルトと黒褐色土で構築した左袖のみ認められる。煙道は燃烧部からゆるやかに立ち上がり煙出し部まで含め約80cmの長さで、幅35cm、深さ15cmほどの溝状で煙出し部でやや落ちこむ。検出時に、煙道部にはかなり多量の焼土が露呈していた。

(その他の施設) 多くのピットが床面で検出された。およその規模は、P<sub>1</sub> 径50cmの隅丸三角形の深さ25cm、P<sub>2</sub> 径80cmの円形で深さ40cm、P<sub>3</sub> 径50cm～60cmの隅丸三角形の深さ15cm、P<sub>4</sub> 径55cm×70cmの楕円形で深さ35cm、P<sub>7</sub> 径55cm×80cm楕円形の深さ10cm、P<sub>8</sub> 径40cm×50cmの楕円形で深さ20cmとなる。大半は床面北東部分のカマド周辺に位置し、貯蔵穴的性格も考えられる。なお、P<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>は重複しP<sub>4</sub>が新しい。

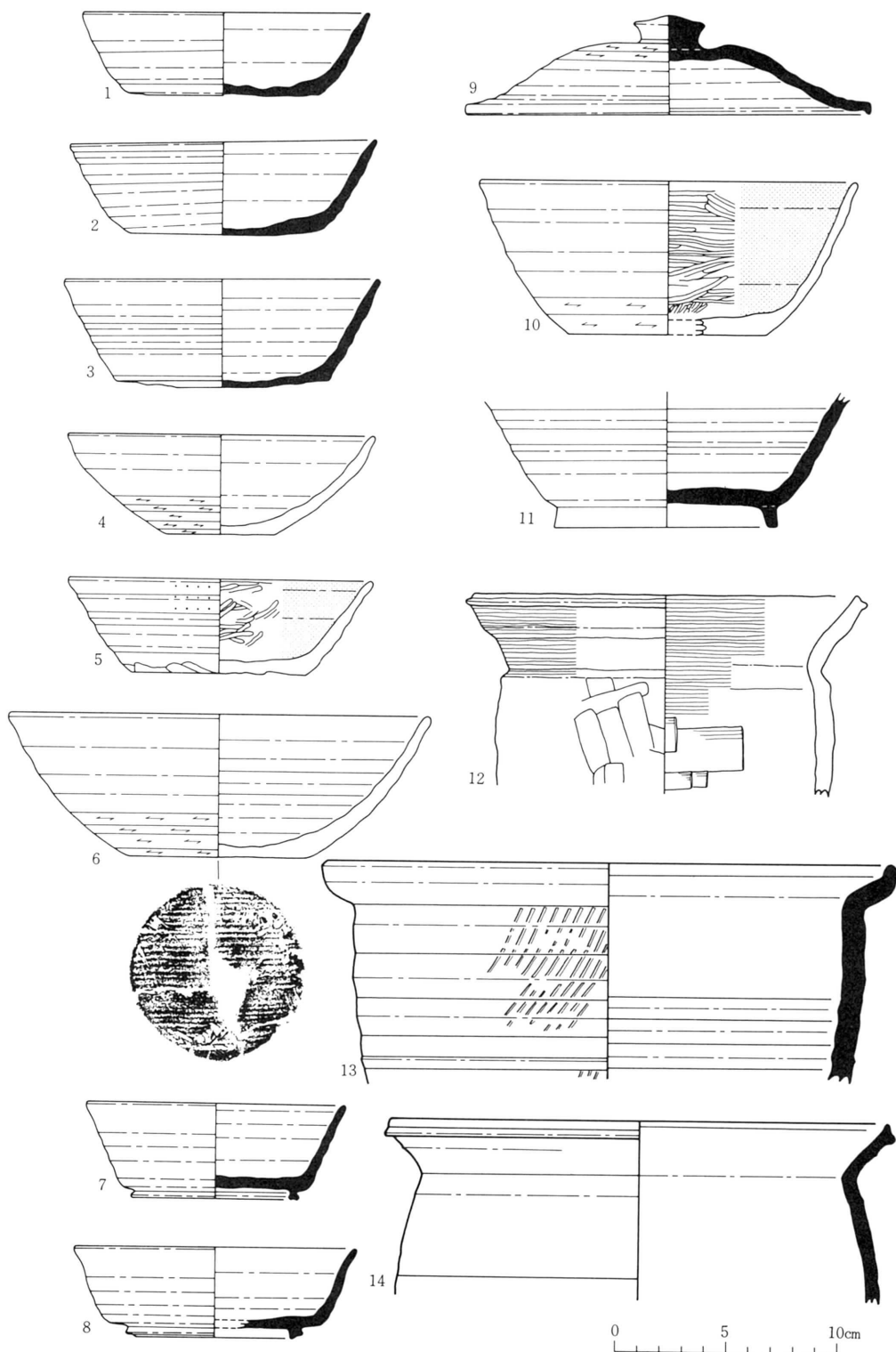
P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は、北壁の midpoint から床面中央に向う線上に乗り、南側のP<sub>5</sub>は床面のほぼ中央に位置する。深さ9cm～10cmと比較的浅いが間仕切りの施設も考えられる。P<sub>5</sub>はP<sub>7</sub>と重複し、より新しい。

東壁中央のやや南寄りに、幅50cmで壁内に50cmほどの台形のテラス状部分があり、床面と約10cmの段差をもち上面は平坦である。この平坦部から約10cmの段差で壁の上端となる。構築土は下に固いシルトと上にシルトと黒色土が攪拌状に混る暗褐色土を用いており、出入り口の施設も想定される。

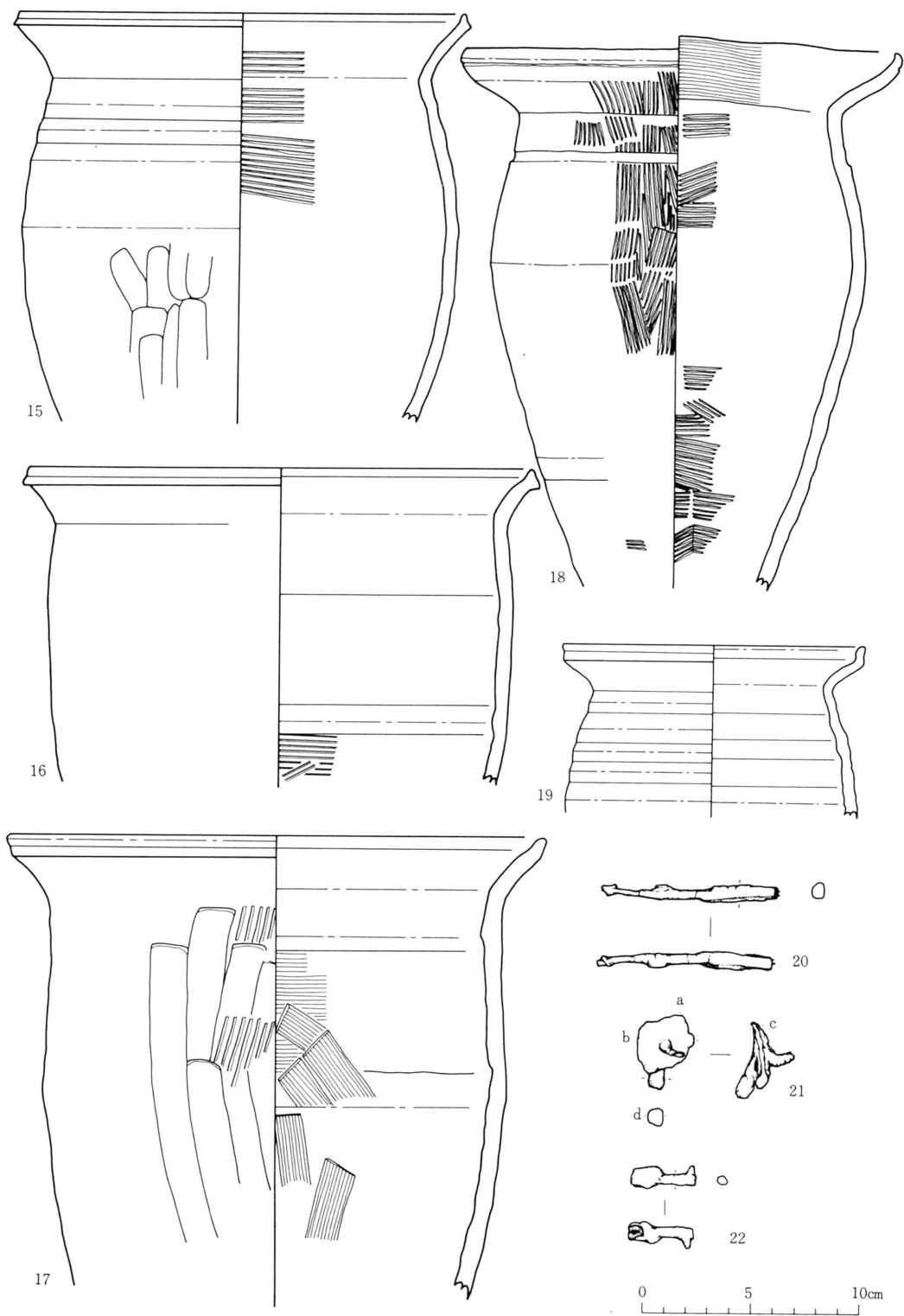
#### 出土遺物 (第42—2・3図 第29表)

坏形土器10点(台付坏3点)、甕形土器8点(土師器6・須恵器2)、鉄製品3点、須恵器蓋1点、合計22点の実測である。

台付坏はNo.7・8・11の3点であるが、何れも須恵器である。小型のタイプ(No.7・8)と大型のタイプ(No.11)の二様がある。前者の切離しはヘラ切に依る。No.11は不明である。



第42—2 图 33号(Lj21)竖穴住居跡出土遺物



第42—3图 33号(Lj21)竖穴住居跡出土遺物

第29-1表 坏形土器 一覧

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(θ°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	141	A 類	ヘラ切	無調整		12.8	8.6	3.8	1.5	3.4	58	(P <sub>3</sub> +床面+カマド付近堆積土)
2	142	A 類	ヘラ切	無調整		13.7	8.2	4.2	1.7	3.3	55.5	底部外面に軽いナデ。(床面+カマド南脇)
3	—	A 類	ヘラ切	無調整		(14.0)	9.4	4.9	1.5	2.9	63	底部外面に軽いナデ。(P <sub>1</sub> 上+堆積土)
4	—	B 類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	(13.6)	4.8	4.5	2.8	3.0	45	(カマド堆積土)
5	—	C 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	(13.6)	7.8	4.3	1.7	3.2	56	(床面)
6	—	B 類	調整のため不明	回転ヘラ削り 木口利用のナデ	体部下端 ~底部	(18.8)	7.8	6.4	2.4	2.9	49.5	内面に少量のカーボン付着。木口利用のナデは底部のみ。(堆積土)
7	—	台付坏	ヘラ切			(11.6)	8.0 (脚径) 7.4	4.3 (脚高) 0.4				(堆積土)
8	—	台付坏	ヘラ切			(12.6)	(9.4) (8.0)	4.1 0.5				(床面+P <sub>8</sub> )
9	143	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体 上 部	18.0	(7.7±0.3) 3.2	4.5 (7.7±0.3) 1.3				(南袖付近+カマド付近堆積土)
10	—	C 類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	(16.8)	(9.0)	6.9	1.9	2.4	60	(堆積土)
11	—	台付坏	不 明			—	(10.0) (10.0)	— 0.9				(P <sub>2</sub> 上)

第29-2表 甕形土器 一覧

実測図番号	写真番号	種 別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大脚径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
12	—	土師器	(18.0)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	非ロクロ。反転復元。肩部有段。(床面)
13	—	須恵器	(25.9)	—	—	—	ロクロナデ	叩目あり	ロクロナデ	ロクロナデ	長胴。(北東隅堆積土)
14	—	須恵器	(23.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白・硬質。一部黄橙色。(ピット内)
15	—	土師器	(21.0)	—	—	(20.0)	ロクロナデ	ロクロナデ +ヘラケズリ	ロクロナデ 一部カキ目	カキ目 一部ヘラナデ	浅黄橙色。(ピット内)
16	—	土師器	(24.0)	—	—	(21.5)	ロクロナデ	ロクロナデ +ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ 一部カキ目	輪積痕。(ピット内)
17	—	土師器	(25.0)	—	—	(21.5)	ロクロナデ	叩目 +ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	胎土粗。(床面)
18	—	土師器	(20.5)	—	—	17.4	ヨコナデ +刷毛目	刷毛目、下端 ヘラケズリ	ヨコナデ	刷毛目	非ロクロ。(床面+カマド+堆積土)
19	—	土師器	(14.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	内面一部黒変。(床面)

第29-3表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種 別	残 存 部 位	遺 存 状 態	法 量				断 面 形	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
20	—	不 明	端 部	やや不良	80.50	7.0	3.0	3.80	長 方 形	釘TorNo21の可能性もありうる。(床面)
21	—	紡錘車	軸 部 分 一 部 欠 失	やや不良	a…35.0	b…26.0 d…6.80	c…3.0	7.35	d…方 形	板部分は不正方形。(3層)成分分析試料
22	—	不 明	端 部 片	比較的良好	29.50	4.50	4.50	1.90	方 形	先端部曲がる。
—	—	釘 状	破 片	不 良	—	—	—	3.75	方 形	木片付着。(床面)



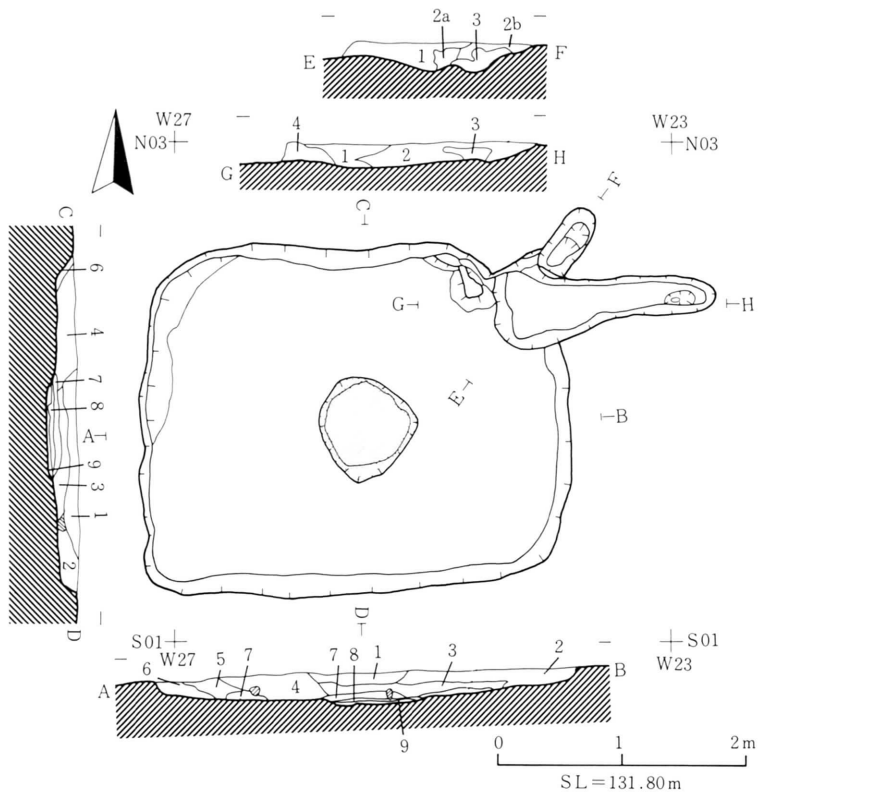
須恵器蓋は図示したNo.9の他に、堆積土中から別個体の破片が出土している。No.9の口径は18cm、ツマミを含めた高さは4.5cm位の大きさである。

他A・B・C類、甕形土器、鉄製品等については、第29表を参照されたい。なお、これらの他に堆積土中から球胴形を呈す土師器片、床面からへら切A類坏底部片、焼土ピット内からはロクロと非ロクロ成形の土師器体部片等が出土している。

### 34号 (Lj27) 竪穴住居跡 (第43図 写真図版22)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.45m、南北2.7m、面積7.96m<sup>2</sup>、東西に長い長方形を呈し、カマド方向軸はN-89°-Eである。



A-B C-D			
1	7.5YR5	黒褐色土	シルト少量
2	7.5YR5	極暗褐色土	シルト多量に含み固い
3	7.5YR5	黒褐色土	シルト少量
4	7.5YR5	極暗褐色土	シルト少量、固く2層に類似
5	7.5YR5	暗褐色土	シルト 腐植質土混入
6	7.5YR5	" "	シルト 5層より腐植土多
7	7.5YR5	黒褐色土	" "
8	5YR5	極暗赤褐色土	焼土 焼土、炭を含む
9	7.5YR5	黒褐色土	" "

◎ 木根等による攪乱

E-F			
1	7.5YR5	黒褐色土	シルトを多く含む
2a	7.5YR5	" "	" "
2b	" "	" "	2a層より固い
3	7.5YR5	" "	" "
G-H			
1	7.5YR5	黒褐色土	E-F、1層と同じ層
2	7.5YR5	" "	" "
3	7.5YR5	" "	シルト少量含む
4	" "	" "	シルト、焼土をブロック状に含む

第43—I図 34号 (Lj27) 竪穴住居跡

(堆積土) 三大別できる。1・3層の少量のシルトを含む黒褐色土、2・4層の多量のシルトを全般に含み固くしまりのある極暗褐色土、5・6層の暗褐色シルトである。1層は中央付近に楕円状に広がり周囲に2・4層がある。また、2・4層のほとんど同類の堆積土間に3層が入り、これらは、あまり時間差のない堆積と考えられ、人為的な可能性もある。西壁北半から北壁沿いの一部にみられる5・6層は壁の崩壊土と推察される。

(壁) 西壁の北半は崩壊している。外傾する立ち上がりで検出面までの高さは10cm～15cmほどあり、一般に東側が低い。

(床) 地山シルト面を利用し中央へ向けやや低くなる。中央に80cm×85cm範囲の薄い焼土の堆積があり、その下は約3cmの浅い落ちこみになる。

(柱穴) 認められない。

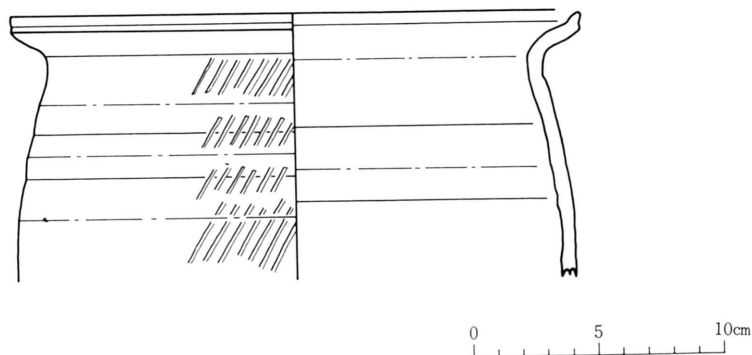
(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北端に約1.75m 東にのびる溝状の掘りこみがあり、壁側のふくらみ部分が燃焼部相当で他は煙道と煙出しとみられ、カマドと推察されるものがある。しかし、堆積土中には焼土、炭とも検出できず、北東隅にシルトと焼土をブロック状に含む黒褐色土をみるのみで、果してカマドとして機能したのか疑問である。また、北東隅から北東にのびる短かい溝状部分があり、調査時にはカマドの一つの考えたが、後の攪乱穴の可能性が強い。

(その他の施設) 床面中央の浅い落ちこみと薄い焼土の堆積が認められ、地床炉的可能性もあるが、落ちこみの底は火熱をうけたか否か明確でなく、断定はできない。

#### 出土遺物 (第43-2 図)

出土遺物は少なく、実測点数はロクロ成形の土師器 1 点だけである。堆積土中からの出土。推定口径22.8cm大。体部外面に斜位の叩目がある。この他には叩目のある体部片 1、不明細片若干ある程度。



第43-2 図 34号(Lj27)竪穴住居跡出土遺物

35号 (Lj71) 竪穴住居跡 (第44図 第30表 写真図版22・65)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西5.1m、南北5.4m、面積21.6㎡で、やや歪んでいるが正方形に近い形状を呈する。カマド方向軸はN-79°-Eである。

(堆積土) 主体は黒色土と黒褐色土の1・3層で、床面直上に4層の黒褐色シルト質土がある。また、明るいシルト粒を混在する黒褐色シルト質の5層等が壁ぎわにみられ、壁崩壊土の一部かと推察される。総じてレンズ状の堆積を示す。

(壁) 比較的外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは40cm~45cmである。北壁の中央部上半では、半円状に外に張り出したピットまたは棚状の施設があり、東壁南端では壁下半をえぐり掘ったピットが構築され、四壁沿いには周溝を認める。なお、北壁東半には崩壊痕がある。

(床) 掘り方技法による床面構築とみられるが、調査時における湧水がはげしく精査はしなかった。

(柱穴) P<sub>3</sub>~P<sub>6</sub>の柱穴状ピットがある。P<sub>3</sub>は径40cm×38cm、深さ30cmの円形、P<sub>4</sub> 40cm×50cm、深さ30cmの長方形 P<sub>5</sub> 45cm×40cm、深さ21cmの円形 P<sub>6</sub> 35cm×40cm、深さ25cmの円形である。P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は南壁東端および西端から、それぞれ1.3mと1.9mにあり、両ピット間は1.7mであるが、P<sub>3</sub>~P<sub>6</sub>の相互関連は明確にできない。

(周溝) 四壁沿い全体に認められる。ただし南壁沿いは不整である。幅10cm~30cmで深さ10cm~15cmほどを計る。

(カマド) 東壁南半の中央近くに位置する。燃焼部の掘り方埋土上面を火床とし、間口60cm奥行100cmほどであり、中央に伏せた状態で完形の小型甕が検出され支脚に転用したものかと推察され、両袖はシルトで構築されている。煙道はゆるやかに立ち上がり溝状に幅20cm~30cm、深さ7cm~25cmで約80cm東にのび煙出しとなる。煙出しは径45cm×55cmの楕円状で検出面から25cmの深さで、底面は煙道底面より約15cmの段差で低い。

カマド内の堆積土は、両袖の内側に若干の焼土を認めるが、全般に顕著な焼土は認められず黒褐色土とシルトの混合土が支配的である。

(その他の施設) P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>がある。P<sub>1</sub>はカマドの南に隣接し、東壁の下半をえぐって奥に40cmほど掘りこまれ、径130cm×110cmの長形状で深さ20cmで坏三个体分を包含し貯蔵穴と推察する。P<sub>2</sub>は北壁の中央寄り南半に位置し、壁上半部を100cm×120cm、深さ23cm規模で壁外に掘りこんだ半円状の張り出しであり下端が奥に入る浅い袋状を呈する。堆積土は竪穴住居跡堆積土と共通し住居跡に伴うものと確証できる。棚様の貯蔵穴等の機能が考えられるが断定できない。

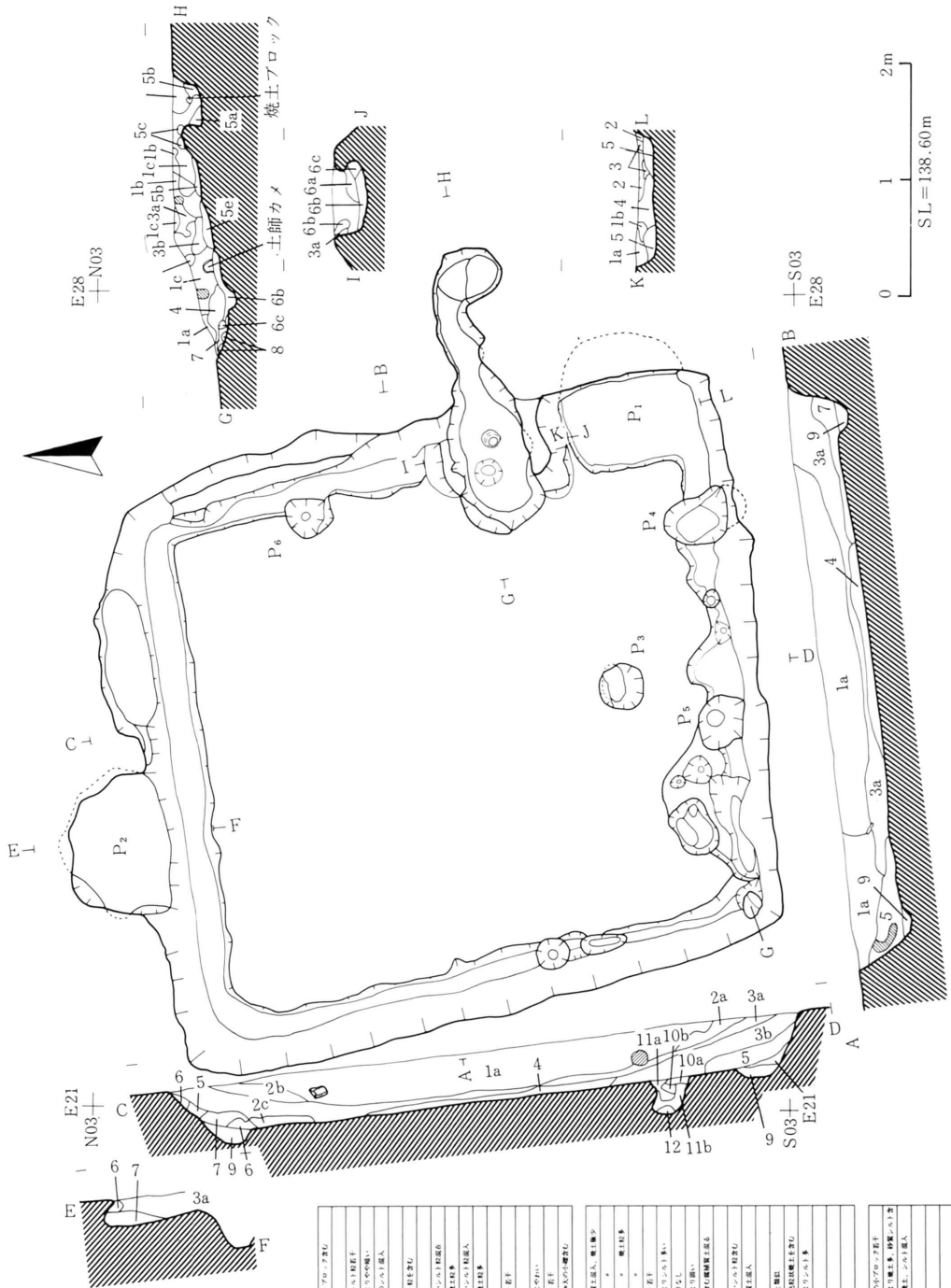


表 44-1-1

1	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
2	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
3	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
4	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
5	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
6	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
7	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
8	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
9	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
10	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
11	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
12	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土

表 44-1-2

1	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
2	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
3	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
4	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
5	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
6	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
7	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
8	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
9	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
10	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
11	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
12	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土

表 44-1-3

1	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
2	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
3	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
4	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
5	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
6	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
7	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
8	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
9	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
10	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
11	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土
12	100%	黄褐色土	100%	黄褐色土

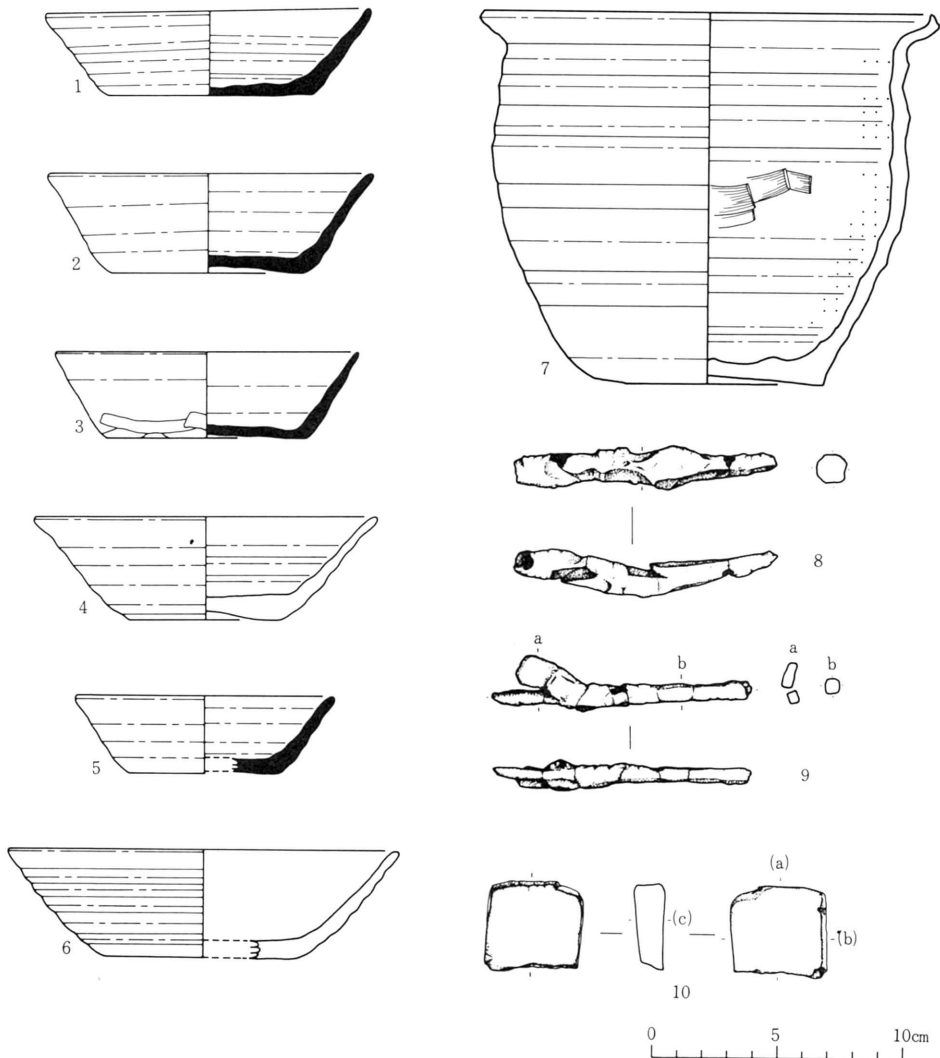
第44-1図 35号 (Lj71) 竪穴住居跡

出土遺物 (第44—2図 第30表)

坏形土器6点、甕1点、鉄製品2点、砥石1点、計10点の実測。この他に、糸切痕を有す須恵器台付坏片がピット内から、また堆積土中からは糸切底部の小型甕片等があるが、特に図示していない。

坏形土器は、No.1・2・3・5のA類、No.4・6のB類がある。C類は1点もみられない。A・B類中で切離しが判明するのはNo.1・2・4・の3点で、何れもヘラ切に依る。他は調整・剥離等で不明である。

甕形土器No.7はロクロ成形の小型甕。器高の割には口径が開いている。内面はロクロナデ痕(一部ヘラナデ)を残しているが、外面は剥離部分が多い。体部下端から底面にかけてヘラ削



第44—2図 35号(Lj71)竪穴住居跡出土遺物

第30表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
8	—	釘 状	頭部欠失	比較的良好	104.0	11.0	11.0	22.40	方 形	やや湾曲 (床面)
9	—	角 釘	ほぼ完成	比較的良好	104.50	b… 6.0	b… 5.50	11.60	方 形	折れた頭部が端部に付着。(床面)

りがみられる。暗赤褐色を呈し、一部にカーボンが付着している。口径18.5cm、底径9.2cm、器高14.9cm、最大胴径16.6cm大。

鉄製品については第30表を参照されたい。

砥石はNo10の1点が出土している。3.5×3.8cm大の方形に近い形をしており、厚さは1cm前後である。携帯用砥石であろう。素材は斜長石流紋岩であり、灰白色を呈す。ただし、部分的にタール状の付着物がみられる。

### 36号 (Mc18) 竪穴住居跡 (第45図 第31表 写真図版23・66)

(重複 改築) 認められない。ただし、現代の用水路によって北壁部が破壊されている。

(規模 平面形 方向) 東西3.4m、南北3.2m、面積9.44m<sup>2</sup>のほぼ正方形に近い平面形で、カマド方向軸はN-90°-Eである。

(堆積土) 三層に大別され、1層の黒褐色シルト質粘質土は全域に厚く堆積し、土器片が多く混入し、焼土粒や褐色土ブロックも少量含まれる。2層も黒褐色のシルト質粘質土で、全般的にみると壁ぎわを除く中央部に堆積し、炭、焼土粒、土器片等を多く混入し人為的堆積の可能性もある。3層の黒褐色土は壁ぎわに堆積する。

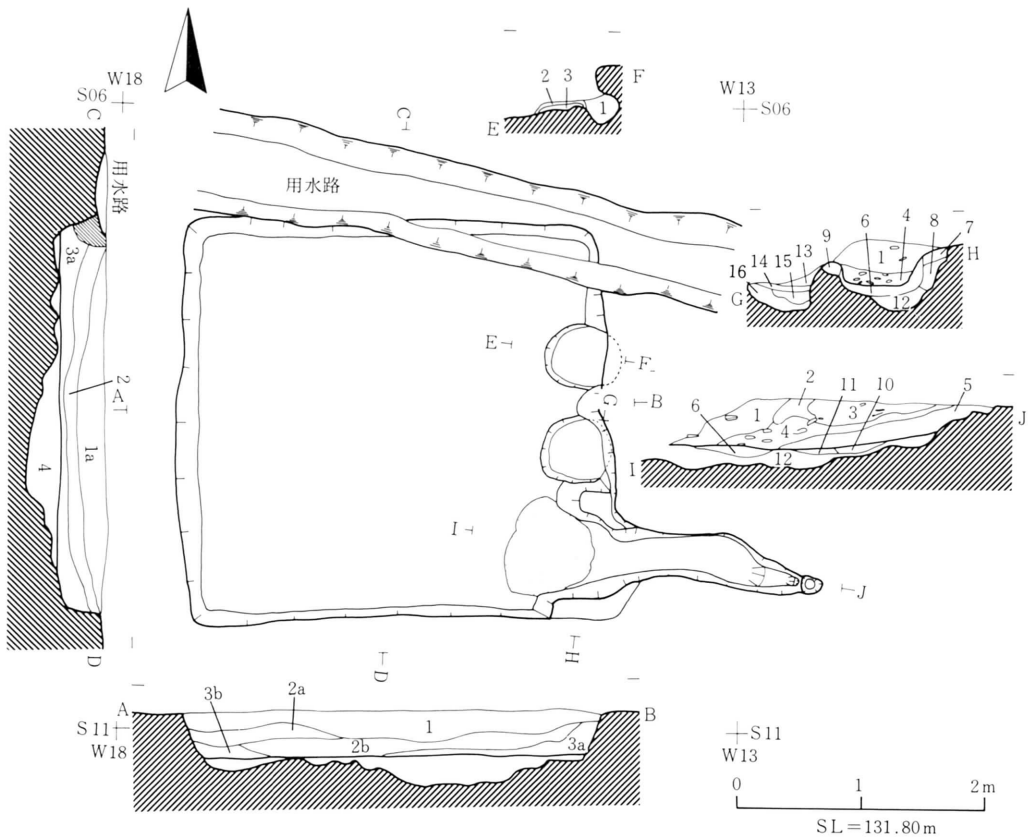
(壁) 垂直に近い立ち上がりで検出面までの高さは約37cmであるが、北壁は現代の溝で上部を破壊されたため約26cmの高さが遺存する。東壁中央寄りの北半で壁内ヘテラス状に張り出す部分が認められる。

(床) 全般的に平坦で固いが、壁ぎわの部分はあまり固い面ではない。床面構築は掘り方技法によって黒色土とシルトの攪拌土を用いている。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の南端に位置し、燃烧部は掘り方に黒褐色土を埋土し、その上面を火床とする。火床面は約50cm×50cmで火熱で固く赤変焼土化し、竪穴住居跡床面とほぼ同じ高さである。左袖は上部を削平されるが、シルト質土を用い構築したもので、右袖は南壁東端に密着し褐色シルトや暗褐色シルト質土を巻いて構築していて、内壁面は火熱による赤変焼土化が顕著である。燃烧部奥壁から、幅25cm、深さ30cm、長さ150cmの溝状の煙道がのび、先端で急な上がりを



A - B C - D			
1	10YR 5 黒褐色土	シルト質土	遺物、焼土粒若土
2a	10YR 5 暗褐色土	黒色土シルト混合	シルト、腐植質土ブロック混在、人跡
2b	10YR 5 暗褐色土	シルト質土	遺物、焼土ブロック、焼土粒混在、人為
3a	10YR 5 " "	黒色土シルト混合	炭混入
3b	" " "	シルト質土	" "
4	10YR 5 " "	黒色土シルト混合	シルトブロック混在固い

E - F			
1	10YR 5 黒色土	褐色シルトブロック混り固い	
2	10YR 5 暗褐色土	黒色土シルト混合	褐色シルトブロック、焼土混り固い
3	" " "	" " "	褐色シルトブロック混る

G - H I - J			
1	5YR 5 黒褐色土	黒色土シルト混合	焼土粒全般に、土器片含む
2	10YR 5 暗褐色土	シルト質土	一部火熱で赤化、煙道大井か
3	10YR 5 暗褐色土	シルト質土	シルト、焼土ブロック少量、土器片含
4	5YR 5 暗赤褐色土	シルト質焼土	土器片多量
5	10YR 5 黒色土	" "	シルト混入、しまり弱い
6	5YR 5 赤褐色土	焼土	焼壁部壁、床の焼土化
7	10YR 5 褐色土	シルト	腐植質土少量混る
8	10YR 5 暗褐色土	シルト質土	シルトブロック混在
9	10YR 5 " "	シルト質土	" "
10	5YR 5 赤褐色土	焼土	固い、煙道府部
11	5YR 5 暗赤褐色土	焼土粒シルト混合	" "
12	10YR 5 黒褐色土	" "	シルトブロック混在
13	5YR 5 暗赤褐色土	焼土	しまり弱い、カマドからの崩れ
14	10YR 5 暗褐色土	シルト質土	焼土ブロック混入
15	10YR 5 黒褐色土	" "	" "
16	10YR 5 暗褐色土	シルト黒色土混合	シルトブロック、焼土粒含む

◎ 木根等による攪乱

第45-1図 36号 (Mc18) 竪穴住居跡

もち煙出しとなる。

(その他の施設) カマド北に隣接し貯蔵穴があり、径50cm、深さ20cmで底面に土器の細片が数片認められた。

東壁中央寄りの北半で、壁から床面に張り出した半円形のテラス状部分があり、床面から緩傾斜で約10cm上がり50cm四方の黒色土とシルト混土で構築した非常に固い面で、出入口等が推察される。

出土遺物 (第45-2図 第31表)

坏形土器 2点、甕形土器 5点、須恵器拓影図 2点、鉄製品 5点を図示している。この他には須

須恵器台付坏片、同蓋片、B類片等が床面上に散見する。須恵器台付坏片の脚高は1.7cm、脚径12cmの大型のものである。

坏形土器はA・C類各1点。No.2はNo.1に比して体部の外反度が強く器高が高い。

甕形土器は4点。No.3・9は非ロクロ成形。No.3は肩部段が明瞭で、巻上げ痕が残る。No.9は調整技法不明の小型品。No.4・5・6はロクロ成形。このうちNo.6は底部が丸底風になるのが特徴。また、これらの3点は何れも口唇部の形が異なり、特にNo.5は須恵器甕のそれに酷似している。No.6の口唇は、外面的にはNo.3の非ロクロ甕に類似しており、No.4は短頸のもので、口唇部に特に凹凸をもたない。

須恵器甕は拓影図の2点。No.7はカマド中の堆積土から、No.8は住居跡内堆積土中からの出土。胎土・技法からみて別個体のものである。

鉄製品は7点の出土であり、そのうちの5点を図示している。角釘様のものと、攝子があるが、不明のものが多。なお、攝子については後掲の別項を参照されたい。

第31-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	—	A類	ヘラ切	無調整		(13.0)	(7.6)	3.6	1.7	3.6	52.5	(堆積土)
2	147	C類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端	14.4	7.2	4.4	1.9	3.0	56.5	(堆積土)

第31-2表 甕形土器一覽

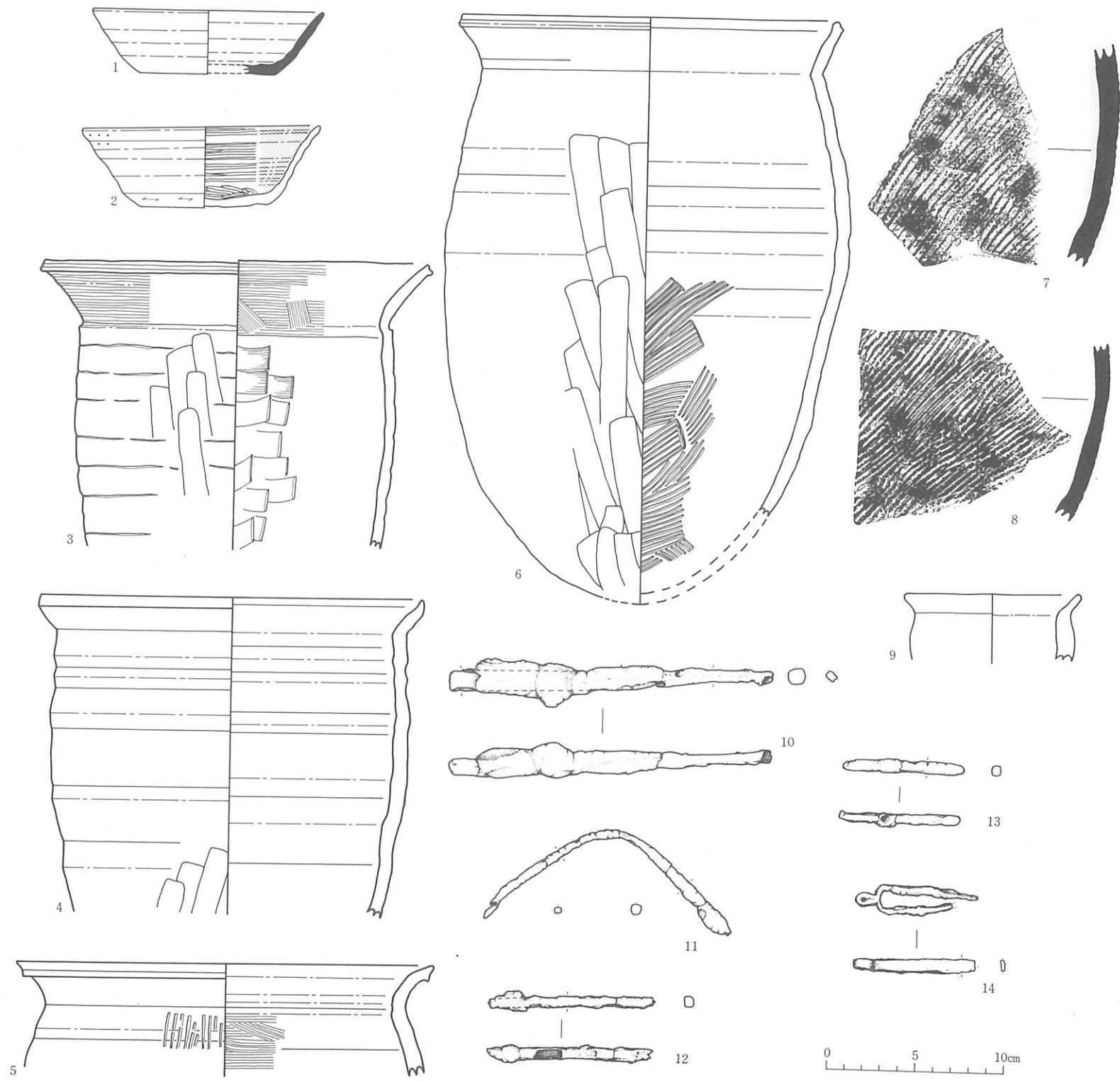
実測図番号	写真番号	種別	法量 (cm)				外面調整		内面調整		備考	
			口径	底径	器高	最大脚径	口縁部	体部	口縁部	体部		
3	—	土師器	(22.3)	—	—	(18.2)	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部有段。巻上げ。(煙道掘り方埋土中)	
4	—	土師器	(21.9)	—	—	(20.5)	ロクロナデ	下ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	短頸。(カマド燃烧部)	
5	—	土師器	(23.8)	—	—	—	ロクロナデ	叩目	ロクロナデ	ヘラナデ?	短頸形の壺か?(堆積土中)	
6	148	土師器	21.8	—	(33.0)	(22.9)	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	木口利用のナデ(刷毛目様)	巻上げ。丸底。(燃烧部堆積土(上部))	
7	—	須恵器	拓影図。外面平行叩目。内面押圧痕上にヘラナデ。(カマド中堆積土)									
8	—	須恵器	拓影図。外面平行叩目(No.7より幅が小さい)。木口利用のナデあり。(住居跡内堆積土中…No.7近辺で出土)									
9	—	土師器	10.0	—	—	(9.3)	磨減	磨減	磨減	磨減	磨減	反転復元。体部の器内が厚い。(煙道掘り方埋土中)

37号 (Me18) 竪穴住居跡 (第46図 第32表 写真図版23・66)

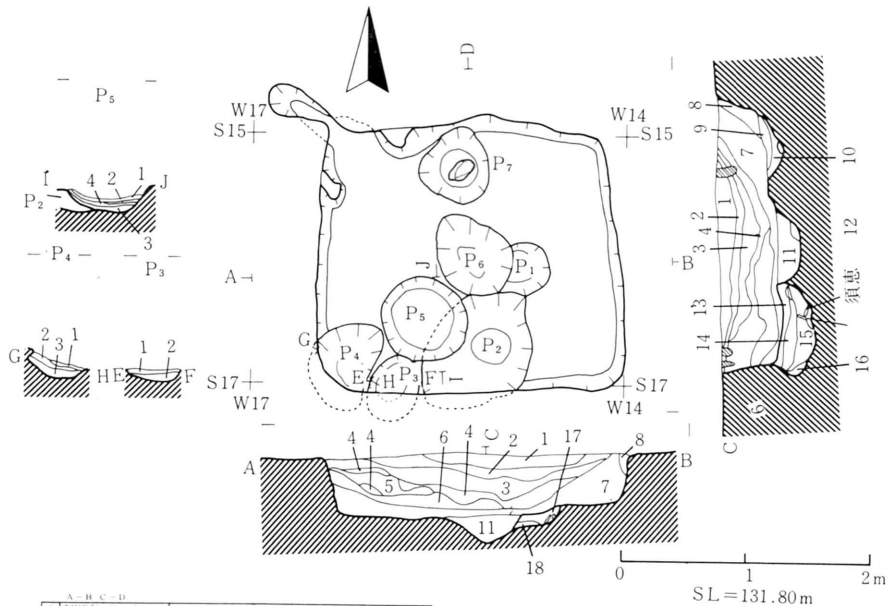
(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西2.4m、南北2.2m、面積4.5m<sup>2</sup>で、やや歪んでいるが、ほぼ正方形に近い。カマド方向軸はN-52°-W、南北方向軸はほぼ真北に近い。





第45—2图 36号(Mcl8)竖穴住居跡出土遺物



A - B - C - D	
1	TSVR土 黒色土 1 土器片含む
2	TSVR土 黒色土 1 粒状の焼土・シルト少量
3	TSVR土 黒褐色土 1 粒状、アゴ・ア灰のシルト・焼土少量
4	TSVR土 黒褐色土 1 灰褐色土のシルト、粒状の焼土少量
5	TSVR土 黒褐色土 1 黒色土シルト混合
6	TSVR土 黒褐色土 1 シルト少量含む
7	TSVR土 黒褐色土 1 アゴ・ア灰のシルト・焼土少量
8	TSVR土 黒褐色土 1 灰少量含む
9	TSVR土 黒褐色土 1 シルト・焼土・灰・土器を含む
10	TSVR土 黒褐色土 1 シルト・黒色土の混合・アゴ・ア灰を含む。焼土若干
11	TSVR土 黒褐色土 1 シルト
12	TSVR土 黒褐色土 1 黒色土少量含む
13	TSVR土 黒褐色土 1 シルト・黒色土を粒状に含む
14	TSVR土 黒褐色土 1 シルト・黒色土をアゴ・ア灰に含む
15	TSVR土 黒褐色土 1 シルト
16	TSVR土 黒褐色土 1 シルト
17	TSVR土 黒褐色土 1 シルト・焼土を粒状に少量・土器含む
18	TSVR土 黒褐色土 1 焼土

E - F	
1	TSVR土 黒褐色土 1 シルト・アゴ・ア灰を含む
2	TSVR土 黒褐色土 1 黒色土シルト混合
G - H	
1	TSVR土 黒褐色土 1 シルト
2	TSVR土 黒褐色土 1 灰・焼色土・シルトをアゴ・ア灰に含む
3	TSVR土 黒褐色土 1 シルト混入
I - J	
1	TSVR土 黒褐色土 1 シルト
2	TSVR土 黒褐色土 1 灰・シルト少量
3	TSVR土 黒褐色土 1 灰・シルト少量
4	TSVR土 黒褐色土 1 シルト・焼土少量

第46-1図 37号 (Me18) 竪穴住居跡

(堆積土) 含有物の量の差異によって、1層から6層までと7層と8層のグループになる。すなわち、前者は6細分されているが、黒色または黒褐色土にシルト粒や焼土粒が少量含まれるもので大差なく、レンズ状の堆積を示し自然堆積と考えられる。後者の中で、7層は黒褐色土にブロック状のシルトと焼土を多量に混在し、他の層より土器の細片が多量に含まれており、8層はシルト混入の灰褐色土である。7・8層の一部は検出面まで達しており一気に埋められた人為的埋土の可能性があり、特に7層では強い。

1層から6層が堆積する範囲は、南と西では壁に接し、東では東壁上端から約13cm、北では北壁上端から約30cmそれぞれ内側になり、外側が7層を主体にする面になる。したがって、7層は東および北側から埋め込まれたものと考えられる。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは40cm~50cmと比較的高い。

(床) 北東と北西隅近くに掘り方がみられるが、他は地山シルトを床面としている。中央から南西隅にピットが密集する。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 北西隅に位置する。燃焼部はシルト、黒色土を用いた側壁残痕があり、地山面を火床としかかなり焼け赤変しており、煙道は約60cmのくりぬきで天井部が崩落していた。

(その他の施設) 7ピットが床面に検出された。それぞれの径、深さは、P<sub>1</sub> 40cm×40cm、10cm P<sub>2</sub> 80cm×100cm、40cm P<sub>3</sub> 35cm×55cm、10cm P<sub>4</sub> 50cm×70cm、15cm P<sub>5</sub> 70cm×70cm、30cm P<sub>6</sub> 60cm×70cm、20cm P<sub>7</sub> 55cm×60cm、20cmであり、円または楕円形を呈する。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は壁下まで掘り込まれており、先後関係の明らかなのは、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>よりP<sub>6</sub>が新、P<sub>2</sub>よりP<sub>5</sub>が新、P<sub>3</sub>よりP<sub>5</sub>が新であり、堆積土状況からは、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>等は上面を貼った状況を呈している。これらのピットは貯蔵穴的性格が考えられる。

### 出土遺物 (第46-2図 第32表)

坏形4点(拓影図1)、甕形土器3点、須恵器壺1点、鉄製品1点、計9点の実測。

坏形土器4点はA類のみ。B・C類は堆積土中に細片がある程度である。また、須恵器の蓋と台付坏の破片もみられるが、これも堆積土中からの出土。

甕形土器はNo.5・6・7の3点。何れもロクロ成形のものである。このうちNo.7は完形品であるが、接合前破片の出土状況は出土地点・層位等からみて一様ではない。口縁・体部破片の多くは住居跡内の床面・堆積土に散在するが、底部周辺は煙道内にあり、更に口縁・体部の一部が第39号(Me27)住居跡内ピット中或るいはカマド右袖内から出土しており、最終的に接合されたものである。また、No.6の体部の一部にもMe27住出土の破片が接合されている。

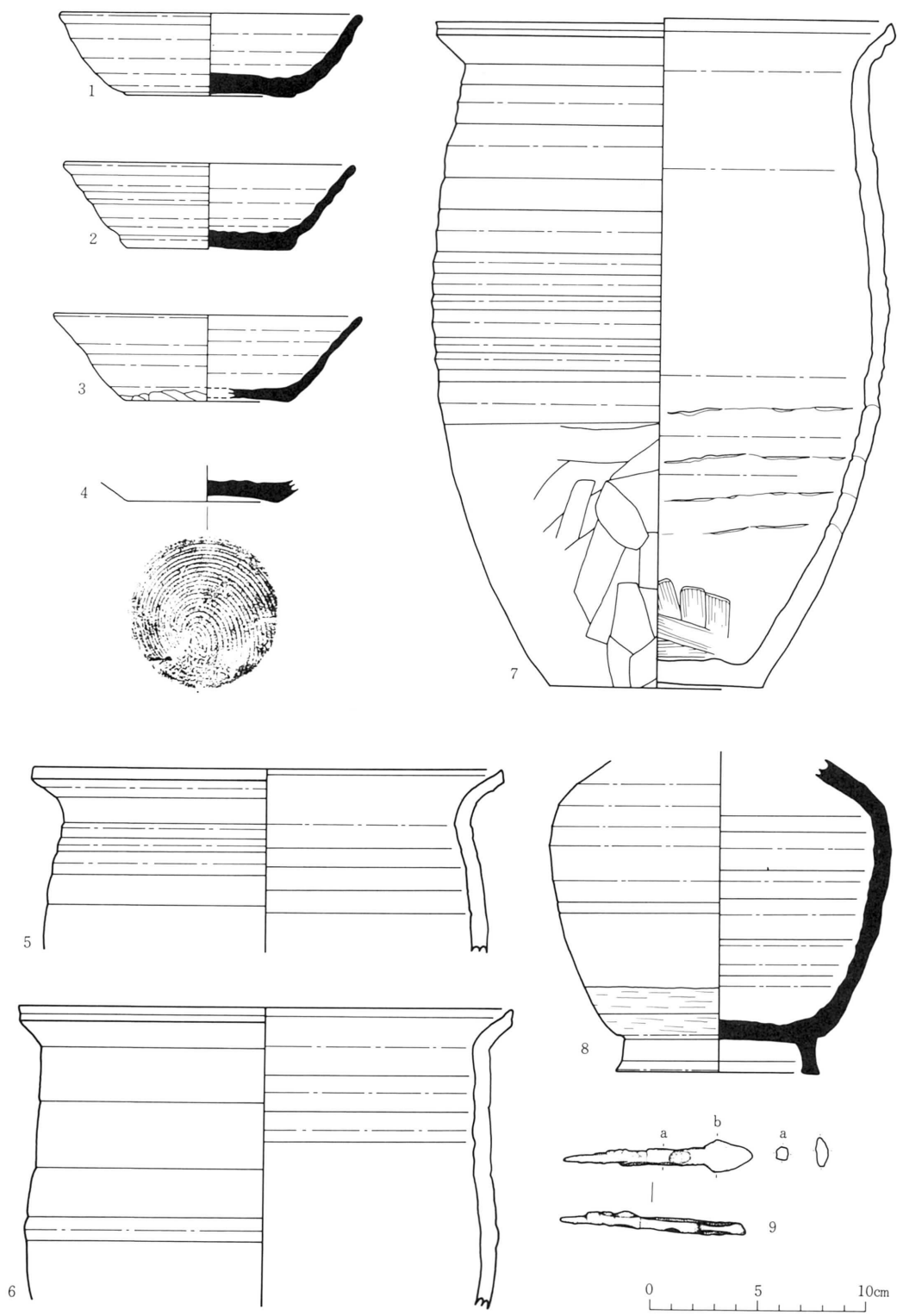
No.8は堆積土下層からの出土。全体が灰黒色を呈す硬質の須恵器。頸部の大半を欠失している長頸壺である。体部上方にロクロナデ、中位に叩目、下方に横位の回転ヘラ削りが施される。

第32-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(θ°)	備考
						口径(a)	底径(b)	器高(d)				
1	151	A類	調整のため不明	手持ヘラ削り	底部	(13.8)	7.6	3.9	1.8	3.5	50.5	(堆積土)
2	—	A類	ヘラ切	手持ヘラ削り	底部	(13.4)	7.6	4.0	1.8	3.4	50.0	
3	—	A類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端~底部	(14.2)	(7.6)	4.0	1.9	3.6	54.0	(堆積土)
4	—	A類	回転糸切	無調整		—	7.0	—	—	—	—	(堆積土) 底部片。

第32-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
			口径	底径	器高	最大胴径	口縁部	体部	口縁部	体部	
5	—	土師器	(22.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。石英粒多い。黒変あり。(床面)
6	—	土師器	(23.0)	—	—	—	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	外面に若干の煤。赤褐色。(床面+堆積土)
7	152	土師器	21.5 ※22.6	10.0	31.2	21.5 ※22.6	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	ナデツケ	巻上げ痕。口~体部に至り。※は最大径。



第46—2 图 37号(Me18)竖穴住居跡出土遺物

内面のナデ痕は木口を利用したものであり、ロクロの回転力を利用して調整しているが、方向の不定な部分もある。

No 9 は鉄製品。最長部8.7cm大の鉄鏃であり、1層からの出土。

38号 (Me21) 竪穴住居跡 (第47図 第33表 写真図版24・66)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3m、南北2.7m、面積7.69m<sup>2</sup>の若干歪んだ方形であり、カマド方向軸はN-83°-Wである。

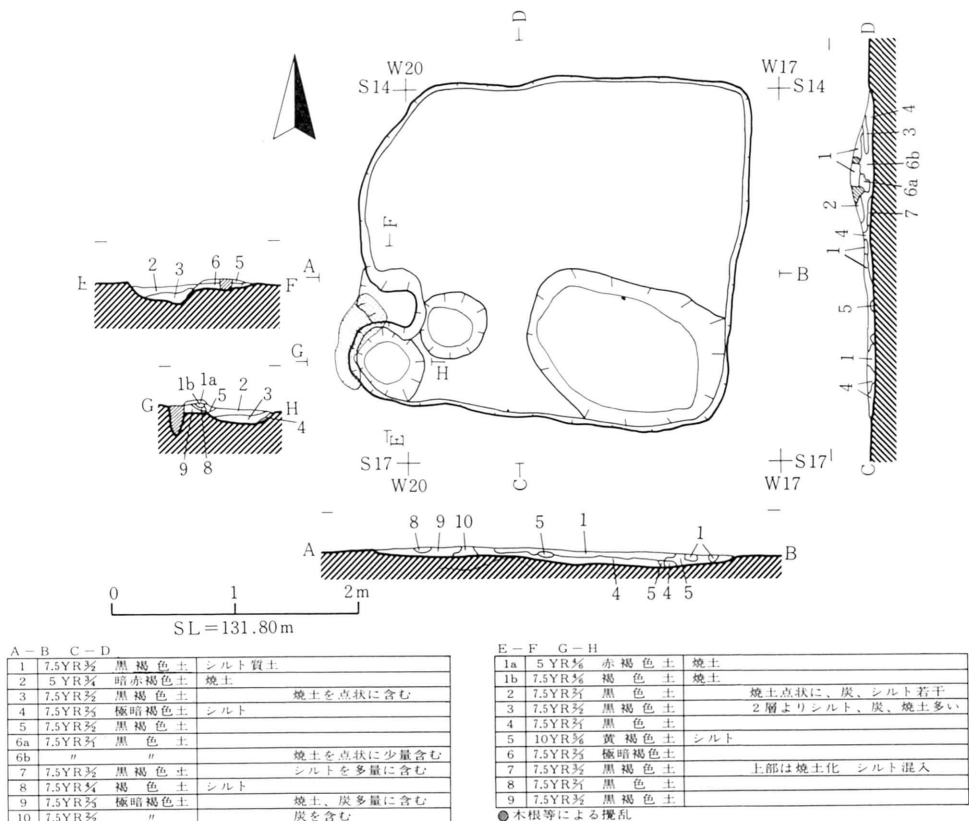
(堆積土) 削平が著しく堆積土の遺存は薄い。黒褐色シルト質土と極暗褐色シルトが入り混る状態で、全体的に炭と焼土およびシルトブロックが多く、堆積土のしまりは非常によい。

(壁) 西壁中央で外へふくらむ、検出面までの高さは2cm~8cmである。

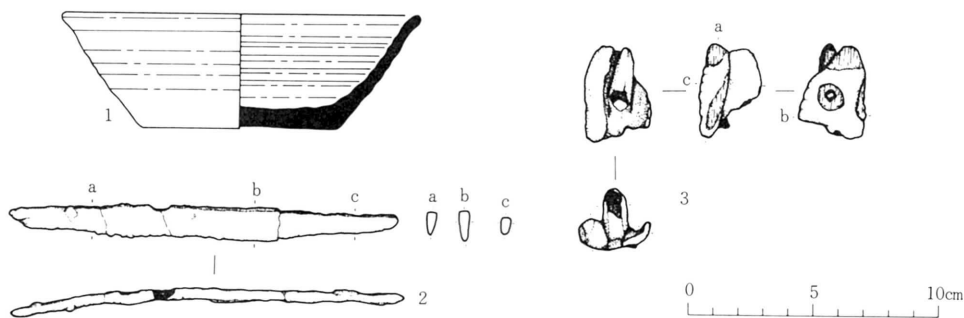
(床) 南東部に掘り方をみるが、全般的には地山シルトを床面としている。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。



第47—1図 38号 (Me21) 竪穴住居跡



第47-2図 38号(Me21)竪穴住居跡出土遺物

(カマド) 西壁南端に位置し、燃烧部は掘り方をもったものと推察され、右袖はシルトで構築され、左は南壁東端を利用したものかと考えられる。煙道、煙出しは認められず、全体的に削平が著しく不明確な点が多い。

(その他の施設) 特に認められない。

出土遺物 (第47-2図 第33表)

出土遺物は少なく、実測点数はA類1点、鉄製品2点のみである。これらの他には、A類の破片が若干、須恵器蓋の破片1点、等が出土する程度。

出土遺物の詳細は下表をもって示す。

第33-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	155	A類	ヘラ切	無調整		(14.2)	7.8	4.6	1.8	3.1	54.5	(床面直上)

第33-2表 鉄製品一覽

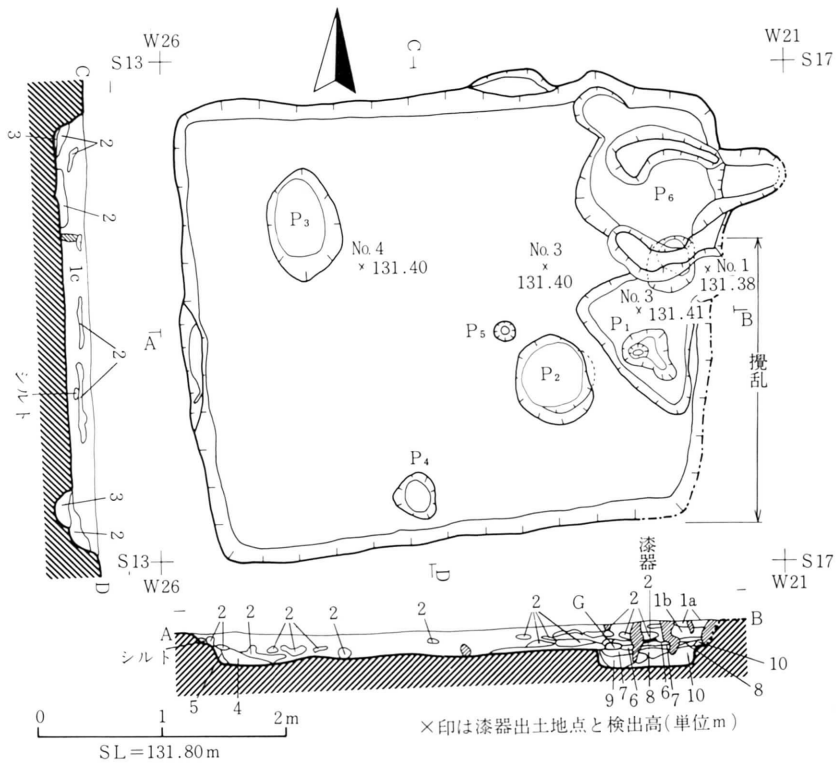
実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法量				断面形状	備考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
2	156	刀子	完形品	比較的良好	156.0	a...10.0 b...13.20 c...6.8	b...3.70 c...4.0	13355	ab...楔形	刃部ゆるく湾曲。(床面)
3	—	不明	破片?	やや良好	a...38.0	b...26.70 c...24.50	d...9.0 e...2.20 f...11.0	11.30	c...長方形	有孔(5.0mm径)木質を鉄で包む。刀等の止金具か?(床面)

39号 (Me27) 竪穴住居跡 (第48図 第34表 写真図版24・25・67)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.5m、南北4.2m、面積12.54m<sup>2</sup>の東西にやや長い長方形を呈する。カマド方向軸はN-89°-Eである。

(堆積土) 東半で木根等による攪乱が著しく複雑になるが、全般的には黒褐色土の単層であ



A-B C-D

1a	5 YR 5/2	黒褐色土	シルト、焼土を含む
1b	5 YR 5/2	"	焼土若干含む
1c	7.5 YR 5/2	黒色土	部分的にシルト少々、土器片若干含む
2	7.5 YR 5/2	極暗褐色土	ブロック状をなし、1c層に含まれる
3	10 YR 5/2	黒褐色土	シルトを含む
4	7.5 YR 5/2	黒色土	
5	7.5 YR 5/2	黒色土	

A-B C-D

6	5 YR 5/2	黒褐色土	多量のシルト、焼土を含み固くしまっている
7	5 YR 5/2	"	焼土、炭を含み土器あり
8	"	"	焼土、炭を粒状にやや多く含む
9	5 YR 5/2	"	焼土、炭を含む
10	10 YR 5/2	黒褐色土	黄褐色シルトを含む

◎ 木根等による攪乱

第48-1図 39号(Me27)竪穴住居跡

る。

(壁) 東壁は攪乱により上端が破壊されており、西壁中央で崩壊部分がみられる。壁はやや外傾して立ち、検出面まで約20cmの高さである。

(床) 地山をそのまま利用したほぼ平坦な床面であるが、カマド付近に多量のシルトと焼土を含んだ固い黒褐色土層があり貼り床とみられる。

(柱穴) 確証できるものは認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半に位置し、カマド構築の掘り方上に燃焼部と袖が認められる。燃焼部は間口70cm、奥行80cm規模で支脚石が認められ、両袖は石を芯材に用い黒褐色土とシルトを巻いて構築している。燃焼部奥壁から若干上がって幅30cm~45cm、深さ6cm~13cmで長さ50cmの溝状の煙道があり、先端は攪乱されるが煙出しの区別はないものとみられる。

(その他の施設) カマド南に隣接するP<sub>1</sub>は、100cm×100cmの三角形状で深さ33cmあり、焼土、炭を多量と土器片を含む黒褐色土を堆積土にもち、上面に貼り床がある。P<sub>2</sub>は径60cm×70cm深さ35cmのほぼ円形、焼土を含む黒褐色土の堆積土をもち遺物を包含する。北西寄りのP<sub>3</sub>は、径60cm×90cm、深さ28cmの楕円形で、黒褐色土の堆積土をもち須恵器坏が検出された。P<sub>4</sub>は径35cm×35cm、深さ20cmの円形で黒褐色土の堆積土、P<sub>5</sub>は径17cm×17cm、深さ10cmの円形で黒色土の堆積土、P<sub>6</sub>は径40cm×45cm、深さ27cmの円形カマド右袖直下にあり、カマド構築以前に掘られたものであり堆積土は黒褐色土である。

以上のピット中、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は貯蔵穴様を呈するが、P<sub>1</sub>は堆積土上が貼り床されており、竅穴住居跡存続中の廃棄と推定されるし、カマド右袖下のP<sub>6</sub>の存在と関連してみると、カマドを含め周辺の改造があったことも想定される。P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は柱穴状の小ピットであるが性格不明である。

#### 出土遺物 (第48-2・3図 第34表)

坏形土器14点 (台付坏5点)、須恵器蓋2点、甕形土器4点、鉄製品6点の実測。

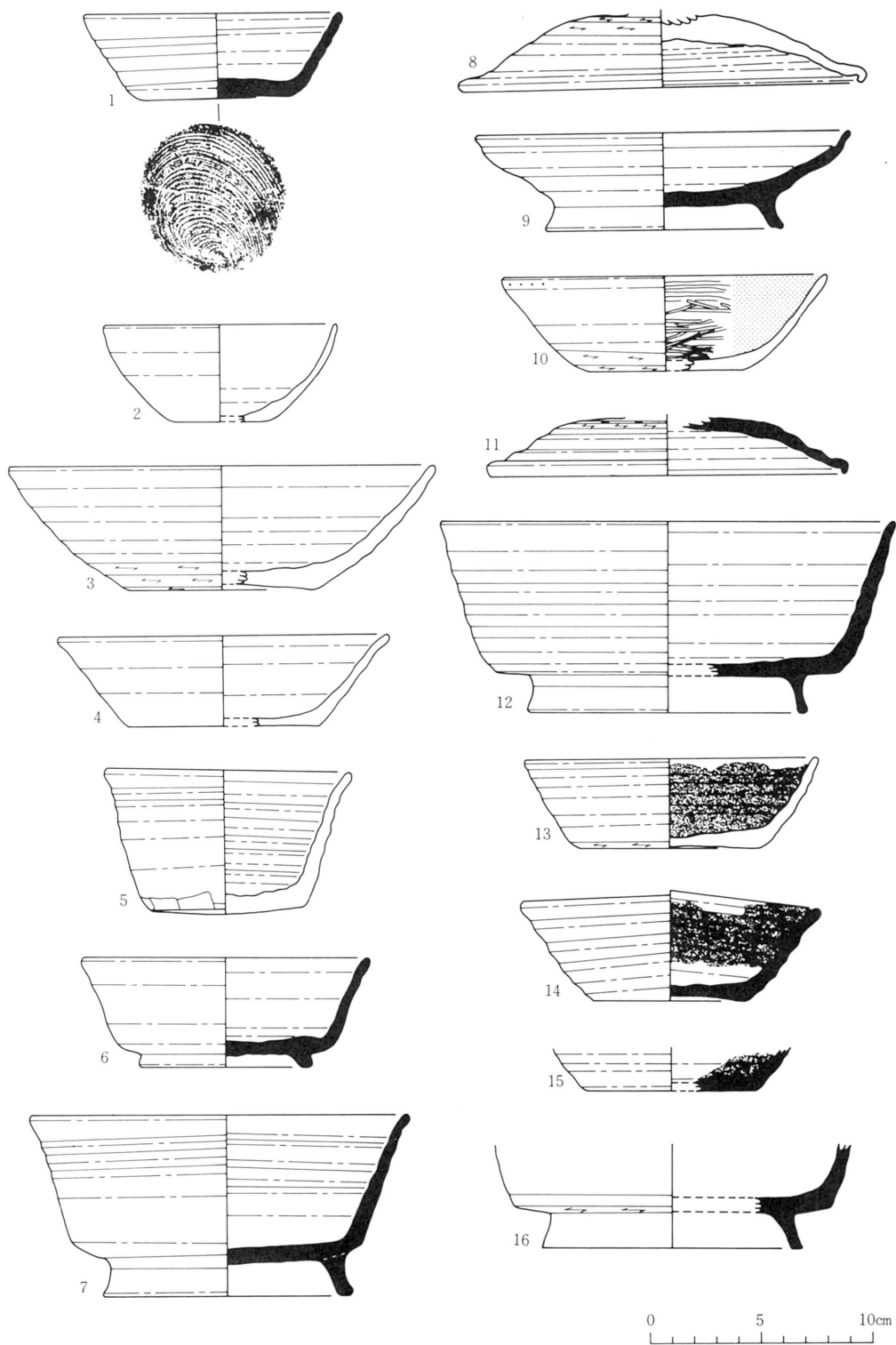
出土遺物は多く、上記の他に外面に叩目のある土師器甕片多数、非ロクロの球胴片若干、須恵器甕体部片等が出土している。何れもカマド近辺に集中している例が多い。

坏はA・B・Cの各類がある。B類が器形的に多様なあり方をみせており、No.8の蓋を含め

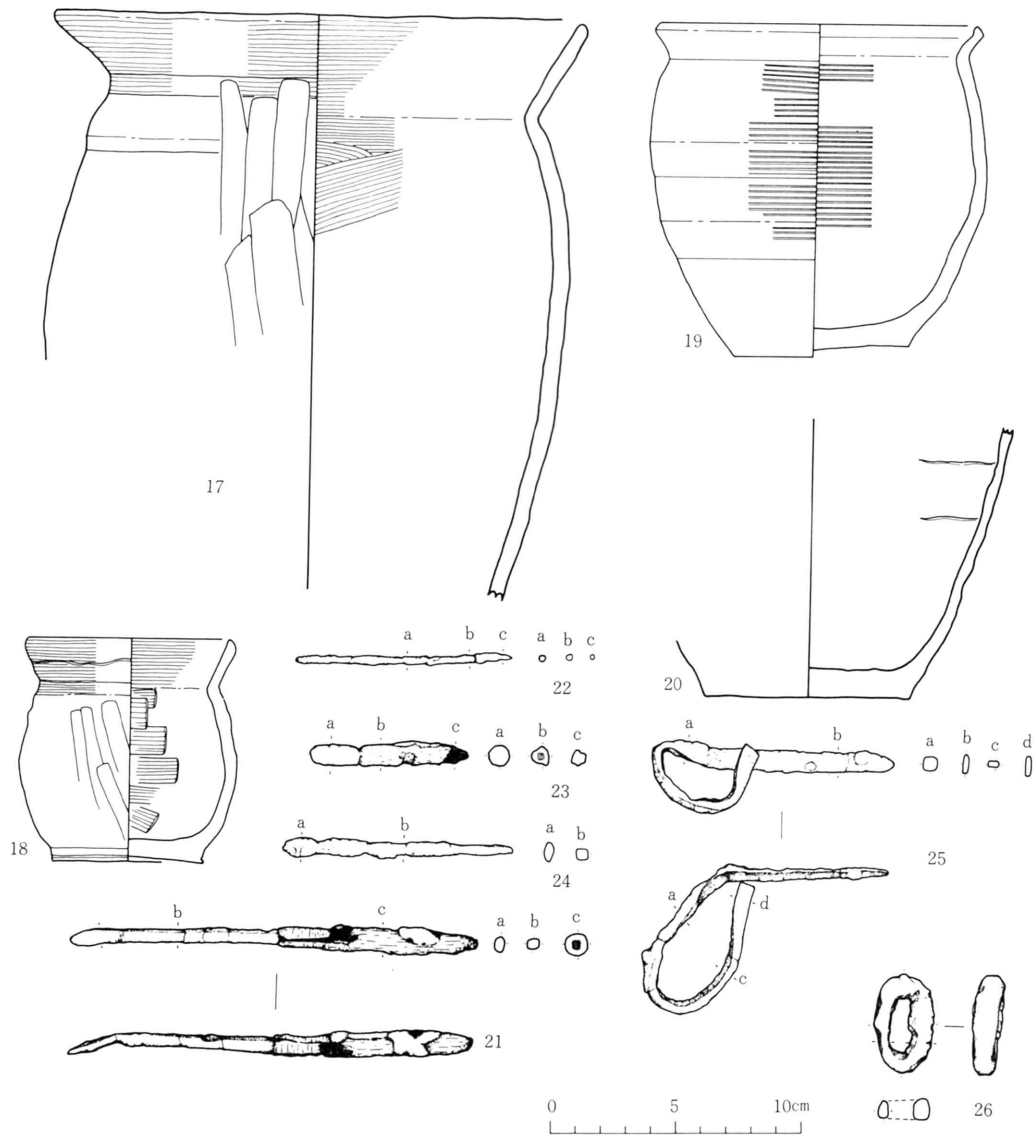
第34-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	157	A類	回転糸切	無調整	/	11.5	6.6	3.9	1.7	2.9	58	(南壁際床面上)
2	—	B類	磨減	顕著	—	(12.4)	(4.0)	4.4	3.1	2.8	53	
3	—	B類	調整のため不明	本口利用のナデ	体部下端 ~底部	(19.2)	(8.2)	5.6	2.3	3.4	45.5	体部下端は回転ヘラ削り。(カマド堆積土)
4	158	B類	磨減	顕著	—	(14.8)	(8.6)	4.1	1.7	3.6	53	(床面上)
5	159	B類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端	11.0	6.8	6.7	1.6	1.6	69.5	磨減顕著。(P <sub>6</sub> 上) コップ形。
6	—	台付坏	ヘラ切	/	/	(12.8)	$\frac{7.4}{7.4}$	$\frac{5.0}{0.6}$	/	/	/	(カマド右)
7	160	台付坏	ヘラ切	回転ヘラ削り	底部	17.0	11.4	8.2	/	/	/	(床面)
8	161	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	18.0	—	二	/	/	/	ツマミ欠失。B類的 (カマド堆積土)
9	162	台付皿	ヘラ切	回転ヘラ削り	底部	16.8	10.6	4.4	/	/	/	口縁部の形態より蓋としての可能性もある。(堆積土)
10	—	C類	回転糸切	回転・手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	(14.4)	(7.0)	4.3	2.1	3.3	48	(P <sub>3</sub> 内)
11	—	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	(16.0)	—	二	/	/	/	ツマミ欠失。口縁著しい歪み。(床面+堆積土)
12	—	台付坏	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	(20.6)	$\frac{15.6}{12.4}$	$\frac{8.7}{1.7}$	/	/	/	内面底部に軽いナデ。(カマド右袖直上+堆積土)
13	—	B類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端	13.2	8.2	4.1	1.6	3.2	58	完形品。内面全面に漆付着。(カマド右袖前床面)
14	—	A類	ヘラ切	無調整	/	13.4	6.8	5.0	2.0	2.7	52	内面全面に漆付着。口縁著しい歪み。(カマド右袖前床面)
15	—	A類	ヘラ切	無調整	/	—	(7.6)	—	—	—	—	内面及び断面に漆付着。
16	—	台付坏	底部欠失	回転ヘラ削り	体部下端	—	$\frac{11.0}{11.8}$	1.6	/	/	/	(堆積土)





第48—2图 39号(Me27)竖穴住居跡出土遺物



第48—3図 39号(Me27)竪穴住居跡出土遺物

て黄橙～にぶい橙色を呈している。台付坏は須恵器に限られるが、小型・大型・皿型の三様がある。また、No.13・14・15の3点の坏は、内面に漆が付着している。紙質上に塗貼しているものもあるが、赤外線照射した結果に依れば、特に文字等は記されていない。

甕形土器はNo.17・18・19・20の4点。遺構内全体をみればロクロ成形の土師器が多いが、図示したうちのNo.17・18・20は非ロクロ、No.19はロクロ成形に依るものである。非ロクロの甕はカマド周辺に集中している。

鉄製品は10点の出土。そのうち6点を図示している。鉄鎌・釘・環状製品等があるが、不明のものも多い。図示した6点は何れも床面またはピット内出土である。

第34-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大脚径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
17	—	土師器	21.4	—	—	21.0	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部段不明瞭。(カマド右袖+燃烧部)
18	—	土師器	8.3	(6.1)	8.9	(8.7)	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	木葉底。巻上げ。(カマド左袖)
19	—	土師器	13.2	6.9	13.4	13.5	ロクロナデ	木口利用 のカキ目	ロクロナデ	木口利用 のカキ目	回転糸切。(床面+堆積土)
20	—	土師器	—	8.2	—	—	—	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	非ロクロ。(カマド焚口+焼土内)

第34-3表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種 別	残 存 部 位	遺 存 状 態	法 量				断 面 形	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
21	163	鉄 鐵	完 形 品	比較的良好	163.0	a…6.30 b…4.80 c…9.80	a…4.10 b…5.10 c…9.90	11.50	a…紡錘形 b…方 形 c…内	鐵身長(14.0)mm 基部に木質が残る。鐵身が小さめ。(床面)
22	164	針	ほぼ完形品	やや不良	86.20	a…2.70 c…2.0	a…2.70 c…2.10	1.40	円形に近い	(床面)
23	—	鉄 鐵	ほぼ完形品	やや不良	64.70	a…9.0 b…7.8	a…9.20 b…8.0	8.0	a…円 形 b…不正形	鐵身以外木質が覆う。 鐵身長…(21.0)mm(床面)
24	165	鉄 鐵	完 形 品	やや不良	91.80	a…8.70 b…5.0	a…4.0 b…4.80	4.87	a…紡錘形 b…方 形	鐵身長…(14.0)mm(床面)
25	167	不 明	端部欠失?	比較的良好	直線にして 214.0	a…6.0 b…8.0 c…3.2	a…6.0 b…3.0 c…5.0	12.50	a…方 形 bc…長方形	全体が立体的によじれている。(床面)
26	166	鐵状製品	完 形 品	比較的良好	長径-39.70 短径-24.20	7.30	4.30	8.47	長 方 形	(住居内P <sub>2</sub> )
—	—	角 釘	端 部	やや不良	49.0	—	—	2.60	方 形	(床面)
—	—	不 明	破 片	不 良	48.0	—	—	3.80		(床面)
—	—	不 明	破 片 ?	やや不良	24.10	6.20	—	0.80	偏 平	(床面)
—	—	不 明	破 片	不 良	—	—	—	1.60	方 形	小片。(1層)

40号 (Me62) 竪穴住居跡 (第49図 第35表 写真図版25・67)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.5m、南北3.5m、面積9.6㎡のほぼ正方形の平面形を呈し、カマド方向軸はN-179°-Eである。

(堆積土) 堆積土の主体は黒褐色土で、混入物やシルトの混入比率によって1層から5層に細分され、シルトの混入比率は下層ほど高くなる。各層ともレンズ状の堆積を示し、壁ぎわに6層・7層の黒色土と黒褐色土が認められる。

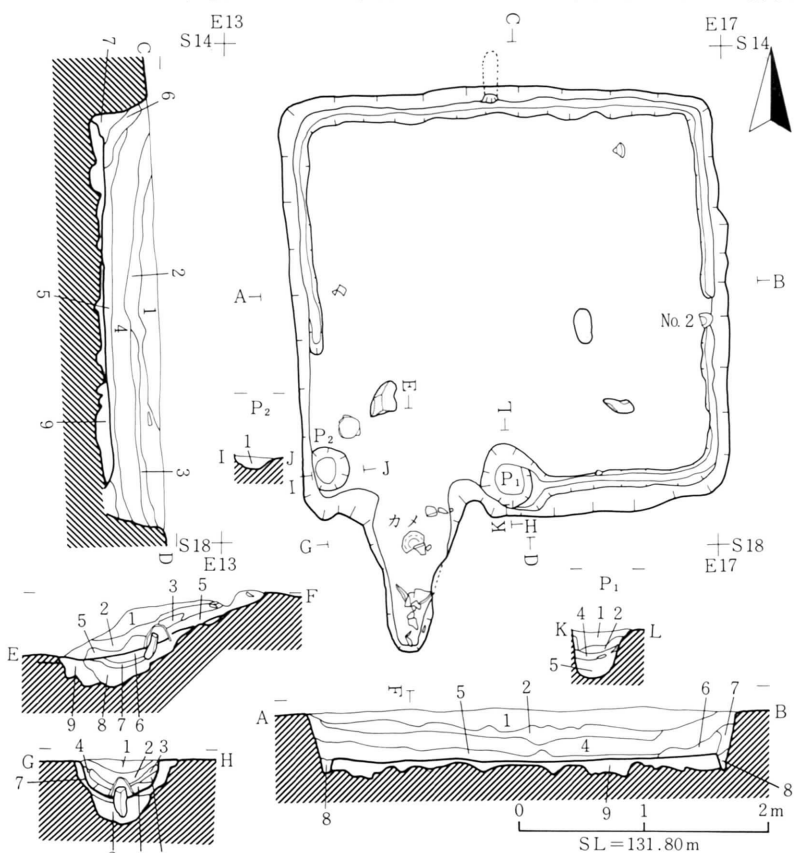
(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは床面から40cm、周溝底面からは50cmである。北壁中央に床面と水平に奥に掘りこまれた細い横穴がある。

(床) 全面掘り方をもち黒褐色土とシルトの混合土で床面を構築しておりほぼ平坦である。床面構築土からの遺物は認められない。

(柱穴) 柱穴と確認できるものは認められない。

(周溝) カマド部分とそれに近接する西壁南半を除く壁沿いに認められ、東壁中央で一部切れるのみである。周溝幅は10cm~20cm、深さは10cm内外を計る。

(カマド) 南壁西端に位置し壁外に張り出して施設されている。燃烧部と煙道の一部も含む掘り方をもち、下はシルトと黒褐色混合土を埋土し、燃烧部火床と両壁はシルトを巻いて構築して、この部分は火熱で赤変焼土化している。燃烧部は焚口から奥へ上がり傾斜した火床面を呈し、中央には縦位に施設した石に甕を伏せた支脚が認められる。煙道は火床面との段差をもたず先端に上がる傾斜で、幅30cm~40cm、深さ10cm~20cmで長さ50cmほどで溝状にのび、先



A-B C-D		
1	7.5YR <sub>2/2</sub> 極暗褐色土	シルト若干
2	7.5YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土	" 土器片少量
3	" "	2層より固い
4	" "	2層に類似、炭若干
5	7.5YR <sub>2/2</sub> 暗褐色土	シルト混入多、炭、焼土ブロック少
6	7.5YR <sub>2/2</sub> 黒色土	"
7	7.5YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土	シルト混入、非常にやわい
8	7.5YR <sub>2/2</sub> 暗褐色土	シルト黒色土混合 粗でやわい
9	" "	シルト黒色土混合 密で固くしめる、床構築土
K-L		
1	7.5YR <sub>2/2</sub> 極暗褐色土	"
2	" "	1層よりやや暗い
3	7.5YR <sub>2/2</sub> 暗褐色土	黒色土シルト混合
4	" "	黒色土焼土混合 土器片、炭若干
5	7.5YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土	黒色土シルト混合 炭混入

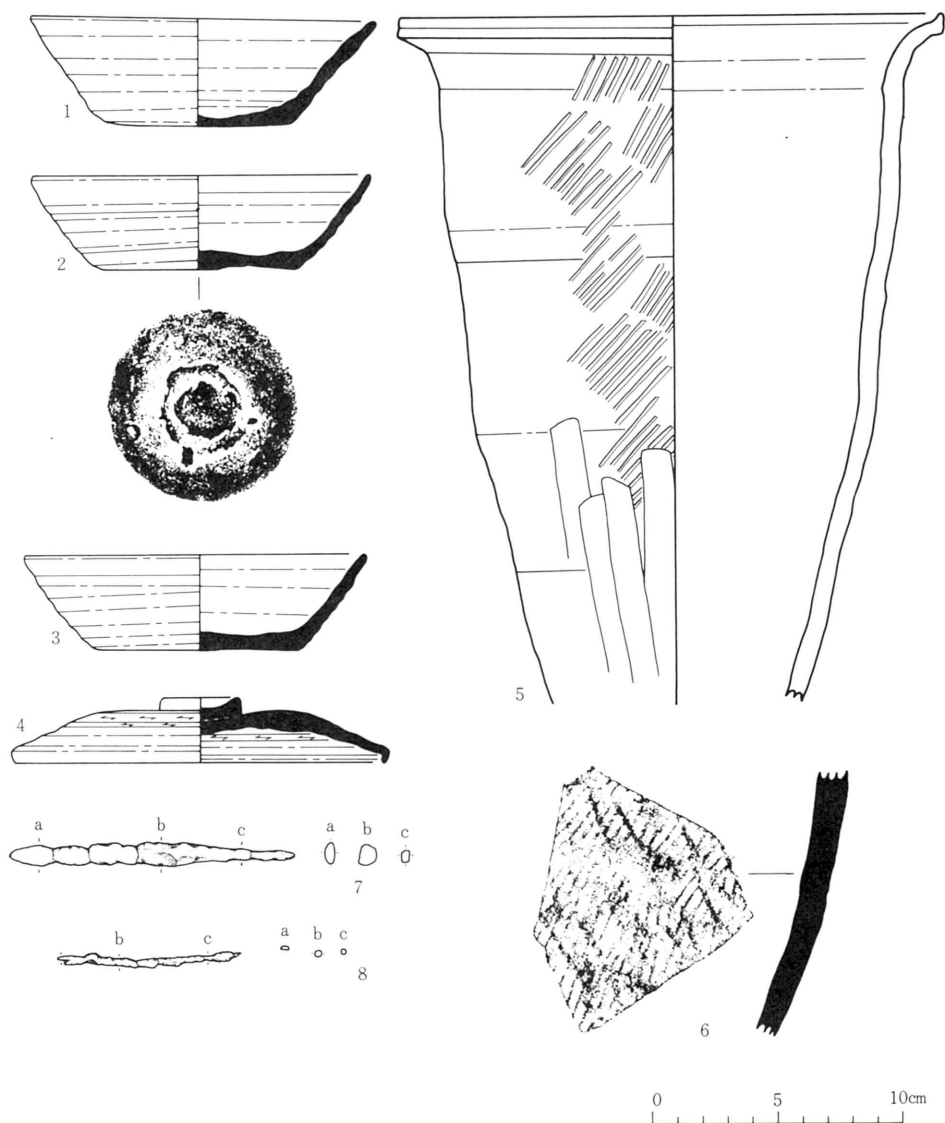
E-F G-H		
1	7.5YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土	シルト若干
2	7.5YR <sub>2/2</sub> 暗褐色土	黒色土シルト混合 焼土ブロック、炭若干
3	5YR <sub>2/2</sub> 暗赤褐色土	シルト質焼土 炭若干
4	5YR <sub>2/2</sub> 極暗赤褐色土	黒色土焼土シルト混合 焼土ブロック多量に混る
5	5YR <sub>2/2</sub> 暗赤褐色土	焼土 焼土ブロック多量
6	5YR <sub>2/2</sub> 赤褐色土	焼土
7	5YR <sub>2/2</sub> 暗赤褐色土	焼土
8	7.5YR <sub>2/2</sub> 黒色土	焼土、炭、若干
9	7.5YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土	シルト、焼土ブロック、炭混入
10	7.5YR <sub>2/2</sub> 暗褐色土	黒色土シルト混合 A-B、C-Dの9層と同じ
I-J		
1	5YR <sub>2/2</sub> 極暗赤褐色土	焼土ブロック多量、炭若干

第49-1 図 40号(Me62)竪穴住居跡

端で細まり煙出しとの区別は認められない。

(その他の施設) カマドに東隣するP<sub>1</sub>は貯蔵穴とみられ、径40cm×60cm、深さ35cmの規模で、焼土とシルト混りの極暗褐色土が堆積土の主体で土器破片を包含する。西南隅のP<sub>2</sub>は径30cm×35cm、深さ10cmあり、焼土ブロックを多量に含む極暗赤褐色の堆積土をもつ、性格は不明。

前述した北壁中央を床面と同レベルで奥に掘りこんだ横穴があり、径10cmで奥行40cmで、奥に若干ふくらむ袋状を呈する、性格は不明である。



第49—2 図 40号(Me62)竪穴住居跡出土遺物

出土遺物 (第49-2図 第35表)

坏形土器3点、須恵器蓋1点、土師器甕1点、鉄製品2点、須恵器拓影図1、計8点の図示。他に破片として、非ロクロ成形の土師器甕体部、須恵器の長胴片等が出土している。

坏形土器はA類のみ出土。B・C類は破片すら見られない。A類は何れも硬質のものでいわゆるくすべ焼成の坏である。3点ともヘラ切調整で計測値も大差ない。

須恵器蓋No.4は堆積土内からの出土。口径14.8cm、器高2.6cm大である。ツマミ部は中央が凹型を呈し、天井部に相当する部分には回転ヘラ削りが施される。

甕形土器のNo.5は反転復元に依るものである。本遺構内のカマド部出土片と9号(Mi68)円形土壙出土の破片とが接合されている。推定口径約22cm、外面体部には叩目とヘラ削りが施される。内面はヘラナデがあるかもしれないが、単位不明。No.6は堆積土内出土。外面に叩目、内面に押圧痕と木口利用のナデがある。

鉄製品は2点。鉄鏃(No.7)と針状(No.8)の製品である。計測値等については35-2表を参照されたい。

第35-1表 坏形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(θ°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	—	A類	ヘラ切	無調整		13.8	7.6	4.4	1.8	3.1	50	(床面上)
2	168	A類	ヘラ切	無調整		13.4	7.6	3.8	1.8	3.5	51.5	完形品。磨滅気味。(床面)
3	—	A類	ヘラ切	無調整		13.6	7.8	3.8	1.7	3.6	55	(床面)
4	—	蓋	調整のため	回転ヘラ削り	体上部と内面の一部	(14.8)	(ツマミ径) 3.0	(ツマミ高) 0.7				(堆積土)

第35-2表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
7	169	鉄 鏃	完形品	錆の割に残りよし	114.30	a…9.10 c…5.30	a…4.30 c…3.50	8.28	a…紡錘形 b…長方形	鏃身長…13.5(18.0)mm(床面)
8	170	針	ほぼ完形品	錆の割に残りよし	73.20	b…2.20	b…2.20	1.0	円形に近い	頭部有孔と思われる。縫針か?

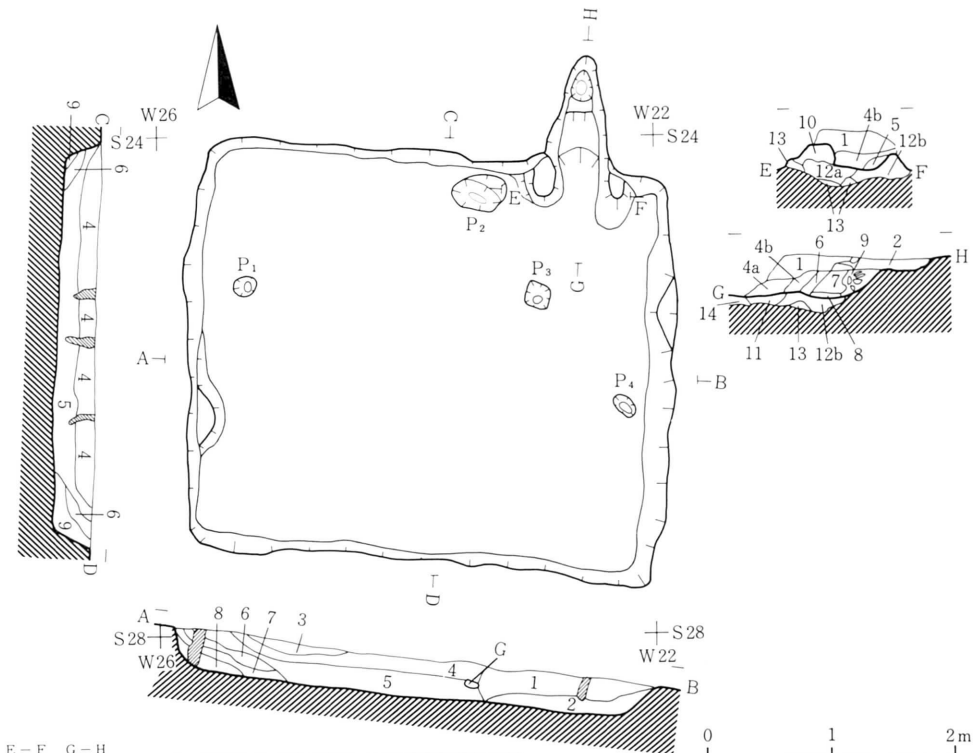
41号 (Mi27) 竪立住居跡 (第50図 第36表 写真図版25・67)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.9m、南北3.3m、面積11.16m<sup>2</sup>で若干東西に長い方形である。

カマド方向軸はN-7°-Eである。

(堆積土) 4層・5層の黒色土および黒褐色土を主体とし、壁ぎわに、6層～9層の細砂やシルトを混入する流れこみの黒褐色土または暗褐色土がみられる。以上の堆積土に対し、1層



E-F		G-H	
1	10YR <sub>2/2</sub> 黒色土		米粒大シルト若干
2	7.5YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土		シルト焼土粒、炭若干
3	10YR <sub>2/2</sub> 褐色土		シルト
4a	5YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土		全体に焼土あり、4b層より多
4b	10YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土		全体に焼土混る
5	5YR <sub>2/2</sub> 赤褐色土		焼土
6	5YR <sub>2/2</sub> 暗褐色土		シルト質焼土
7	5YR <sub>2/2</sub> "		シルト 焼けている
8	7.5YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土		
9	10YR <sub>2/2</sub> 暗褐色土		黒色土シルト混合 シルト粒、焼土粒多、上面火熱
10	10YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土		黒色土シルト混合 焼土若干
11	5YR <sub>2/2</sub> 明赤褐色土		シルト 上面火熱
12a	7.5YR <sub>2/2</sub> 暗褐色土		黒色土シルト混合 外面火熱
12b	"		黒色土シルト混合 12a層よりシルト多
13	7.5YR <sub>2/2</sub> 褐色土		シルト
14	10YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土		粒状焼土多量

A-B		C-D	
1	10YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土		ボソボソの部分あり、攪乱著しい
2	"		径5mm大シルト多量に含む
3	7.5YR <sub>2/2</sub> "		細砂多量
4	10YR <sub>2/2</sub> 黒色土		
5	10YR <sub>2/2</sub> 褐色土		シルト粒若干
6	"		細砂多量、シルト粒若干
7	10YR <sub>2/2</sub> 黒褐色土		6層と類似するもシルト粒多
8	"		径2cm大のシルト粒多
9	10YR <sub>2/2</sub> 暗褐色土		細砂若干

◎木根等による攪乱

第50—1 図 41号(Mi27)竪穴住居跡

の黒褐色土は竪穴住居跡埋没後に攪乱されたボソボソしたもので、2層としたものはシルト粒を多量に含む黒褐色土で、当初、本来の堆積土後で1層と関連するものとみたが、むしろ、6層～8層等に相当するとみる方が妥当と推察する。

(壁) 東壁は外傾が強く、他は比較的直に近い立ち上がりを示す。検出面までの壁高は25cm～30cmである。

(床) 全体に掘り方をもち、シルトと黒褐色土の混合土を用い床面構築をしており、固くしまったほぼ平坦な床面である。カマド前方には焼土の広がりが見られた。

(柱穴) P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の柱穴状小ピットを認めるが、対状になるP<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>に柱穴の可能性もある。P<sub>1</sub>は径15cmの円形で深さ15cm黒褐色の堆積土、P<sub>3</sub>は一辺15cmの方形で深さ15cm黒褐色の堆積土をもつ、いずれも柱痕は認められず、両ピット間は2.35mである。

(周溝) 認められない。

(カマド) 北壁の東端に位置し、カマド構築部分を一旦掘りこんで黒褐色土とシルトを埋め、燃焼部と袖をつくっている。火床面は平坦で間口35cm、奥行50cmほどで、煙道は火床面から先端に向けて約30cmの長さで上がり、先端で若干の落ちこみをもち煙出しとなる。平面的には煙道と煙出しの区別は判然とせず、全長70cm、幅20cm～30cmの溝状で先細りの平面形を呈し、深さは10cm～30cmを計る。

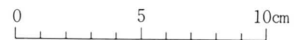
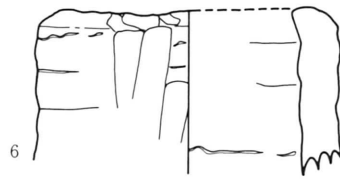
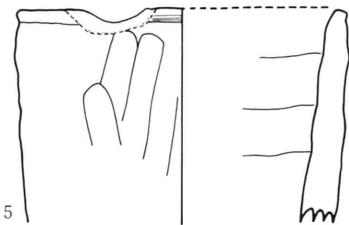
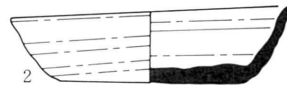
(その他の施設) カマド左袖に隣接するP<sub>2</sub>は、貯蔵穴かと推察される。径30cm×40cm、深さ18cmの楕円形のピットで、堆積土は黒褐色土に焼土粒を含み、遺物の出土はない。

出土遺物 (第50—2図 第36表)

坏形土器3点、須恵器蓋1点、筒形土器2点、計6点の実測。他に破片としては堆積土中から非クロコ土師器球胴片、回転糸切痕を残すB類底部片等が出土している。球胴片は外面に刷

第36表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	171	A類	ヘラ切	無調整		14.2	7.8	3.9	1.8	3.6	50	(堆積土)
2	—	A類	ヘラ切	無調整		11.1	7.2	3.2	1.5	3.5	58.5	(床面直上)
3	—	蓋	不明			(13.0)	—	—				口縁～体部片。(床面直上+堆積土)
4	—	A類	底部欠失	手持ヘラ削り	体部下端	(14.0)	—	—	—	—		(床面直上)



第50—2図 41号(Mi27)竪穴住居跡出土遺物



毛目とヘラ削り調整がみられる。

No.3の蓋は、堆積土と床面近くの破片が接合されたものである。

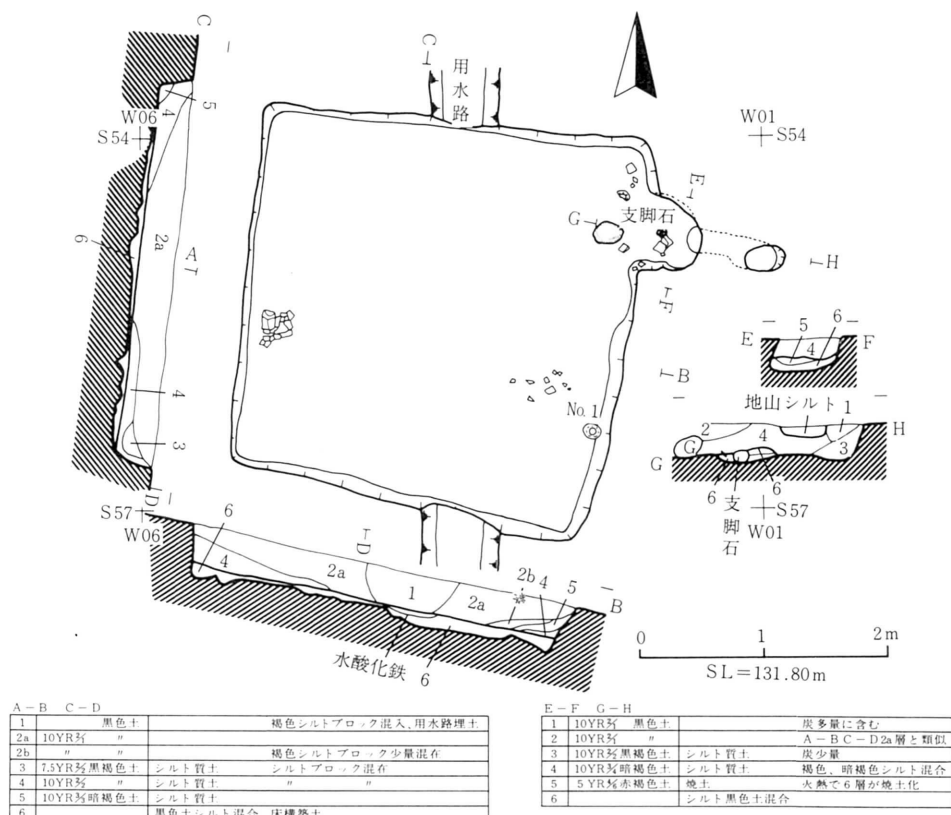
特異な遺物としてはNo.5・6の2点がある。反転復元に依る実測であるが、器種としては他例をみないため、便宜上“筒形土器”と仮称した。何れも酸化焰焼成に依るもので、カマド近辺の床面付近からの出土である。No.5は二次火熱を受けたと思われる痕跡がある。口唇の一部に剝離した部分がある。輪積みに依るもので外面に縦方向のヘラ削り、内面にはヘラナデが加えられる。No.6は口唇部が内側に入る器形であるが、成形技法・胎土・色調についてはNo.5とほぼ同様である。下端は接着面の欠落部分に相当し、人工的な割れ口を呈す。

42号 (Nh06) 竪穴住居跡 (第51図 第37表 写真図版26・68)

(重複 改築) 竪穴住居跡中央部が南北に走る現代の溝によって切られる。

(規模 平面形 方向) 東西3.1m、南北3.1m、面積8.41㎡あり、ややゆがんでいるがほぼ正方形に近い。カマド方向軸はN-100°30'-Eである。

(堆積土) 基本的には二大別される。すなわち、2層の黒色土で壁ぎわ床面近くを除き全体



第51—1図 42号(Nh06)竪穴住居跡

に広がり、4層の黒褐色粘質シルト質土で床面周囲の壁ぎわに認められる。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは30cmである。

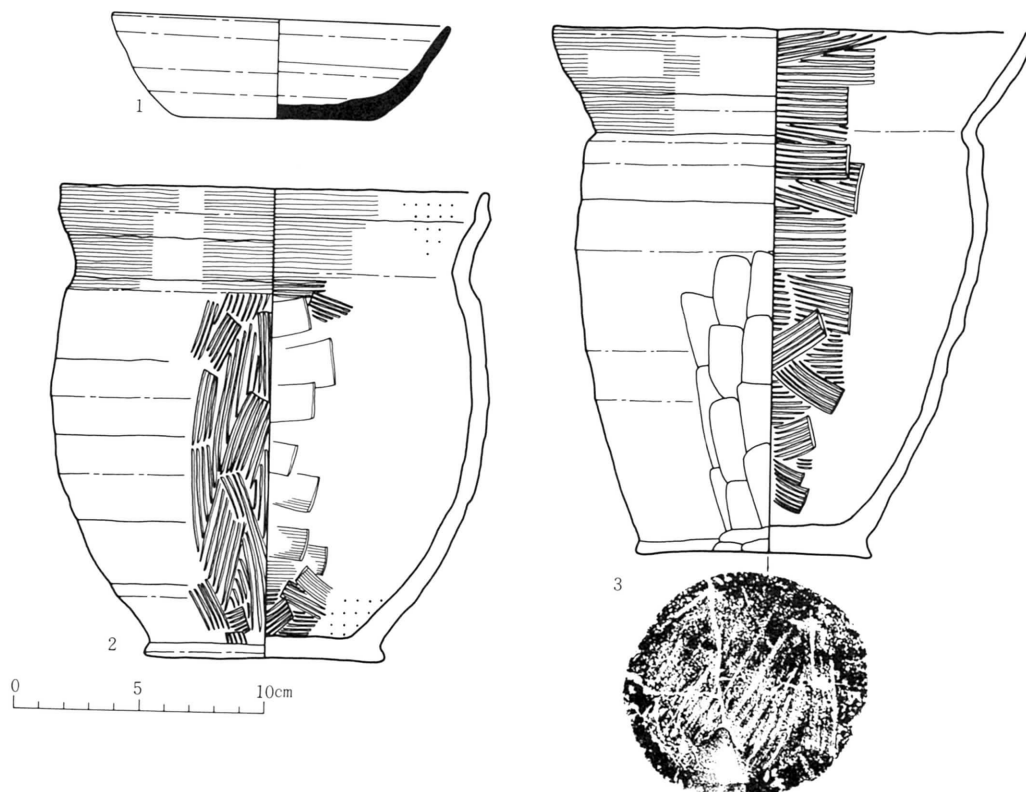
(床) 全体に掘り方をもつ、床面は多少の凹凸はあるがほぼ平坦で固い。床面中央には火熱によって赤変した部分を認めたが、地床炉か否かは断定できない。

(柱穴) 認められない。

(カマド) 東壁の北端寄りにあり、燃烧部は半円状に壁外に張り出し、約50cm×50cmの掘り方埋土上を火床とし、中央に支脚石が認められた。燃烧部焚口付近にいく分焼けた部分を認めたが、側壁はほとんど焼けていない。煙道は燃烧部奥壁からくりぬき、わずかに下がり煙出しへ続く。煙出し底面は煙道より若干落ちこむ。なお、煙道は長さ35cm、径20cm、煙出しは20cm×30cmの楕円形で深さ30cmを計る。

#### 出土遺物 (第51-2図 第37表)

A類環1点、甕形土器2点の実測。何れも床面からの出土である。出土遺物は少なく、これらの他に床面から非ロクロの土師器甕体部片若干、黄橙色軟質のB類片が1点みられる程度。また、堆積土上層からは、推定口径7cm大、脚径3cmほどの猪口が出土している。これは有田系統の産と思われる磁器で、明治時代のもものと推測される。(図は○Pにあり)



第51-2図 42号(Nh06)竪穴住居跡出土遺物

第37—1表 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	172	A類	ヘラ切	無調整		13.5	8.0	4.2	1.7	3.2	50.5	完形品。内外面に少量のカーボン付着。(床面)

第36—2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
			口径	底径	器高	最大胴径	口縁部	体部	口縁部	体部	
2	173	土師器	(17.4)	9.7	18.8	(17.6)	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	ヘラナデ	木葉底。黒斑あり。頸部に沈線入る。(床面)
3	174	土師器	19.3	9.5	21.2	16.4	ヨコナデ	ヘラケズリ	刷毛目	刷毛目	底部外面木口利用のナデ。口縁やや内湾。(床面)

43号 (Nj21) 竪穴住居跡 (第52図 写真図版 27)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西4.3m、南北3.0m、面積12.47㎡の東西に長い長方形である。カマド方向軸はN-197°-Eである。

(堆積土) 全面もしくは壁ぎわを除いた面には、1層の暗褐色土、2層の黒褐色土、3層の暗褐色土が主体に堆積し、1層・3層は黒褐色土にシルトが混在する。壁ぎわには流れこみ状の4層があり、黒褐色土とシルトが混合した暗褐色土である。全般に比較的単純なレンズ状の堆積を示す。

(壁) 垂直に近く立ち上がるが、南壁中央近くでP<sub>1</sub>に関連する張り出し部分があり、この部分の壁は大きく外傾する。床面から検出面までの高さは40cm~50cmを計る。

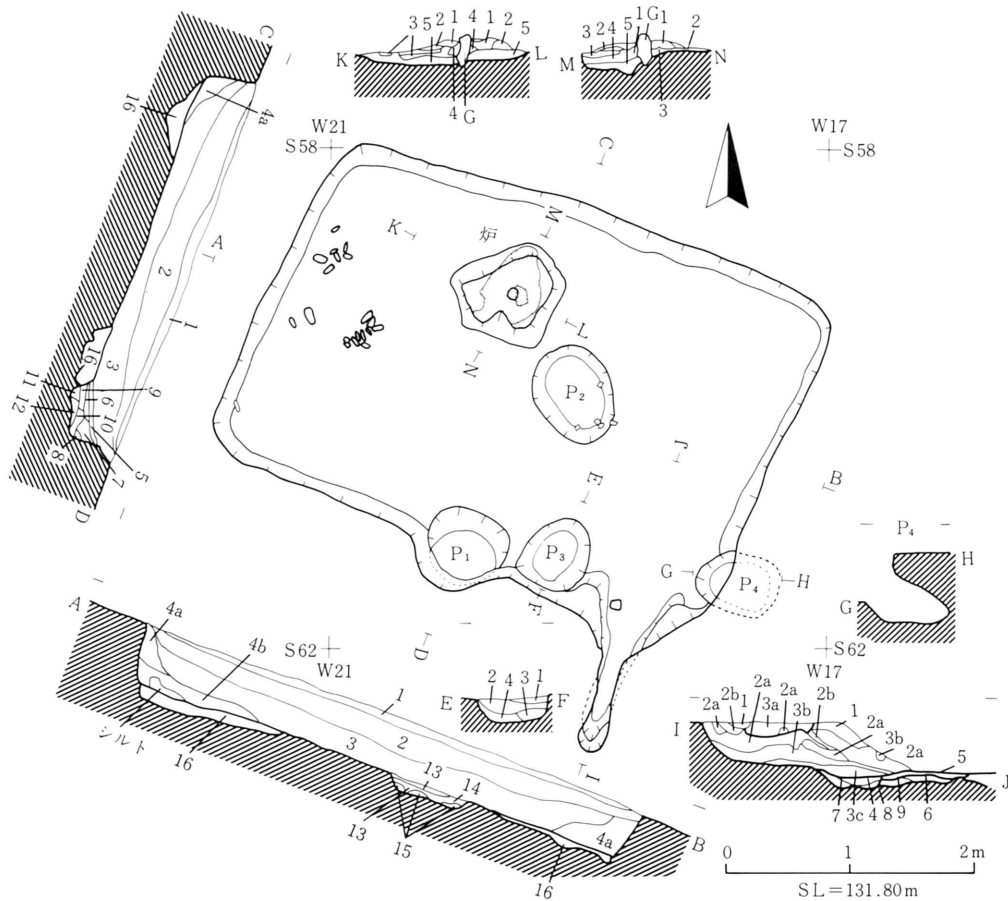
(床) 壁沿いに床面構築の掘り方を認めたが、他は地山シルト面をそのまま利用した固くてほぼ平坦な床面である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 南壁東端に位置し、袖の一部かとみられる地山の削り出しが壁内に入る様相もあるが、むしろ、燃烧部は壁外に掘りこまれたとみたい。燃烧部は間口50cm、奥行60cmで火床面は約10cmほど掘りこんだ上で埋土した上面でかなり焼けた様相を示し、床面とほぼ同レベルである。燃烧部奥壁から若干立ち上がってくりぬきの煙道が認められ、煙出し部も含め約90cmの長さ、20cmの径を計る。

(その他の施設) 貯蔵穴様ピットとしてP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>がある。各ピットの径と深さは、P<sub>1</sub> 50cm×60cmの20cm P<sub>2</sub> 60cm×80cmの8cm P<sub>3</sub> 50cm×70cmの20cm P<sub>4</sub> 60cm×70cmの20cmでP<sub>1</sub>はほぼ中央に、P<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>は南壁沿いに位置し、P<sub>1</sub>の南半が壁外に張り出し、P<sub>4</sub>が壁下半の奥へ



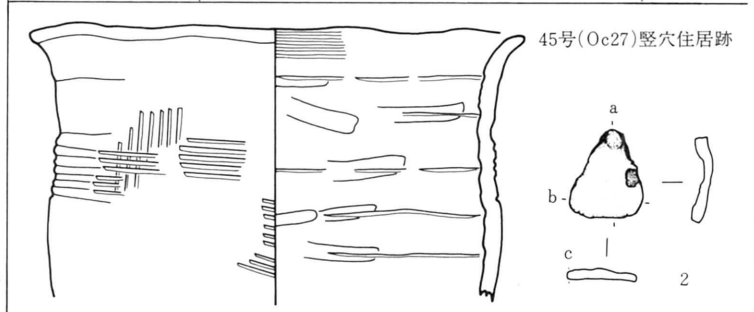
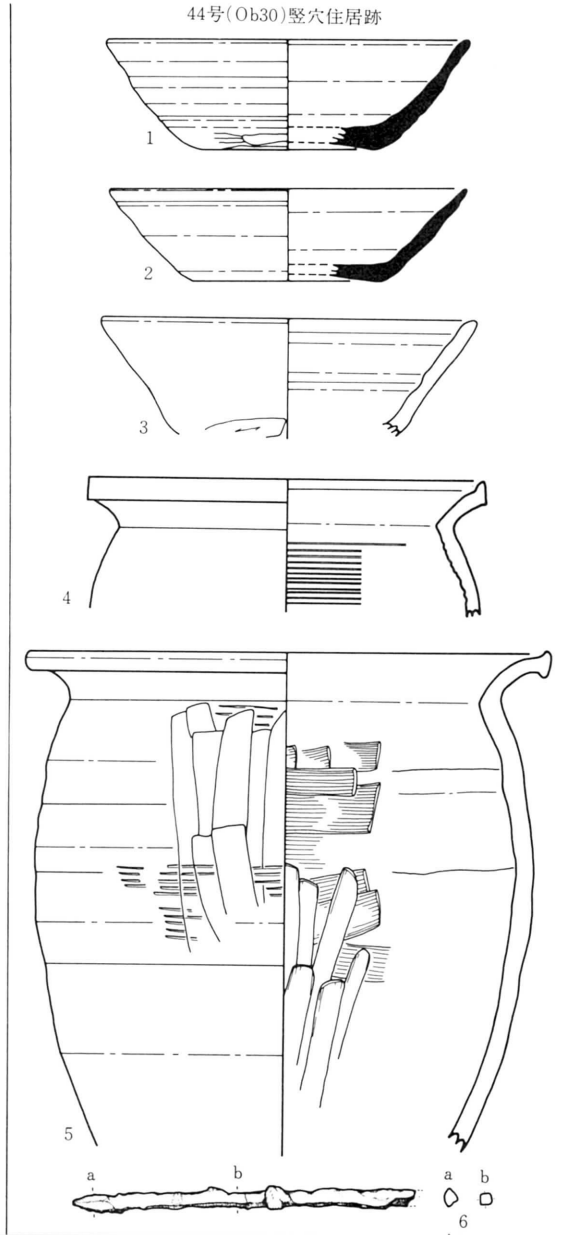
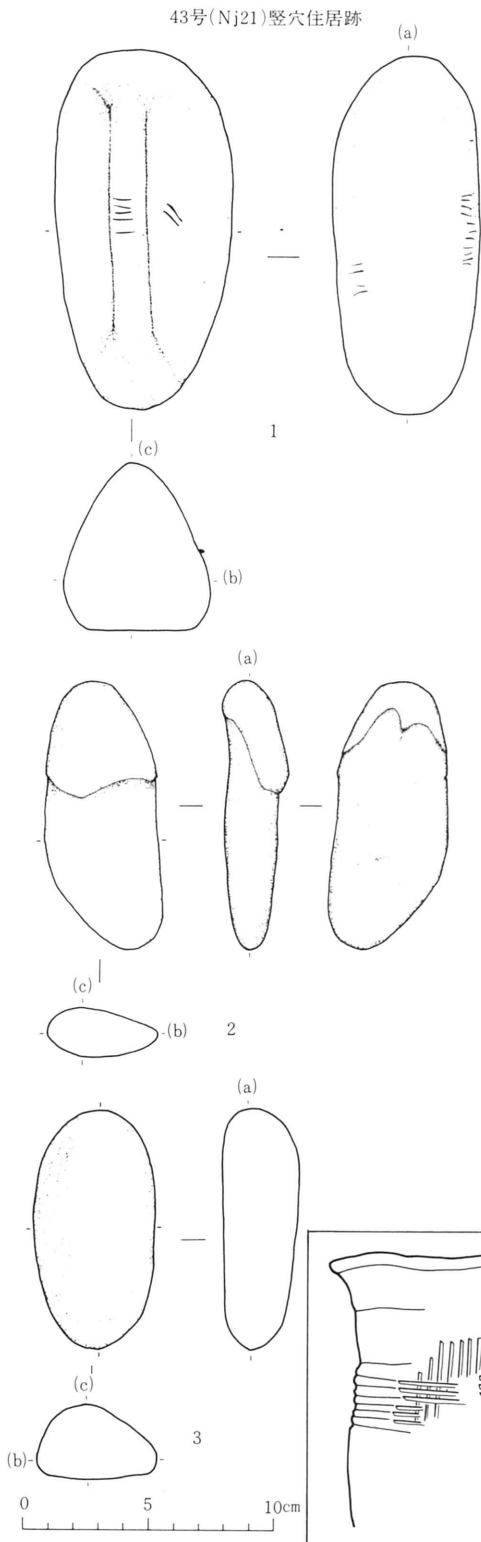
A-B C-D			
1	7.5YR5 暗褐色土	黒色土シルト混合	極少の焼土粒、シルト粒含む
2	7.5YR5 黒褐色土	"	"
3	7.5YR5 褐色土	シルト黒色土混合	シルト粒混入、部分的に多少難あり
4a	7.5YR5 暗褐色土	シルト黒色土混合	シルト黒色土混合
4b	"	"	シルトブロックを若干
5	"	シルト黒色土混合	焼土、シルト若干、非常に固く貼りか
6	10YR5 暗褐色土	"	シルトを含み固い
7	10YR5に多い黄褐色土	シルト	粘性ありしりまい
8	10YR5 褐色土	黒色土シルト混合	"
9	10YR5 黒褐色土	"	粘性 しりまいあり
10	10YR5 暗褐色土	"	"
11	10YR5 褐色土	黒色土シルト混合	8層と類似
12	10YR5に多い黄褐色土	シルト	7層と類似
13	10YR5 黄褐色土	シルト	腐植質土混る
14	10YR5 黒褐色土	シルト	非常に固い
15	10YR5に多い黄褐色土	シルト	腐植質土混る、固い
16	"	黒色土シルト混合	床積築土
E-F			
1	7.5YR5 褐色土	シルト混入	焼土粒含む
2	7.5YR5 黒褐色土	"	やわらかい
3	7.5YR5 暗褐色土	"	"
4	7.5YR5 褐色土	"	1層と類似

I-J			
1	10YR5 黒色土	焼土粒含む	"
2a	7.5YR5 褐色土	シルト質土	焼土粒含む部分で多少差
2b	7.5YR5 明褐色土	シルト質土	部分的に焼けている
2c	"	シルト質土	" 2b層より明るい
3a	2.5YR5 赤褐色土	焼土	部分的に埋、暗赤褐色あり
3b	2.5YR5に多い赤褐色土	焼土	バラバラし、しりまいなし
3c	5YR5 赤褐色土	焼土	しりまいあり、炭含む
4	10YR5 暗赤褐色土	シルト質焼土	"
5	7.5YR5 黒褐色土	"	焼土粒と炭少、固い
6	5YR5 赤褐色土	焼土	焼土粒あり
7	7.5YR5 黒褐色土	"	やわらかく、しりまいある
8	7.5YR5 暗褐色土	"	固く、しりまいあり、シルト混在
9	7.5YR5 黒褐色土	"	粘性あり固くしる
K-L M-N			
1	2.5YR5に多い赤褐色土	焼土	炭少量含む
2	7.5YR5 暗褐色土	黒色土シルト混合	炭少量含む
3	7.5YR5 黒色土	"	固く、しりまいよく粘性あり
4	7.5YR5 褐色土	黒色土シルト混合	非常に固くしりまいよい
5	7.5YR5 黒褐色土	"	固くしりまいよい、軽状シルト含む

第52—1 図 43号(Nj21)竪穴住居跡

掘りこんでいる。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>では廃棄後埋土し、上面を貼って床面としている。

出入り口の施設と想定されるものにP<sub>1</sub>がある。すなわち、P<sub>1</sub>の埋土は、シルトまたは黒褐色土とシルトの混土を主体に互層状に埋められ、非常に固くしまっており上面が貼られており、壁の上端から床面にゆるかなスロープ状を呈することなど、貯蔵穴を出入り口に転用したか、当初からそのような用途をもつ施設であった可能性も想定されるが現状では断定はできない。



第52—2图 43号(Nj21)·44号(Ob30)·45号(Oc27)竖穴住居跡出土遺物

炉様施設として、床面北半の中央よりやや西寄りに位置し、焼土の中央に立石をもつ施設がある。径100cm×130cmほどの範囲で床面を若干掘りくぼめ、10cm～15cmほどの埋土をし立石を施設しており、立石の周囲に50cm×60cmの範囲で5cmほどの厚さの焼土が広がる。焼土上面は床面より10cmほど高い。なお、石囲い等は認められない。

**出土遺物** (第52—2 図)

土器類は、叩目を有す土師器甕片が若干ある程度。図示したのは両輝石安山岩を素材とする石製品3点である。No.1は3面に使用痕のある砥石である。三角形を呈す断面の各角には、鋭利な鉄製品の刃部を研磨したと思われる痕跡が残る。No.3はNo.1の小型品とも思えるが、平坦面を使用した形跡は特に観察されない。単なる自然石かもしれないが、No.1と同じ材質でしかも断面が三角形を呈すことから、類似の遺物として掲示したものである。No.2は、陽物石製品の類いと思われる。

**44号 (Ob30) 竪穴住居跡** (第52—2・53図 写真図版27・68)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西1.8m、南北4.4m、面積6.72m<sup>2</sup>で、南北に細長い長方形を呈する。カマド方向軸はN—80°—Wである。

(堆積土) 二層に大別される。すなわち、1層の黒褐色土と2層の黒色土であり、後者に炭を多量に含む。堆積状況は東壁と西壁側から中央に流れこむ様相をもつ。南半は攪乱のため本来の堆積土は不明であるとともに、南端では現代の水路の影響でグライ化層がみられる。

(壁) 東壁の南半と南壁は攪乱でほとんど破壊されており、床面でその範囲を確認できた。遺存部分の壁は、やや外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは約20cmである。

(床) 南半が若干低くなるが、面的には著しい凹凸はない地山を利用した床面である。北半東壁沿いに細い材の炭化物の広がりが認められたが、火熱による赤変面はない。

(柱穴) 認められない。

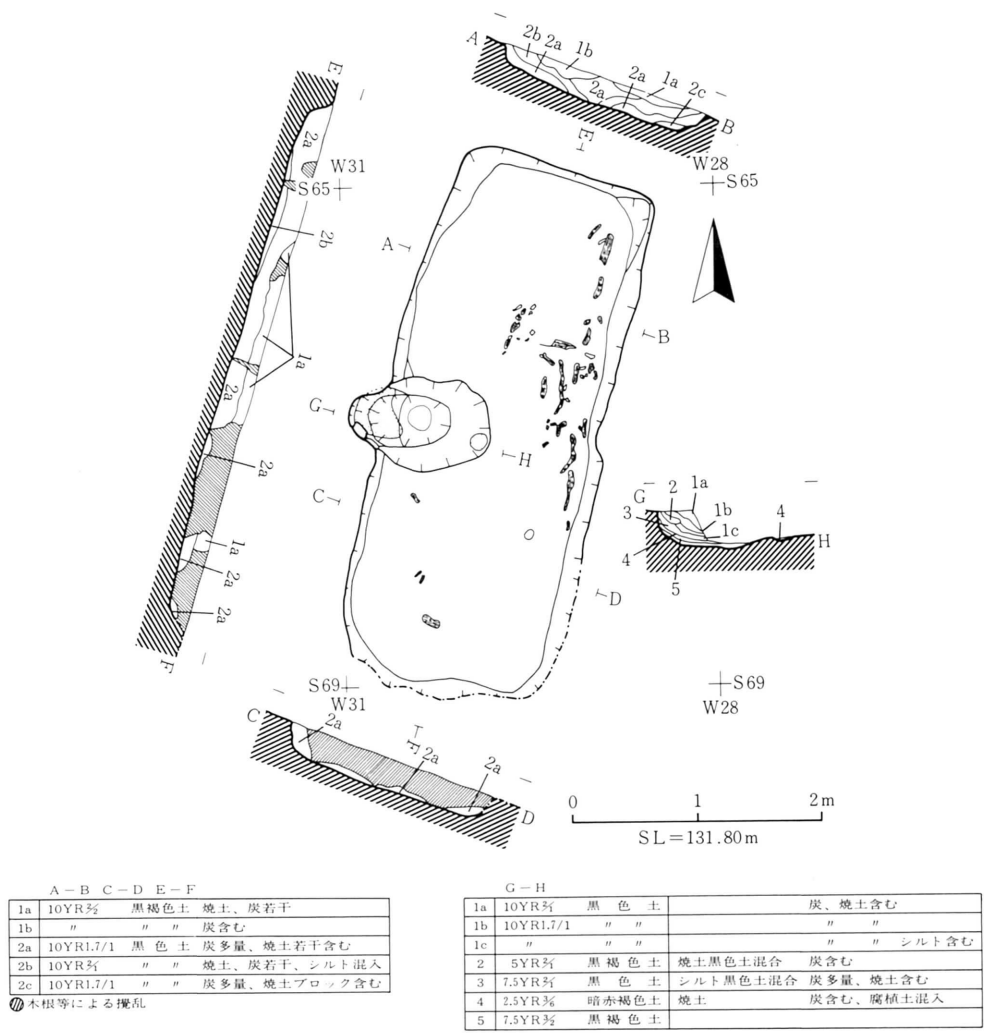
(周溝) 認められない。

(カマド) 西壁中央に位置し、燃焼部の奥壁が壁外に張り出しているが、煙道、煙出しは認められなく、遺存状況が悪く全体構造は明瞭でない。

(その他の施設) 認められない。

**出土遺物** (第52—2 図)

環形土器3点、甕形土器2点、鉄製品1点、計6点の実測である。ただし、No.2は遺構検出段階にあって本竪穴住居跡のやや北側から発見されたもので、本来的な共伴を意味するものではない。



第53図 44号 (Ob30) 竪穴住居跡

甕のNo.4はロクロ成形。推定口径16.1cm。内面にはカキ目痕が残る。外面の凹凸はあまり目立たず、僅かにロクロナデ痕がみられる。No.5は堆積土中からの出土。ロクロ成形であるが内面の作りはかなり雑であり、輪積痕上にヘラに依るナデツケがあるが、凹凸を消しきれないでいる。外面の体部には横位の叩目があり、その上にヘラ削りが加えられる。反転復元に依る計測では口径が21.0cm位に推測される。

鉄製品はNo.6の1点。全長13.7cm。錆の付着は比較的少ないが一方の端部が欠失している。角釘と推察される。床面出土である。

他に破片として、堆積土中から土師器木葉底部片、ロクロと非ロクロの土師器体部片等が出土している。非ロクロ片は、外面に刷毛目かヘラ削りのものが大半である。また、最上層には近世の陶磁器細片がみられる。

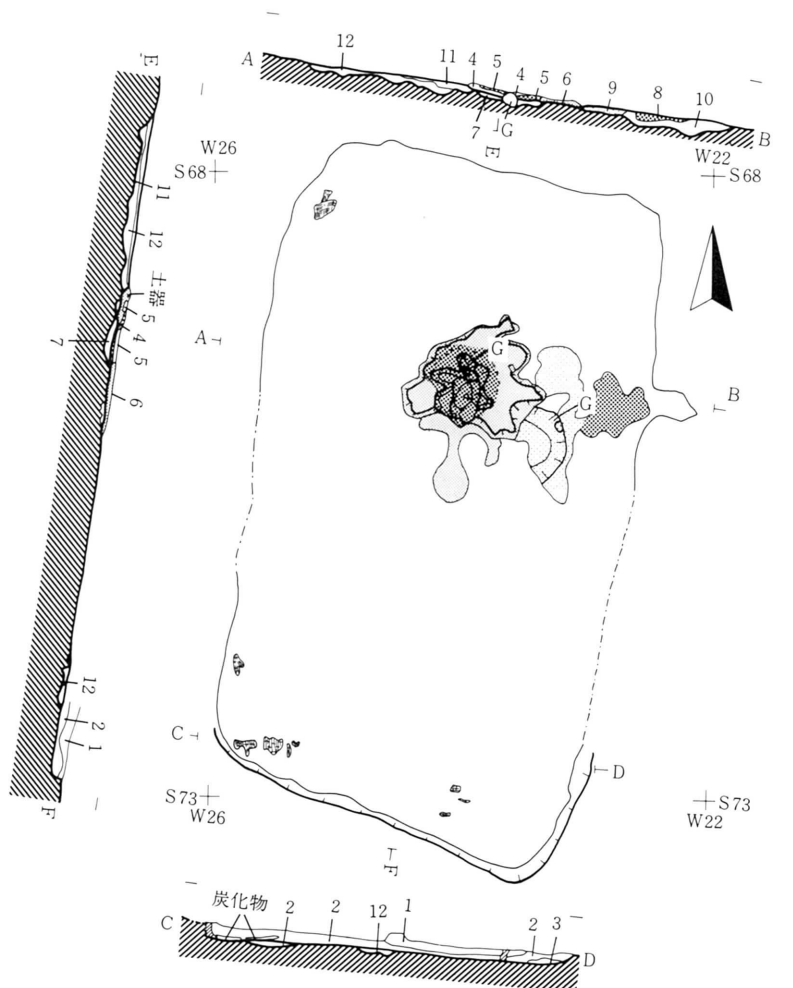
45号 (Oc27) 竪穴住居跡 (第52—2、54図 写真図版28)

(重複 改築) カマド廃棄後に炉が構築されたものとみられる。

(規模 平面形 方向) 東西3.1m、南北5.3m、面積15.60㎡の南北に長くややゆがんだ長方形である。カマド方向軸はN-97°-Eである。

(堆積土) 削平が著しく、わずかに遺存する堆積土は黒色土に炭極少と焼土を含む1層と黒色土に多量の炭を含む2層を主体とする。

(壁) 削平のためほとんど遺存せず南壁で痕跡を残すのみで、検出面まで10cmほどの高さである。



A-B C-D E-F		
1	10YR7/1黒色土	炭極少・焼土含む
2	10YR7/1" "	炭を多く含む、焼土あり
3	10YR7/1" "	11層と類似
4	10YR7/1無彩色土	焼土、炭を含む
5	5YR7/1赤褐色土	強く焼けている、固い
6	5YR7/1無彩色褐色土	炭を含む
7	黄褐色土	粘性が強く、しまりあり
8	5YR7/1赤褐色土	5層と類似
9	5YR7/1無彩色褐色土	シルト混る、ボソボソしやわい
10	10YR7/1無彩色土	4層に類似
11	" "	4・10層に類似、固い
12	" "	黒色土シルト混合 未構築土

第54図 45号 (Oc27) 竪穴住居跡



(床) 削平のため遺構検出面が床面という状況である。北半で掘り方をみるが、南半は地山面利用の床で、全般に平坦である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半の中央に位置する。削平のため全貌は明瞭でないが、燃烧部掘り方と煙道の痕跡が認められた。なお、焼土の堆積状況から、後述する炉様の施設より古いと推察される。

(その他の施設) 北半の中央でカマドの西側に、炉様の施設が認められる。径約50cmで南開きの馬蹄形の掘りこみの中央に立石が認められ、馬蹄形面は黄褐色シルト質土を貼って構築したもので、立石を中心に焼土の広がりをもつが、石周辺は強く焼けた焼土である。カマド使用時の焼土が、本施設使用時の焼土下で認められることからカマドより新しく構築されたものと推察できる。

#### 出土遺物 (第52-2図)

出土遺物は少なく、図示したのはNo.1の土師器甕とNo.2の鉄製品のみである。No.1は中央焼土内からの出土で、反転復元に依る実測である。叩目を有する非ロクロ成形の甕である。口縁部は歪み、内面には巻上げの痕跡をそのまま残している。部分的にはヘラ先で巻き上げの接着面を横方向にナデツケしているが、かなり雑で器肉の厚さが一定しない。外面の頸部近くにあつては縦位の叩目があり、更に横位のそれが重なる。従つて部分的に格子目を呈している。下方は、ヘラ削りで器面調整をしたと思われるが、単位は確定しない。

No.2の鉄製品は住居跡内ピットからの出土。最大幅3.7×3.0cm大の板状三角形を呈すが、器種は不明。

その他破片としては、床面中央焼土内より、刷毛目調整を主とした土師器甕片、横位の叩目を有す土師器片等が散見される。なお、坏形土器類は、各類共出土していない。

#### 46号-1 (Oi33-1)・46号-2 (Oi33-2) 竪穴住居跡

(第55図 第38表 写真図版28・29・68)

(重複 改築) 46号-1 竪穴住居跡としたものを拡張し46号-2 竪穴住居跡としており、本来同一住居跡となすべきものであり一括して記述する。

(規模 平面形 方向) 46号-1 住は、東西4.7m、南北5.7m、面積24.3m<sup>2</sup>、南北に長い長方形を呈し、カマド方向軸はN-190°-Eである。ただし、後述するように拡張以前にカマドを移築した可能性もあり、その場合の新規カマド方向軸は、46号-2 住と同じになる。

46号-2 住は、東西6.3m、南北7.1m、面積41.89m<sup>2</sup>、東壁がやや外にふくらむ歪んだ長方形であり、カマド方向軸はN-107°-Eである。

(堆積土) 黒褐色土を主体とする堆積土で、混入物による差異は認められないがほぼ類似する。その中で、南東寄りに堆積する4層は全般に焼土粒を含み、カマド周辺の堆積土の特徴をもつ、壁ぎわに流入する6層は黄褐色シルトブロックを混在する。1層～6層は人為性はみられず自然堆積土であるが、8層～11層は、拡張の46号-2住期の貼り床土の可能性がある。8層はシルトが混り若干固さをもつものの顕著な人為性を認めないが、9層のシルトと10層、11層を包括し、46号-1住の床面と拡張面との段差を埋めた貼り土と推察される。

多量に検出した炉壁片の分布は、東壁南端寄りに位置するNo.2カマド本体付近に最も密集し、そこから北西方向に3.5m～4m、幅0.8m～1.5mの帯状の範囲に分布するが、これを包含する層は、詳細な記録がなく明らかにできないが、炉壁片分布範囲の一部が1層の焼土ブロックと炉壁片を含む黒褐色土が相当すると推察されるし、この分布範囲には焼土と灰の散在が確認されている。炉壁片の検出はレベル的にみて、一部は検出面上で確認でき、検出面下約10cmの幅の中に大半の上面レベルが包括され、深いもので20cm下が若干あり、それがカマド本体付近密集部分の北および南側に分布する炉壁片である。

(壁) 垂直に近い立上がりで、検出面までの壁高は高い部分で30cm内外、46号-2住拡張部では10cm～20cmを計る。拡張部の壁は46号-2住の北壁および西壁と平行せず、東壁の大半は共通するが拡張部は西に屈折する。すなわち、46号-1住プランの南北方向に対し、46号-2住プランの南北方向はやや西に傾く状況を呈する。

(床) 46号-1住では全体に掘り方をもち、黒色土とシルトの混合土を用いほぼ平坦な床面を構築しているが、46号-2住は、拡張部の大半は地山シルトをそのまま床面とし、北東隅および北西隅に浅い掘り方を認めた。46号-1住床面と拡張床面とは約10cmの段差を認めるが、北壁東半部では小さくなりほとんど感じられない。段差の大きな部分、つまり、46号-1住プランの西半相当には、東に低くなる状況に斜めに貼り土をし段差を埋めたと推察され、したがって、46号-2住の床は、拡張部の大半は地山シルト、46号-1住と共通する部分西半では貼り床、東半は旧住居跡の床面と一部に後述する粘土の貼り土を用い、西側から東側に低く傾斜するが面的には凹凸のない床であったものと推察する。

しかし、貼り土とした断面A-B・C-Dの9層～11層はともかく、8層は人為性が顕著でなく、調査時に面的に観察しなかった不備もあって、貼り土として断定する積極的要素を若干欠くが、層の入り方と他の堆積土よりシルトを混入し固さを認めることから、前述のような状況を推察したが、本来段差が存在したものであったことも完全に否定し得ない。

一方、46号-1住の東半床面に部分的に焼土混りの固い灰白色粘土が認められ、塊状ではなく5cm内外の厚さで広がりをもつもので、46号-2住の貼り土の可能性もあるが断定できない。

(柱穴) P<sub>1</sub>～P<sub>22</sub>の柱穴状ピットを検出した。46号-1住に伴うものは、位置と状況から



第55—1図 46号—2(O133—2)竪穴住居跡 炉片分布平面図

次の各ピットと推察される。すなわち、 $P_{10} \cdot P_{12} \cdot P_{19} \cdot P_{20} \cdot P_{14} \cdot P_{15} \cdot P_{16} \cdot P_{22} \cdot P_{17} \cdot P_{21}$ で、 $P_{10} \cdot P_{12} \cdot P_{19} \cdot P_{20}$ は、それぞれ北壁と南壁の midpoint 近くに位置し、 $P_{10}$ と $P_{12} \cdot P_{19}$ と $P_{20}$ が隣接しその間0.7mと0.8mを計り、 $P_{10}$ と $P_{19} \cdot P_{12}$ と $P_{20}$ が対になって、5.7mと5.9mの間を計り住居跡北壁 midpoint から南壁 midpoint へと南北軸に平行する。この4本の柱穴は内側に傾き $P_{12}$ と $P_{20}$ は特に顕著である。

$P_{14} \sim P_{16} \cdot P_{22}$ の相関も考えられるが明確でない。すなわち、 $P_{14}$ と $P_{22}$ は後述する間仕切り様の溝に関連した囲いの施設等である。なお、 $P_{14}$ と $P_{22}$ は3m、 $P_{14} - P_{15} - P_{16}$ は0.8m—0.85m、 $P_{16}$ から間仕切り様溝上端まで0.85mの間を計り、4点を結ぶとほぼ正方形に近い。 $P_{17}$ と $P_{21}$ はカマド施設張り出し部の両隅に位置し対状をなし、カマド施設部と関連するものと推察される。

46号—2住に伴う柱穴は $P_1 \sim P_9$ 、 $P_{11}$ が明瞭である。 $P_1 \cdot P_3$ は住居跡平面の対角線上に乗り、 $P_3 \cdot P_4$ は若干東にずれる。各壁上端からの測定値は、 $P_1$ で南壁から2m 西壁から1.8m、 $P_2$  西壁から1.5m 北壁から1.6m、 $P_3$  北壁から1.65m 東壁から1.8m、 $P_4$  東壁から1.45m 南壁から2.8mを計り、 $P_1 - P_2 - P_3 - P_4 - P_1$ 間は、3.3m—2.9m—3.3m—3.05mを計る。

$P_7 \cdot P_8$ は北壁に接し相互の間は2m、これにほぼ平行し46号—1住北壁上端に $P_9 - P_{11}$ があり、1.8mの間を計る。 $P_7 \cdot P_9 \cdot P_8 \cdot P_{11}$ は対状になり、それぞれ1m、1.2mの間をもつ。



これら4本の東西方向は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の東西方向とほぼ平行になる。また、検出柱穴の中では最も柱痕を明瞭に残している。

P<sub>18</sub>は、いずれの住居跡に伴うか不明であるが、P<sub>17</sub>とP<sub>19</sub>と関連させたとき、P<sub>17</sub>—P<sub>18</sub>—P<sub>19</sub>の間が、各1.45mとなり柱穴を結ぶ延長線が拡張南壁線上にほぼ乗ってくることから、拡張時の南壁関連も推察され、とするならP<sub>17</sub>・P<sub>19</sub>は重複した使用も考えられるが確証なく断定できない。

(周溝) 46号—2住の拡張部分北半にのみ認められ、幅、深さとも15cm内外である。

(カマド) No.1カマドは南壁東端を若干外へ角状に張り出させ施設したものと推察されるが、現状は煙道と煙出しのみ遺存する。煙道は幅25cm、深さ10cm内外の溝状で長さ80cmあり先端に楕円状の煙出しをもつ、煙出し底面は煙道より15cm落ちる。このカマドは、遺存状況からNo.2カマドより古く46号—1住に伴うものである。

No.2カマドは東壁南端に位置し、二枚の火床面を認めるものである。すなわち、断面D—D'の15層はカマド構築掘り方埋土で、その上に敷かれたシルトの焼土化が14a層の瓦礫状および14b層の焼土層で1次の火床面であり、1次火床面上に白灰粘土とシルトを敷き2次火床面としており、火熱のため赤褐色化した白灰粘土が13層、シルトは12a層、12b層で特に12a層は瓦礫状を呈する。

2次火床面構築に当って全面改築したものか否かは明瞭に把握できない。現存の袖は粘土とシルトを主体に用い内から外へ貼りつけており、右側壁には石を、左側壁には炉壁片の転用と石を使用している。2次火床面は間口60cm、奥行100cm内外あり、右側壁寄りに支脚使用の伏せた甕がある。煙道は火床から緩傾斜で先端に高くなる幅25cm、深さ15cm～20cmで110cmの長さをもつ溝状で先端での煙出しとの区別はない。

なお、側壁転用の炉壁は燃焼部にも破片を多量に検出し、カマドを基点に北西方向に何らかの作用で押し流された様相を呈することから、燃焼部の上部にも転用した可能性もある。

No.2カマドはNo.1カマドより新規で、46号—2住に伴うものとみるが、1次火床期については拡張前の46号—1住期にNo.1カマドから移築されたとする可能性は否定できない。

(その他の施設) 46号—1住に伴ない間仕切り様の溝を検出。北壁に平行し幅15cm～20cm、深さ5cm内外で長さ3mあり、北壁から溝南側の上端まで約1.2mある。明確な性格は不明であるが、前述のP<sub>14</sub>・P<sub>22</sub>柱穴等との相関があり得るならば間仕切りとも推察できる。

P<sub>23</sub>～P<sub>32</sub>のピットは、拡張床面に所在するP<sub>31</sub>・P<sub>32</sub>と施設順において柱穴P<sub>4</sub>より新しいP<sub>24</sub>は、46号—2住に属するが、他のピットについては、検出面の把握が不備であったこと、共通の床面の可能性とから、いずれの住居跡に属するか判然とし得なく遺憾である。

ただ、拡張部分のピットを除き、堆積土に焼土をもつものが多く、特にP<sub>24</sub>・P<sub>27</sub>・P<sub>28</sub>は量

A-A' B-B'

1a	7.5YR3/5	黒褐色土	全般にシルト粒混入、極少の炭あり、しまり悪い
1b	7.5YR3/5	"	若干の焼土ブロックとが壁片あり
2a	7.5YR3/5	"	混入物ほとんどなし
2b	"	"	2a層より若干含む
3	7.5YR3/5	黒色土	シルト粒を若干含む
4a	7.5YR3/5	黒褐色土	混入物ほとんどなし、2a層とほぼ類似するが色調が若干異なる
4b	7.5YR3/5	"	焼土粒が全にあり
6a	7.5YR3/5	"	シルト粒が全にあり
6b	"	"	黄色シルトの小ブロックを全般に含む
7	7.5YR3/5	暗褐色シルト	6a層よりシルトブロック少量、炭灰少量あり
8	7.5YR3/5	暗褐色シルト	焼土粒散在
9	7.5YR3/5	暗褐色シルト	一部に極小の焼土粒あり、シルトが混る
10	7.5YR3/5	暗褐色シルト	黒褐色土若干混入
11	7.5YR3/5	暗褐色シルト	黒褐色土と黄褐色シルトの II 期住の床か
12	7.5YR3/5	暗褐色土	黒褐色土と黄褐色シルトの攪拌土

C-C'

1	7.5YR3/5	黒褐色土	シルト粒混る
2a	7.5YR3/5	"	黒色土とシルトの混土、粒状、ブロック状焼土あり
2b	"	"	"
3	7.5YR3/5	"	粒状ブロック状に黄褐色シルト混在、粒状焼土若干取り
4a	7.5YR3/5	暗赤褐色土	焼土と黒色土の混合土、まだら状に焼土あり、炭あり
4b	"	"	"
4c	"	"	4a層より焼土少ない
4d	"	"	"
5	"	"	"
6	5 YR3/5	黒褐色土	黒色土とシルトの混合土に黒色土がまだら状に入る
7	7.5YR3/5	暗褐色シルト	極少のシルト粒あり

D-D'

1	7.5YR3/5	黒褐色土	粉状シルト、焼土若干
2	10YR3/5	暗褐色土	黒色土と黄色シルトとまだらに混合、焼土小ブロックあり
3	7.5YR3/5	黒褐色土	シルトと混色の混土、粉状の焼土あり
4	5 YR3/5	暗赤褐色土	黒色土に焼土、シルトが若干混る
5	6.5YR3/5	黒褐色土	カラカラし、粉状の焼土、シルトが若干混る
6	7.5YR3/5	暗褐色シルト	黒色土混入
7a	5 YR3/5	暗赤褐色焼土	黒色土混入
7b	5 YR3/5	"	黒色土混入極少、土器を少量に出す
8	5 YR3/5	黒褐色土	粉状焼土、灰壁小塊を含み
9	10YR3/5	暗褐色土	2層と類似する
10	5 YR3/5	暗赤褐色土	小ブロック、粉状の焼土混る
11	7.5YR3/5	暗褐色土	3層と類似する
12a	5 YR3/5	赤褐色焼土	火熱で互酸化したシルト
12b	7.5YR3/5	褐色シルト	黒色土若干、炭を含み火熱で若干赤変した部分あり
13	5 YR3/5	赤褐色粘土	赤褐色化した粘土、生の状態で非常に粘り性
14a	"	赤褐色焼土	12a層と類似する
14b	5 YR3/5	極暗赤褐色焼土	火熱で焼土化したシルト
15	10YR3/5	暗褐色土	焼土粒を含む

E-E'

1a	5 YR3/5	暗赤褐色粘土	火熱で赤化した粘土
1b	10YR3/5	暗褐色粘土	焼土粒若干混入
1c	10YR3/5	褐色粘土	1b層の汚れ、小ブロック状黒色土あり
2	10YR3/5	暗褐色土	黒色土と粘土混土、粒状の焼土混入
3	10YR3/5	暗褐色土	混れたシルト混りの粘土
4	10YR3/5	暗褐色土	シルトが若干混る黒色土、土器含む
5	10YR3/5	褐色砂質シルト	カラカラする
6	10YR3/5	黒褐色土	黒色土の混った粘土、焼土小ブロックあり
7	10YR3/5	暗褐色土	焼土粒と炭を含む
8	10YR3/5	暗褐色土	白粘土、焼土粒子を含む
9	10YR3/5	"	黒色土をまだら状に入
10	10YR3/5	暗褐色土	黒色土にシルトがまだら状に入る炭混入

F-F' (P23)

1	5 YR3/5	暗赤褐色焼土	若干のシルト、炭を含む
2	7.5YR3/5	暗褐色土	まだら状のシルト、白粘土あり
3	10YR3/5	暗褐色シルト	シルトがまだら状に若干含む
4	10YR3/5	暗褐色土	シルトがまだら状に若干含む

G-G' (P24)

1	10YR3/5	暗褐色土	若干シルトを含む
2	5 YR3/5	暗赤褐色焼土	"

H-H' (P25)

1a	10YR3/5	暗褐色シルト	部分的に焼土を含む
1b	7.5YR3/5	"	"
2	10YR3/5	暗褐色土	全体的に "

I-I' (P26)

1	7.5YR3/5	暗褐色土	焼土を含む黒褐色土
2a	5 YR3/5	暗赤褐色焼土	シルトをまだら状に含む
2b	"	"	シルトを若干含む
3	7.5YR3/5	暗褐色シルト	黒色土を大量に含む
4	2a層と同じ	"	"
5	10YR3/5	暗褐色土	3層と似るが褐色味が強い

J-J' (P27)

1	5 YR3/5	暗赤褐色粘土	粘土に焼土が混る
2	10YR3/5	暗褐色シルト	汚れている
3	10YR3/5	暗褐色シルト	黒色土を多く混入
4	10YR3/5	暗褐色土	シルトを大量に含む
5	10YR3/5	暗褐色シルト	3層と似るが褐色味が強い

K-K' (P28)

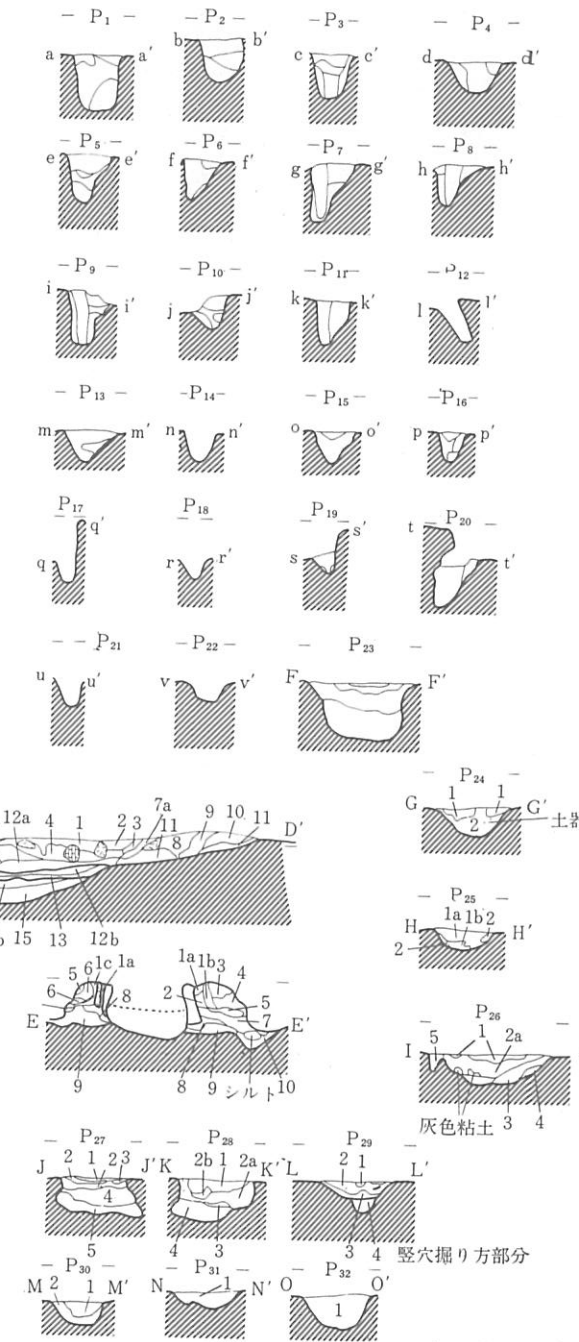
1	5 YR3/5	暗赤褐色焼土	非常に湿気あり
2	10YR3/5	暗褐色土	非常にやわらかい
3	10YR3/5	"	"
4	10YR3/5	暗褐色シルト	シルトを大量に含む

L-L' (P29)

1	5 YR3/5	暗赤褐色焼土	黒色土に焼土を含む
2	7.5YR3/5	暗褐色土	混りなし
3	10YR3/5	暗褐色シルト	シルト混り
4	10YR3/5	暗褐色土	床構築土の一部か



M-M' (P30)		
1	10YR3/5	黒褐色土、シルト混り、黄色シルトブロックあり
2	"	"
N-N' (P31)		
1	7.5YR3/5	極暗褐色土、黒色土、シルトの混土に黄色シルトと黒色土の小ブロックあり
O-O' (P32)		
1	7.5YR3/5	極暗褐色土、P23、堆積土と類似



項目	口径	検出面(cm)からの深さ	項目	口径	検出面(cm)からの深さ	項目	口径	検出面(cm)からの深さ
P1	40x45	43	P13	32x45	25	P25	58x58	23
P2	42x45	32	P14	25x25	23	P26	43x50	14
P3	33x35	35	P15	30x35	25	P27	80x95	25
P4	50x?	25	P16	15x20	19	P28	影無断	39
P5	35x45	38	P17	20x23	16	P29	55x65	32
P6	27x40	32	P18	22x25	18	P30	50x65	15
P7	36x39	47	P19	20x26	40	P31	40x50	17
P8	30x43	34	P20	20x23	22	P32	55x70	13
P9	30x35	42	P21	27x28	15			
P10	30x35	25	P22	83x91	46			
P11	25x25	35						
P12	17x22	35						

第55-2図 46号-1 (O133-1)・46号-2 (O133-2) 竪穴住居跡

的に多い。P<sub>27</sub>は上面を貼っておりP<sub>23</sub>とP<sub>26</sub>も可能性が強く人為的埋土の可能性があり、他にP<sub>24</sub>も一気に焼土を埋めたものとみられる。また、P<sub>29</sub>は底をシルトで貼っており特徴的である。

形態的には、隣接するP<sub>27</sub>とP<sub>28</sub>が口径に対し底径が広く袋状を呈し、P<sub>23</sub>は円筒状に近い。他は半円もしくは皿状である。これらピットの性格は特定できないが貯蔵穴他の用途が想定され、炉壁と直接関連づけられるピットはない。

#### 出土遺物・46-2号住 (第55-3・5図No.1・12・32)

出土遺物は、第46号-1(Oi33-1)住の方に集中しており、本遺構からの出土はA類(No.1)、須恵器蓋(No.12)、砥石(No.32)の3点を図示しているだけである。他に破片として、刷毛目とヘラ削りを中心とする土師器体部片とロクロ成形細片が若干みられる程度である。

No.1は床面出土。口径13.8cm、底径6.8cm、器高4.4cm、ヘラ切無調整の坏。No.12は堆積土中からの出土。暗灰黄色を呈す硬質な蓋である。口径11.2cm。No.1・12共第46-1号住の壁近くに存在していた。No.32は床面出土の砥石。素材は石質細粒凝灰岩。4面に使用痕があるが、多く使われたのは1面である。

#### 出土遺物・46-1号住 (第55-3・4・5図 第38表)

出土遺物は多く、その大半が新期のカマド近くに集中している。住居跡内堆積土上面は46号-2(Oi33-2)住の床面レベルと同位であるが、以下の各層にも遺物は混入する。特に新期カマド周辺にあつては、少なくとも3段に渡る分布が確認される。

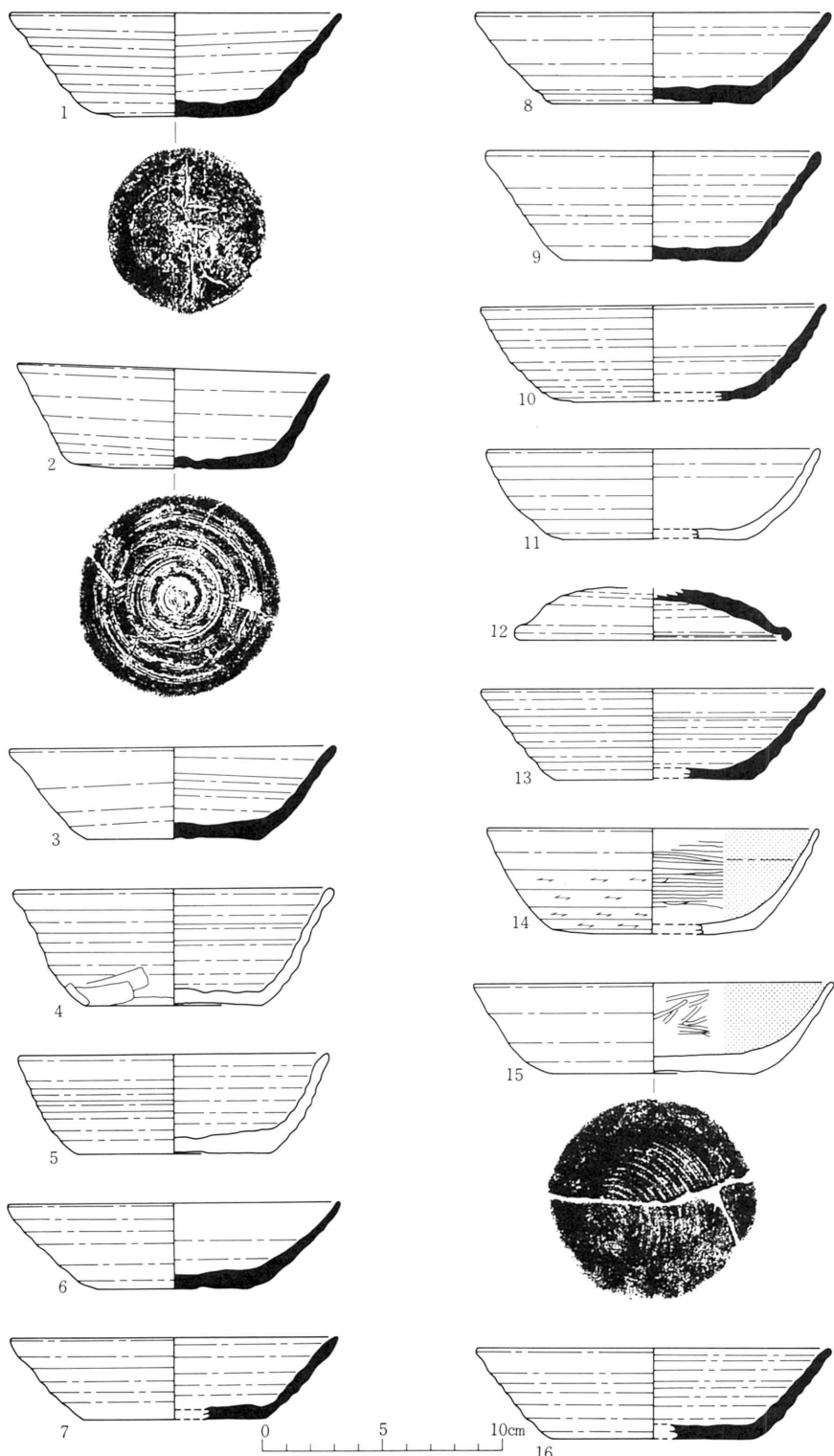
第50-2・4図中のNo.2・12・32は既述の46号-2住のものであるが、他は本遺構出土である。坏形土器14点、甕形土器10点、須恵器拓影図1点、土錘1点、鉄製品2点、砥石2点の他、第50-4図に示した遺物がある。

坏形土器はA・B・C各類がセットして出土する。A類9点、B類3点、C類2点の内訳であり、A類は概して体部が直線的に起上る例が多い。一方のB・C類は体部或いは底部付近でやや膨らみを持つのが普通であるが、口縁付近は外反乃至は外傾と一定しない。

甕形土器は土師器10点と須恵器拓影図1点を図示している。No.17・20・23・25・26は新期カマド周辺からの出土であるが、この他には体部に×印を有す土師器片も1点みられる。また、底部外面仕上げの特異な例としては、No.25・26の2点が挙げられよう。No.25は刷毛目、No.26は木葉痕上にヘラ削りが加えられる。

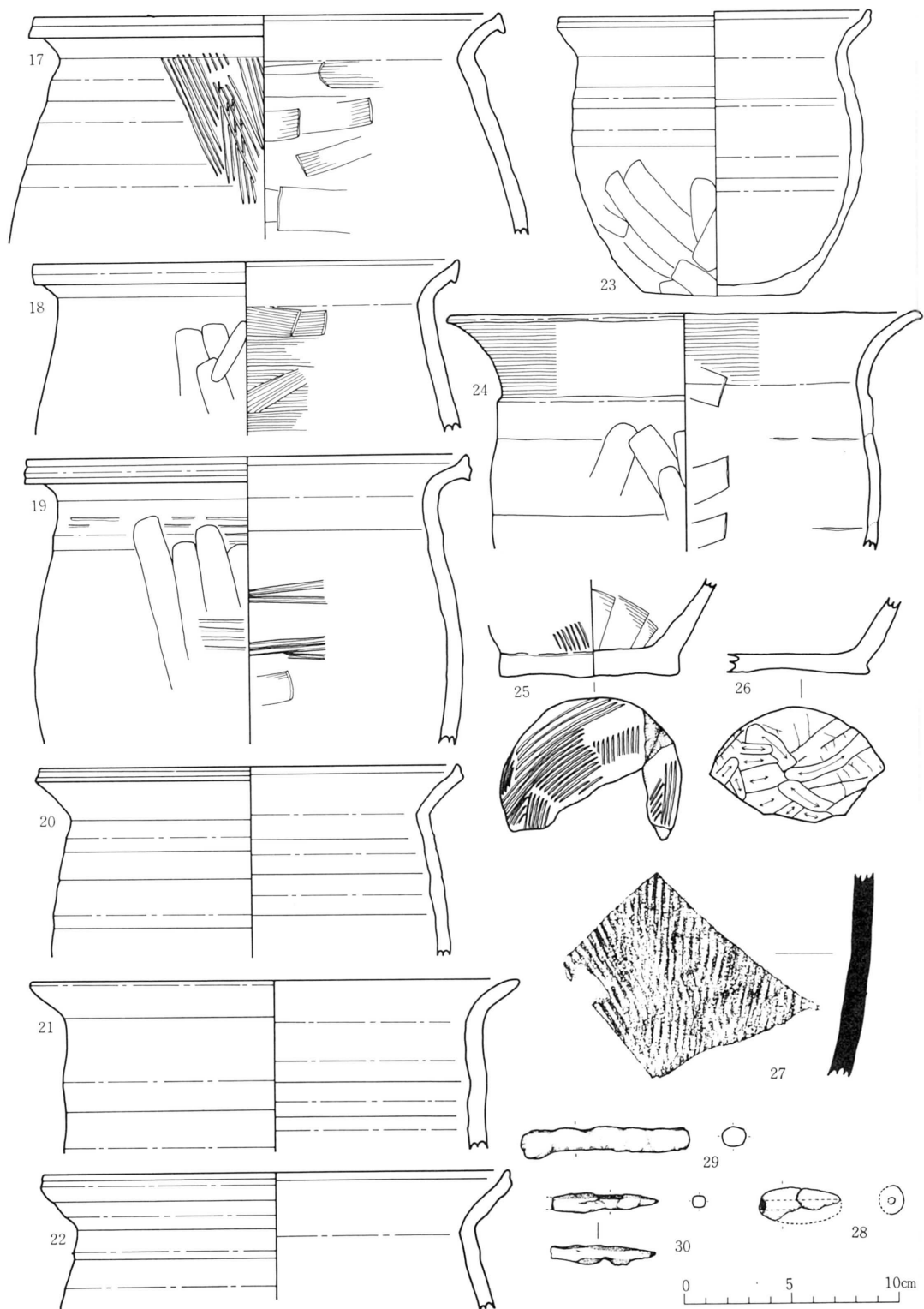
鉄製品は4点の出土であるが図示したのは2点、何れも器種不明である。各々についての法量等は38-3表の通りである。

砥石は、31・33の2点である。No.31は緑色凝灰岩、No.33は斜長石流紋岩を素材とする。前者は側面が台形状を呈し3面が使用されている。また後者は歪みのある四角柱で、4面が使用されている。何れも床面出土である。

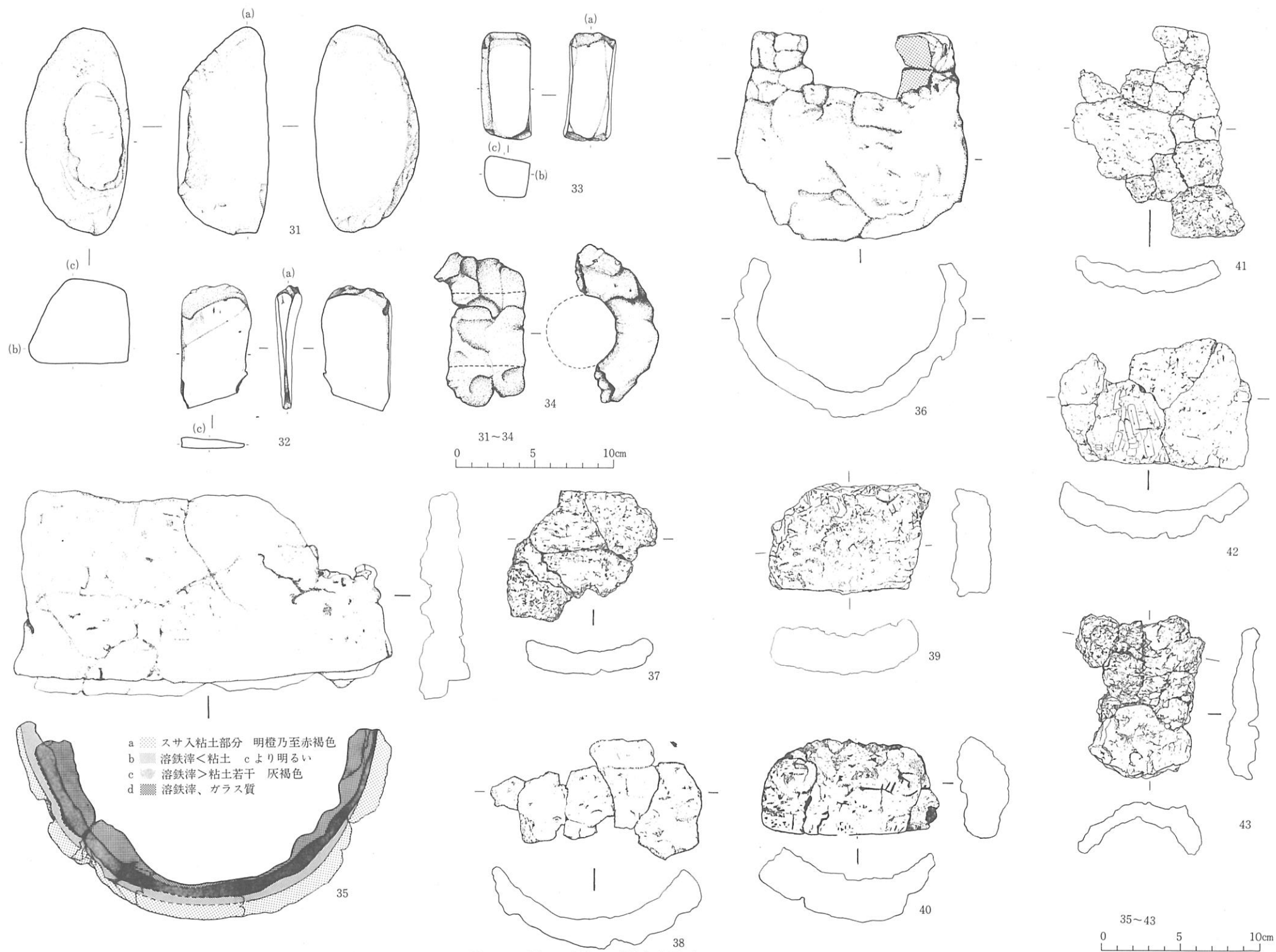


第55—3图 46号(Oi33)竖穴住居跡出土遺物





第55—4图 46号(Oi33)竖穴住居跡出土遺物



第55-5図 46号(Oi33)竪穴住居跡出土遺物

No34は韃の羽口片である。推定内径4.5cm以上の大型であり、一方の端部表面に溶鉄滓が多量に付着している。住居跡内の堆積土上面からの出土であるが、46号—2住の床面レベルにほぼ

第38—1表 坏形土器一覽

実測区番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
2	176	A類	ヘラ切	無調整		13.0	8.2	4.4	1.6	3.0	58.5	B類の色調 (7.5YR $\frac{7}{4}$ にぶい橙) (床面)
3	177	A類	ヘラ切	無調整		13.6	7.2	3.9	1.9	3.5	50.5	(堆積土)
4	178	B類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端~底部	13.2	7.4	4.9	1.8	2.7	58.5	硬質。(堆積土)
5	—	B類	ヘラ切	無調整		(12.8)	8.0	4.2	1.6	3.0	59	磨滅。(堆積土)
6	—	A類	ヘラ切	無調整		(13.8)	6.4	3.6	2.2	3.8	44	底部に軽いナデ。(堆積土)
7	—	A類	ヘラ切	無調整		(13.8)	(7.6)	3.4	1.8	4.1	48	(新カマド左袖左+新カマド付近堆積土)
8	179	A類	ヘラ切	無調整		(14.8)	8.4	3.8	1.8	3.9	50	(新カマド)
9	—	A類	ヘラ切	無調整		(13.8)	7.6	4.6	1.8	3.0	55.5	(堆積土)
10	—	A類	ヘラ切	無調整		(14.4)	(8.6)	4.0	1.7	3.6	52.5	(堆積土)
11	—	B類	磨滅		—	(13.8)	(7.6)	3.8	1.8	3.6	50	(新カマド左袖内)
13	—	A類	ヘラ切	無調整		(14.2)	(8.2)	3.8	1.7	3.7	52	(堆積土)
14	—	C類	磨滅	回転ヘラ削り	体部下端	(13.8)	(8.4)	4.4	1.6	3.1	57.5	(堆積土)
15	—	C類	回転糸切	回転ヘラ削り	底部外周	(15.0)	8.4	3.8	1.8	3.9	51.5	磨滅のため体部調整不明。(堆積土)
16	—	A類	ヘラ切	無調整		(14.8)	(8.2)	3.8	1.8	3.9	50	(堆積土)

第38—2表 甕形土器一覽

実測区番号	写真番号	種別	法量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
			口径	底径	器高	最大胴径	口縁部	体部	口縁部	体部	
17	—	土師器	(22.3)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラケズリ	非ロクロ。肩部有段。反転復元。(カマドNo2+床面)
18	—	土師器	(22.3)	—	—	—	ロクロナデ	木口利用のナデ	ロクロナデ	ヘラナデ	反転復元。外面刷毛目様。(掘り方埋土中)
19	—	土師器	(20.1)	—	—	—	ロクロナデ	横位の叩目+ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	反転復元。(堆積土)
20	—	土師器	(20.1)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。朱塗あるか?(カマドNo2+床面)
21	—	土師器	(22.9)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。一部黒変あり。(粗掘時出土)
22	—	土師器	(22.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。(ピットNo4堆積土)
23	180	土師器	14.8	7.3	13.3	13.7	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	底面ヘラケズリ。体部下端ケズリ部分器肉薄い。(カマドNo2焼土中)
24	—	土師器	21.0	—	—	—	ロクロナデ	叩目+ヘラケズリ	ロクロナデ	カキ目+ナデ	(堆積土)
25	—	土師器	—	8.4	—	—	—	刷毛目	—	ヘラナデツケ	非ロクロ。輪積み。底部外面にも刷毛目。(カマドNo2)
26	—	土師器	—	8.5	—	—	—	ヘラケズリ	—	木口利用のナデ	非ロクロ。底部外面木葉痕上にヘラケズリ。(カマドNo2)
27	—	須恵器	拓影図。外面平行叩目。内面押し痕あり。								

第38—3表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形	備 考
					長さ(mm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
29	—	不明	破片 ?	不良	77.50	9.50	11.0	11.90	楕円形	棒状。
30	—	釘状	端部片	やや不良	48.50	6.0	5.80	4.60	方形	(堆積土)
—	—	不明	破片	やや不良	28.70	—	—	0.90	方形	細い棒状片。(堆積土)
—	—	不明	破片	不良	—	—	—	計 21.0	—	詳細不明。(堆積土)

同位である。

No.35以下は、炉壁の一部と思われる。個体数は確定しないが、図示したもの以外にも多量の破片が出土している。カマドの袖部に比較的大き目の破片が備えつけられたようであったり、カマド燃焼部を中心とした範囲に散在していたものである。層位的には本遺構の堆積土上面に当たるが、この場合も46号—2住の床面レベルにほぼ近い。また、量的には少ないが鉄滓も同位に存在する。「製鉄遺構」に関わる遺物であろうが、ここでは特に触れない。各々についての様子は、No.35の断面図に示した様に、内側ガラス質の溶鉄滓が付着しており、外側に向かって漸移的に粘土質部分が多くなる。外壁部分は明橙色或るいは赤褐色を呈し、スサが入っている。この部分は火熱の影響をあまり受けない部分である。また溶鉄滓部分の表面には、部分的に突き刺さったような感じで木炭らしき痕跡がみられる場合もある。なお、No.35は上方に行くに従って狭くなるようであり、No.36が炉の先端部となる可能性が考えられる。

また、No.43は溶鉄滓の付着する面が他の遺物と異なり、反り方向が逆になっている。従って、円形のプランを呈す部分とハート形を呈す部分とがあったことを示唆する。

47号 (Pd15) 竪穴住居跡 (第56図 第39表 写真図版29・30・68・69)

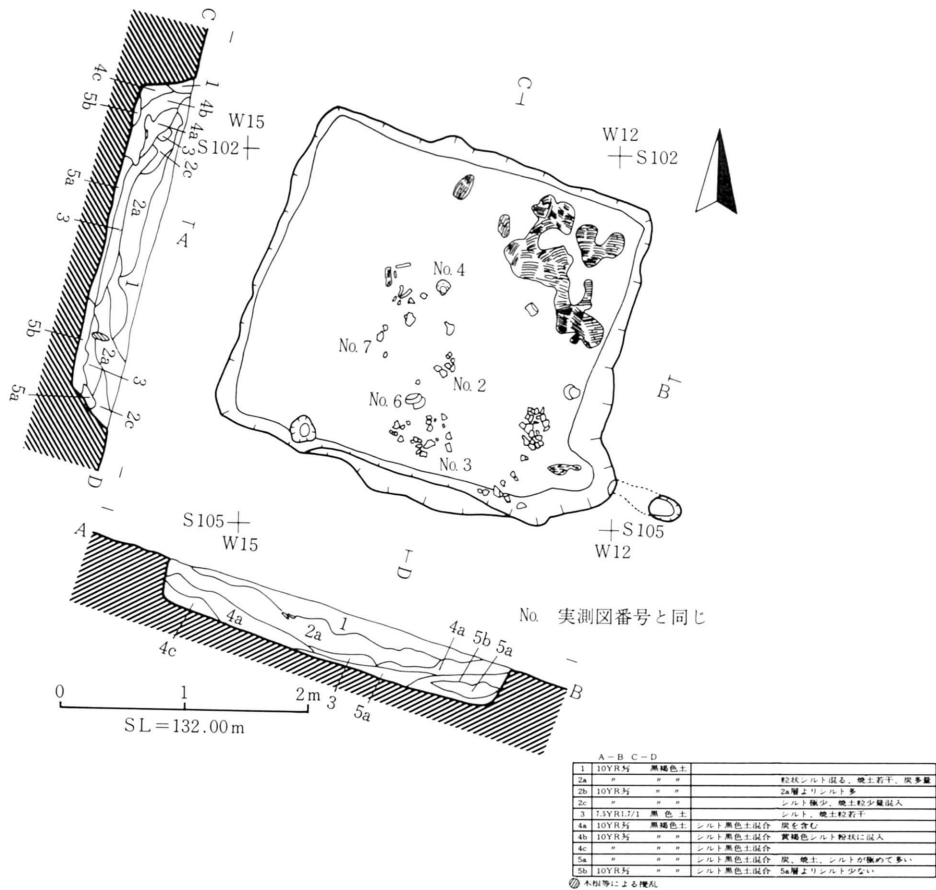
(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西2.9m、南北2.8m、面積3.4㎡のほぼ正方形の平面形をもち、カマド方向軸はN-109°-Eである。

(堆積土) 二大別できる。すなわち、1層から3層は黒褐色土からなり、4層・5層は黒色土とシルトの混合する黒褐色土となる。前者では1層を除き、シルト、焼土、炭が混入し、特に、2a層では多量の炭が認められた。後者も前者同様の混入物を見るが、竪穴住居跡東半に東壁から流れこむ様に堆積する5層では、焼土、炭、シルトの混入が極めて多量である。

(壁) 南壁でやや外傾するが、他は垂直に近い立ち上がりを呈し、検出面までの壁高は35cm~40cmである。

(床) 地山をそのまま利用するほぼ平坦な床面である。床面には炭が非常に多く検出されて



第56—I図 47号 (Pd15) 竪穴住居跡

おり、北東隅では茅状植物の炭化物が床面より若干浮いて認められ、状況から推測して床面敷設用の材より、上部材の落下したものと考えられる。なお、床面上での焼土は認められない。

(柱穴) 南壁の西半中央近くに柱穴状ピットがある。上端から一部を削りこんで壁に密着し、径20cmの円形で深さ17cmである。他にピットは確認されず柱穴としての確証はない。

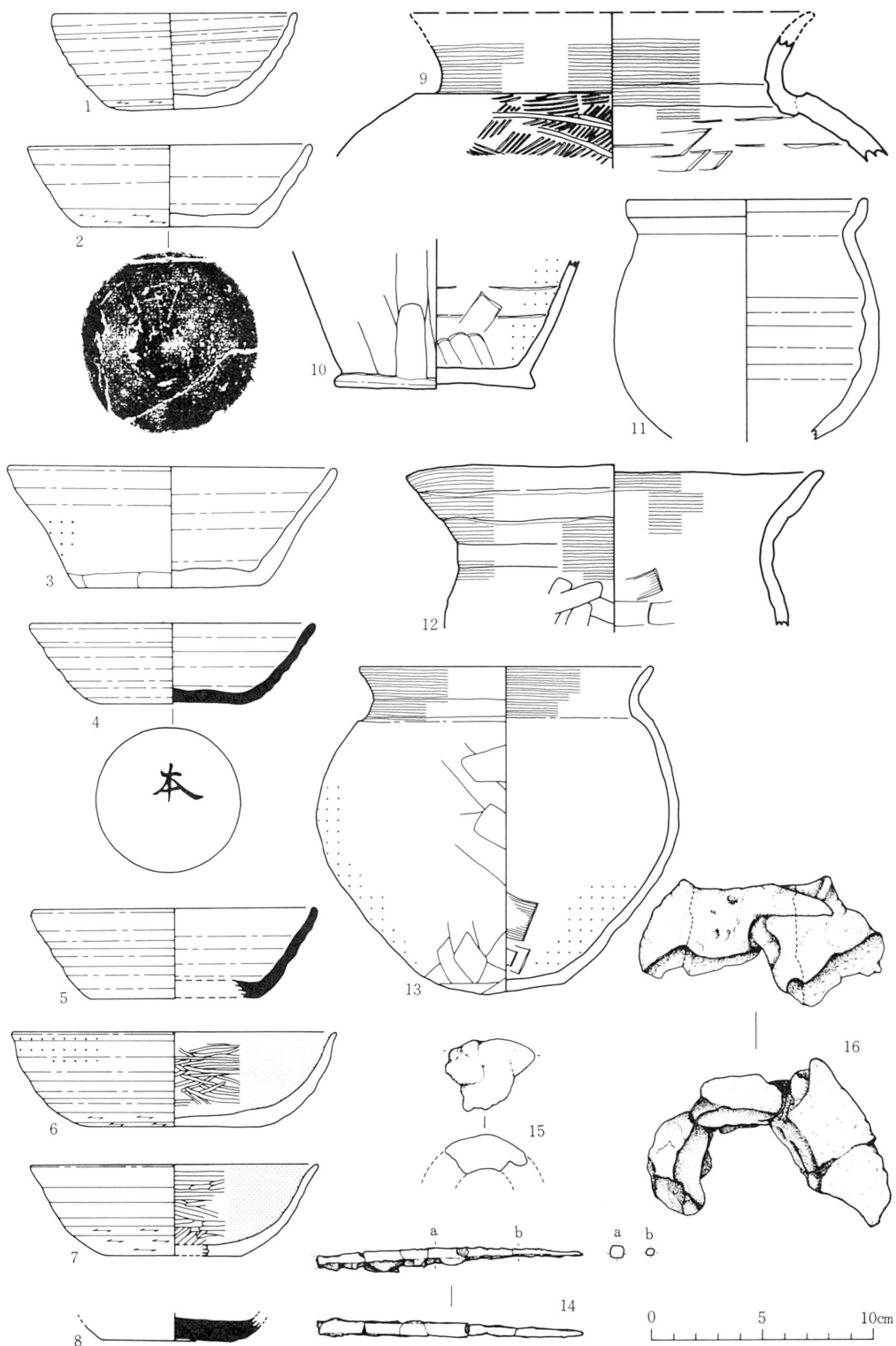
(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の南端に位置し、カマド構築の掘り方等は認められず、燃烧部は壁外に半円状に張り出し火床面は間口35cm、奥行30cmである。煙道は火床面から約20cm上がった燃烧部奥壁から、径10cm~20cmのくりぬきで約60cmのび先端が楕円状の煙出しとなる。

燃烧部、煙道部とも火熱の痕跡がみられず、遺物も検出されない。ただ、煙道の堆積土には若干の炭と焼土粒が混入している。

(その他の施設) 認められない。

(小結) 床面に炭化物が多量に検出されたことが顕著な特徴で、北東隅の茅状の炭化物の状況、堆積土中に炭と焼土を含み、特に、5層に多いこと等を総合するとき、焼失家屋である可



第56—2图 47号(Pd15)竖穴住居跡出土遺物

能性も推察される。

出土遺物 (第56—2図 第39表)

環形土器 8点、甕形土器 5点、鉄製品 1点、羽口片 2点の計16点の実測。他に堆積土内より、ロクロ・非ロクロ成形土師器甕片、A・B・C各類片等が出土している。甕は大・小の両様が見られ、非ロクロ片は刷毛目+ヘラ削り調整が多く、ロクロ成形品の多くは外面にヘラ刷りが施される。A類片中にはヘラ切片が2点あり、体部片と共に硬質のもので占められる。

図示した環形土器中で回転糸切痕を有するのはA類に限られており、しかも再調整はみられない。また、特にNo.4については、底部外面に「本」の墨書が記されている。他のB・C類とされた5点は外面に何らかの再調整を有しており、切離しはヘラ切または不明である。No.2の底部外面には、刻字らしきものがみられ、「甲」と読める。

甕形土器は相対的に非ロクロ成形のものが多い。また、球胴を呈する器形が目立つようである。No.10・13を除き、他は反転復元に依る実測である。

鉄製品No.14は、最長部12cm残存の鉄鏃。堆積土内からの出土で、断面は方形に近い。

第39—1表 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(θ°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	181	B 類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	11.1	6.0	4.5	1.9	2.5	55	底部調整は外周のみ。(堆積土)
2	182	B 類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	12.8	8.0	3.8	1.6	3.4	58	底部調整外周のみ。底部外面に刻字(?)「甲」有。(床面上)
3	—	B 類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	14.7	8.6	5.6	1.7	2.6	58.5	外面に多量のカーデン付着。(床面)
4	—	A 類	回転糸切	無 調整	/	(12.8)	6.6	3.7	1.9	3.5	50.5	底部外面に墨書「本」(床面)
5	—	A 類	回転糸切	無 調整	/	(12.6)	(7.6)	4.1	1.7	3.1	58	(堆積土)
6	183	C 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	(14.6)	7.8	4.3	1.9	3.4	51	(堆積土)
7	—	C 類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	(13.0)	(6.2)	4.1	2.1	3.2	50	
8	—	A 類	回転糸切	無 調整	/	—	6.4	—	—	—	—	底部片。切離しを2度試みた痕跡あり。

第39—2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大胴径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
9	—	土師器	—	—	—	—	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	ヘラナデ	反転復元。球胴形。口唇部欠失。(堆積土)
10	—	土師器	—	9.0	—	—	—	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	体下端~底部片。底部外面ヘラ先に依るナデ。
11	—	土師器	(11.0)	—	—	(12.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。(堆積土)
12	—	土師器	(19.0)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	非ロクロ。輪積み。(堆積土)
13	184	土師器	13.4	5.8	14.9	16.5	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	底部外面ヘラケズリ。器肉薄手。(床面)

これらの他に、床面から羽口の破片が出土している。No.15は一方の端に溶鉄滓が付着している小片である。No.16は、約½が49号（Pf18） 竪穴住居跡出土の破片であり、残る部分は本遺構内出土片である。一方の端部外面には溶鉄滓が付着しており、内径が4 cm以上もある。

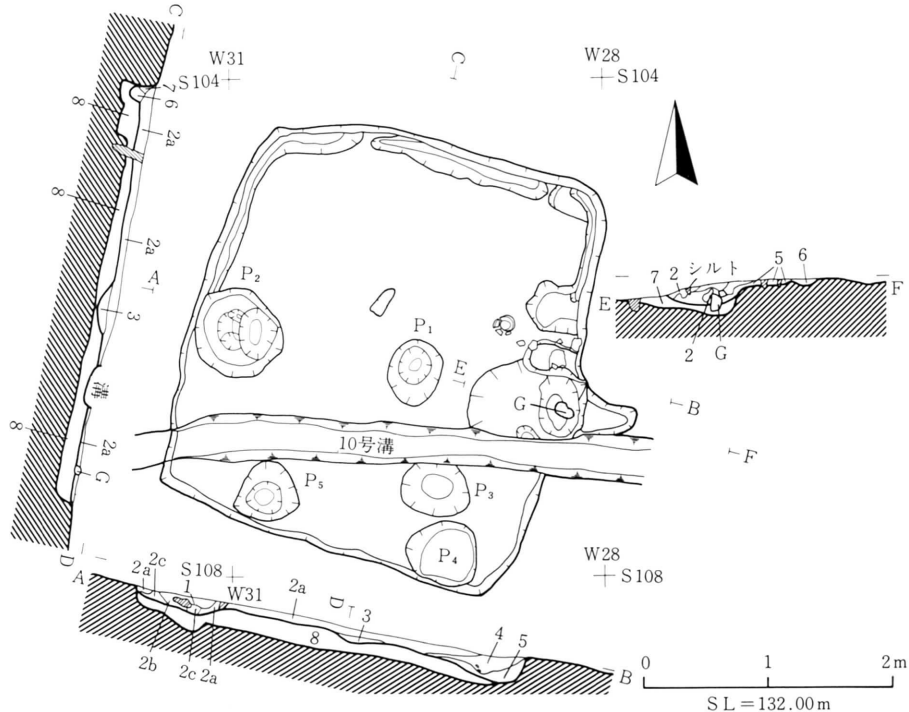
また、植物遺体としては、東壁付近より茅が出土している。一定の方向性を持って堆積しており、屋根材に関わるものかもしれないが、断定はできない。

48号（Pe33） 竪穴住居跡 （第57図 第40表 写真図版30）

（重複 改築） 10号（Pf33） 溝が竪穴住居跡南半を東西に切っているが床面までは達していない。

（規模 平面形 方向） 東西3.1m、南北3.4m、面積9.28㎡の若干南北に長い方形を呈している。カマド方向軸はN-107°-Eである。

（堆積土） 削平が著しく堆積土は比較的薄い遺存であり、焼土、炭、シルト等を含んだ黒褐色土を主体とする。



A-B C-D	
1	TSYRH 黒色土 シルト若干
2a	TSYRH 黒褐色土 シルト、焼土、炭、遺物若干
2b	TSYRH 黒色土 シルト、焼土、炭若干
3	TSYRH 黒色土 焼土極少
4	SYRH 赤褐色土 炭、遺物あり、E-Fの4層
5	TSYRH 黒褐色土 焼土、炭若干、E-Fの7層
6	サ シルト混入
7	TSYRH 黒色土 シルト若干
8	TSYRH 黒褐色土 黒色シルト混入、体積減少

E-F	
1	TSYRH 黒色土 焼土若干
2	TSYRH 黒褐色土 焼土、腐植土混入シルト若干
3	サ シルトなし
4	SYRH 赤褐色土 焼土、A-B、C-Dの4層と同じ
5	TSYRH 黒褐色土 焼土、腐植土混入
6	TSYRH 黒褐色土 焼土、炭あり、A-B、C-Dの5層
7	TSYRH サ 焼土、炭あり、A-B、C-Dの5層

第57-1図 48号（Pe33） 竪穴住居跡



(壁) 削平のため遺存は良好ではない。床面から検出面までの高さは5cm~10cmである。

(床) 全面掘り方があり、その掘り方底面は壁沿いで凹凸を認めるが、他は著しい凹凸がなく、他例に比較して特徴的である。床構築土はシルトと黒色土の混土を用い、床面はほぼ平坦である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 北半壁沿いに認められ、北壁東端寄りと西端寄りに一部切れる部分がある。幅10cm、深さ10cm内外を計る。

(カマド) 東壁中央に位置する。掘り方をもつ構築法で、燃烧部は間口50cm、奥行50cmほどで火床面は若干のくぼみをもち、中央には支脚石が認められた。左袖と10号溝に破壊され一部のみ遺存する右袖があり、シルトと黒色土の混土を用い構築している。煙道は燃烧部火床から若干上がり、幅20cm~40cmの深さ5cmで長さ40cmの先細りの溝状を呈す。煙出し部との区別は明瞭でない。

(その他の施設) P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の貯蔵穴様ピットを認めるが、用途は必ずしも明確ではない。それぞれの径と深さは、P<sub>1</sub> 43cm×53cm、25cm P<sub>2</sub> 70cm×72cm、30cm P<sub>3</sub> 50cm×52cm、14cm P<sub>4</sub> 50cm×55cm、13cm P<sub>5</sub> 47cm×50cm、20cmを計る。堆積土の主体は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>は黒褐色土で、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は暗赤褐色または極暗褐色の焼土で炭と甕片を少量含む。

出土遺物 (第57-2図 第40表)

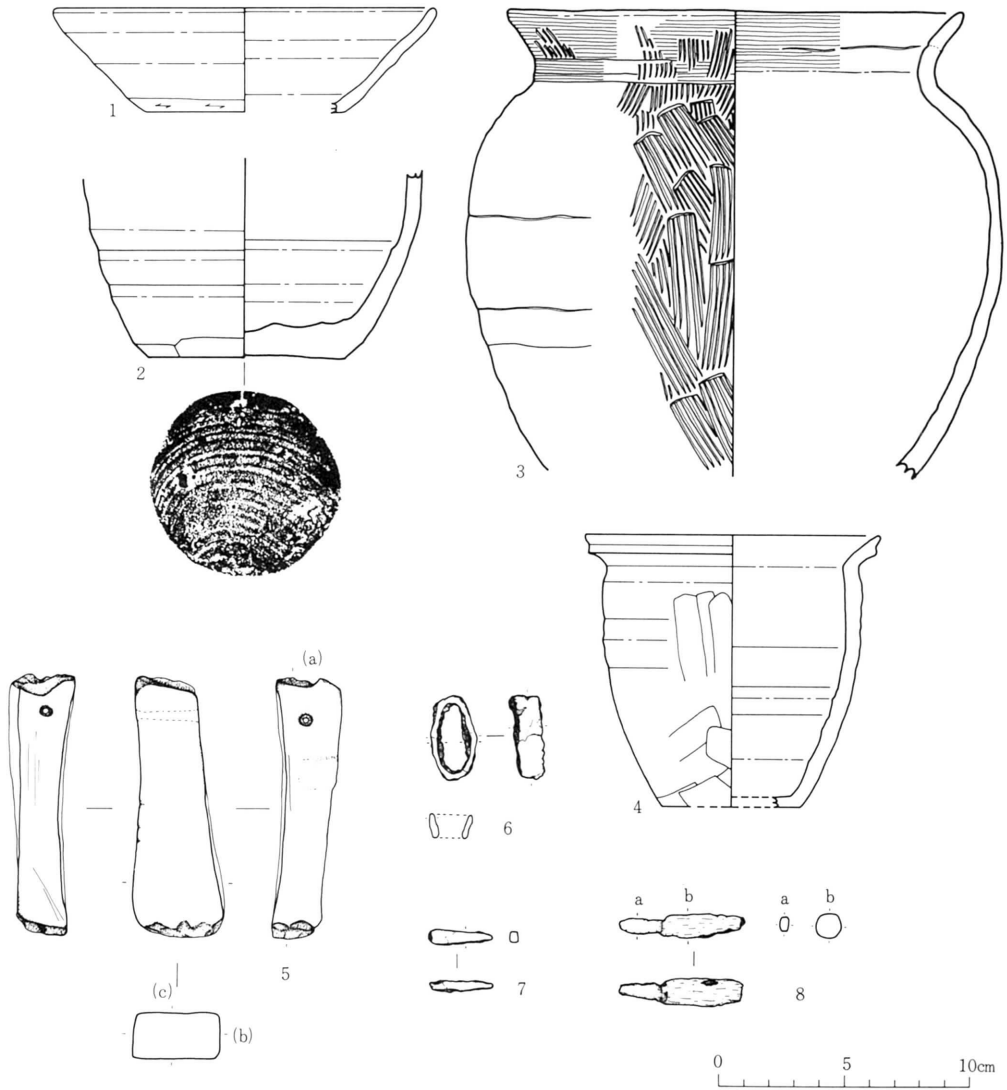
環形土器1点、甕形土器3点、砥石1点、鉄製品3点、計8点の実測。他に破片としては、

第40-1表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大脚径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
2	—	土師器	—	7.8	—	—	—	ロクロナデ 下端ヘラケズ	—	ロクロナデ	回転糸切。手持ヘラ削り。(床面)
3	—	土師器	(18.4)	—	—	(21.4)	ヨコナデ +刷毛目	刷毛目	ヨコナデ	ヘラナデ?	非ロクロ。反転復元。球形。 (床面)
4	—	土師器	(11.9)	(5.5)	10.9	肩部 (10.3)	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。内面黒変。(堆積土+ピット)

第40-2表 鉄製品一覽

実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断 面 形	備 考	
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
6	—	鏝状製品	完形品	比較的良好	長径・32.70 短径・18.10	10.90	—	4.50	3.85	長方形	楕円形。(床面)
7	—	角 釘	完形品	比較的良好	25.50	—	4.50	3.70	0.90	長方形	小型。(床面)
8	—	鉄 鏝	茎部片?	比較的良好	49.0	a…7.0 b…10.0	—	a…4.80 b…10.20	4.10	a…長方形 b…円形	%位を木質が覆う。(床面)
—	—	刀 子	刃の先端部	やや不良	29.80	—	7.90	7.90	1.10	薄い楔形	(床面)
—	—	不 明	破片?	不 良	—	—	—	—	1.90	—	棒状。(床面)



第57—2図 48号(Pe33)竪穴住居跡出土遺物

非ロクロの土師器甕片とB類の底部片があるだけである。

No.1は橙色を呈す胎土の悪いB類。反転復元に依る。住居跡内ピットからの出土であり、体部下端にヘラ削りが施される。底部は欠失しているため切離しは不明である。

甕形土器と鉄製品については40表を参照されたい。なお、鉄製品は床面から5点出土しているが、図示したのはそのうちの3点 (No.6・7・8) だけである。

No.5は砥石。素材は斜長石流紋岩。カマド袖部北側からの出土。有孔のもので4面が使用されている。携帯用であろう。使用面上の一部に黒褐色の付着物が観察される。

49号 (Pf18) 竪穴住居跡 (第58図 第41表 写真図版30)

(重複 改築) 竪穴住居跡のほぼ中央を10号 (Pf33) 溝に東西方向に切られている。

(規模 平面形 方向) 東西2.8m、南北3.6m、面積8.5m<sup>2</sup>の非常に歪んだ南北に長い長方形である。カマド方向軸はN-19°-Eである。

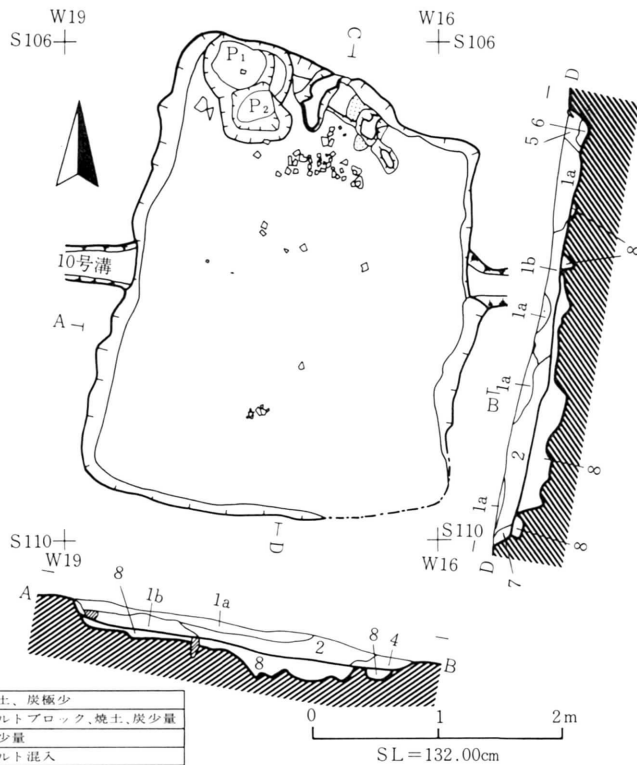
(堆積土) 二大別できる。黒色土に炭、焼土、シルトブロック等を含む1層、黒色土シルトの混合土の2層とで、堆積土のほぼ全体をしめる。堆積状況は必ずしも整ったものではなく10号溝等との関連で攪乱もある。

(壁) 竪穴住居跡上面がかなり削平されており壁の遺存状況は悪く、南壁東半はほとんど遺存しない。現況での立ち上がりは大きく外傾していて、特に東壁南半で著しく、本来のものではなく崩壊によるものと推察される。遺存部での検出面までの壁高は10cm~15cmである。

(床) 主に南半で顕著な掘り方を持ち、シルトと黒色土の混合土で床面を構築し、北側では地山をそのまま利用して、一般的にほぼ平坦である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。



● 木根による攪乱

A-B C-D

1a	10YR号黒色土	焼土、炭極少
1b	" " "	シルトブロック、焼土、炭少量
2	10YR号黒褐色土	黒色土シルト混合 炭少量
3	10YR号黒色土	シルト混入
4	10YR号黒褐色土	黒色土シルト混合 焼土極少
5	10YR号黒色土	シルト、焼土混入
6	10YR号黒褐色土	黒色土シルト混合 焼土混入
7	" " "	黒色土シルト混合
8	10YR号 " "	黒色土シルト混合 床構築土

第58-1図 49号 (Pf18) 竪穴住居跡

(カマド) 北壁のほぼ中央に位置し、カマド構築の掘り方は認められず、左袖は黒色土とシルトの攪拌土を用い構築し、中に2ケの石を芯材として認めた。右袖はわずかに残痕がみられるのみで、燃焼部の一部に焼土をみるが、破壊が著しく全貌は明瞭でない。煙道と煙出しは認められない。

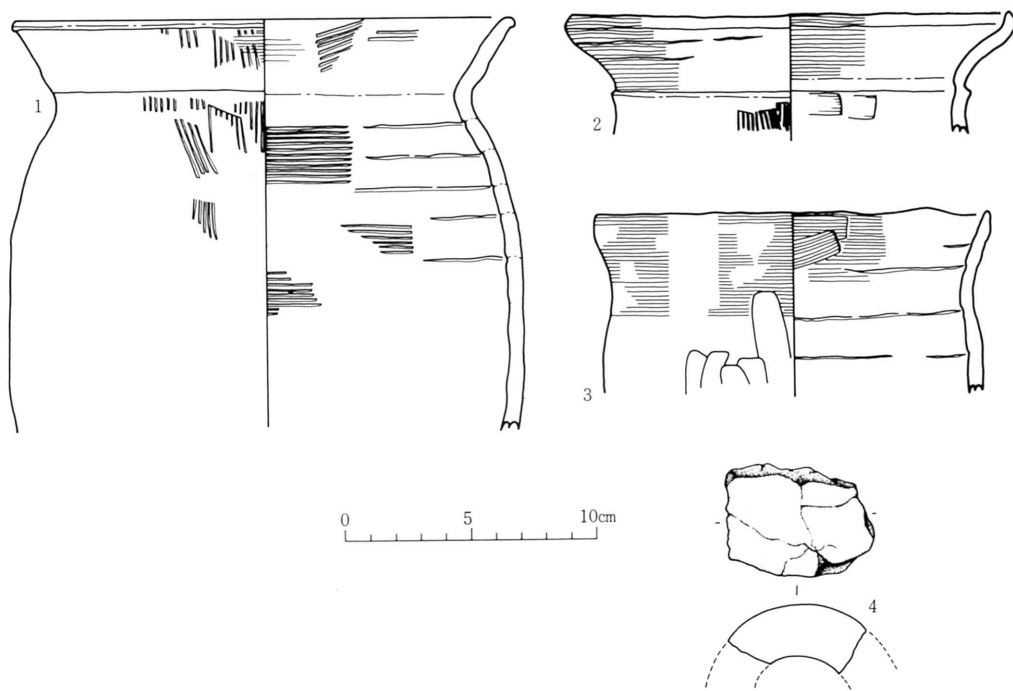
(その他の施設) カマド西隣りにP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を検出した。P<sub>1</sub>は径55cm×67cm、深さ18cm、P<sub>2</sub>は40cm×53cm、深さ21cmで、堆積土はいずれも黒褐色土を主体に土器片を包含する。両者は重複し、P<sub>2</sub>が新しい。どちらも、貯蔵穴と推察される。

#### 出土遺物 (第58—2図 第41表)

図示した遺物は甕形土器3点と轆の羽口1点である。坏形土器は、C類の底部片とA類の口縁部細片が各々1点だけ床面から出土している。他に破片としては、カマド付近に非ロクロの球胴片(土師器)、床面から木葉底部片・ロクロ成形土師器甕片が若干出土している。

甕形土器の3点は何れも床面出土の非ロクロ土師器。完形品は無く、反転復元に依る実測である。3点共口縁部と頸部～肩部の様相が異なるものである。

No.4は床面出土の羽口片。外面と端部に溶鉄滓が付着する。推定外径は7cm強位と思われる。内側はやや赤熱化した粘土であり、磨滅している。なお、同様の羽口片がもう1点出土しているが、47号(Pd15)住出土の羽口片と接合したため、図版は47号住で載示している。やはり端



第58—2図 49号(Pf18)竪穴住居跡出土遺物

第41表 甕形土器一覽

実測番号	写真番号	種別	法量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
			口径	底径	器高	最大胴径	口縁部	体部	口縁部	体部	
1	—	土師器	(22.0)	—	—	—	刷毛目ナ ヨコナデ	刷毛目ナ ヘラケズリ	ヨコナデ 早刷毛目	幅広い刷毛目	ヘラケズリの単位不明。(床面)
2	—	土師器	(18.0)	—	—	—	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部有段。(床面+カマド左側軸)
3	—	土師器	(16.0)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ?	肩部無段。輪積み。(床面)

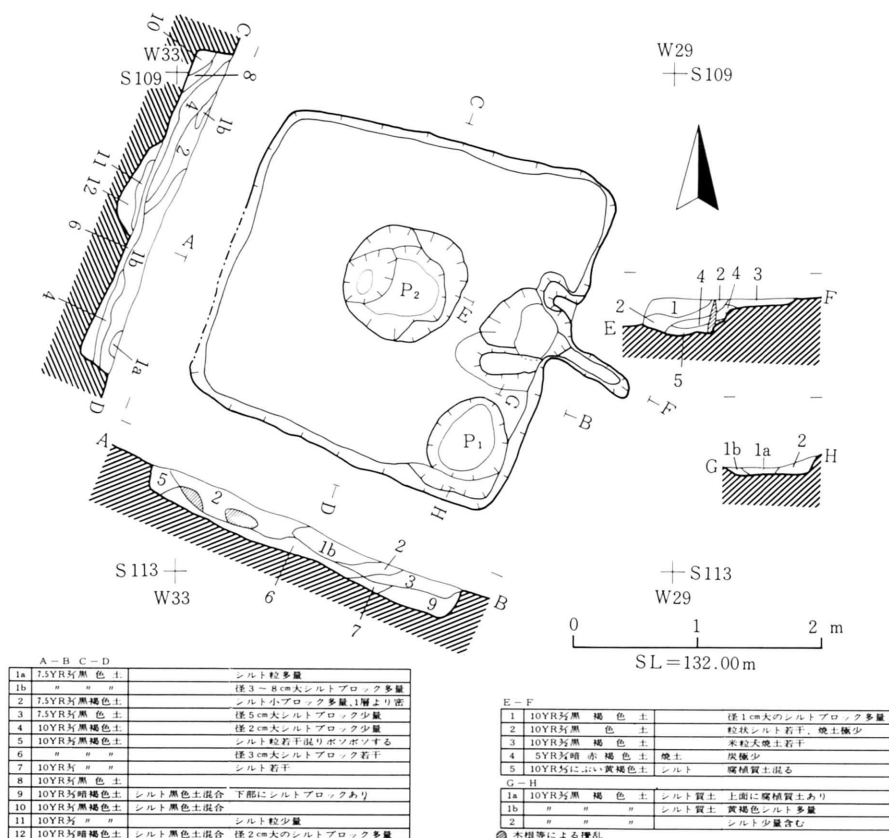
部外面に溶鉄滓が付着したものである。

50号 (Pg33) 竪穴住居跡 (第59図 第42表 写真図版31・69)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西2.7m、南北2.7m、面積6.25m<sup>2</sup>で、正方形に近いがやや歪んでいる。カマド方向軸はN-115°30'-Eである。

(堆積土) 比較的大きなシルトブロックを全般に含む黒色土および黒褐色土が堆積土の主体であり、シルトの混入量の多少によって細分され、混入するブロックは径2cm~8cm大のものである。



第59-1図 50号 (Pg33) 竪穴住居跡

(壁) 垂直に近い立ち上がりであるが、西壁上端の一部は攪乱で破壊されている。検出面までの高さは25cm～30cmを計る。

(床) 全面掘り方もち、黒色土とシルトの混土で床面を構築し、ほぼ平坦である。

(柱穴) 認められない。

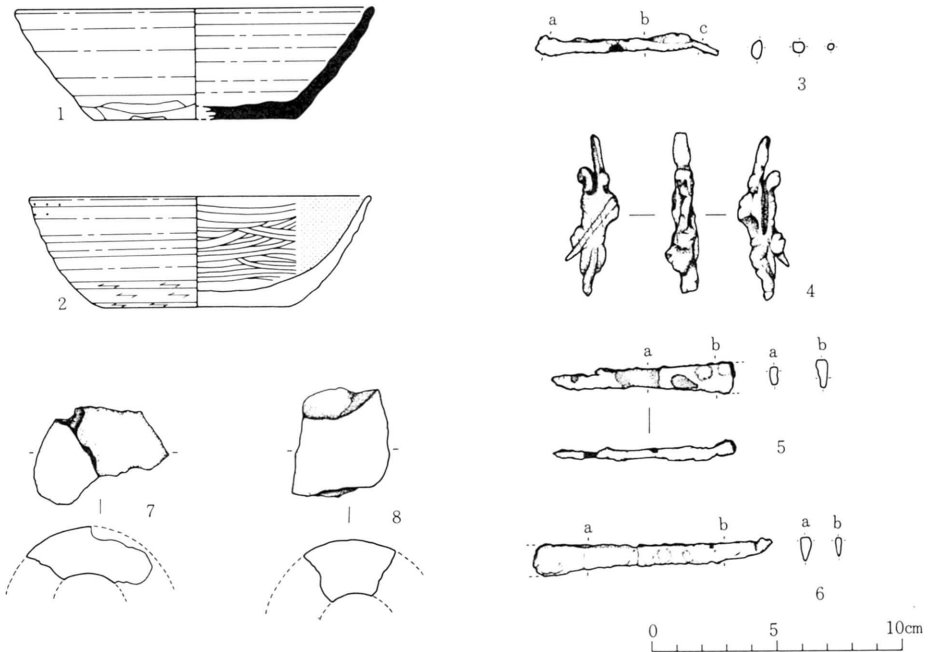
(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁のほぼ中央に位置し、燃焼部は掘り方もち黒色土混りのシルトを埋土して上面を火床面として、間口は40cm、奥行5cmを計り、両袖はシルトと黒褐色土で構築する。煙道は燃焼部から若干の立ち上がりで約60cmの長さでほぼ水平にのびる溝状で、幅15cm、深さ5cmであり、煙出し部の区別はない。

(その他の施設) 貯蔵穴と推察されるP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>があり、南東隅のP<sub>1</sub>は径60cm×70cm、深さ5cmでシルトを若干含む黒褐色の堆積土をもつ、遺物の出土はない。中央に検出されたP<sub>2</sub>は、径90cm×90cm、深さ15cm、ブロック状のシルトが多量に混入する黒褐色土を堆積土とする。

出土遺物 (第59—2図 第42表)

環形土器2点、鉄製品4点、鞆の羽口2点、計8点の実測。他にカマド部を中心として非ロクロの土師器甕片が少数出土している。明らかにロクロ成形と思われる例はみられない。甕片は球胴と長胴の二様があるようである。また、やはりカマド近くで炉壁の破片が数点出土して



第59—2図 50号(Pg33)竪穴住居跡出土遺物

いる。これは第46号—2 (Oi33-2) 住出土のそれと全く同類のものであり、内側に溶鉄滓が付着している。ただし、同一の個体であるか否かは判断出来ない。

環形土器・鉄製品については下表を以って説明に替える。なお、鉄製品は9点出土しているが図示したのはそのうちの4点 (No.3・4・5・6) である。

No.7・8は鞆の羽口片である。No.7は堆積土中からの出土。推定内径3cm弱、厚さ1.8cm。No.8は床面出土。推定内径3cm弱、厚さ2.1cm。既述の炉壁片と共に、本遺構が「鉄」に関わる生産遺構として何らかの役割を果していたであろう可能性を示唆するものである。なお、鞆の羽口片はもう1点出土しているが、54号 (Qe18) 竪穴住居跡出土の羽口片と接合したため、図版及び詳細は54号住居跡の項を参照されたい。

第42—1表 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	—	A類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端～底部	(14.2)	(8.0)	4.5	1.8	3.2	54.5	(カマド左袖)
2	—	C類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端～底部	13.6	7.4	4.5	1.8	3.0	54.5	(床面直上)

第42—2表 鉄製品一覽

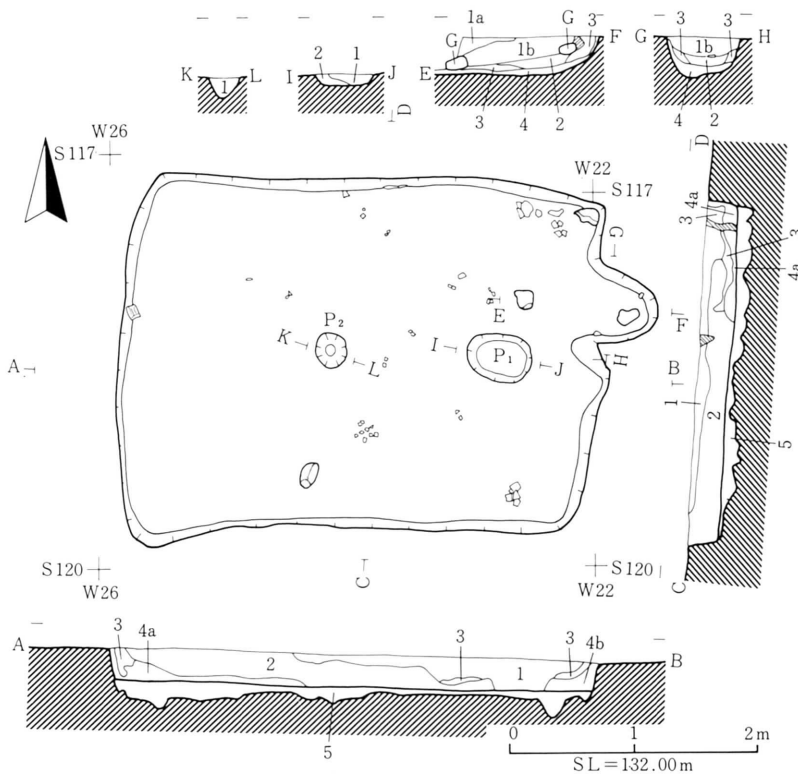
実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法量				断面形状	備考	
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
3	186	鉄 鏃	一部欠失	やや不良	75.20	a…8.0 b…4.80 c…2.80	a…4.20 b…4.90 c…2.80	4.90	a…偏 bc…方	平形 末端部曲がる。(地山直上)	
4	187	不明	3破片が合体	やや不良	64.0	—	—	計 7.90	—	—	詳細実測図参照。(袖直上)
5	188	刀 子	茎 部	鏽の割に残りよし	73.0	a…8.0 b…11.2	a…3.10 b…3.0	5.40	—	長方形	茎元やや湾曲。(堆積土)
6	189	刀 子	刃 部	鏽の割に残りよし	95.60	a…9.80 b…7.20	a…4.0 b…2.80	6.60	—	楔形	(堆積土)
—	—	刀 子	刃部2破片	やや不良	—	12.50	—	計 0.90	—	薄い楔形	同一個体。(地山直上)
—	—	不明	破片	やや不良	23.50	—	—	0.65	—	方形	(地山直上)
—	—	釘状	破片	不良	80.0	—	—	6.70	—	方形	(堆積土)
—	—	刀 子	刃部片	やや不良	26.0	12.90	—	1.75	—	薄い楔形	(地山直上)
—	—	不明	破片	やや不良	14.70	—	—	0.15	—	方形	小破片。(堆積土)

51号 (Pi27) 竪穴住居跡 (第60図 第43表 写真図版31・69)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北2.8m、面積9.62m<sup>2</sup>の、東西に長い長方形を呈する。カマド方向軸はN—94°—Eである。

(堆積土) 主体は黒色土および黒色土とシルトの混土である。すなわち、1層の黒色土であ



A-B C-D

1	7.5YR7 黒色土	遺物包含
2	10YR7 黒褐色土	黒色土シルト混入 部分的にシルト小ブロック、遺物包含
3	7.5YR1.7/1 黒色土	
4a	10YR7 黒褐色土	シルト混入
4b	"	" 焼土、炭若干
5	7.5YR7 "	シルト黒色土混入 部分的にシルトブロック、床構築土
I-J		
1	7.5YR7 黒色土	炭包含
2	5 YR7 暗赤褐色土	焼土

◎ 木根等による擾乱

E-F G-H

1a	7.5YR7 黒色土	遺物包含、部分的に焼土粒
1b	7.5YR1.7/1 "	" 焼土粒、炭包含
2	5 YR7 暗赤褐色土	シルト焼土、焼土小ブロックあり
3	5 YR7 "	焼土、炭含む
4	10YR7 黒褐色土	焼土、炭若干
K-L		
1	10YR7 黒色土	粒状シルト若干

第60—1図 51号(P127)竪穴住居跡

り、東半に広がり一部床面まで達し、2層は黒色土とシルトの混土で部分的に黄褐色シルトのブロックを含み西半検出面から東へ斜めに入り床面まで達する。壁ぎわにシルト混入の黒褐色土の4層がある。2層に対する1層の入り方に垂直に近い部分があり、しかも堆積土中から出土した約95片の土器片中、約70片が1層からの出土であることも含め、2層堆積後に何らかの目的で掘りこんだ可能性と、1層・2層とも人為的な可能性も考えられる。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは25cmである。

(床) 全面に掘り方をもち、黒色土とシルトの混合土を用いて構築した平坦な床面であり、貼り床等は認められない。

(柱穴) 床面の中央から若干西寄りに柱穴状のP<sub>2</sub>が検出された。径25cmの円形で深さ17cmのピットで、粒状のシルトを若干含む黒色土の堆積土で柱痕は認められない。柱穴としての確証はない。



(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の北寄りに位置する。燃烧部は壁外に張り出し、掘り方をもち、底および側壁と奥壁に黒褐色土を貼って構築しており、間口50cm、奥行50cmで、煙道、煙出しは認められない。

(その他の施設) カマドの右前にP<sub>1</sub>が検出された。径35cm×50cmで7cmの深さを計り、黒色土と焼土を堆積土にもつ、確証はないが貯蔵穴的な性格も考えられる。

**出土遺物** (第60—2図 第42表)

坏形土器(C類) 1点、甕形土器2点、鉄製品3点、砥石3点、計9点の実測。他に土師器甕の破片が多く出土しているが、総じて非ロクロ成形のものが目立つ。坏形土器はNo.1の他にはB・C類の細片が各1点ずつある程度で、A類は出土していない。須恵器の甕も見当らない。また、鉄製品は床面を中心として5点出土しているが、図示したのは3点だけである。なお、鉄製品・砥石については下表を参照して頂くこととし、ここではNo.1・2・3の土器についてのみ詳細を記す。

No.1はカマド内出土のC類坏。反転復元に依る実測である。推定口径16cm位で底部が欠失している。数片の接合による遺物であり、内黒部分と非内黒部分とがある。この範囲は各々の破片に依って区別されるが、より燃烧部に近い出土をみせる破片が非内黒である。外面のロクロナデ痕は明瞭であり、内面のヘラミガキは丁寧である。

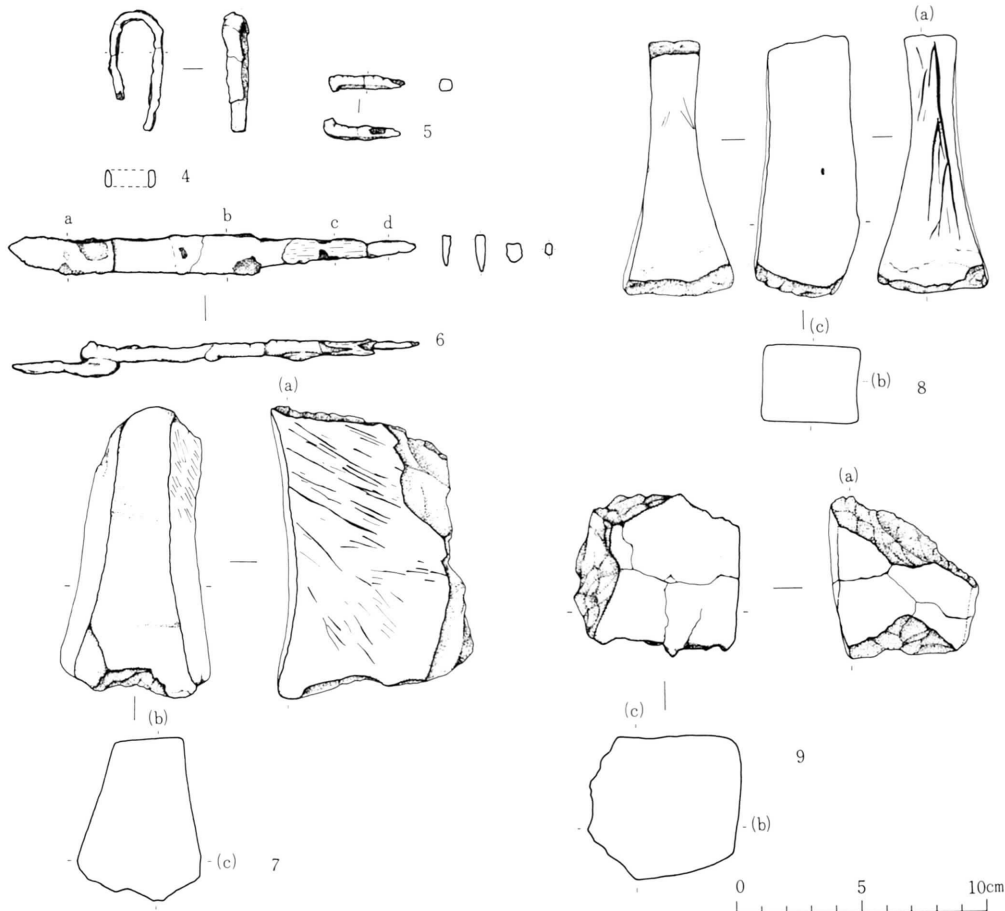
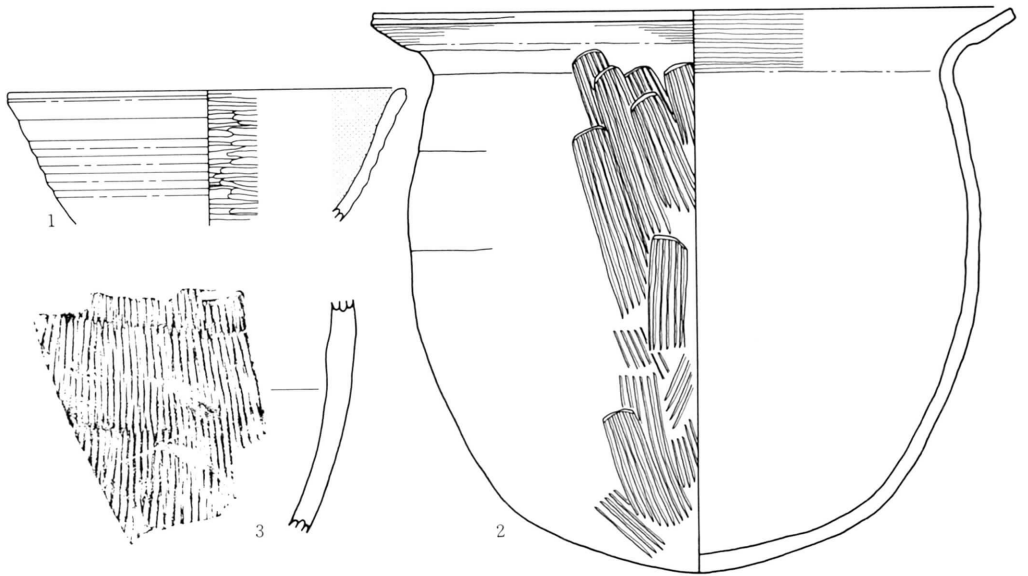
No.2は丸底の球胴甕。口径26cm、器高22.5cm、頸径21cm、最大胴径22.9cm大である。内外面

**第43—1表 鉄 製 品 一 覧**

実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
4	—	鐮状製品	一部欠失	比較的良好	48.50	6.50	3.30	4.30	長方形	(1層)
5	—	角釘	完形品	比較的良好	30.50	5.50	5.90	1.25	方形	小型。(掘り方埋土)
6	190	刀子	ほぼ完形品	比較的良好	162.70	b…15.50 d…5.10	b…4.90 d…3.20	16.40	b…楔形 d…長方形	刃部が折れて重なっている。茎部に木質残存。(床)
—	—	釘状	破片	不良	49.0	—	—	2.40	方形	(床面)
—	—	不明	破片	不良	30.30	—	—	0.75	長方形	小破片(床面)

**第43—2表 砥 石 一 覧**

実測図番号	写真番号	法 量 (mm・g)				使用面の数	色 調	材 質	産地・地質年代	備 考
		(a)長さ	(b)幅	(c)厚さ	重さ					
7	16	112.0	68.20	50.70	360.80	4	灰黄褐(10YR・%)	両輝石安山岩 熔岩塊	岩手火山群起源。葛根田付近。第四系	一見軽石様。(床面)
8	17	101.0	39.0	29.50	198.0	5	灰白(10YR・%)	斜長石流紋岩	磐石盆地西南部。中新統	付着物あり。(堆積土)
9	18	65.0	65.50	54.50	299.30	3	明褐灰(7.5YR・%)	輝石安山岩	岩手火山群起源。第四系	一部片



第60—2图 51号(Pi27)竖穴住居跡出土遺物

の口縁部をヨコナデし、外面体部には縦位の刷毛目が施される。内面の調整は磨滅のため不明である。また外面の底部周辺には煤が付着しており、赤褐色化した火熱痕がある。

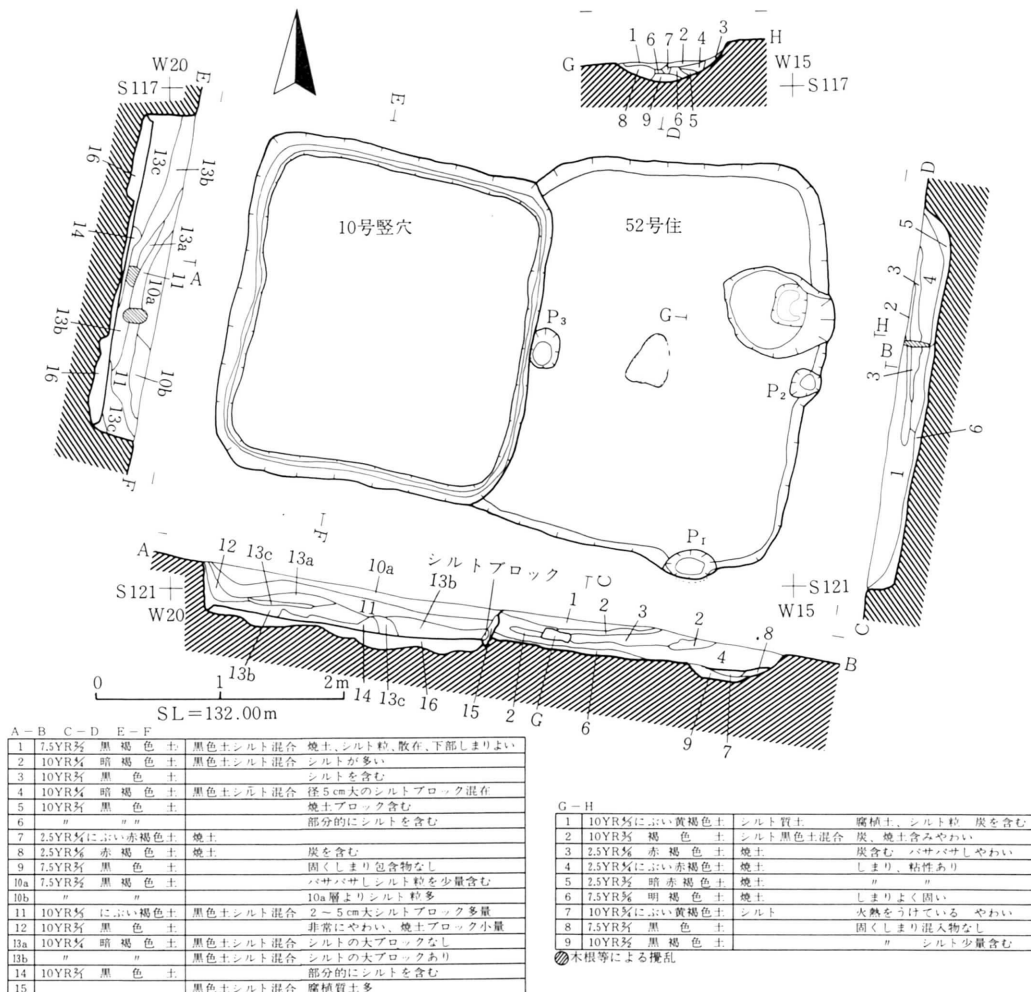
No 3 は、土師器甕体部片の拓影図である。外面に縦位の叩目を施している。

### 52号 (Pj18) 竪穴住居跡 (第61図 写真図版31)

(重複 改築) 10号 (Pj21) 竪穴によって本竪穴住居跡の西壁が切られている。

(規模 平面形 方向) 東西2.3m の×3.1m、面積は約6.2m<sup>2</sup>を計り、やや歪んだ南北に長い長方形が推察される。カマド方向軸はN-100°-Eである。

(堆積土) 大別すると、黒褐色土、黒色土からなる。黒褐色土と暗褐色土は、黒色土とシルトの混合土で、更に、シルトのブロックを全般に含んでいる。堆積状況は各層が交互に入りこんでおり、東側と西側から流れこんだ様相を呈しており、5層・6層を除く各層は人為的な可



第61図 10号(Pj21)・52号(Pj18) 竪穴住居跡

能性がある。

(壁) 北壁と東壁は外傾し、南壁は直に近い立ち上がりを示す。検出面までの壁高は20cm～25cmを計る。

(床) 北西部分を除き掘り方が認められ、黒色土とシルトの混合土で構築したほぼ平坦な床面を呈する。床面中央には、30cm×40cmの範囲で焼土があり床面も火熱によって赤変している。

(柱穴) P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>は東西中軸線上に乗り、それぞれ東壁と西壁に近接する。P<sub>2</sub>は径25cmの円形で深さ23cm、堆積土は黒色土とシルトである。P<sub>3</sub>は径25cm×30cmの楕円形で深さ10cm、堆積土はP<sub>2</sub>と類似する。いずれも柱痕は認められない。その位置と、対応して2.15mの間をもつ状況から柱穴と推察する。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の中央やや北寄りに位置し、壁内に径60cm×90cmの掘り方をもって燃焼部を構築しているが、袖は遺存せず、煙道、煙出しは認められない。

(その他の施設) 南東隅近くにP<sub>1</sub>が検出され、径25cm×40cm、深さ20cmの規模で、暗褐色土を堆積土とし甕片を包含するが、性格は不明である。

床面中央に焼土と火熱痕を認めるが、地床炉としての施設か否かは明確ではない。

#### 出土遺物

何れも破片のみの出土であり、図示出来るものはない。破片は土師器の甕片でほぼ占められ、坏形土器は僅かに回転糸切痕を有すB類底部片が1点みられる程度。また、他の器種や須恵器・鉄製品等は出土していない。

土師器甕は底部に回転糸切痕(底径7.4cm)を残すロクロ成形片と、外面にヘラ削りや刷毛目を有する非ロクロ成形片に大別される。またロクロ使用の有無は判別されない例もあるが、長胴形と小型の甕の二様があるようである。

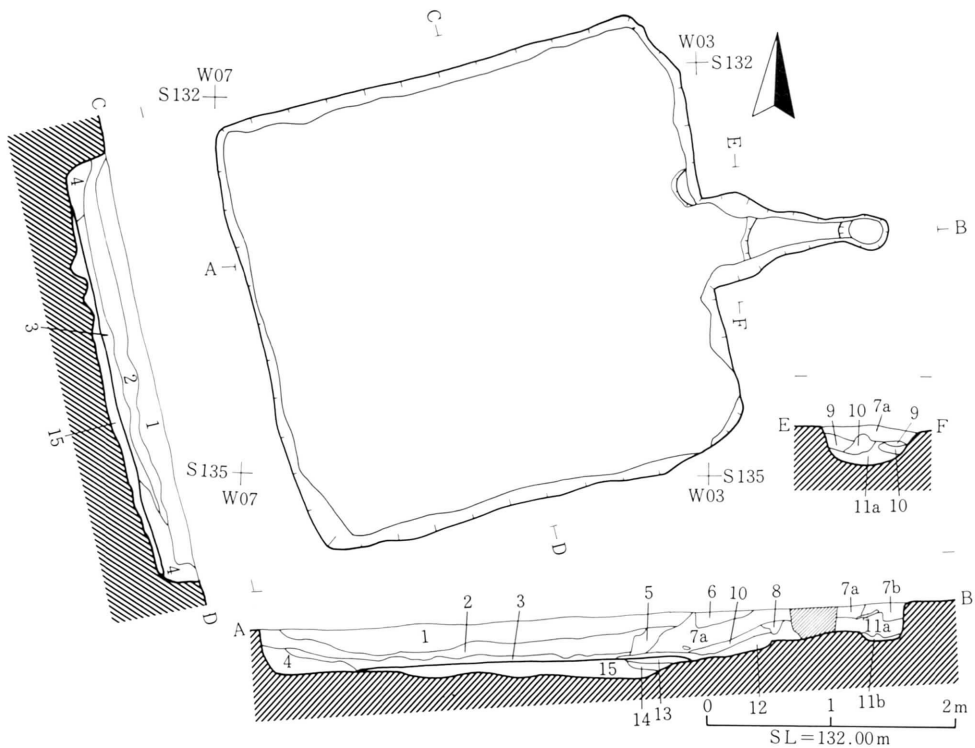
#### 53号(Qe09) 竪穴住居跡 (第62図 第44表 写真図版32・69)

(重複 改築) 認められず。

(規模 平面形 方向) 東西3.7m、南北3.5m、面積11.54m<sup>2</sup>のほぼ正方形に近い平面形を呈しており、カマド方向軸はN-85°-Eである。

(堆積土) 1層から3層の黒色土および黒褐色土は、ほぼ全域に近い広がりを持ち堆積土の主体をなし、それぞれシルトを含むが、下層になるにしたがって量が多くなるとともに、炭、焼土も含まれる。遺物はカマド前のみで他はほとんどみられない。四壁ぎわでは黒色土とシルト混土の極暗褐色土4層がある。

(壁) ほぼ垂直に近い立ち上がりを持ち、検出面までの高さは40cmほどを計る。



A-B	C-D	E-F	
1	7.5YR 5/2	黒色土	密でしまりあり
2	"	"	シルト、炭若干、粗でやわい
3	7.5YR 5/2	黒褐色土	シルト多量、炭、焼土若干
4	7.5YR 5/2	極暗褐色土	黒色土シルト混合
5	7.5YR 5/2	黒褐色土	黒色土シルト混合
6	10YR 5/2	黒色土	遺物包含
7a	7.5YR 5/2	黒褐色土	シルト、炭若干密でしまりあり
7b	"	"	シルト、炭、遺物少量、やわい
8	7.5YR 5/2	暗褐色土	シルト黒色土混合
9	7.5YR 5/2	黒褐色土	シルト黒色土混合
10	7.5YR 5/2	暗褐色土	シルト多量、炭、焼土若干

A-B	C-D	E-F	
11a	5YR 5/2	暗赤褐色土	炭多量、焼土、シルト若干密でやわい
11b	"	"	11a層より炭少量
12	5YR 5/2	"	焼土
13	7.5YR 5/2	黒褐色土	黒色土シルト混合
14	5YR 5/2	極暗赤褐色土	シルト焼土混合
15	7.5YR 5/2	黒褐色土	黒色土シルト混合

●木根等による攪乱

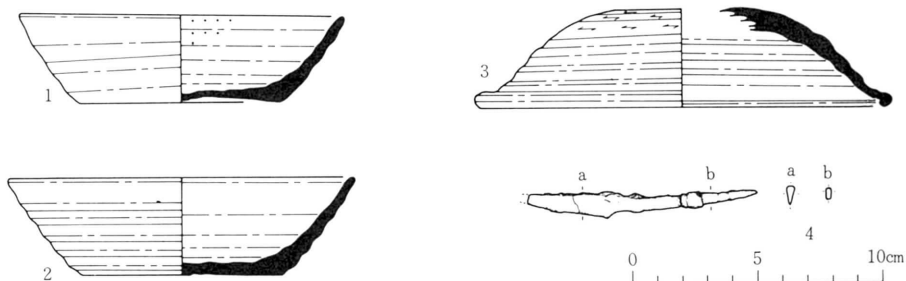
第62—1 図 53号(Qe09)竪穴住居跡

(床) 全面の約3分の1ほどに相当する西壁寄り部分では地山シルトをそのまま床面とし、他は掘り方もち黒色土とシルトの混土を用いて床面を構築している。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁のほぼ中央に位置する。燃烧部は壁外に掘り込み施設しており、間口60cm、奥行40cm程度で地山面が火床となっている。煙道は、火床から若干の段差で高くなり、ゆるやかな傾斜で煙出し方向に上がる様相を呈し、幅15cm~35cm、深さ20cm~25cmで長さ75cmほどの溝状である。煙出しの径は25cm×35cmで楕円状で、検出面からの深さ30cmほどで、底面は煙道底面より低くなる。なお、カマド前面には若干の掘りくぼみがありその上面に焼土の広がりがあることが認められた。



第62—2図 53号(Qe09)竪穴住居跡出土遺物

(その他の施設) 認められない。

出土遺物 (第62—2図 第44表)

出土遺物の総量は少ないが、坏形土器2点(A類)、須恵器蓋1点、鉄製品1点、計4点の実測。他に床面から土師器球胴片、カマド内から刷毛目を有す土師器片等が出土しているが、甕形土器で明らかにロクロ成形と思われる例は無い。

坏形土器については下表の通りである。No.3は須恵器蓋でカマド内からの出土。反転復元に依るもので、推定径16.2cm位である。回転ヘラ削りに依って器面を整えている。

No.4は堆積土内出土の鉄製品。刀子と思われる。刃部が欠損しており、残存長は9.1cm位しかない。刃部の断面は楔形、茎部のそれは一回り小さい長方形を呈している。

第44表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	191	A類	ヘラ切	無調整		12.9	8.0	3.6	1.6	3.6	52.5	完形品。内外面カーボン付着。(カマド付近床面)
2	—	A類	ヘラ切	無調整		(13.8)	8.0	3.9	1.7	3.5	53	(南壁際床面)
3	—	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	16.2	—	—				体~口縁部片。(カマド内)

54号 (Qe18) 竪穴住居跡 (第63図 第45表 写真図版32・33・69)

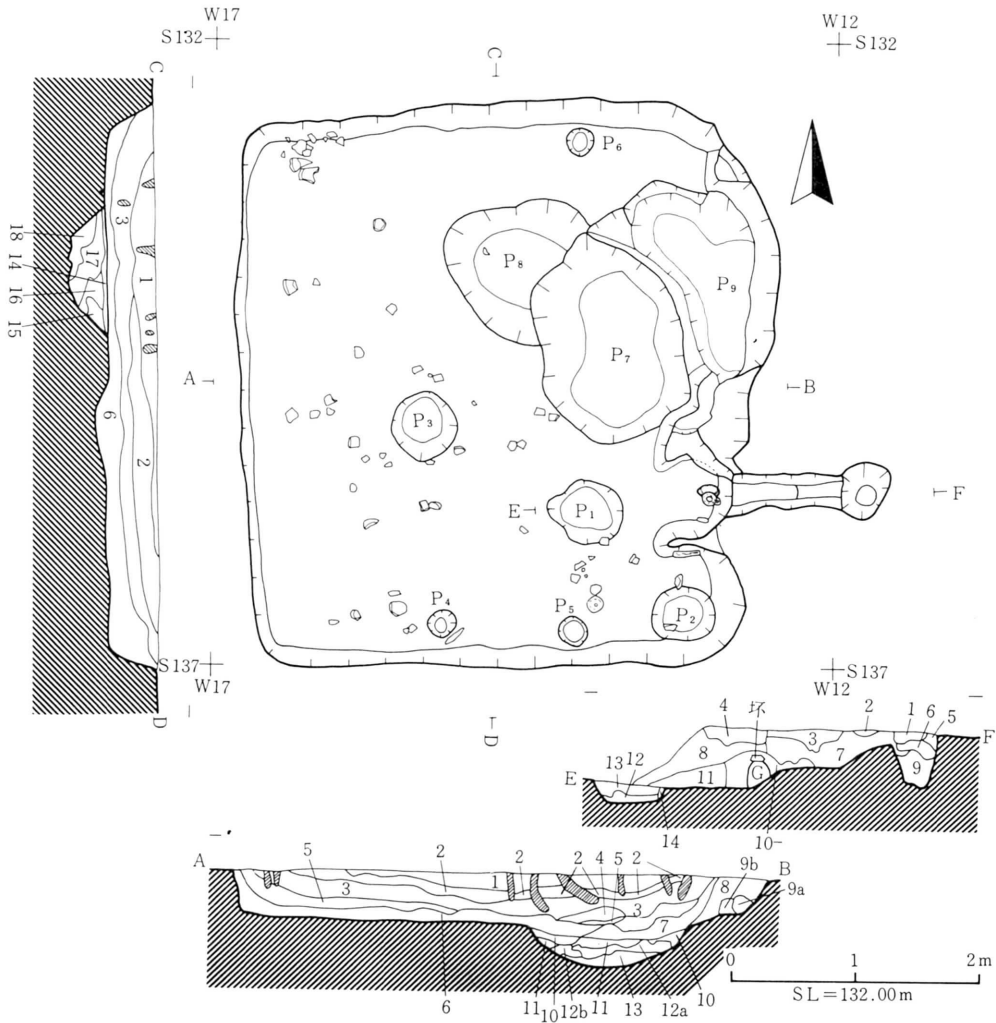
(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西4m、南北4.5m、面積15.17㎡のやや南北に長い方形を呈する。カマド方向軸はN-88°-Eとなる。

(堆積土) 東半部分に木根等による攪乱が多い。全般に黒色土および黒褐色土を主体とする堆積土にシルト粒を含む。中で6層はシルト多量と小礫、焼土等を含む極暗褐色土である。堆積状況はレンズ状を呈し自然堆積と推察される。

(壁) カマド以北の東壁が若干に張り出す。立ち上がりは垂直に近く、検出面までの高さは40cm~50cmを計る。

(床) 全面に掘り方をもち、シルトと黒色土の混合土を用いて床面構築をしており、凹凸を



A-B, C-D		
1	7.5YR3/6 黒色土	シルト粒含む
2	7.5YR3/6 黒褐色土	" "
3	7.5YR3/6 黒色土	シルト粒少量散在
4	" "	焼土炭少量含む
5	" "	" "
6	7.5YR3/6 極暗褐色土	シルト多量、小礫、焼土含む
7	7.5YR3/6 黒褐色土	シルト若干混在
8	" "	焼土、シルト少量散在
9a	7.5YR3/6 極暗褐色土	シルト黒色土混合
9b	" "	シルト黒色土混合 9a層よりシルト多
10	7.5YR3/6 黒褐色土	シルト粒 点在
11	7.5YR3/6 極暗褐色土	シルトブロック、焼土少量
12a	7.5YR3/6 黒色土	シルト粒点在
12b	" "	12a層よりシルト粒多
13	7.5YR3/6 暗褐色土	黒色+シルト混合
14	7.5YR3/6 黒褐色土	黒色+シルト混合
15	7.5YR3/6 褐色土	シルト
16	7.5YR3/6 黒褐色土	腐植質土含む
17	" "	シルト若干
18	7.5YR3/6 極暗褐色土	14層よりシルトブロック状多 腐植質土、シルト、ブロック状を含む

E-F		
1	7.5YR3/6 褐色土	シルト 焼土少量
2	7.5YR3/6 暗褐色土	焼土 シルト少量
3	5 YR3/6 暗赤褐色土	焼土 シルト、腐植土含む
4	7.5YR3/6 黒褐色土	焼土 点状に少量
5	7.5YR3/6 黒色土	焼土、炭を少量
6	7.5YR3/6 黒褐色土	シルト、焼土ブロック含む
7	7.5YR3/6 黒色土	粒状の焼土シルト含む
8	7.5YR3/6 極暗褐色土	シルト、焼土点状を含む
9	7.5YR3/6 黒色土	粒状の焼土、シルトを飲みやわい
10	5 YR3/6 暗赤褐色土	焼土 小礫、シルト含む
11	7.5YR3/6 黒色土	焼土、炭点状を含む
12	7.5YR3/6 黒褐色土	炭、焼土少量
13	7.5YR3/6 "	シルト、焼土多量
14	7.5YR3/6 暗褐色土	" "

●木根等による擾乱

第63-1図 54号(Qe18)竪穴住居跡

みるが顕著なものではなく、貼り床等は認められない。

(柱穴) 柱穴状ピットとして、南壁沿いにP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>が北壁沿いにP<sub>6</sub>がある。それぞれの径と深さは、P<sub>4</sub> 25cm×20cm、16cm、P<sub>5</sub> 25cm×25cm、10cm P<sub>6</sub> 20cm×25cm、8cmを計る。位置的にはP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は南壁中央をはさんで1m間に対に壁に接してあり、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は、それぞれ南壁と北壁の東半中央に相對してある。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の南半中央に位置する。カマド構築の掘り方は認められず、燃烧部火床はほぼ平坦で奥壁近くに支脚石があり坏が伏せた状況で検出された。袖はシルトを主体にした構築土を用いている。火床から約15cmの段差で上がり煙道となり、幅25cm、長さ85cmほどの溝状で東にのびる。深さは燃烧部奥壁から50cm地点までは約30cm、以東は煙出しに向け高くなる傾斜をもつ。煙出しは径35cm×45cmの楕円形で検出面から40cm、煙道底面から30cmを計る。

(その他の施設) ほぼ同規模のP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>がある。それぞれの径と深さは、P<sub>1</sub> 50cm×60cm、10cm P<sub>2</sub> 50cm×45cm、12cm P<sub>3</sub> 55cm×55cm、15cm、堆積土はいずれも、黒褐色土に焼土と炭を含んでいる。性格は明確でないが貯蔵穴の可能性もある。

P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>は、前3ピットより大型になり、それぞれの径と深さは、P<sub>7</sub> 120cm×180cm、20cm P<sub>8</sub> 115cm× $\alpha$ cm、30cm P<sub>9</sub> 140cm× $\alpha$ cm、15cmを計り、シルト混りの黒褐色土を堆積土とする。重複関係にあり、P<sub>7</sub>が最も新しく、P<sub>8</sub>とP<sub>9</sub>の先後関係は明瞭でなく、性格等は不明である。

#### 出土遺物 (第63—2・3図 第45表)

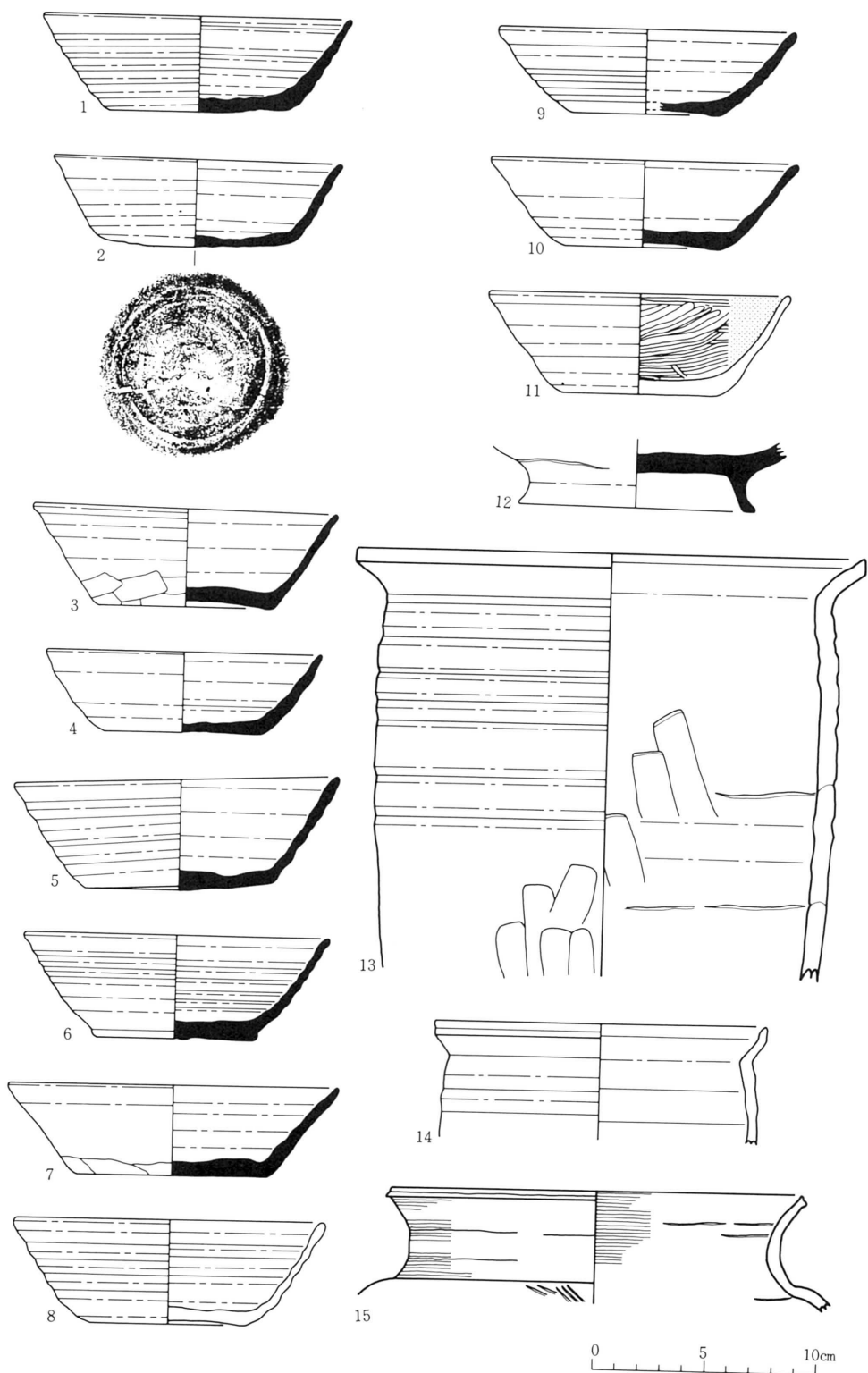
出土遺物は多く、組成も多様である。坏形土器12点(台付坏1)、甕形土器3点、須恵器壺1点、鉄製品2点、砥石3点、鞆の羽口2点、須恵器拓影図1点、計24点を図示している。他に破片として土師質の蓋片、ヘラ切のA類底部片、須恵器甕体部片多数等がカマドや床面近くから出土している。

坏形土器はA・B・C各類が出土しているが、圧倒的にA類が多い。切離しはNo8のB類とNo10のA類が回転糸切、No7のA類とNo11のC類は不明、他はヘラ切に依る。No12は脚径10.5cm、脚高1.1cm大の須恵器台付坏の破片である。付高台で、脚部と体部との接着面に亀裂が入っている。底部外面には回転ヘラ削りが施され、本来の切離しは不明である。

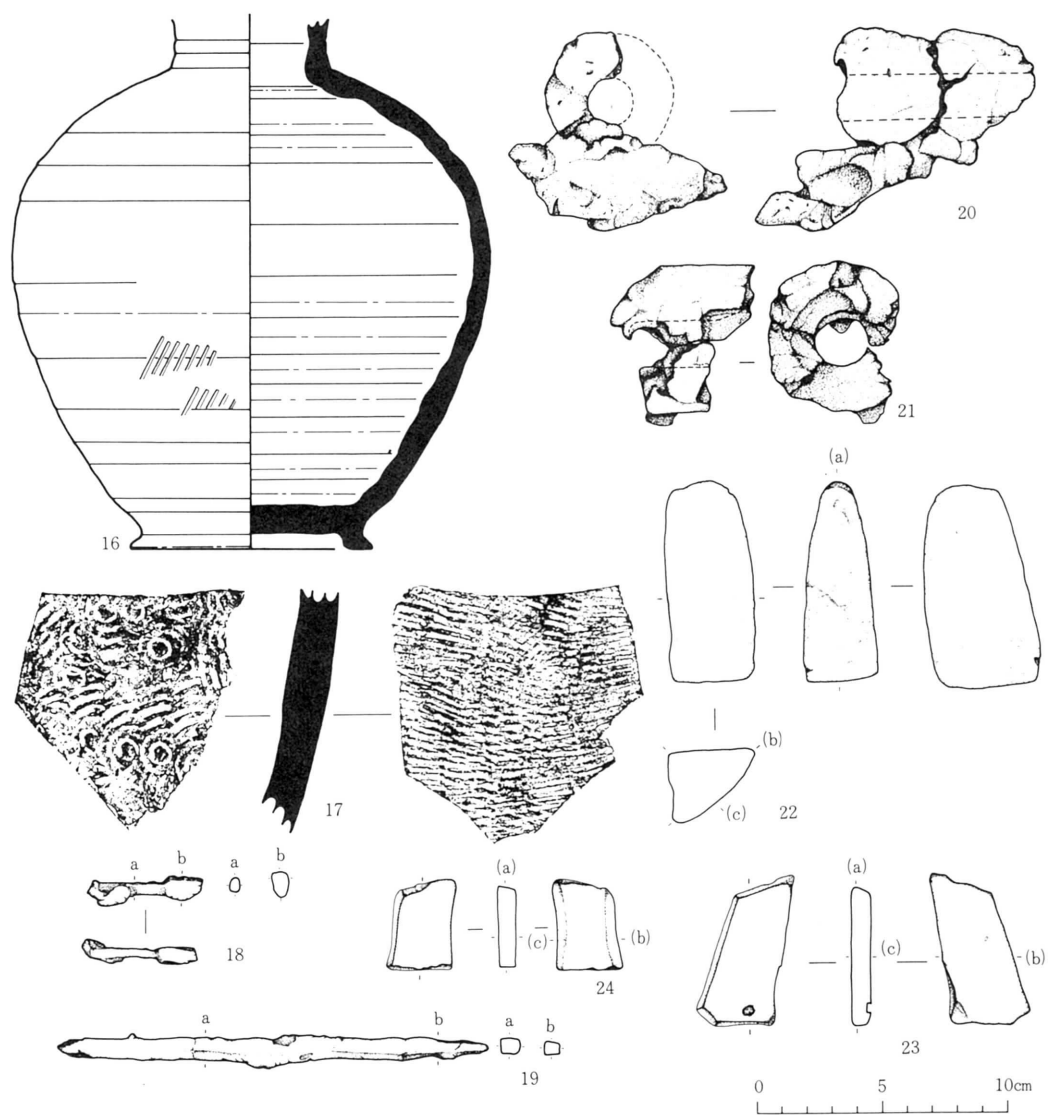
甕形土器はロクロ成形のNo13・14、非ロクロで球胴を呈すと思われるNo15の3点を図示。No15の下部に相当する破片はカマド内に相当量あるが接合されない。

No16は須恵器長頸壺。肩部の一部と頸部上方から口縁にかけての部分欠失している。頸径6.1cm、最大胴径18.2cm、脚径9.8cm大。体部中央よりやや下位に斜位の叩目が残る。叩目のある部分から底部直近までは、回転ヘラ削りが施される。脚部は付高台に依るもので、端部が外





第63—2图 54号(Qe18)竖穴住居跡出土遺物



第63—3図 54号(Qe18)竪穴住居跡出土遺物

側に向かって突出する。底部には同心円状のナデが入るが、中央部は指或いは布で軽く押し  
ている。灰黒色を呈す硬質な焼成であり、断面の胎土は若干赤味がかかる。

No.20・21の2点は鞆の羽口である。一方の端部外面には溶鉄滓が付着しており、両者とも内  
径が2cm以下である。No.21は当遺構出土片であるが、No.20は約半分が50号(Pg33)竪穴住居跡  
出土、残りが当遺構出土の破片を接合したものである。またNo.20は、炉壁の下部に取り付けら  
れたものと思われ、羽口下に密着する溶鉄滓の下側表面には細かい砂粒が多量に付着している。  
これらの他には多量の鉄滓が堆積土の各層から床面にかけて散在しているが、大きいもので

第45—1表 坏形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)					外傾角度 (θ°)	備 考	
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)	a/b	a/d			
1	—	A 類	ヘラ切	無調整		13.7	8.0	4.3	1.7	3.2	56	完形品。(床面)	
2	192	A 類	ヘラ切	無調整		12.8	9.0	4.0	1.4	3.2	59.5	底部付近 B 類の色調(7.5YR 浅黄橙)(床面)	
3	193	A 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	13.6	7.8	4.5	1.7	3.0	56	内面にカーボン若干付着。(堆積土)	
4	—	A 類	ヘラ切	無調整		(12.2)	7.0	3.6	1.7	3.4	54	磨滅顕著。(堆積土)	
5	194	A 類	ヘラ切	無調整		14.5	8.4	4.9	1.7	3.0	59.5	底部中央 B 類の色調(2.5Y 黄)に黄(堆積土)	
6	—	A 類	ヘラ切	無調整		(13.6)	7.0	4.7	1.9	2.9	54.5	(床面直上)	
7	195	A 類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	(14.6)	8.6	4.1	1.7	3.6	53	(床面)	
8	—	B 類	回転糸切	無調整		(13.8)	7.0	4.7	2.0	2.9	54	磨滅顕著。(堆積土)	
9	—	A 類	ヘラ切	無調整		(13.2)	(6.6)	3.8	2.0	3.5	49	内外面にカーボン付着。(床面)	
10	—	A 類	回転糸切	無調整		(13.6)	7.0	3.9	1.9	3.5	49.5	(床面+堆積土)	
11	—	C 類	調整のため不明	手持ヘラ削り	底 部	13.3	7.0	4.5	1.9	3.0	55.5	磨滅。(カマド内)	
12	—	台付	調整のため不明	回転ヘラ削り	底 部	—	10.1 (脚径) 10.5	— (脚高) 1.6	—	—	—	—	底部片。(P <sub>1</sub> )

第45—2表 甕形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大脚径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
13	—	土師器	(23.0)	—	—	—	ロクロナデ	下ラケズリ	ロクロナデ	一部ヘラナデ	反転復元。浅黄橙色。(カマド+ピット内)
14	—	土師器	(15.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	小型ロクロ甕。(東側ピット内出土)
15	—	土師器	(18.9)	—	—	—	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	不 明	反転復元。球形。(Q <sub>2</sub> 掘り方堆積土)
17	—	須恵器	拓影図。体部片。外面横位の印目、内面青海波文を施す。(堆積土)								

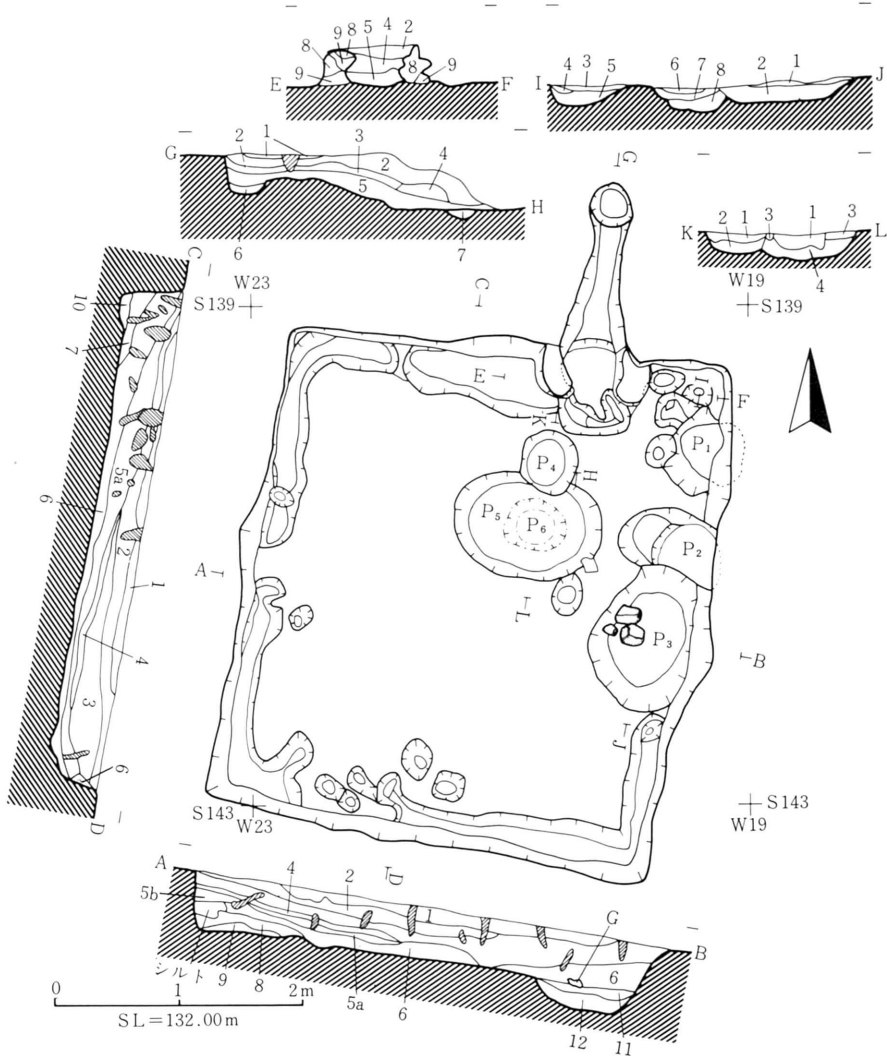
第45—3表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
18	—	不 明	破片 ?	やや不良	46.0	a … 6.10 b … 10.20	a … 4.0 b … 7.0	4.25	a … 方 形	(堆積土)
19	—	釘 状	ほぼ完成品	比較的良好	173.50	a … 7.20 b … 6.20	a … 9.0 b … 7.0	25.20	方 形	(堆積土)

第45—4表 砥 石 一 覧

実測図番号	写真番号	法 量 (mm・g)				使用面の数	色 調	材 質	産地・地質年代	備 考
		(a) 長さ	(b) 幅	(c) 厚さ	重さ					
22	19	81.0	42.20	26.0	55.20	4	灰 白 (2.5Y・%)	白色細粒凝灰岩	零石盆地南部(御所)。上部中新統	三角形。軟質。(床面直上)
23	20	54.90	29.0	7.80	24.50	6	に黄い黄橙(10YR・%)	石質細粒凝灰岩	零石盆地西・南部。中新統	孔の作りかけ。
24	21	33.50	23.90	6.20	12.0	4	暗灰黄 (2.5Y・%)	粗粒玄武岩	零石盆地西・南部。中新統	薄手。

16×11cm位、しかも片面が丸味を持つ皿状を呈するものである。この種の形態を有す鉄滓は、凸状に丸味を持つ側に砂や細石が付着しているのが一般的である。また、炉壁の細片も若干み



A-B C-D

1	10YR5/1	黒色土	
2	"	"	シルト若干と遺物含む
3	10YR1.7/1	"	
4	10YR5/1	"	粒状のシルト含む
5a	Y	"	"
5b	"	"	ブロック状のシルト含む
6	"	"	シルト、遺物含む
7	10YR1.7/1	"	
8	10YR5/1	"	シルト若干含む
9	10YR5/1	"	シルト混入
10	10YR5/1	暗褐色土	腐植土混入
11	5YR5/1	黒褐色土	シルト若干含む
12	5YR5/1	"	焼土、シルト若干、遺物含む

K-L

1		焼土黒色土混合	炭、シルト若干
2	7.5YR5/1	黒褐色土	シルト、砂多量
3		焼土シルト混合	粘床か
4	5YR5/1	暗赤褐色土	シルト若干と焼土混入

◎木根等による攪乱

E-F G-H

1	5YR5/1	黒褐色土	焼土、シルト若干
2	5YR5/1	極暗赤褐色土	焼土、炭、腐植質土含む
3	5YR5/1	黒褐色土	部分的に焼土多量に混入
4	5YR5/1	"	焼土、シルト粒状に混入
5	5YR5/1	極暗赤褐色土	焼土、炭混入
6	5YR5/1	黒褐色土	焼土若干混入
7	5YR5/1	暗赤褐色土	黒色土シルト混合 焼土混入
8			シルト カマド構築土
9	10YR5/1	黒色土	シルト質土 " 焼土混入

I-J

1	5YR5/1	黒褐色土	A-B-C-Dの11層と同じ
2	5YR5/1	"	" " 12層と同じ
3	5YR5/1	暗赤褐色土	焼土、砂多量、遺物含む
4	7.5YR5/1	褐色土	砂
5	5YR5/1	暗赤褐色土	焼土、砂質土多量、炭若干、遺物含む
6	5YR5/1	黒褐色土	焼土、シルト含む
7	5YR5/1	"	焼土、シルト粒状に含む
8	5YR5/1	暗赤褐色土	焼土、炭、シルト若干、砂質土遺物含む

第64-1図 55号(Qg24)竪穴住居跡

られる。

砥石は小型のもの3点。No22は床面、他は堆積土からの出土である。

#### 55号 (Qg24) 竪穴住居跡 (第64図 第46表 写真図版33・70)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北4.1m、面積11.55m<sup>2</sup>のほぼ正方形の平面形を呈する。カマド方向軸はN-8°-Eである。

(堆積土) ほぼ黒色土による堆積土で、シルトの混入量による若干の差はあるが大きな差異は認められなくレンズ状の堆積である。

(壁) 東壁でやや外傾するが、他はほぼ垂直に近い立ち上がりである。検出面までの高さは40cm~45cmを計る。

(床) 掘り方は認められず、地山シルトをそのまま床面としており、竪穴住居跡の北東部のピット埋土上面等には、シルト混りの黒色土等による貼りがみられる。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 北壁のカマド以東と東壁北半のピット施設部分を除き認められた。幅25cm、深さ10cm内外を計り西壁中央で切れる部分がある。

(カマド) 北壁の東半中央に施設され、カマド構築のための掘り方は特になく、燃烧部火床は若干くぼむ程度で、間口40cm、奥行50cmほどで、袖はシルトを用いている。燃烧部火床から若干上がって煙道となり、幅30cm~50cm、深さ17cm~30cm、長さ100cmの溝状で北にのび煙出しとなる。煙出しは径33cmの円筒状で、底面は煙道より若干の段差で低い。

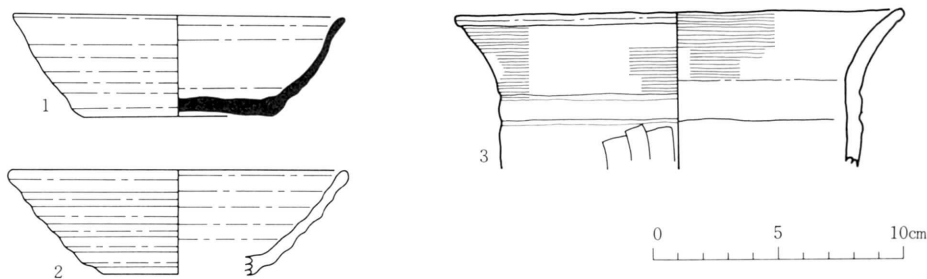
(その他の施設) P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>が検出された。それぞれの径と深さは以下の通りである。P<sub>1</sub> 70cm×60cm、16cm P<sub>2</sub> 60cm×92cm、23cm P<sub>3</sub> 80cm×113cm、18cm P<sub>4</sub> 45cm×50cm、15cm P<sub>5</sub> 84cm×120cm、20cm P<sub>6</sub> 40cm×50cm、11cmを計り、堆積土は、焼土に黒褐色土や炭を混入する暗赤褐色土を主体に、いずれも土器を包含している。重複はP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>、P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>とがあり、それぞれで新しいのはP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>であり、更にP<sub>1</sub>も含めた各ピットは、P<sub>6</sub>を除き上面が薄く貼られている。これらのピットは貯蔵穴の可能性があり、特にP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は強い。

#### 出土遺物 (第64-2図 第46表)

坏形土器2点、甕形土器1点、計3点の実測。他に外面に叩目を有す土師器体部片、非ロクロ片等が多数出土している。非ロクロ成形の体部片は外面をヘラ削り、内面にヘラナデするものが多く、ロクロ成形片よりは相対数が多い。

坏形土器A・B類については46表を参照されたい。

No.3の土師器甕は堆積土中出土。反転復元図であるが推定口径は23cm位。内外面の口縁部を



第64—2図 55号(Qg24)竪穴住居跡出土遺物

第46表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	197	A類	回転糸切	無調整		13.2	7.4	4.2	1.8	3.1	53	(床面+P <sub>4</sub> 堆積土)
2	—	B類	底部残存小		—	(13.4)	(6.0)	4.2	2.2	3.2	48.5	(P <sub>2</sub> 堆積土)

ヨコナデ、外面体部にヘラ削りを加えている。肩部段は明瞭ではないが、沈線様の境界がある。

56号 (Rh06) 竪穴住居跡 (第65図 第47表 写真図版33・34・70・71)

(重複 改築) カマドの移築があり、旧カマドのNo.1と新カマドのNo.2がいずれも東壁南半にあつて、No.1の北隣りにNo.2カマドが構築されている。

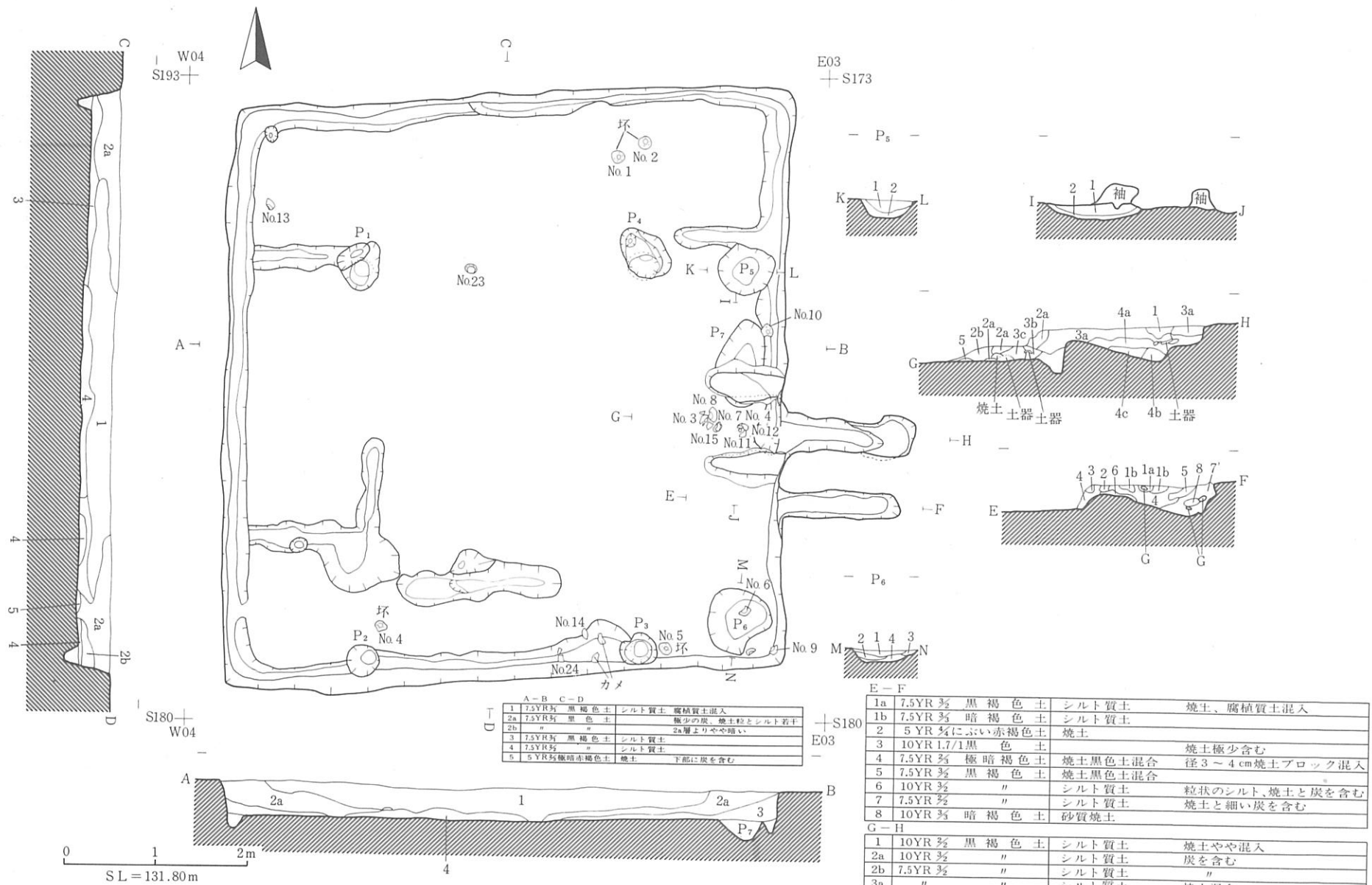
(規模 平面形 方向) 東西6m、南北6.3m、面積33.06m<sup>2</sup>のほぼ正方形の平面を呈する。カマド方向軸はN-90°-Eである。

(堆積土) 黒褐色シルト質土および黒色土が主体で1層から4層に分けられるが、東西断面ではレンズ状を示し、南北断面では2層の黒色土が1層の黒褐色シルト質土を覆う状況を示しており、1層と2層はあまり時間差のない堆積と推察されるが、攪拌もなく混入物等からも人為的な様相はない。

(壁) ほぼ垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは30cm~35cmを計る。

(床) 全面掘り方もち、黒色土とシルトをたたきこみ固めて床面を構築しており、厚さは壁近くで約20cm、中央では5cmほどで床下砂質シルト面は凹凸が顕著である。

(柱穴) P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が柱穴である。P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>は竪穴住居跡の北半で平面对角線上に乗り、P<sub>1</sub>は西壁および北壁上端から、それぞれ1.5mと1.8mあり、P<sub>4</sub>は東壁および北壁上端から、それぞれ1.5mと1.8mを計る位置にある。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は南壁に接し、P<sub>2</sub>は西端からP<sub>3</sub>は東端から、それぞれ1.5mの位置にあり、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>間は3mを、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>間は4.2mを計り対称をなしている。



A-B C-D	
1 7.5YR 5/2 黒褐色土	シルト質土 腐植質土混入
2a 7.5YR 5/2 黒褐色土	極少の炭、焼土粒とシルト若干
2b " "	2a層よりやや暗い
3 7.5YR 5/2 黒褐色土	シルト質土
4 7.5YR 5/2 " "	シルト質土
5 5 YR 5/2 暗赤褐色土	焼土 下部に炭を含む

E-F			
1a	7.5YR 5/2 黒褐色土	シルト質土	焼土、腐植質土混入
1b	7.5YR 5/2 暗褐色土	シルト質土	
2	5 YR 5/2 にふい赤褐色土	焼土	
3	10YR 1.7/1 黒色土		焼土極少含む
4	7.5YR 5/2 極暗褐色土	焼土黒色土混合	径3~4cm焼土ブロック混入
5	7.5YR 5/2 黒褐色土	焼土黒色土混合	
6	10YR 5/2 " "	シルト質土	粒状のシルト、焼土と炭を含む
7	7.5YR 5/2 " "	シルト質土	焼土と細い炭を含む
8	10YR 5/2 暗褐色土	砂質焼土	
G-H			
1	10YR 5/2 黒褐色土	シルト質土	焼土やや混入
2a	10YR 5/2 " "	シルト質土	炭を含む
2b	7.5YR 5/2 " "	シルト質土	" "
3a	" "	シルト質土	焼土混合
3b	10YR 5/2 " "	シルト質土	3a層より焼土少
3c	7.5YR 5/2 褐色土	シルト質土	部分的に焼けている
4a	10YR 5/2 にふい黄褐色土	シルト	やや焼土混入
4b	7.5YR 5/2 黒褐色土	シルト	" 黒色土混入
4c	10YR 5/2 にふい黄褐色土	シルト	砂を含む
5	10YR 5/2 黒褐色土	シルト質土	砂を含む
I-J Y			
1	7.5YR 5/2 黒色土		シルト、焼土粒混入
2	7.5YR 5/2 褐色土	焼土	明るい焼土粒あり、土器片多い
K-L			
1	10YR 5/2 黒褐色土		砂質シルトを粒状に含む
2	7.5YR 5/2 褐色土	砂質シルト	黒色土混入
M-N			
1	5 YR 5/2 暗赤褐色土	焼土黒色土混合	粒状のシルト、炭混入
2	10YR 5/2 黒褐色土		焼土粒含む
3	10YR 5/2 にふい黄褐色土	焼土	
4	7.5YR 5/2 褐色土	砂	黒色土混入

第65-1図 56号(Rh06)竪穴住居跡

柱穴規模は、径、深さの順に、P<sub>1</sub> 40cm×50cm、40cm P<sub>2</sub> 35cm×35cm、54cm P<sub>3</sub> 35cm×40cm、54cm P<sub>4</sub> 45cm×60cm、48cmを計り、平均径は42.1cmの円もしくは楕円の平面形で、深さの平均は49cmである。堆積土は、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>では黒色土を、P<sub>4</sub>は汚れた砂質土が主体で柱痕は不明であった。なお、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>は床面で確認し、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>は黄褐色砂質シルトに覆われ、その下で確認した。

(周溝) 南東隅を除く壁沿いに認められる。幅15cm～20cm、深さ15cmほどを計る。

(カマド) No.1 カマド 東壁南半の中央に位置し、煙道と煙出しのみ遺存する旧カマドで、煙道は燃烧部から立ち上がり煙出し方向に傾斜し下がる。幅30cm、深さ10cm～35cm、長さ130cmの溝状で、煙出し部との区別は無い。

No.2 カマド No.1 カマドの北に隣接し、壁内に本体をもつ。燃烧部は間口60cm、奥行70cmで火床面は住居跡床面とほぼ同レベルであり、下にはNo.1 カマド期の周溝が認められた。袖はシルトを盛り固め構築しており、煙道、煙出しはNo.1 カマドと類似する形態をもつが、煙出し部が楕円状を呈し区別される。幅30cm～40cm、深さ13cm～35cm、長さ145cmを計る。

(その他の施設) 間仕切りと推察される溝<sub>1</sub>～溝<sub>5</sub>がある。溝<sub>1</sub>は幅25cm、深さ18cm、長さ100cmあり、溝<sub>2</sub>は幅30cm、深さ16cm、長さ120cm、溝<sub>2</sub>の東端から直角に北に走る溝<sub>3</sub>は、幅20cm、深さ16cm、長さ100cm、溝<sub>4</sub>は幅50cm、深さ16cm、長さ180cmを計り、溝<sub>5</sub>は幅20cm、深さ20cm、長さ100cmある。

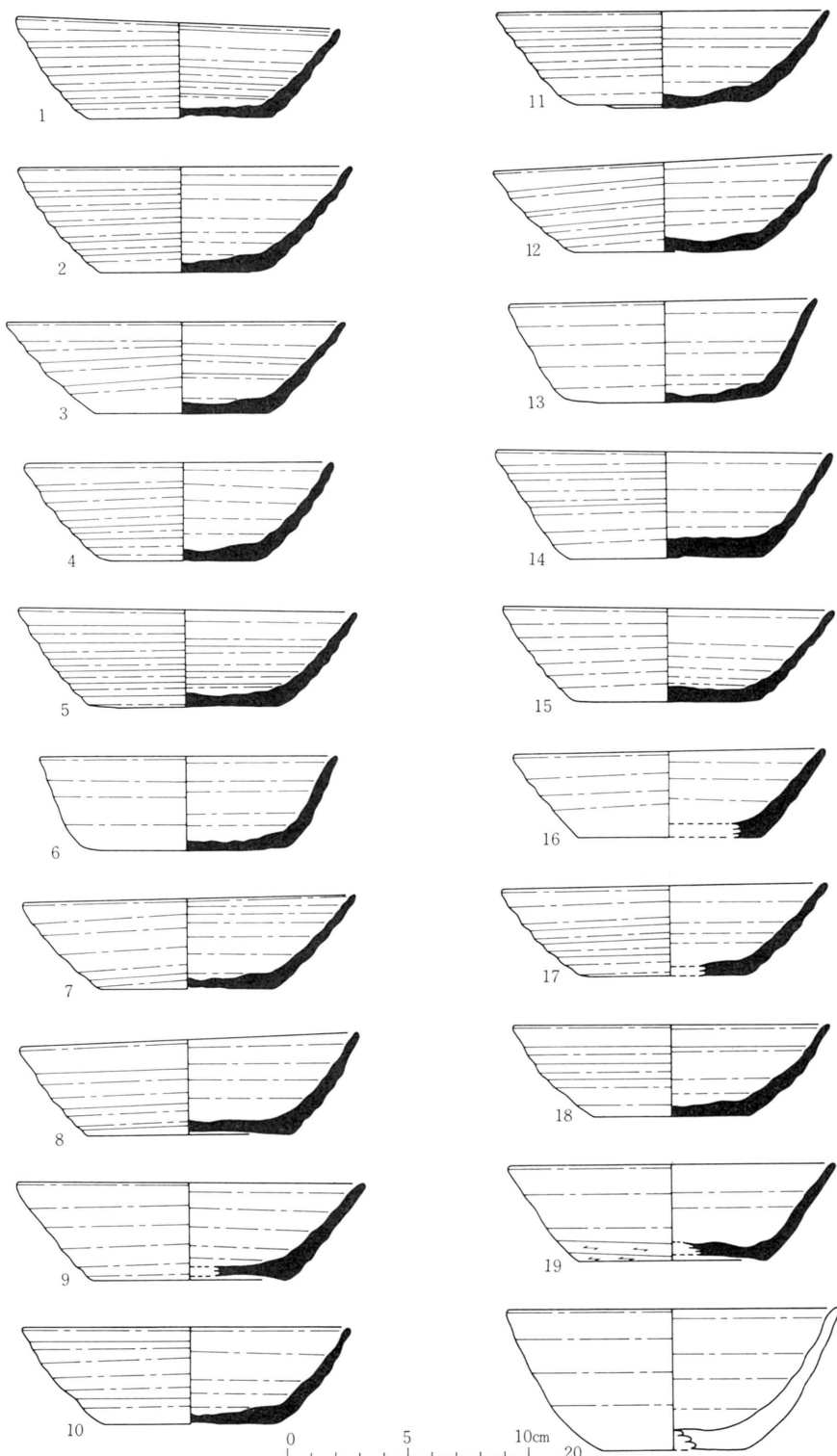
以上のようにほぼ同規模の溝で、配列をみると溝<sub>1</sub>と溝<sub>5</sub>は柱穴P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>を結ぶ線上に乗り、北壁の上端から約165cm南で東西方向壁に平行し、溝<sub>1</sub>は柱穴P<sub>1</sub>と連結し、溝<sub>5</sub>も柱穴P<sub>4</sub>と連結した可能性がある。したがって、住居跡北半を溝<sub>1</sub>と溝<sub>5</sub>で区切った一画があり、更に溝<sub>2</sub>は南壁上端から165cm北で東西方向壁および溝<sub>1</sub>に平行し、溝<sub>2</sub>東端から直角に北に走る溝<sub>3</sub>は、柱穴P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を結ぶ線上に乗り南北方向壁に平行する。すなわち、住居跡西半の中央で溝<sub>1</sub>～溝<sub>3</sub>によって区画される部分がある。溝<sub>4</sub>は南壁上端から約110cm北に東西方向壁に平行し、柱穴P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>間に位置し、間仕切り溝かと推察するが、他溝との関連は明確でない。

貯蔵穴様ピットとしてP<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>が認められた。P<sub>5</sub>は溝<sub>5</sub>と東壁の交点となる北東隅に位置し、径50cm×60cm、深さ20cm、堆積土は黒褐色土と褐色シルトである。P<sub>6</sub>は南東隅にあり、径70cmの不整形円で深さ10cmあり、黒褐色土と焼土混りの堆積土が主体である。No.2 カマド左袖下にあるP<sub>7</sub>は、径55cm×95cmの楕円形で深さ15cm、焼土混りの黒色土と焼土を堆積土にもち土器片を多く含む状況からみて、No.1 カマド期に属するものと断定できるが、P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>は明確にし得ない。

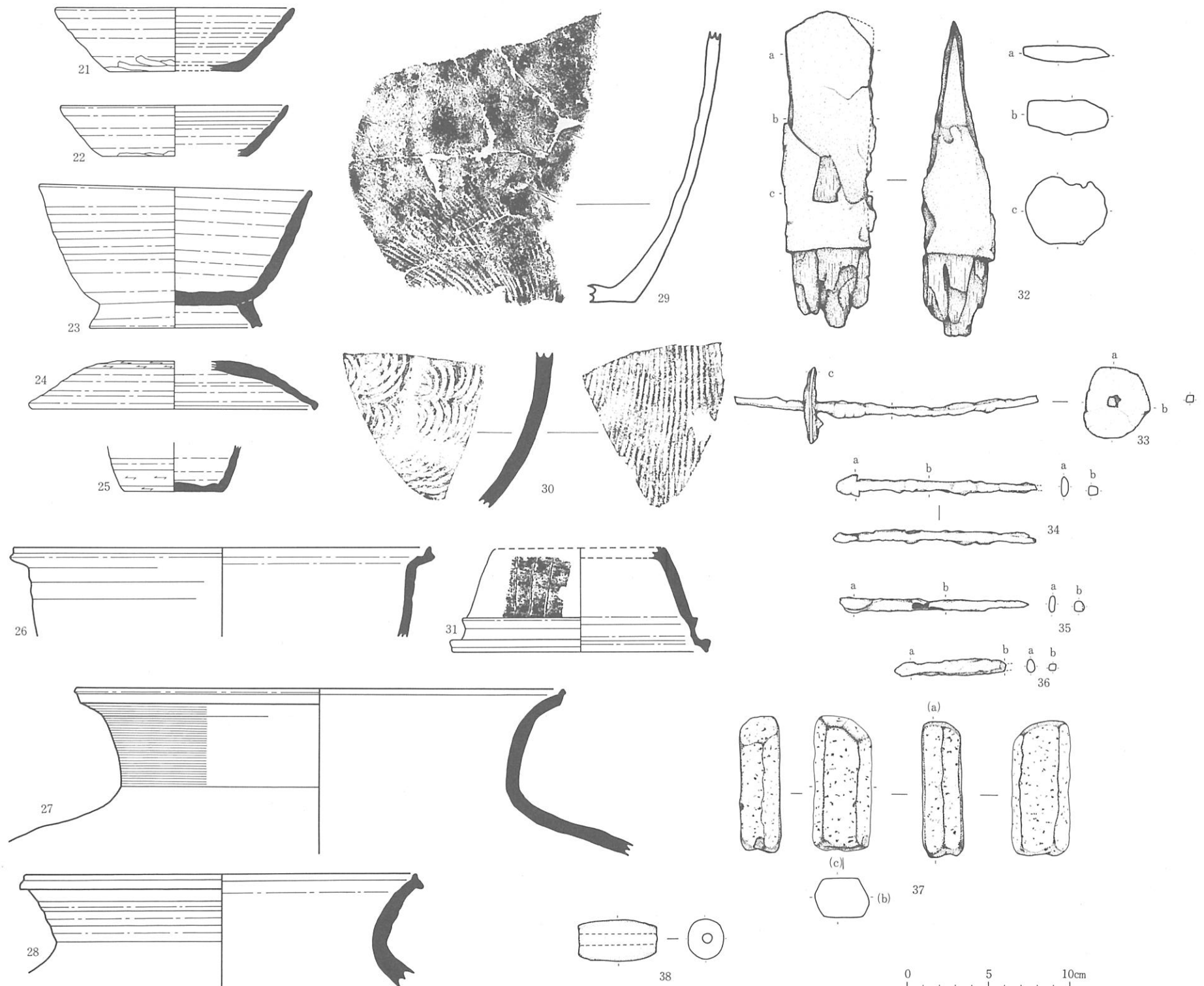
#### 出土遺物 (第65-2・3図 第46表)

环形土器24点(台付坏1)、須恵器蓋1点、甕形土器2点、鉢形土器1点、土師器甕・須恵器





第65—2 图 56号(Rh06)竖穴住居跡出土遺物



第65—3图 56号(Rh06)竖穴住居跡出土遺物

甕拓影図各1点、土錘1点、円面硯1点、鉄製品5点、砥石1点、計38点について図示している。

これらの他には、非ロクロ土師器片・木葉底部片等がカマド焚口周辺にみられ、貼床下からはロクロ成形の土師器片が出土している。また、坏形土器はA類が主であるが、焼土ピット内出土の破片はいわゆるくすべ色を呈すものが少なく、白橙色片が多い。

第47-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考	
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)					
1	198	A類	ヘラ切	無調整	/	13.5	7.6	4.3	1.8	3.1	51	完形品。(床面)	
2	199	A類	ヘラ切	無調整	/	13.8	6.6	4.4	2.1	3.1	48.5	完形品。底部外面に軽いナデ。(床面)	
3	—	A類	ヘラ切	無調整	/	14.0	7.2	3.8	1.9	3.7	50	完形品。底部外面に軽いナデ。(面)	
4	—	A類	ヘラ切	無調整	/	12.7	6.0	4.1	2.1	3.1	52	完形品。底部外面軽いナデ、内面に赤色付着物。(カマド焚口堆積土+床面中央焼土)	
5	—	A類	ヘラ切	無調整	/	14.0	8.0	4.2	1.8	3.3	50.5	完形品。底部外面に軽いナデ。(床面)	
6	200	A類	ヘラ切	無調整	/	12.3	8.4	3.9	1.5	3.2	61.5	(P <sub>6</sub> 内)	
7	201	A類	ヘラ切	無調整	/	13.8	7.2	3.9	1.9	3.5	49	底部外面軽いナデ。口縁若干の歪み。(床面+カマド焚口堆積土)	
8	202	A類	ヘラ切	無調整	/	14.0	8.4	4.3	1.7	3.3	56	底部外面中央凸部のみナデ(床面)	
9	203	A類	ヘラ切	無調整	/	14.4	8.0	4.1	1.8	3.5	50	歪曲。縦位の亀裂をナデで補強。(P <sub>6</sub> 付近)	
10	—	A類	ヘラ切	無調整	/	13.6	7.2	4.1	1.9	3.3	53	(床面)	
11	204	A類	ヘラ切	無調整	/	13.8	7.2	4.0	1.9	3.5	48	歪みあり。稚拙な作り。(カマド袖+焚口部埋土)	
12	—	A類	ヘラ切	無調整	/	14.1	7.4	4.0	1.9	3.5	50	歪曲。(カマド焚口堆積土)	
13	—	A類	ヘラ切	無調整	/	12.7	8.4	4.3	1.5	3.0	62	多量のカーボン付着。(床面+堆積土)	
14	—	A類	ヘラ切	無調整	/	13.9	8.0	4.6	1.7	3.0	55.5	(床面)	
15	—	A類	ヘラ切	無調整	/	13.7	7.6	4.0	1.8	3.4	50	(カマド袖+焚口部堆積土)	
16	—	A類	ヘラ切	無調整	/	12.9	7.6	3.7	1.7	3.5	54	(床面+堆積土)	
17	—	A類	底部残存小			/	13.5	6.6	3.8	2.0	3.6	48.5	(堆積土)
18	—	A類	ヘラ切	無調整	/	(13.2)	6.4	3.9	2.1	3.4	48	底部外面に軽いナデ。(床面)	
19	—	A類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端~底部	(13.4)	(7.8)	4.0	1.7	3.4	54.5	(床面+堆積土)	
20	—	B類	回転糸切	無調整	/	(13.6)	(6.0)	5.9	2.3	2.3	57	(堆積土)	
21	—	A類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端~底部	(14.6)	(8.0)	3.9	1.8	3.7	49.5	(P <sub>6</sub> 付近+堆積土)	
22	—	A類	底部残存小	手持ヘラ削り	体部下端	(14.0)	(9.0)	3.1	1.6	4.5	51.5	(床面焼土中)	
23	—	台付坏	ヘラ切	回転ヘラ削り	底部	16.6	9.5 (脚径) 10.4	8.9 (脚高) 1.5	/	/	/	/	(床面)
24	205	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	(17.4)	—	—	/	/	/	/	体上~口縁部片。(床面+南カマド焚口部)

甕形土器は須恵器2点と土師器(No.29)・須恵器(No.30)の拓影図を示した。No.27(床面出土)・28(カマド付近堆積土内出土)は胴部が膨らむ球胴の甕である。何れも反転復元に依る。肩部の反り具合はNo.28の方が強く、口唇の作りも異なる。No.26は鉢形を呈す。薄手で硬質の須恵器である。推定口径26cm前後、煙道内からの出土である。No.29は体部下端に叩目を有す土師器甕。上位にはダイナミックなヘラ削りが加えられ、器面の一部に煤状を呈す黒変部がある。No.26に近い煙道内出土。No.30は床面出土。外面に縦位の平行叩目、内面に青海波文を施す。

No.31は円面硯。硯面を欠く台脚部分の破片である。台脚径は推定で16cm。台脚中央よりやや上位には窓の一部が残っているが全容は明らかではない。台脚部には6～11mm間隔で縦方向の沈線が配される。この間隔でいけば、透窓は3箇所にあったと推される。

No.38は焼土中床直上出土の土錘。長さ4.8cm、外径2.2～2.4cm大。中央貫通孔径は0.6cm前後である。

鉄製品は6点出土しているが、そのうちの5点を図示している。木質部も残存する鉄斧、紡錘車、鉄鎌等である。No.32・34は出土層位が不明であるが、他については下記一覧表の如くである。

No.37は砥石。堆積土中からの出土。やや扁平な六角柱形を呈しており、全面に何らかの使用痕が観察される。石英安山岩を素材とする。使用面の研磨量は少なく、部分的に残る凹部底面に至らない。

第47—2表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
32	207	鉄 斧	ほぼ完形品	比較的良好	193.0	a …54.0 b …51.0 c …51.20	a …10.80 b …24.30 c …40.50	632.0	a…偏平 b…長方形 c…重た円形	木質残存。(No.1カマド北袖下)
33	208	紡錘車	ほぼ完形品	比較的良好	188.0	長径a…45.10 短径b…41.80 軸…4.30	c … 3.50 軸… 5.0	27.45	軸…方形	(袖直上)
34	209	鉄 鎌	茎端のみ欠失	比較的良好	123.0	a …13.10 b … 5.70	a … 5.0 b … 5.50	10.40	a…紡錘形 b…方形	鎌身長…14.0mm
35	210	鉄 鎌	ほぼ完形品	やや不良	118.50	a … 9.90 b … 7.0	a … 4.0 b … 6.0	10.60	a…長楕円形 b…方形	鎌身部の形状はつきりしない。(床直上)
36	—	鉄 鎌	茎端部欠失	不 良	68.0	a … 8.80 b … 4.90	a … 4.90 b … 5.0	9.40	a…楕円形 b…方形	鎌身長…(14.0)
—	—	不 明	破 片	やや不良	47.0	27.20	—	7.80	偏 平	不正形な板状。(カマ出土ピット内)

57号 (Sj74) 竪穴住居跡 (第66図 第48表 写真図版34・71)

(重複 改築) 本竪穴住居跡北東隅からNo.2カマド間を9号溝が走っていたものとみられるが、平面および住居跡堆積土中の断面も認められない。したがって、溝は住居跡よりも古いものと推定される。一方、住居跡に伴ない旧カマドのNo.1、新カマドのNo.2があり、カマドの移築と一部に貼りの新床面が認められる。

A-B C-D

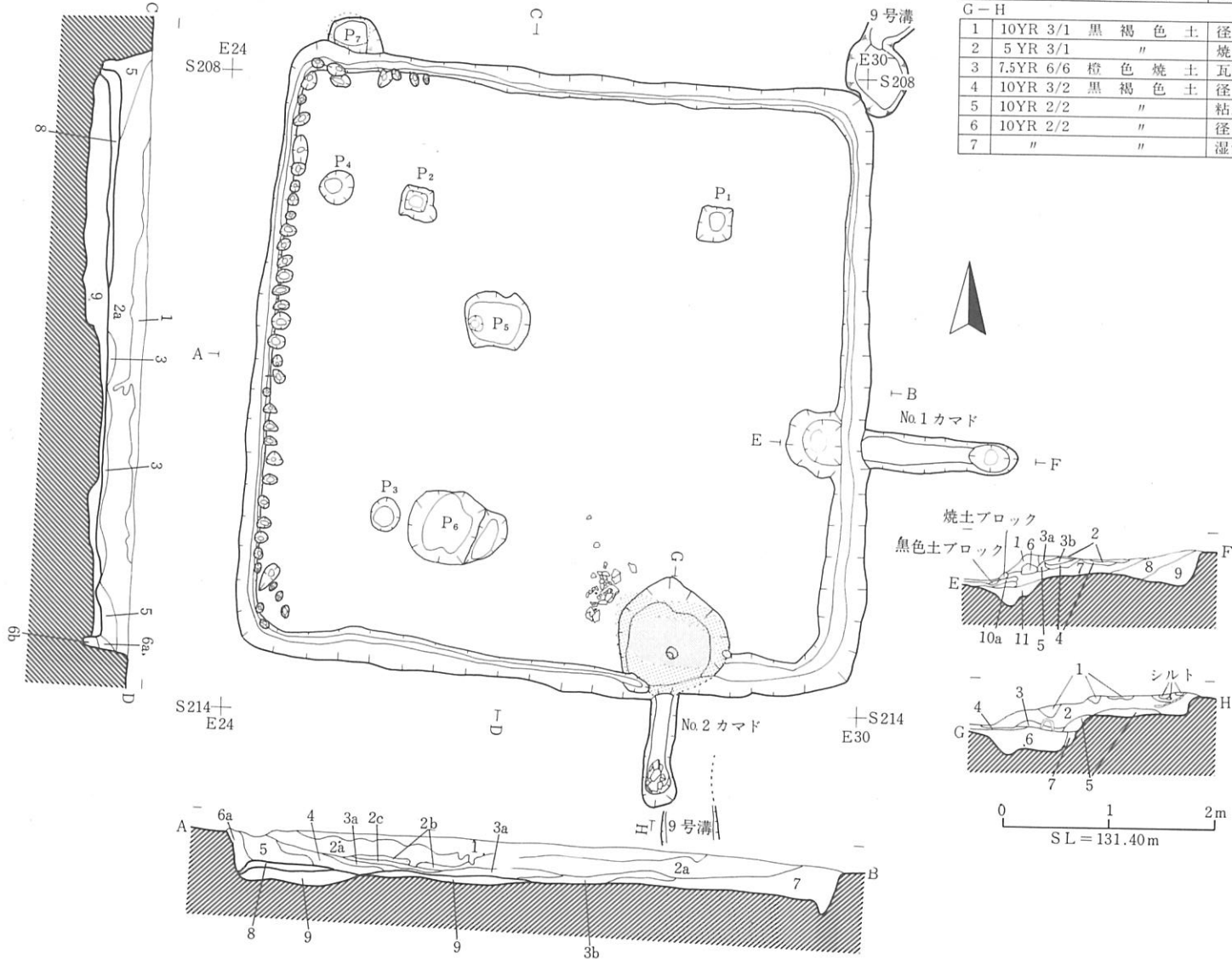
1	10YR1.7/1	黒色土	粉状バミス礫若干含む
2a	10YR 2/1	"	上部に粉状バミスを含む
2b	"	"	シルト若干含む
2c	"	"	"
3a	10YR1.7/1	"	"
3b	10YR 2/1	"	シルトを多く含む
4	10YR 2/1	"	"
5	"	"	シルト若干含む
6a	10YR1.7/1	"	"
6b	10YR 2/1	"	"
7	10YR1.7/1	"	多量の礫を含む
8	10YR 3/3	暗褐色土	黒色土とシルト混合 貼り床
9	10YR 2/3	黒褐色土	シルト混合、床構築土

E-F

1	10YR 3/1	黒褐色土	シルト質土若干含む
2	10YR1.7/1	黒色土	焼土若干含む
3a	10YR 4/3	黄褐色粘質土	
3b	10YR 4/4	褐色シルト質土	
4	10YR 3/1	黒褐色土	焼土多く含む
5	7.5YR 3/3	暗褐色土	焼土、を含む
6	7.5YR 4/3	褐色シルト質土	"
7	10YR 3/1	黒褐色土	"
8	5 YR 3/1	"	"
9	5 YR 3/2	"	焼土、炭を含む
10a	5 YR 5/8	明赤褐色焼土	炭を含む
10b	5 YR 3/4	暗赤褐色焼土	炭若干含む
11	5 YR 3/3	暗赤褐色土	黒色土と焼土混合、炭、礫含む
12	10YR 3/2	黒褐色土	径1cm内外の小礫と焼土を含む(G-H 4層相当)貼り床

G-H

1	10YR 3/1	黒褐色土	径1~2cmの小礫を含む
2	5 YR 3/1	"	焼土と炭を含む
3	7.5YR 6/6	橙色焼土	瓦礫状で固い
4	10YR 3/2	黒褐色土	径1cm内外の小礫と焼土を含む(E-F 12層相当)貼り床
5	10YR 2/2	"	粘土質土を含む 固い
6	10YR 2/2	"	径1cm~5cm大の礫を大量に含み上部に焼土、炭あり
7	"	"	湿気が多い



第66-1図 57号(Sj74)竪穴住居跡

(規模 平面形 方向) 東西5.8m、南北5.75m、面積28.09m<sup>2</sup>、正方形の平面を呈し、カマド方向はNo.1カマドでN-90°-E、No.2カマドはN-184°-Eである。

(堆積土) 黒色土を主体にし含有物によって分けられる。中央部から壁ぎわ近くまで広がる1層と2層は、それぞれの下部と上部にブロックまたは塊状に粉状パミスを含み、床面に近い3層に土器片を含む、壁ぎわに流れこむ4層・5層・6層は前出各層より比較的シルトを混入し、東側から中央へ流れこむ7層は多量の礫を含む点で他層と異なる。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは25cm~30cmを計る。

(床) 南東部は検出面も礫混りの黒褐色土であるが、床面もこの黒褐色土をそのまま利用したもので、他は掘り方をもち、シルト混合の黒褐色土を用い床面構築をしたのがNo.1カマドのときと推察され、No.2カマド期では、北壁から西壁沿いに黒色土とシルトの混合土を、南東部では小礫と焼土混りの黒褐色土を貼って床面としたものと推察される。

(柱穴) P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が柱穴である。その中でP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は、各壁上端から1.3m~1.45m内側にあって住居跡平面の対角線上に乗り、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>・P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>間は2.85m・3.0mを計る。なお、P<sub>4</sub>はP<sub>2</sub>の西0.8m、また、P<sub>4</sub>の北1.5mの壁外に柱穴状ピットP<sub>7</sub>がある。

それぞれの径と深さは、P<sub>1</sub> 径30cm×30cm、30cm P<sub>2</sub> 30cm×30cm、36cm P<sub>3</sub> 28cm×30cm、20cm P<sub>4</sub> 30cm×30cm、33cm P<sub>7</sub> 30cm×50cm、39cmを計り、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は方形を呈する。住居跡内の柱穴は貼り床上では明確に検出できなかった。

(周溝) 四壁沿いに幅15cm内外、深さ10cm~15cmで検出、貼床後も認める。西壁周溝沿いに径と深さ10cm内外で円もしくは半円状の壁土留杭跡と推察される小ピットを検出し、床構築土下で明瞭に確認されたが、その上から痕跡があった可能性もある。

(カマド) 東壁中央寄り南半にNo.1カマドがあり、本体は遺存せず巾35cm長さ100cmの溝状煙道と先端に楕円状の煙出しを認めた。一方、南壁東半中央にNo.2カマドが位置し、小形甕を伏せた支脚と瓦礫状の火床面を認めるが袖は遺存せず、幅25cm長さ100cmの溝状煙道があり煙出し部に長胴甕片が斜めに入っていた。No.1カマドの火床がわずかに遺存し、その上の貼り土がNo.2カマド火床下にもぐることからNo.2が新カマドと推察できる。なお、いずれも掘り方をもち、

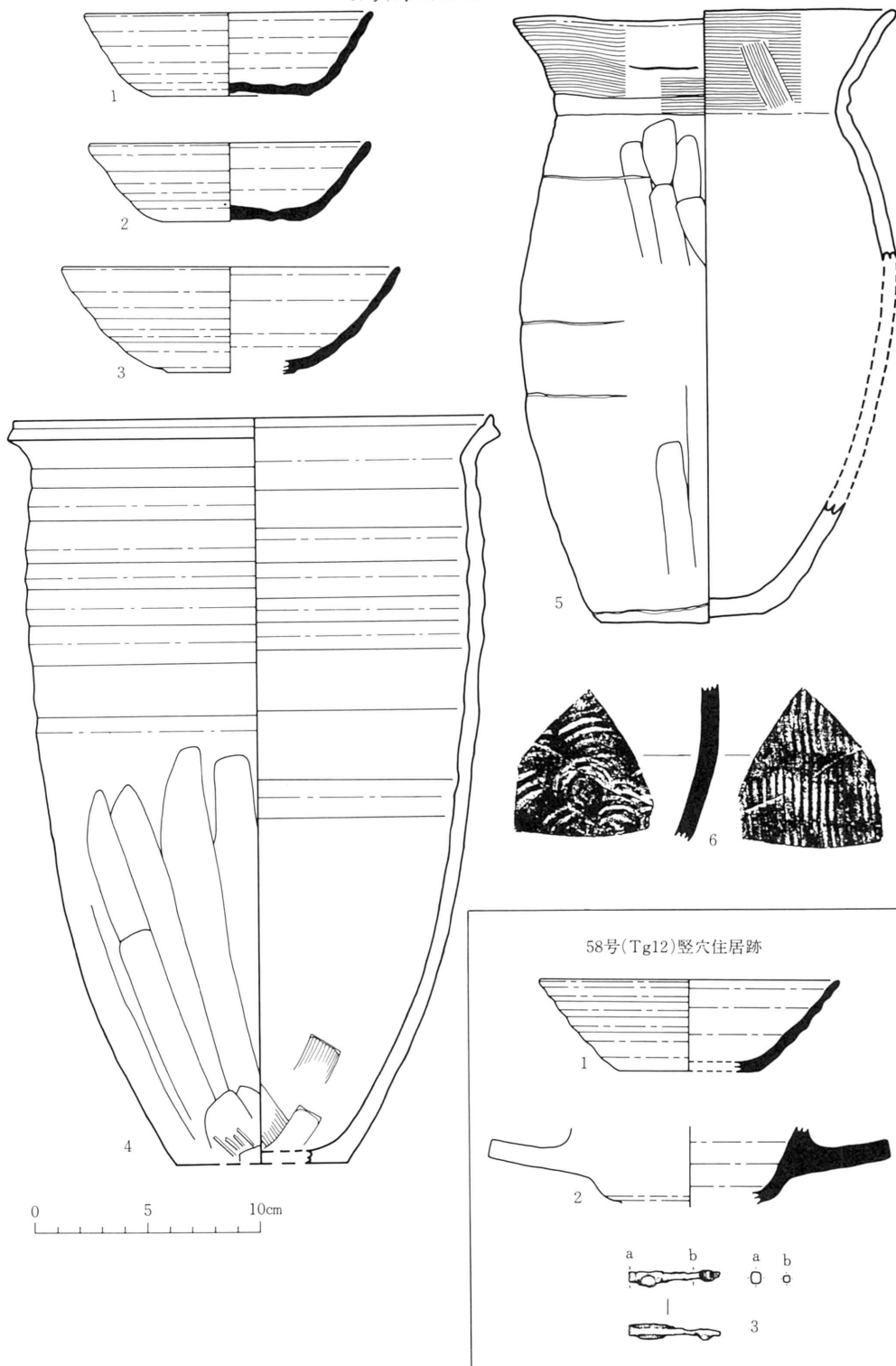
(その他の施設) P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>のピットを認めるが性格は不明である。

#### 出土遺物 (第66-2図 第48表)

坏形土器3点、甕形土器3点の実測。法量・調整技法等については48表の通りである。

なお、本遺構内からはいわゆる粉状パミスと呼ばれる火山灰が採集されている。1層と2層の中間に存在していたものである。当試料に関わる化学的分析や考古学的見地に於ける関連資料は別項を参照されたい。

57号(Sj74)竖穴住居跡



第66—2图 57号(Sj74)·58号(Tg12)竖穴住居跡出土遺物

第48—1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	—	A類	ヘラ切	無調整		(12.6)	7.0	3.7	1.8	3.4	52.5	(床面下)
2		A類	ヘラ切	無調整		(12.4)	6.0	3.5	2.1	3.5	47.5	(カマド東側)
3	—	A類	底部残存小		—	(14.8)	(5.6)	4.7	2.6	3.1	45.5	

第48—2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
			口径	底径	器高	最大胴径	口縁部	体部	口縁部	体部	
4	—	土師器	(22.0)	(7.6)	33.4	(20.5)	ロクロナデ	叩目 +ケズリ	ロクロナデ	下端 ヘラナデ	反転復元。煤付着。(煙道内)
5	212	土師器	17.2	7.3 ~8.4	26.7	16.7	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ?	非ロクロ。歪曲。底外面にヘラケズリ。頸部二条の洗線様痕。
6	—	須恵器	拓影図。外面叩目、内面青海波文。(床面近く)								

58号 (Tg12) 竪穴住居跡 (第66—2・67図 写真図版34)

(重複 改築) 重複は認められないが、カマドの改築がある。すなわち、西壁南半の中央に旧のNo.1カマド、東壁北半の中央に新のNo.2カマドが検出された。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北4.2m、面積13.30m<sup>2</sup>の南北にやや長い長方形を呈する。カマド方向軸は、No.1カマドでN-91°-W、No.2カマドでN-89°-Eである。

(堆積土) 黒色土と黒褐色土を主体とする堆積土で、当初、南壁方向から主に堆積した様相が2層以下みられ、その上に1層が堆積し、しかも、1層は径1cm~7cm大の円礫を多量に含むことで他の層と大きな差異がある。

(壁) 北半は砂礫、南半は褐色シルトが壁面をなしていて、砂礫とシルト層の接点に竪穴が掘られたものである。壁は比較的垂直に近い立ち上がりで検出面までの高さは45cmを計る。

(床) 北半は地山砂礫面を南半では一部掘り方を認めるが地山シルトをそのまま床面とする部分が多い。南西部分ではNo.1カマド焼土の散乱があり踏み固めて床面としている。

(柱穴) 認められない。

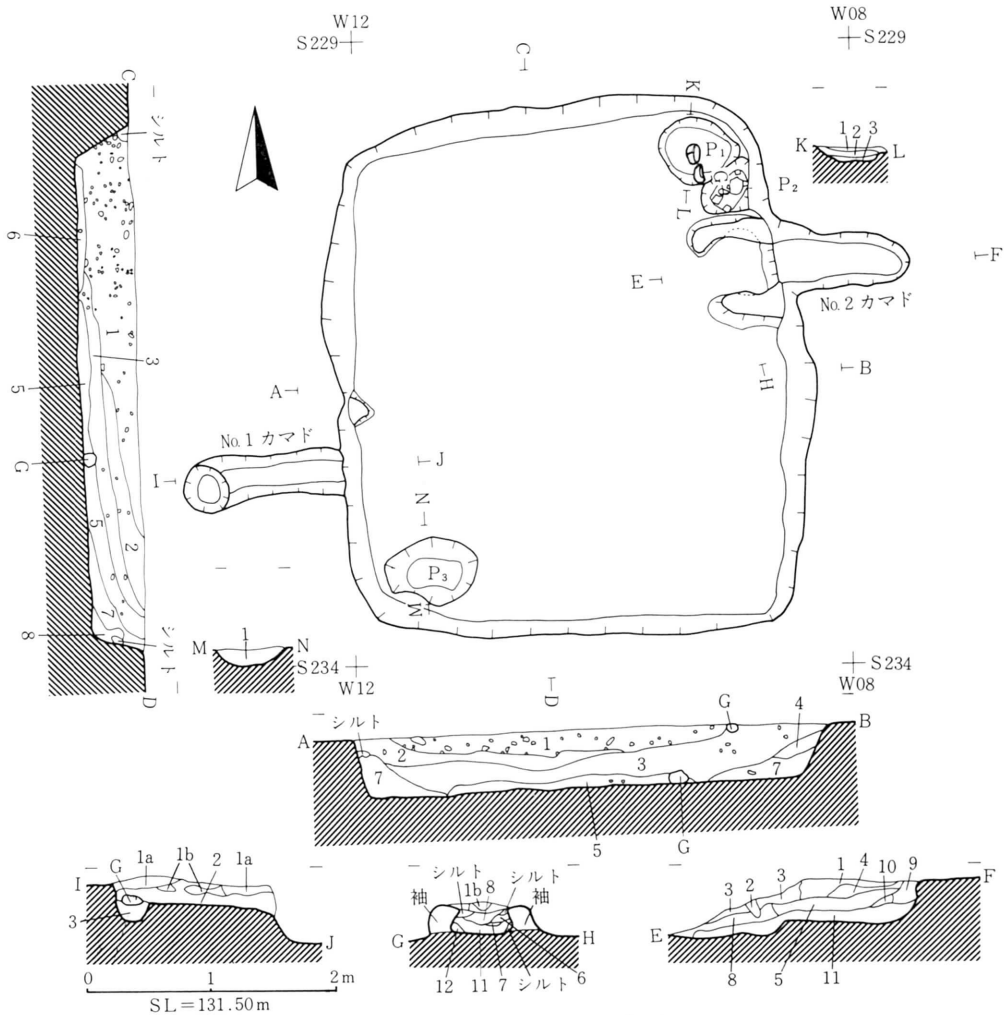
(周溝) 認められない。

(カマド) No.1カマド 西壁南半の中央に施設された旧カマドであり、煙道、煙出しのみで他は痕跡を残さない。煙道底面は床面より約20cm上がり、幅35cm、深さ18cmで溝状に127cm西へほぼ水平にのび煙出しとなる。煙出しは、径35cm×40cm、深さ30cmを計り、底面は煙道底面より13cm低くなる。

No.2カマド 東壁の北半中央に施設された新カマドである。カマド構築の掘り方はなく、燃



焼部の火床はほぼ平坦で間口40cm、奥行50cmあり、袖はシルトを主体に用いて構築している。煙道は火床から若干上がり、幅40cm、深さ30cmで長さ106cmの溝状で東にのびるが、煙出しとの区別はない。



A-B C-D		
1	7.5YR 2/1	黒色土 1-7cmの円礫を多量に含む
2	"	" 1-3cmの円礫を若干含む
3	7.5YR17/1	" 遺物を若干含む
4	5.YR 3/1	黒褐色土 シルト若干含む
5	7.5YR 3/1	" シルト、焼土、小円礫若干、遺物多く含む
6	5.YR 2/1	" 焼土、炭を若干含む
7	7.5YR 3/1	" シルト若干含む
8	5.YR 3/1	" シルト若干含む
E-F G-H		
1	10YR 4/3	黄褐色シルト 黒色土混りで汚れている
2	10YR 2/2	黒褐色土
3	10YR 3/1	" シルト混合、焼土若干含む
4	10YR 2/2	" 焼土若干含む
5	10YR 3/2	" シルト混合、焼土若干
6	10YR 3/3	暗赤褐色焼土 黒色土、シルト混合
7	10YR 3/2	黒褐色土 焼土、シルト混合
8	5.YR 2/3	極暗赤褐色焼土 黒色土、シルト混合
9	10YR 2/2	黒褐色土 焼土若干
10	"	"
11	5.YR 4/2	灰褐色焼土 黒色土、3-7cmの円礫を含む、焼土は焼部で多、煙道部はシルト質土
12	7.5YR 4/2	灰褐色シルト 黒色土混入、焼土若干

I-J		
1a	5.YR 2/1	黒褐色土 粒状焼土若干
1b	5.YR 3/1	" 焼土若干
2	5.YR 3/2	暗赤褐色焼土 黒色土若干含む
3	10YR 2/2	黒褐色土 焼土若干含む
K-L		
1	7.5YR 2/1	黒色土
2	5.YR 4/8	赤褐色焼土
3	5.YR 2/1	黒褐色土 円礫を含む
M-N		
1	7.5YR 3/1	黒褐色土 シルト焼土若干含む

第67図 58号 (Tg12) 竪穴住居跡

(その他の施設) P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>がある。P<sub>1</sub>は径54cm×64cmの楕円で10cmの深さをもち、赤褐色焼土を主体にその上下層に黒色土の堆積土をもつ。P<sub>2</sub>は径35cm×50cmの楕円で深さ10cmを計り、焼土を含む黒色土を堆積土とし甕破片の細片を含む。これらの3ピットは、北東隅のP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>がNo.2カマド期の貯蔵穴で、堆積土が互層状のP<sub>1</sub>が先で、P<sub>2</sub>が後になると推察できる。南西隅のP<sub>3</sub>は、No.1カマド期の貯蔵穴とみられる。

#### 出土遺物 (第66—2図)

A類坏1点、双耳坏1点、鉄製品1点、計3点の図示。

No.1のA類は南東隅ピット内出土。反転復元に依るもので、推定口径13.4cm、同底径6.2cm、同器高4.1cmの大きさである。

No.2は須恵器の双耳坏。取手部分と体部の破片である。残存部下端に稜を呈す部分が僅かながらも有ることから台付の器種になるかもしれない。外面は取手下部より下端まで灰かぶりが見られるが、内面はロクロナデの素地がそのまま残る。灰色を呈すいわゆるA類の坏と同様の色調である。断面にみる胎土も器面と同色であり、やや石英細粒の混入が目立つ。

No.3は床面出土の鉄製品である。残存長4cmで方形の断面を呈す。角釘の類と思われる。

#### 59号(Tj21) 竪穴住居跡 (第68図 第49表 写真図版35・71)

(重複 改築) 他遺構との重複はない。カマドの改築があり、北壁に旧のNo.1カマド、南壁に新のNo.2カマドがある。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北3.8m、面積11.22m<sup>2</sup>の正方形を呈する。カマド方向軸はNo.1カマドでN-6°30'-E、No.2カマドでN-182°-Eである。

(堆積土) 2層・3層の黒色土と黒褐色土が主体となり、前者には小礫を含み後者にはシルトを少量含む、壁ぎわには混りの少ない黒色土の6層があり、概ね以上の三大別の堆積土になる。

(壁) 壁はほぼ垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは20cmである。No.2カマド部分を除く壁沿いに周溝があり、その底部に土留施設の杭跡と推察される小穴が認められる。

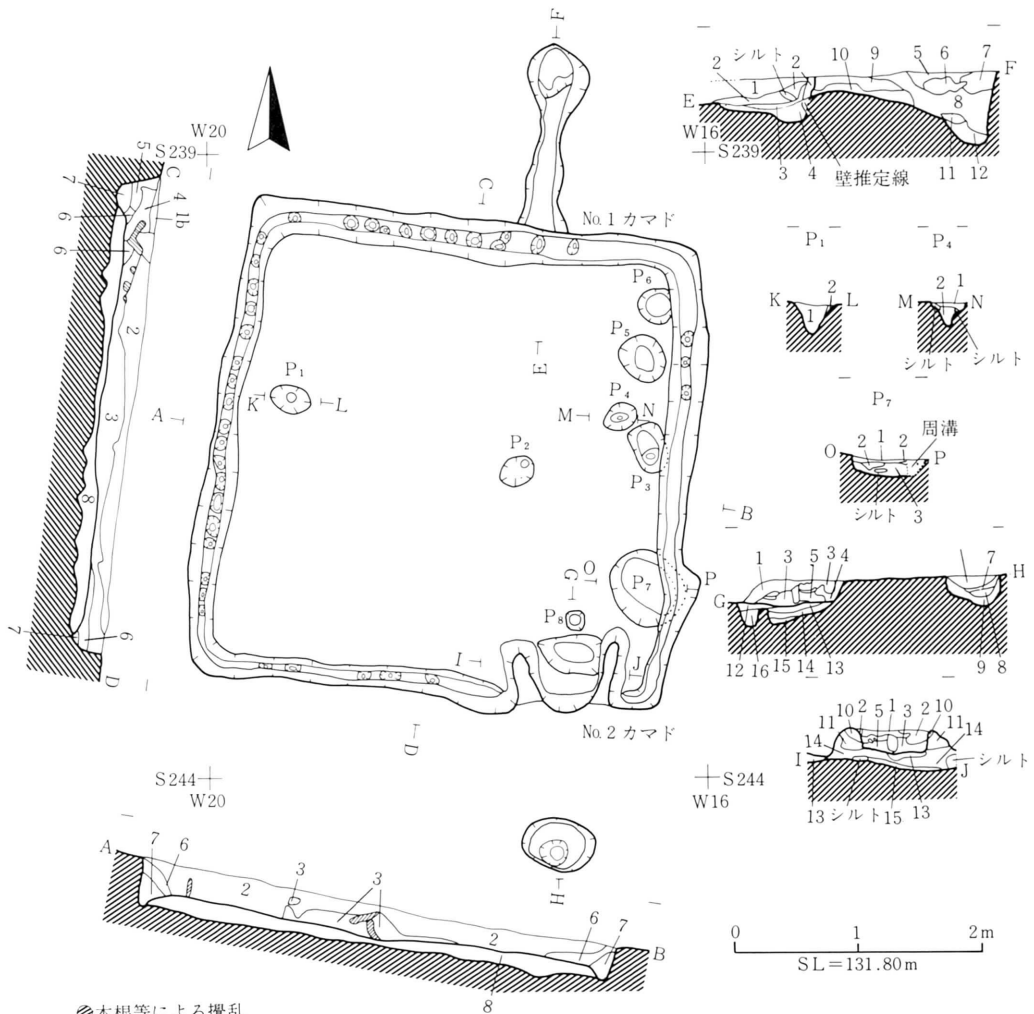
(床) 全面に掘り方をもち、シルトと黒色土の混土を用い構築したほぼ平坦な床面を呈する。

(柱穴) P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>の7ピットが柱穴状であるが、位置上から柱穴の可能性をもつのはP<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>である。それぞれ、西壁と東壁の midpoint 近くで壁から60cm～65cm内側にあつて対となり、2.7mの間をもつP<sub>1</sub>は径24cm×30cm、深さ24cm P<sub>4</sub>は径22cm×24cm、深さ20cmを計り、柱痕は確認できない。

(周溝) No.2カマド部分を除く各壁沿いにあり、幅15～20cm、深さ10cm内外を計る。底面には土留施設の杭痕とみられる径10cm内外で深さ5cmほどの小穴が検出され、西壁沿いでは特に

密に検出された。

(カマド) No.1カマド 北壁の東半中央に位置し、煙道、煙出しのみ残る。煙道底面は煙出しに向って傾斜し下がり幅15cm~35cm、深さ10cm~35cm、長さ100cmの溝状で、煙出しは径45



●木根等による攪乱

A-B C-D

1a	7.5YR 5/2 黒褐色土	毛根あり、シルト少量
1b	"	"
2	7.5YR 5/2 黒色土	毛根あり、小礫含む
3	7.5YR 5/2 黒褐色土	シルト少量含む
4	7.5YR 5/2 極暗褐色シルト	毛根とシルト含む
5	7.5YR 5/2 暗褐色シルト	黒色土を含む
6	7.5YR 5/2 黒色土	"
7	7.5YR 5/2 黒褐色土	シルトを含む

K-L

1	7.5YR 5/2 黒色土	シルト少量含む
2	7.5YR 5/2 黒褐色土	"

M-N

1	7.5YR 5/2 黒色土	焼土粒状に含む
2	7.5YR 5/2 極暗褐色土	"

E-F

1	7.5YR 5/2 黒褐色土	粒状焼土若干、炭を含む
2	7.5YR 5/2 黒色土	炭、焼土、シルトを粒状に含む
3	7.5YR 5/2 黒褐色焼土	黒色土まじり、土器片含む
4	7.5YR 5/2 黒色土	シルト粒状に含む
5	7.5YR 5/2 黒褐色土	毛根、焼土少量含む
6	7.5YR 5/2 黒色土	毛根あり
7	7.5YR 5/2 黒褐色土	毛根あり、シルトをブロック状に含む
8	7.5YR 5/2 極暗褐色土	焼土粒状に含む
9	7.5YR 5/2 暗褐色焼土	炭、粒状のシルト含む
10	7.5YR 5/2 黒褐色シルト	焼土粒状に含む
11	7.5YR 1.7/1 黒色土	焼土を含む
12	7.5YR 5/2 暗褐色土	"

O-P

1	7.5YR 5/2 黒褐色土	炭と粒状に焼土を含む、土器片あり
2	7.5YR 5/2 "	シルト、焼土を少量、土器片あり
3	7.5YR 5/2 極暗褐色土	焼土、炭を点状に含む

G-H I-J

1	10YR 5/2 黒色土	焼土、シルト粒状に含む、土器片あり
2	10YR 5/2 褐色焼土	焼土ブロック、黒色土を含む
3	7.5YR 5/2 暗褐色焼土	焼土ブロック状に含む、土器片あり
4	7.5YR 5/2 極暗褐色土	炭と焼土含む
5	10YR 5/2 暗褐色シルト	"
6	7.5YR 1.7/1 黒色土	焼土、炭を含む
7	7.5YR 5/2 "	シルト、焼土、炭若干含む
8	7.5YR 1.7/1 "	焼土若干
9	"	シルト若干
10	7.5YR 5/2 褐色シルト	焼土を含む
11	"	焼土少量含む
12	7.5YR 5/2 黒色土	炭、粒状の焼土、シルトを含む
13	5YR 5/2 黒褐色土	シルト混入
14	7.5YR 5/2 "	シルト含む
15	7.5YR 5/2 "	"

第68-1図 59号(TJ21) 竪穴住居跡

cm×50cm、深さ55cmを計る。

No.2 カマド 南壁東端に位置し、燃焼部は掘り方もち、火床は間口45cm、奥行50cmほどであり、袖はシルトを主体に用い構築している。煙道は認められず、燃焼部の南約100cmに径40cm×50cm、深さ20cmのピットがあり、位置的に煙出しの可能性もある。漆紙の出土をみた。

(その他の施設) No.2 カマドの左袖北に、壁に接してP<sub>7</sub>がある。径55cm×60cm、深さ14cm、焼土と炭を粒状に含む黒褐色土と極暗褐色土を堆積土とし、甕の破片を含む。貯蔵穴の可能性はある。

出土遺物 (68-2・3 図 第49表)

坏形土器 4点、須恵器蓋 1点、甕形土器 5点(拓影図1)、鉢形土器 1点、鉄製品 2点、砥石 1点、計14点の実測。

坏形土器は回転糸切に依る切離しのものが多く、他に同種の底部片が床面に散在する。ただし、C類は1点もみられない。

甕はロクロ成形のみ図示しているが、破片としては木葉底部片・内外面刷毛目を有す土器片等が少量ながらも床面にみられる。また、底径7.3cm大の土師器でヘラ切痕を有すものもある。

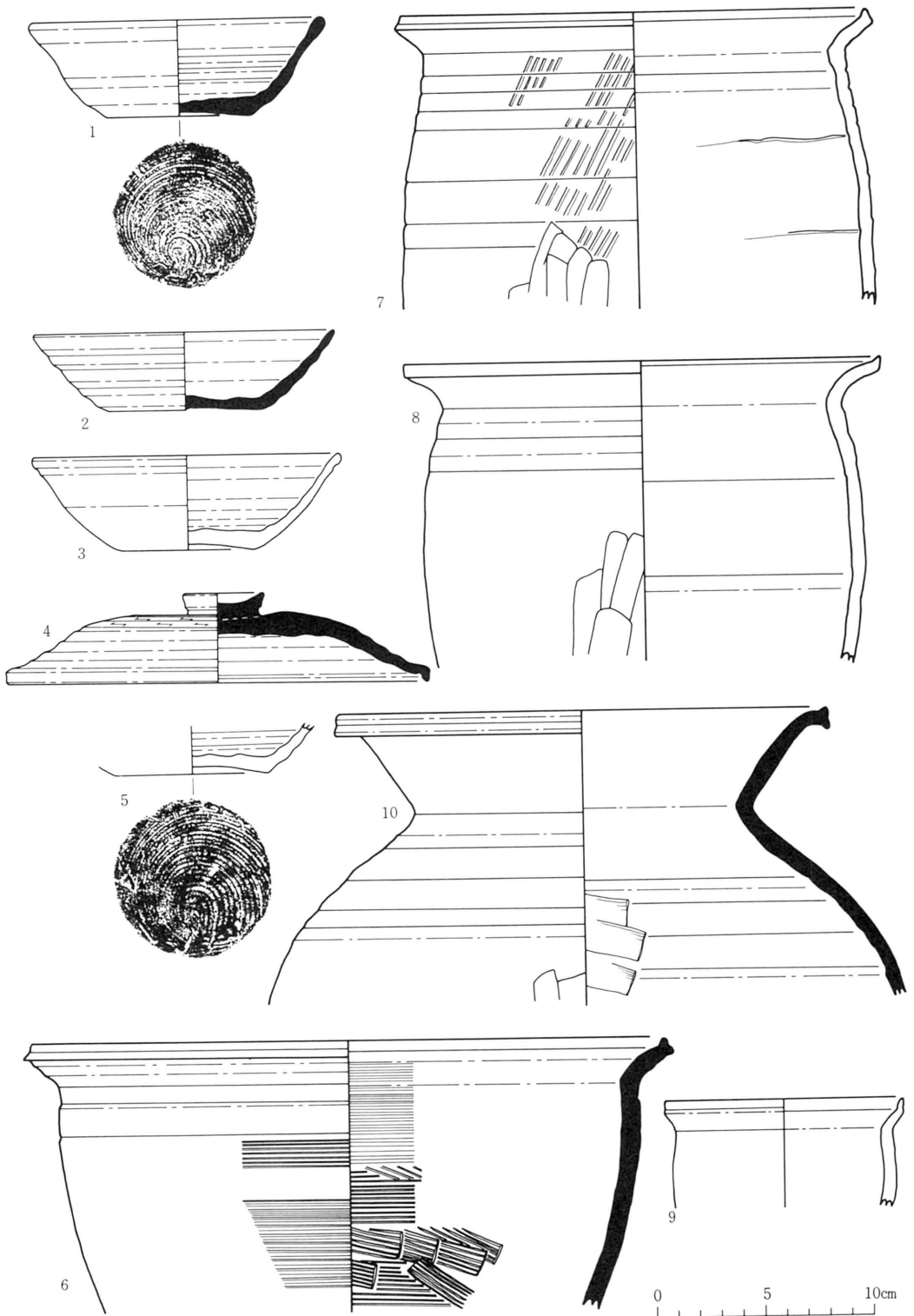
No.6 は須恵器の鉢形土器。推定口径約30cm大。外面のロクロナデは一部に木口も利用されている。内面の体部は横・斜位の調整が交錯する。一見して刷毛目様でもあるが、木口利用のナ

第49-1表 坏形土器 一覧

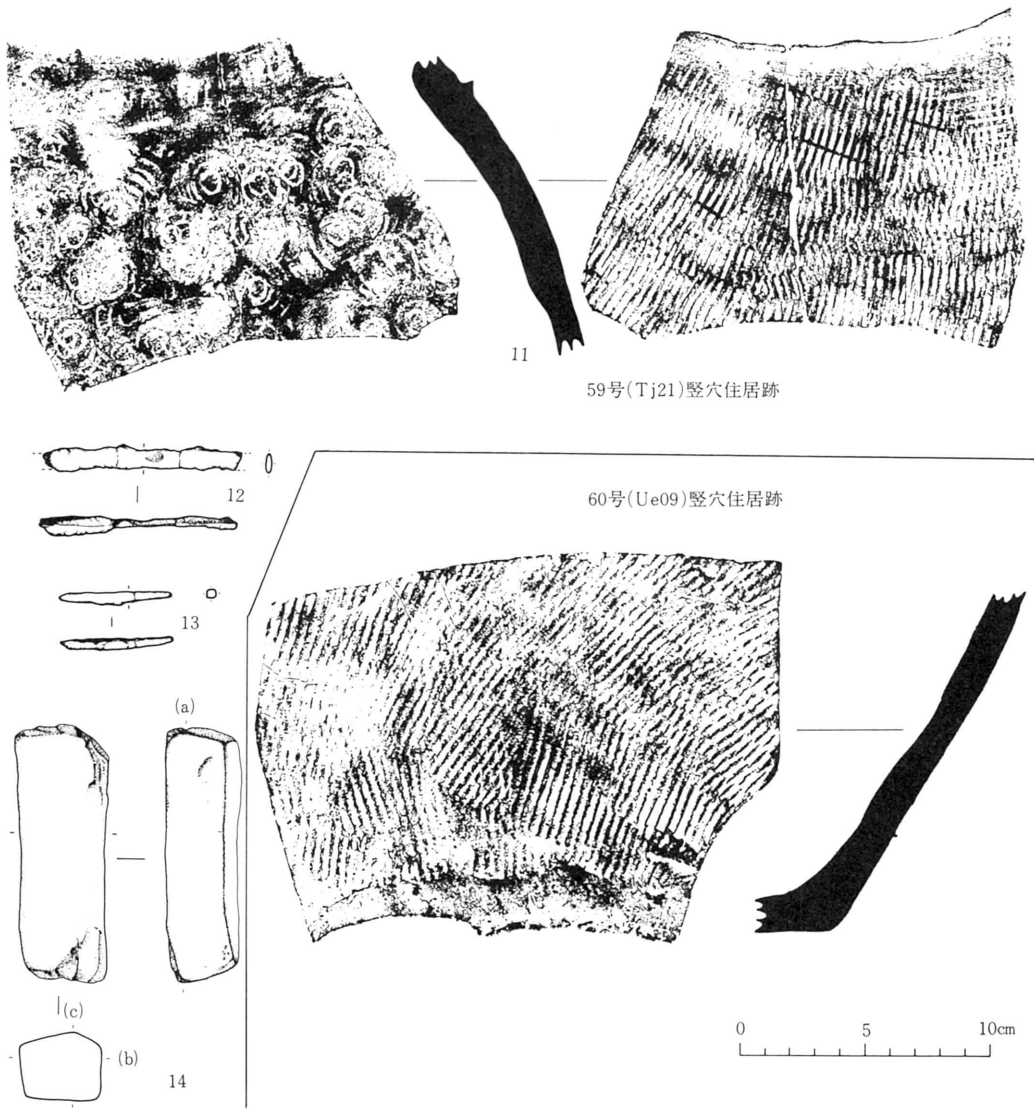
実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(θ°)	備 考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	213	A 類	回転糸切	無調整		(13.2)	6.6	4.5	2.0	2.9	53	(床面)
2	—	A 類	ヘラ切	無調整		(13.8)	7.0	3.6	2.0	3.8	46.5	内面に付着物あり。(P; 堆積土)
3	—	B 類	回転糸切	無調整		(14.0)	6.0	4.3	2.3	3.3	47	一部(底部内面)青灰色でA類的。
4	—	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	19.4	(フマミ径) 3.8	(フマミ高) 4.2 1.1				B類的色調(10YR 5/2 黄橙)。(床面)
5	—	B 類	回転糸切	無調整		—	7.2	—	—	—	—	(堆積土)

第49-2表 甕形土器 一覧

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口径	底径	器高	最大脷径	口縁部	体部	口縁部	体部	
7	—	土師器	(22.0)	—	—	—	ロクロナデ	叩目 + ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ?	反転復元。輪積み。(南カマド内)
8	—	土師器	(22.0)	—	—	—	ロクロナデ	ヘラケズリ	不 明	不 明	体部に凹部分あり。煤付着。反転復元。
9	—	土師器	(11.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。小型甕。
10	—	須恵器	(23.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	一部ヘラナデ	反転復元。(床面)
11	—	須恵器	拓影図。外面平行叩目、一部格子目。内面竹管様の押圧痕。頸部付近は平行叩目。(床面)								



第68—2图 59号(Tj21)竖穴住居跡出土遺物



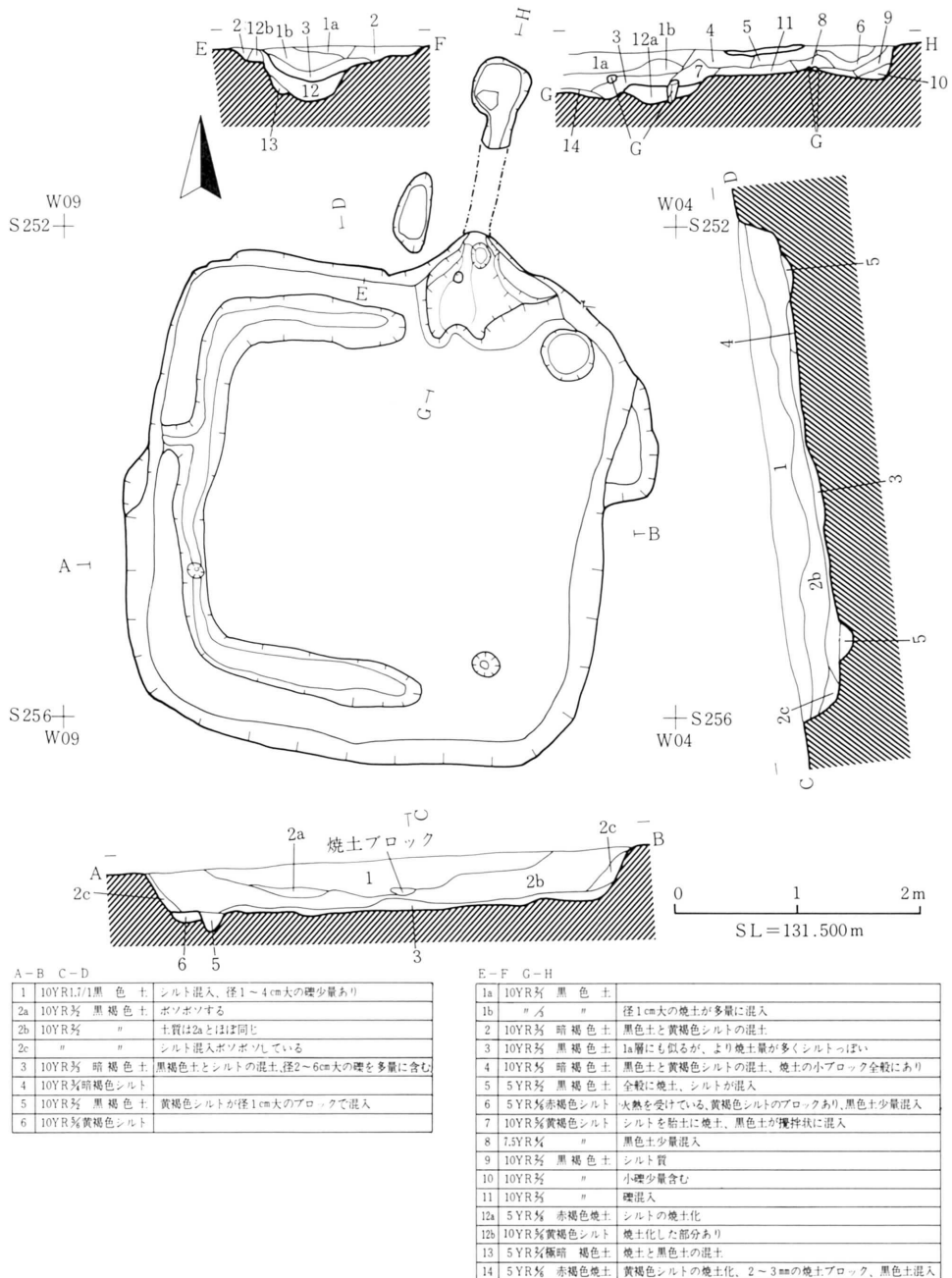
第68—3図 59号(Tj21)・60号(Ue09)竪穴住居跡出土遺物

デである。灰色を呈す硬質の仕上がりである。

No14は床面出土の砥石。白色細粒凝灰岩。灰白色を呈す軟質な素材である。5面に使用痕が観察される。10×3.4×2.9cm辺長の直方体に近い形状。

60号 (Ue09) 竪穴住居跡 (第68—3・69図 写真図版35)

(重複 増改築) 増改築の可能性としては、床面西半に検出された匚状溝が、旧平面の壁関連施設である場合の拡張がある。しかし、匚状溝の西壁沿いに中半で西壁方向に走る短い溝があり、壁関連施設と異なる溝とも言えるが、現状では増改築を断定できる積極的要素はない。



第69図 60号 (Ue09) 竪穴住居跡

(規模 平面形 方向) 東西3.9m、南北4m、面積12.95m<sup>2</sup>のほぼ正方形の竪穴住居跡であり、カマド方向軸はN-12°-Eである。

(堆積土) 上から1層の黒色土、2層の黒褐色土があって堆積土の主体をなし、床面上に3層のシルトと黒褐色土の混土で多量の礫を含む層がある。

(壁) 直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは30cm~40cmある。北壁の北半部に外への張り出し様部分を認めるが、意図的構築か壁の一部崩壊か明確にできなかった。

(床) 北半は黄褐色シルト、南半は黒褐色土のいずれも礫を多量に含む地山面をそのまま利用した床面である。床面西半には匚状溝を認めたが詳細は後述する。この溝の外側、すなわち、北壁西半から西壁と南壁西半沿いに、幅約30cm、厚さ約10cmの黄褐色シルトが貼りめぐらされている。

(柱穴) 南東隅近くに径20cm、深さ38cmほどの柱穴状ピットを検出したが、柱穴としての確証はない。

(周溝) いわゆる一般的な周溝とは異なる。床面西半に北壁西半から西壁および南壁西半にかけて、各壁から20cm~35cmほど内側に匚状に走る溝で、西壁沿い中央に壁に向う短かい突出部がある。溝幅は18cm~35cm、深さ7cm~15cm程の規模で内部施設はなく、黒褐色土に黄褐色シルトをブロック状に含む堆積土をもつ。

(カマド) 北壁の中央寄り東半にあって、構築は燃焼部の一部を壁外に張り出し、掘り方にシルトを叩き込み火床面としており支脚石も認められ、掘り方埋土は火熱により焼土化していた。側壁は張り出し部分では地山を利用しているが、内側に連続したとみられる袖の遺存は明瞭でない。煙道は燃焼部から若干立ち上がり、ほぼ水平にのびる径20cm、長さ100cmのくり抜きで、先端に径45cmの円形で検出面から28cmの深さをもつ煙出しがある。

(その他の施設) 北東隅に径43cm、深さ8cm規模の皿状のピットが認められ、堆積土は上に黒褐色土、下に焼土を多量に含んだシルトをもつ。位置的に貯蔵穴の可能性はある。

なお、住居跡外、煙道の西側に径28cm×60cmの楕円形で深さ30cmほどの、黒色土と黒褐色土を堆積土にもつピットを検出したが、住居跡との関連や性格は不明である。

#### 出土遺物 (第68-3図)

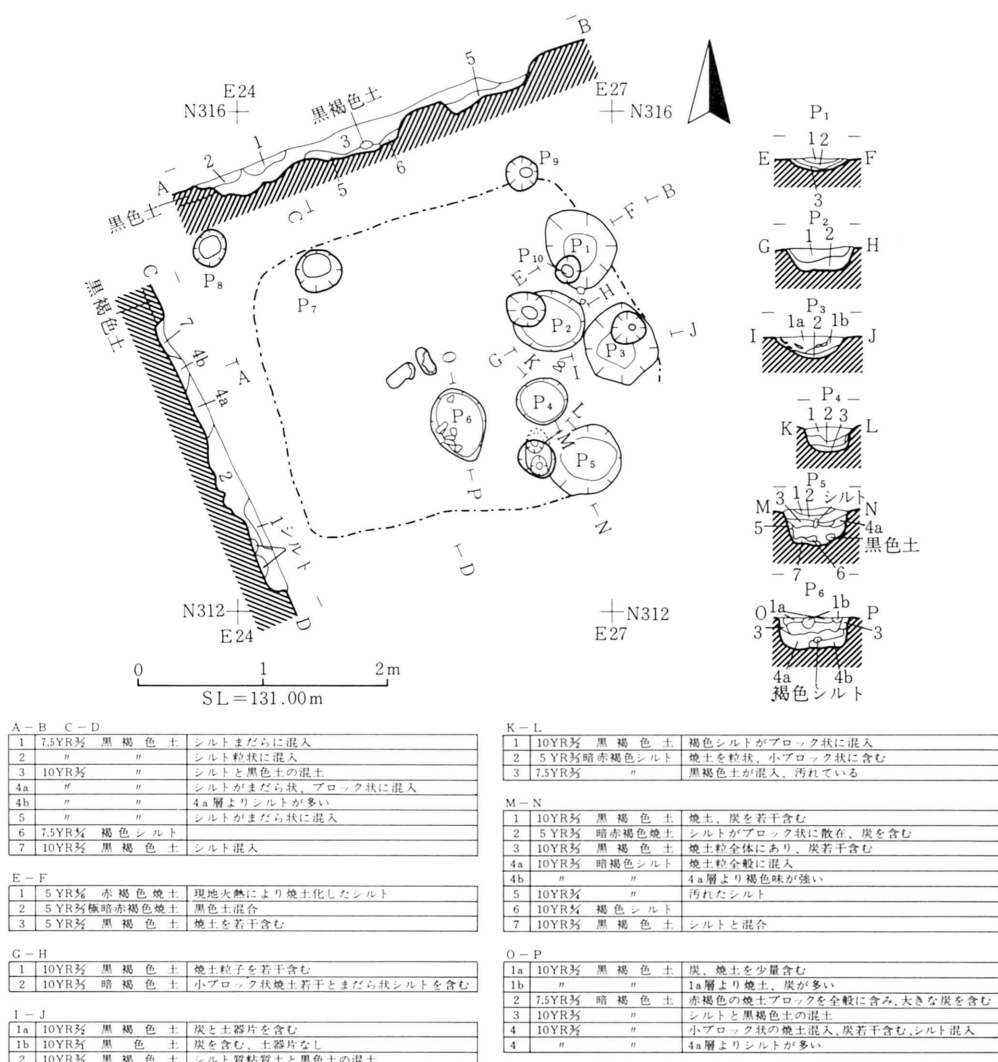
出土遺物は少なく、図示したのは須恵器拓影図1点のみである。大甕の体部下端片であり、僅かに残る底部は平底を呈している。外面には平行・格子の叩目があり、下端から底部にかけては不定方向のヘラナデが加えられる。また、内面はやはり不定方向のヘラナデが施されるが、かなり雑なため輪積み痕を残したままである。内面にかけては多量の煤が付着しており、出土地点が煙出し内であることからカマド施設に関わる材として転用されたものと推される。



他に床面から須恵器蓋、大甕の体部下端～底部片、長胴甕体部、土師器甕等の破片が出土している。大甕片は外面へラ削り、内面カキ目のもので、図示したそれとは別個体のものである。また、堆積土中からはC類糸切底部片・A類細片が、カマドから非ロクロ土師器片・ロクロ土師器片や支脚に利用した石等がみられる。

61号 (Be71) 竪穴住居跡 (第70図 第50表 写真図版36・71)

(重複 改築) 削平のため、竪穴住居跡の床面と掘り方および付設された貯蔵穴様ピットが遺存したものと推察し、竪穴住居跡としたものである。カマド燃焼部と推察されるP<sub>1</sub>、貯蔵穴様のP<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>を、柱穴状のP<sub>10</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>12</sub>が切っており、同類のP<sub>7</sub>～P<sub>9</sub>を含め、柱穴状の小ピット



第70-1図 61号 (Be71) 竪穴住居跡

トは本住居跡より新しいと考えられP<sub>9</sub>—P<sub>11</sub>—P<sub>12</sub>は1.1m—1.2mの間をもち一線上に乗るが建物等にはならない。

(規模 平面形 方向) 東西3m、南北2.5m、面積7.5m<sup>2</sup>ほどと推定され、東西に長い長方形で、P<sub>1</sub>をカマド燃焼部としたとき、カマド方向軸はN—76°—Eとみられる。

(堆積土) 削平によって遺存しない。

(壁) 削平のため遺存なし。

(床) 全面掘り方をもつと推察され、北半では黒褐色土、南半ではシルト面を掘り込み、シルト混合の黒褐色土を用い構築した平坦な床面で、南東部に土器片を多く検出した。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半に位置したと推察される。すなわち、P<sub>1</sub>は約10cmの掘り込みで2層は現地で火熱をうけた焼土であり、カマド燃焼部の残痕の可能性はある。

(その他の施設) P<sub>2</sub>—P<sub>6</sub>の貯蔵穴様のピットが検出された。いずれも堆積土には焼土や炭を含み、土器片をもつ。径40cm—50cm、深さ15cm—40cm規模を計る。

#### 出土遺物 (第70—2図 第50表)

土器は土師器のみ6点、他に鉄製品2点、計8点の図示。坏形土器はA・B・D類の体部破片が少量出土している程度。また、住居跡内北側には須恵器台付の破片が1点出土している。なお、本遺構からは球胴を呈する非ロクロ土師器が目立ち、相対的にロクロ成形量が少ない。

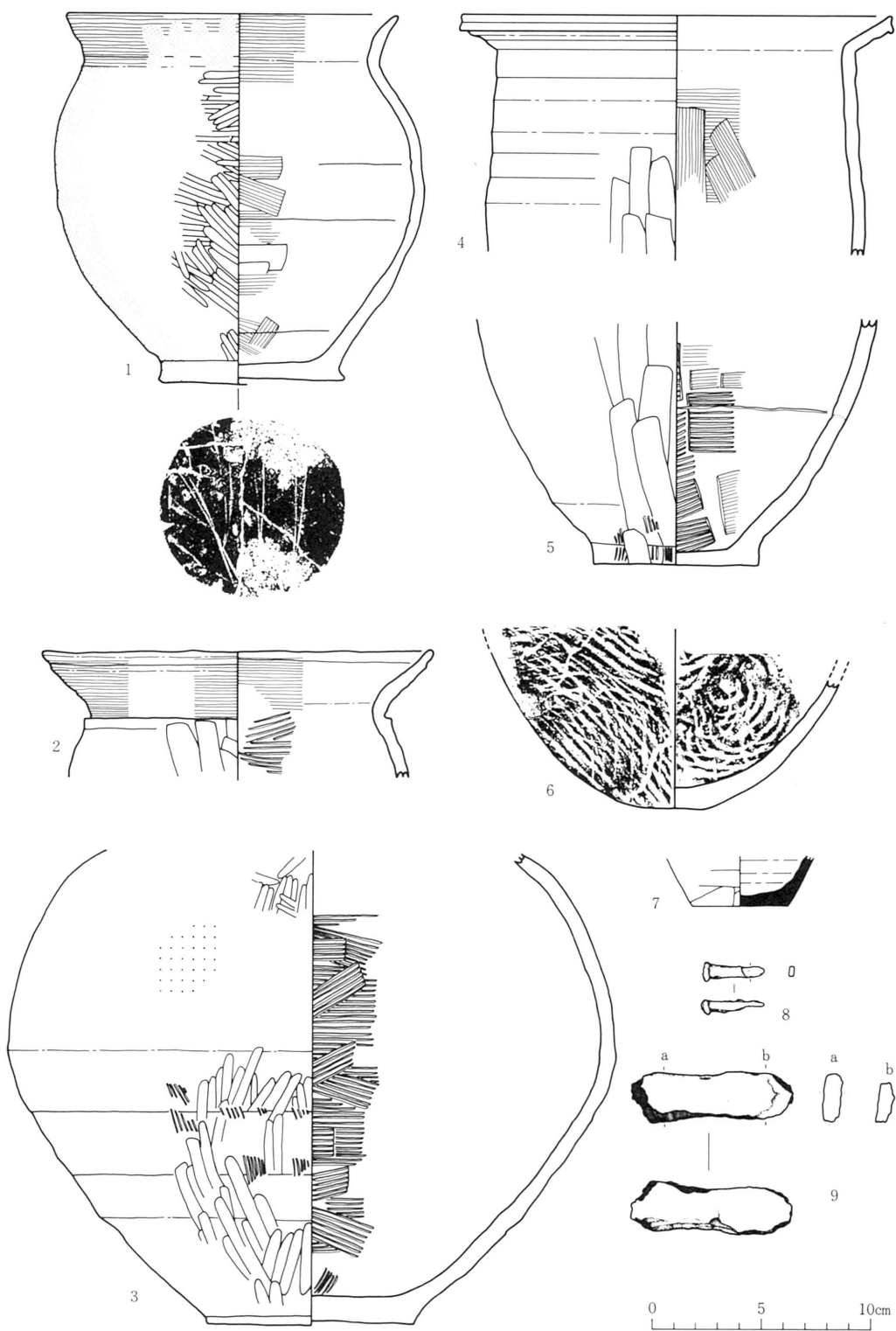
特異な遺物としてNo.6がある。焼土ピットからの出土。須恵器の製作技法を有す酸化焰焼成の土器。外面は叩目、内面には青海波状の押圧痕が残る。丸底を呈す壺形に近い器種が想定される。また、No.1は赤色塗彩が施される甕である。外面の体部と頸部に塗られている。頸部のそれは28本確認されるが、方向は必ずしも一定しない。No.3にも赤色塗彩の痕跡らしきものがあるが、断定はしない。

鉄製品は4点出土している。図示したのはそのうちの2点である。No.7は7.2×2.1×0.8cm大

第50表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大胴径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
1	214	土師器	15.3	8.6	17.0	17.0	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ	木葉底。球胴形。赤色塗彩あり。(床面)
2	—	土師器	(18.0)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	刷毛目	非ロクロ、肩部有段。口唇下に沈線。
3	—	土師器	—	9.5	—	28.0	—	刷毛目+ヘラミガキ	—	刷毛目	多量の煤付着。底外面ミガキ。黒斑あり。
4	—	土師器	(19.9)	—	—	(17.4)	ロクロナデ	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	反転復元。煤付着。(床面)
5	—	土師器	—	7.7	—	—	—	刷毛目+ヘラケズリ	—	ヘラナデ+刷毛目	輪積み。底外面ヘラケズリ。(堆積土)

(No.6は省略)



第70—2图 61号(Be71)竖穴住居跡出土遺物

熱痕が認められ、袖は遺存せず、煙道の一部分が残る。

(その他の施設) 現状では不明である。

### 62号 (Na68) 竪穴住居跡 (第71図)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 削平のためか極めて遺存状況が悪く、西半はほとんど遺存しない。現存の東西は1.1m、南北2mであり、方形の平面を想定できるが全容は不明である。カマド方向軸はN-85°-Eである。

(堆積土) 若干の焼土ブロックと炭を含む黒褐色土が上を覆い、カマド部分に暗褐色焼土と黒褐色土に焼土、炭の混合土がある。

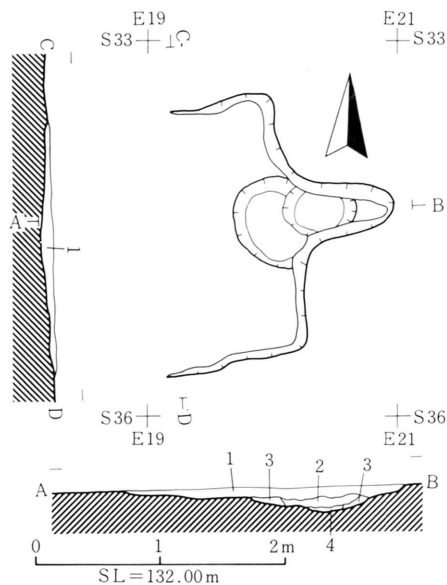
(壁) 東壁で比較的直に近い立ち上がりを見るが、大半は明瞭でない。検出面までの高さは10cm内外を計る。

(床) 全貌は不明であるが、地山シルトをそのまま利用したものと想定される。

(柱穴) 現状では不明である。

(周溝) 現状では不明である。

(カマド) 東壁中央に位置、焼焼部は壁外に出若干の掘りこみをもち、地山面の火床には火



1. 7.5YR<sub>2/1</sub> 黒褐色土 焼土ブロック炭若干あり、
2. 5 YR<sub>2/1</sub> 暗褐色焼土
3. 5 YR<sub>2/1</sub> 黒褐色土 焼土炭混合
4. 7.5YR<sub>2/1</sub> 極暗褐色シルト 若干の加熱あり、

第71—1図 62号 (Na68) 竪穴住居跡



第71—2図 62号(Na68)竪穴住居跡出土遺物

熱痕が認められ、袖は遺存せず、煙道の一部分が残る。

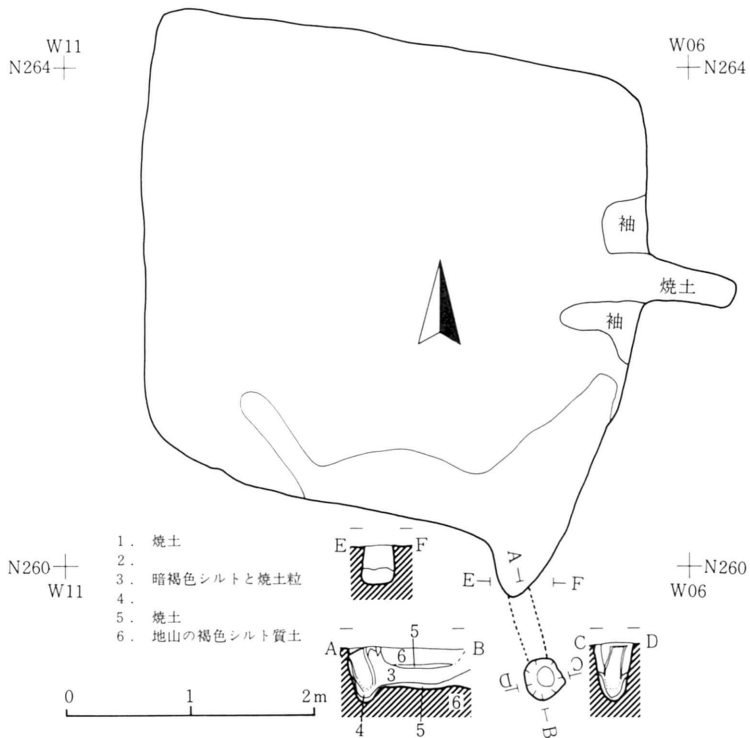
(その他の施設) 現状では不明である。

出土遺物 (第71—2図)

A類1点、鉄製品1点を図示した。No.1のA類は反転復元による。計測値は何れも推定によるもので口径13.2cm、底径7.6cm、器高3.8cmである。切離しは回転糸切で、再調整はみられない。No.2は、鍔身部がはっきりしない。全長10.6cmで、茎尻部が細くなっている。

67号(Dc12)竪穴住居跡 (第72図)

破壊される南東隅カマドの煙道、煙出し部のみ精査した。竪穴住居跡は検出面の平面観察で



第72図 67号(Dc12)竪穴住居跡

は重複は認められず、東西4m、南北3.75m規模で、南東隅カマドの他に東カマドがある。

南東隅カマドの煙道は長さ約50cm、径20cmのくりぬきで、先端に径30cm内外の円形平面で深さ45cmの煙出しがあり、長胴甕（第79図）が縦位に設置されていた。煙道の周壁と煙出し底部から側壁の一部は火熱による焼け方が著しい。

なお、出土遺物については、後述する「未精査遺構出土遺物」の項を参照して頂きたい。

## (2) 竪 穴

### 1号 (Ka50) 竪穴 （第33—1図… P113 写真図版18）

（重複 改築） 24号竪穴住居跡に西壁を切られる、北西および南西隅は確認でき、西壁の中央部分で重複する。

（規模 平面形 方向） 東西2.4m、南北2.2mで4.5㎡のほぼ正方形の平面形をもち、南北方向軸は真北を向く。

（堆積土） 黄褐色シルトの混入した黒褐色土のみの単層である。

（壁） やや外傾ぎみで、検出面まで10cm～15cmの高さをもつ。

（床） 若干の凹凸をみるが、地山をそのまま利用した床面である。

（柱穴） 認められない。

（周溝） 認められない。

（その他の施設） 南壁中央付近にP<sub>1</sub>があり、径50cm×45cmの円形で約10cmの深さをもつ、性格は不明である。北壁中央付近に径20cm程度で円形範囲の現地性焼土があり、床面に弱い火熱をうける。

### 2号 (La06) （第38—1図… P127 写真図版21）

（重複 改築） 東半部を29号竪穴住居跡によって切られる。

（規模 平面形 方向） 東西4.7m、南北3.7m、面積15.13㎡が推定され、東西に長い長方形を呈し、規模と平面形が29号竪穴住居跡と類似する。南北方向軸は真北からやや西に傾く。

（堆積土） シルト混りの黒褐色土の単層でシルトがブロック状に混入し人為的可能性が強く、いわゆる床面構築土となる可能性が強い。

（壁） 外傾する立ちで、検出面まで10cmほどを計る。南壁の3分2以上は攪乱破壊をうける。

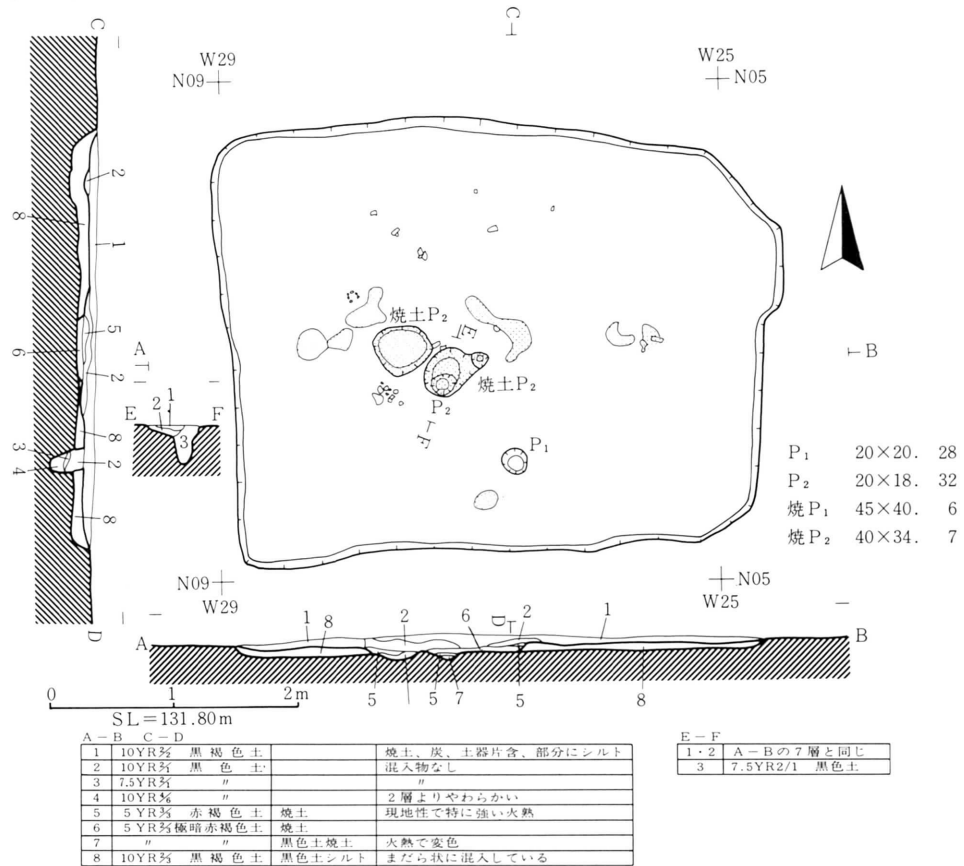
（床） 堆積土の項で述べた黒褐色土下は、凹凸のある黄褐色シルト面であり、生活面を認めず、堆積土上面にも生活面の形成はない。したがって、現状では床面とし得るものは認め難い。

（柱穴） 認められない。

（周溝） 認められない。

(その他の施設) 認められない。

(出土遺物) なし



第73-1図 3号(Lh30)竪穴

### 3号 (Lh30) 竪穴 (第73図)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西4.2m、南北3.5m、面積13.53㎡の東西に長い長方形を呈する。長軸方向は真北に対してほぼ90°東を向く。

(堆積土) 削平のため現存する堆積土は5cm~10cmと薄い。主体は焼土と炭を含む黒褐色土で、部分的に混入物のない黒色土がある。

(壁) 削平でほとんど遺存しない。床面から大きく外傾する立ち上がりでわずかに痕跡を残すのみで、検出面まで5cm内外を計る。東壁北半の一部に張り出しをみるが特別な施設はない。

(床) 全面に掘り方をもち、黒色土とシルトの混合土を用い構築したほぼ平坦な床面である。

(柱穴) P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の柱穴状のピットを認めるが、柱穴としての確証はない。P<sub>1</sub>は径20cm×20cm、深さ28cm、P<sub>2</sub>は径18cm×20cm、深さ32cmを計る。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 床面中央の西寄りに現地性の焼土をもつ焼土P<sub>1</sub>と焼土P<sub>2</sub>があり、焼土P<sub>1</sub>は40cm×45cm、焼土P<sub>2</sub>は34cm×40cmの円もしくは楕円状の範囲を、それぞれ6cm～7cm程度掘りくぼめており、火熱による赤変部分が認められることから地床炉の可能性もあり、周辺には焼土の散布が顕著である。

#### 出土遺物 (第73-2図No.1～5)

A類坏2点、甕形土器1点、鉄製品2点を図示。他に破片として床面からC類体部片とB類の糸切底部片が出土している。また、堆積土内からは須恵器蓋の破片が2個体分、ロクロ・非ロクロ各様の土師器片若干等が出土している。非ロクロ片の中には球胴形で木葉底のものもある。

No.1のA類坏は、床面出土と堆積土上層出土の破片が接合されたものである。口径13.7、底径7.2、器高3.9cm。ヘラ切無調整で胎土・焼成良好の坏である。内面は灰オリーブ、外面は灰黄色を呈す。No.2は、口縁部破片の反転復元資料である。床面出土で、口径が11cm強に推定される。胎土は精良で、焼成も良好である。色調は灰色。No.3は床面出土。非ロクロ成形。推定口径は18.3cm大。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面には刷毛目が施される。輪積み成形で凹凸痕がそのまま残る。また外面には黒変部分がある。

鉄製品は盛土中より3点出土しているが、何れも器種は不明。但し、図示したNo.4は紡錘車が変形したものかもしれない。

#### 4号(Mc24) 竪穴 (第73-2・74図)

(重複 改築) 西壁が現代の用水路によって切られる。

(規模 平面形 方向) 東西1.50m、南北2.3m、面積3.45m<sup>2</sup>、南北に長い良方形を呈し、長軸方向は真北に対しやや東に偏する。

(堆積土) 大概二層になるが、そのうち、南半はほとんど攪乱土の1<sub>a</sub>～1<sub>c</sub>層となり、北半の2層黒色土は攪乱のない堆積土である。

(壁) 東壁上端の大半は現代の溝により破壊、立ち上がりは外傾し検出面までの高さは10cm～15cmを計る。

(床) 東半に掘り方が認められ、黒色土とシルトの攪拌土を用いて床面を構築している。床面北半に投棄焼土が認められた。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

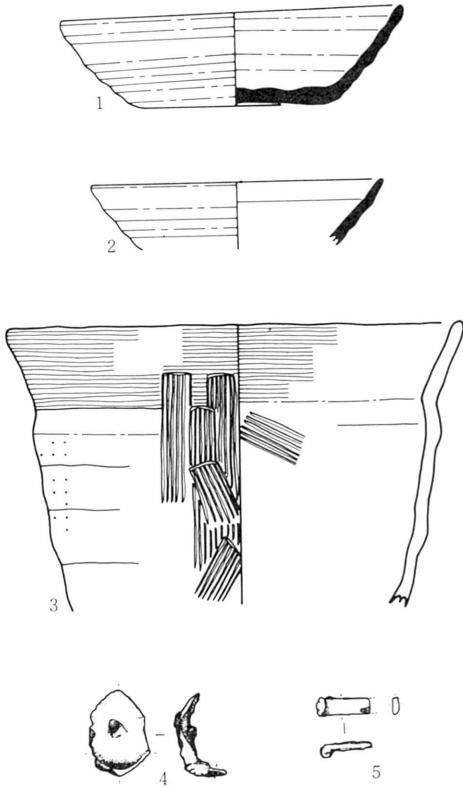
(その他の施設) 認められない。

#### 出土遺物 (第73-2図No.6・7)

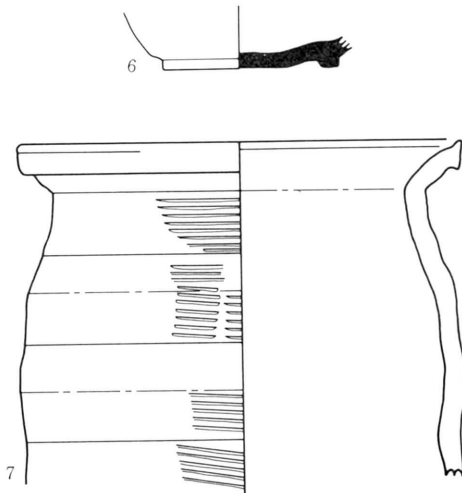
台付坏(須恵器)片と土師器甕のみの出土。



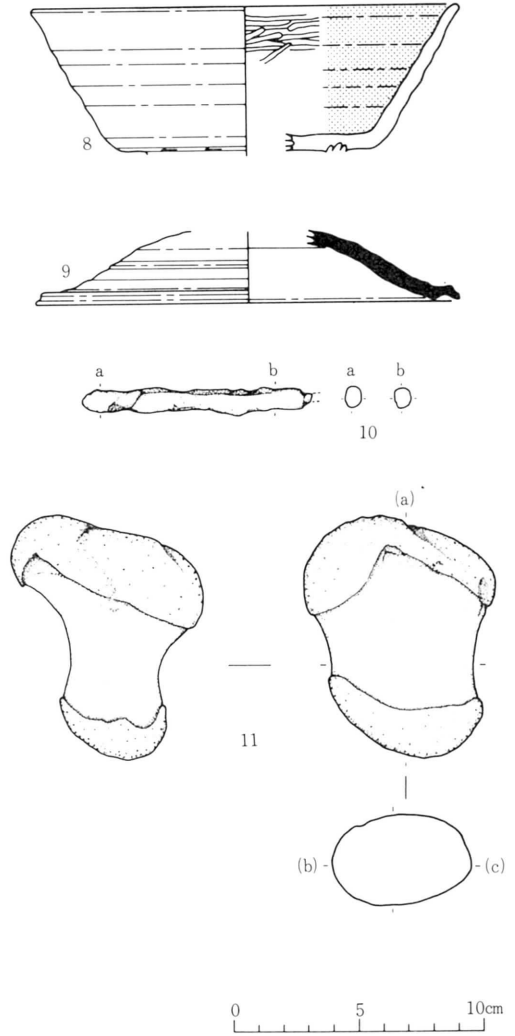
3号(Lh30)竖穴状遺構



4号(Mc24)竖穴状遺構



5号(Mb27)竖穴状遺構



第73—2图 3号(Lh30)·4号(Mc24)·5号(Mb27)竖穴出土遺物

No.6 は堆積土中からの出土。脚部は幅の割には低く、付高台によるものである。一部に自然釉がかかる。脚径7.1cmの大きさ。

No.7 は出土不明。ロクロ成形による土師器で口径17.7cm、頸部の起上りがやや不自然である。外面体部には横位方向の叩目を加えられる。

#### 5号 (Mb27) (第73—2・74図)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北3m、東西に長い長方形を呈し東壁南半で若干外に張り出す。長軸方向は真北に対しほぼ90°東を向く。

(堆積土) 単層で、黒色土とシルトの混合した暗褐色土に褐色シルトのブロックを含んでおり、木根による攪乱が大部分に及び黒色土の木根跡が多い。

(壁) 緩やかに外傾する立ち上がりで、検出面までの壁高は約8cmである。

(床) 一部に掘り方が認められ、黒色土とシルトの攪拌土を用い床面を構築しており、他は地山シルト面をそのまま利用している。床面には木根による攪乱が全体にわたっていた。中央に極少の焼土と炭をみたが、火熱による赤変は認められない。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 認められない。

#### 出土遺物 (第73—2 図No.8～11)

No.8 は脚部の欠落した高台坏。堆積土中からの出土。外面底部の脚部外側に回転ヘラ削りが加えられている。C類の範疇にも係るもので、内黒・ヘラミガキに依る調整で仕上げられる。但し、体部の起上りは須恵器の高台付坏にみられるタイプのものに酷似している。推定口径17cm位。

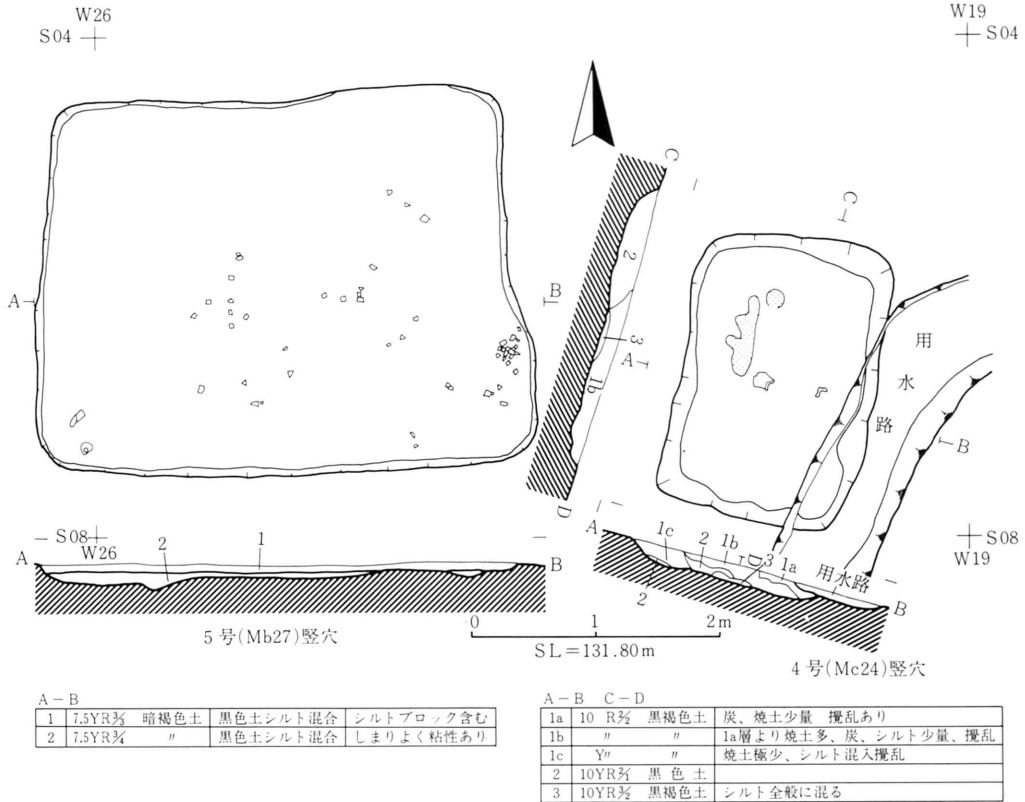
No.9 は堆積土内出土の須恵器蓋片。下端に自然釉がかかっている。推定口径17cm。

No.10 は堆積土内出土の鉄製品。一部欠失しているが全長9.1cmで、断面は円形を呈す。但し、錆部分が多く本来の形状はこの限りではない。右端部に突出した形で残る部分が本体であるかもしれない。

No.11 は両輝石安山岩熔岩塊を素材とする石製品である。中央部を研磨して、両端の自然面をそのまま残している。用途は不明であるが、陽物石製品の類であると思われる。出土層位は不明。

#### 6号 (Na27) 竪穴 (第75図 第51表 写真図版26・72)

(重複 改築) 認められない。



第74図 4号(Mc24)・5号(Mb27)竪穴

(規模 平面形 方向) 東西6.2m、南北4.8m、面積25.20m<sup>2</sup>、東西に長くやや歪んだ長方形を呈し、長軸方向は真北に対しほぼ90°東を向く。

(堆積土) ほぼレンズ状の堆積をなし、1層黒褐色土は土器片と焼土小ブロックを含み中央部に皿状に、2層黒色土は全域に、3層の黒褐色シルト質土、4層黒色シルト質土は周囲壁沿いに、それぞれ堆積する。

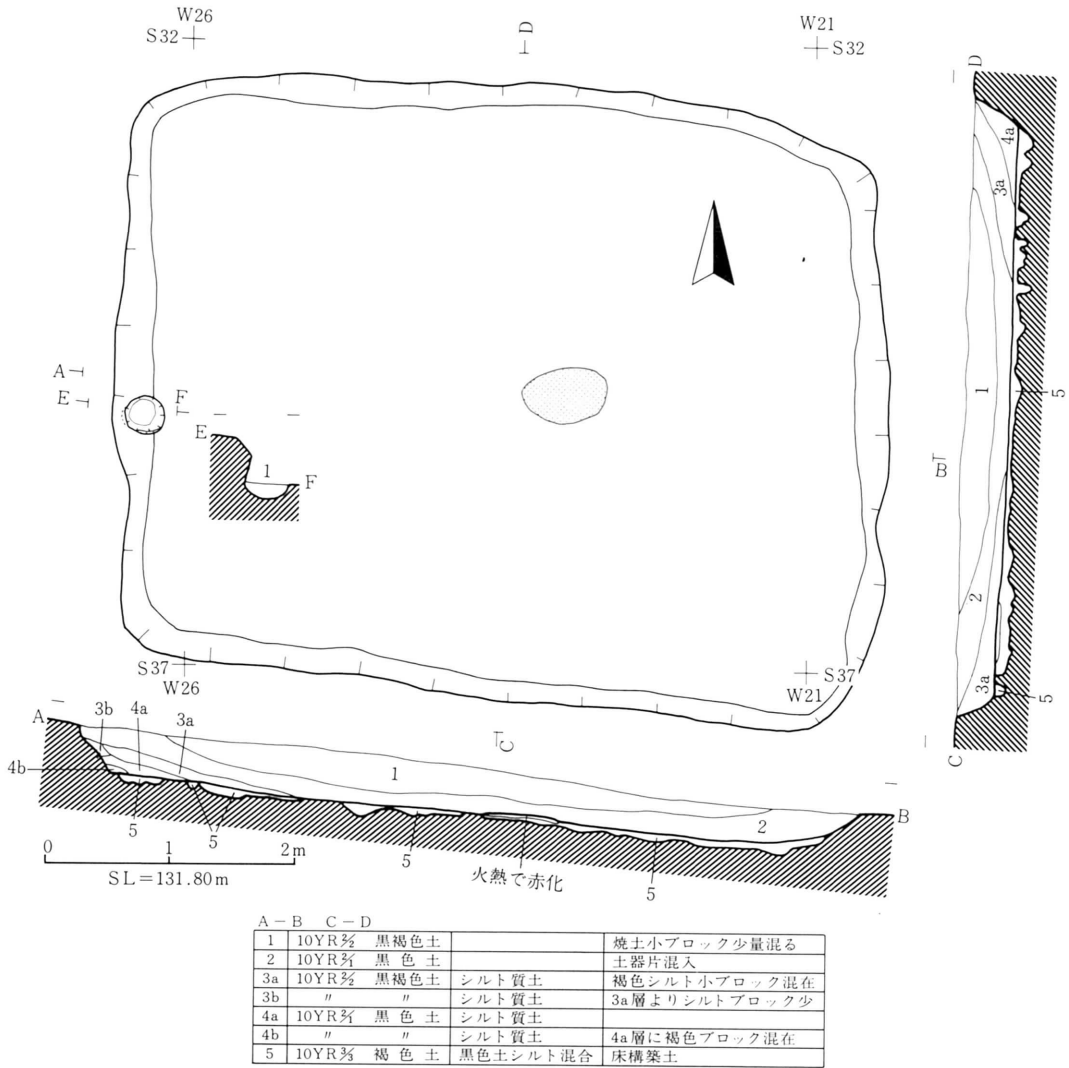
(壁) 外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは30cm～35cmほどを計る。

(床) 全面に掘り方をもち、黒色土とシルトの混土を用いて構築したほぼ平坦な床面で、固くしまっているが、壁沿にやわらかい部分がある。

(柱穴) 西壁中央近くに、径30cm×30cm床面から10cmの深さの柱穴状ピットを検出したが、柱穴としての確証はない。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 床面中央やや東寄りに42cm×66cmの範囲に焼土を認め、床の一部が火熱によって赤褐色の固い面をなし、厚さ2cm～3cmを計り、炭が少量散乱していた。短期間であるが火の使用が認められ、地床炉的なものかと考えられる。



第75—1図 6号(Na27)竖穴

出土遺物 (第75—2図No.1～8 第51表)

环形土器3点(台付坏2)、須恵器蓋1点、鉄製品4点、計8点の実測。他に破片としてロクロ・非ロクロ成形の土師器片(ロクロの方が多)が床面や堆積土中から出土している。また、須恵器蓋は床面からの別個体の破片がもう1点ある。

No.1のA類は堆積土中からの出土。灰黄色を呈す。口径13.9cm、底径8.2cm、器高3.9cmの大きさ。底面に軽いナデがあるが有調整の範囲内ではない。口縁部付近には重ね焼と思われる痕跡が残る。

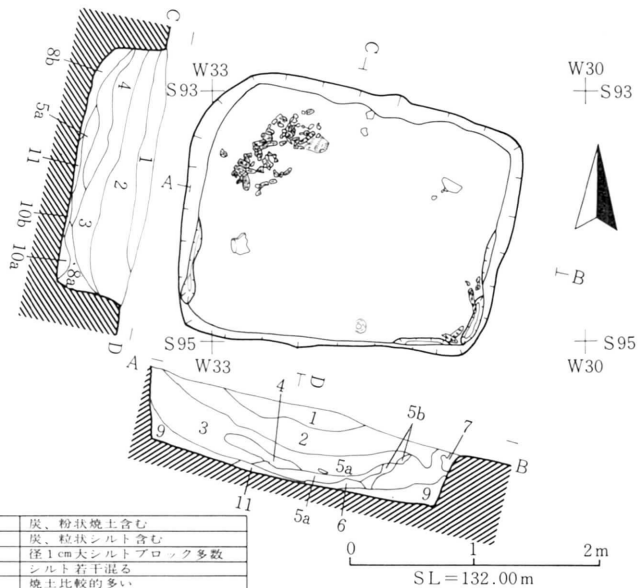
台付坏の2点、鉄製品4点については51表の通りである。尚、攝子が1点出ているが、詳細については別項を参照されたい。

第51-1表 台付坏一覽

実測図番号	写真番号	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)					備 考
					口径	底径	脚径	器高	脚高	
2	216	ヘラ切	—	—	11.2	7.0	(6.0)	5.9	1.1	B類の色調(10YR5にぶい黄橙)硬質。(堆積土)
3	—	不明	—	—	(17.2)	(10.6)	(9.6)	7.2	1.6	(床面)

第51-2表 鉄製品一覽

実測図番号	写真番号	種 別	調存部位	遺存状態	法 量				断面形	備 考
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
5	218	刀子	完形品	比較的良好	204.50	b...11.0 d...7.5	b...3.30 d...4.80	14.60	b...腰形 d...長方形	茎部に木質残存。(床面)
6	219	刀子	完形品	比較的良好	135.50	b...13.0 c...8.70	b...5.0 c...4.90	12.50	b...腰形 c...長方形	茎端部に木質らしきもの残る。(床面)
7	220	撮子	一端欠失	やや不良	65.30	4.90	2.80	4.05	長方形	(床面)
8	221	鉄 鐮	茎部欠失	比較的良好	65.90	a...8.0 b...5.80	a...4.70 b...5.80	5.10	a...紡錘形 d...方形	鐵身長...11.0(14.0)mm



A-B	C-D		
1	10YR5	黒色土	炭、粉状焼土含む
1	"	"	炭、粒状シルト含む
1	10YR5	黒褐色土	黒色土シルト混合
1	10YR5	黒色土	シルト若干混る
5a	"	"	焼土比較的多い
5b	"	"	シルト部分的に含む、焼土なし
6	10YR5	暗褐色土	粘質シルト
7	10YR5	黒褐色土	シルト黒色土の攪乱土
8a	10YR5	黒色土	焼土なし
8b	"	"	下部に焼土を含む
9	"	"	粒状の焼土若干
10a	10YR5	黒褐色土	シルト黒色土混合
10b	"	"	シルト黒色土混合
11	10YR5	"	シルト黒色土の攪乱土

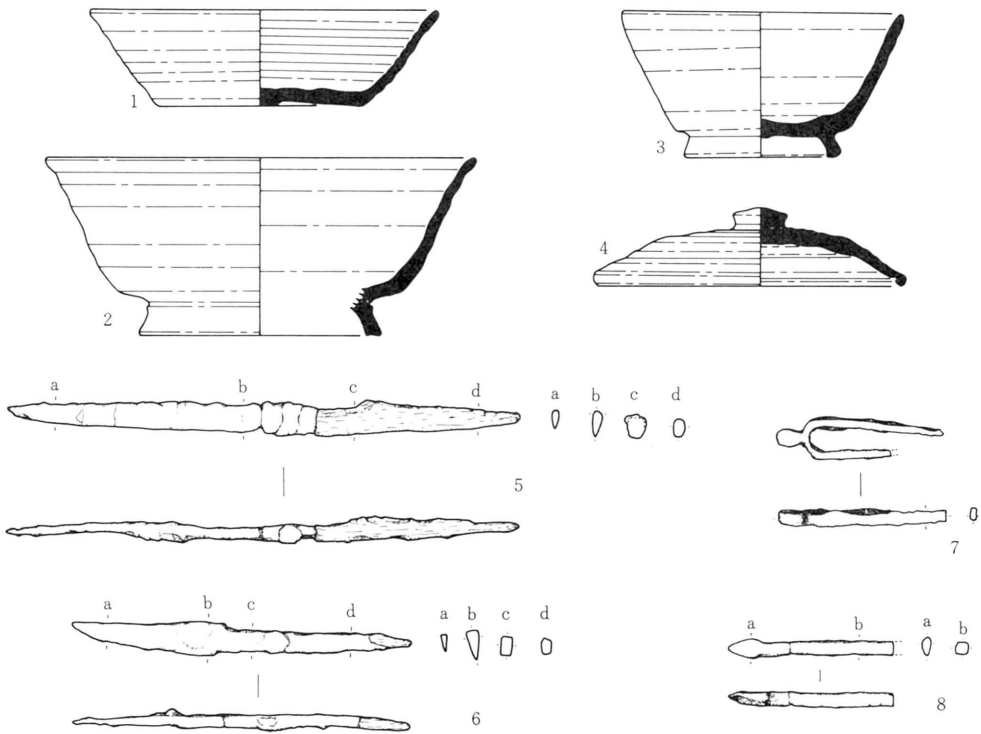
第76図 7号(Pb33)竪穴

7号 (Pb33) 竪穴 (第75-2・76図 第52表 写真図版72)

(重複 増改築) 認められない。

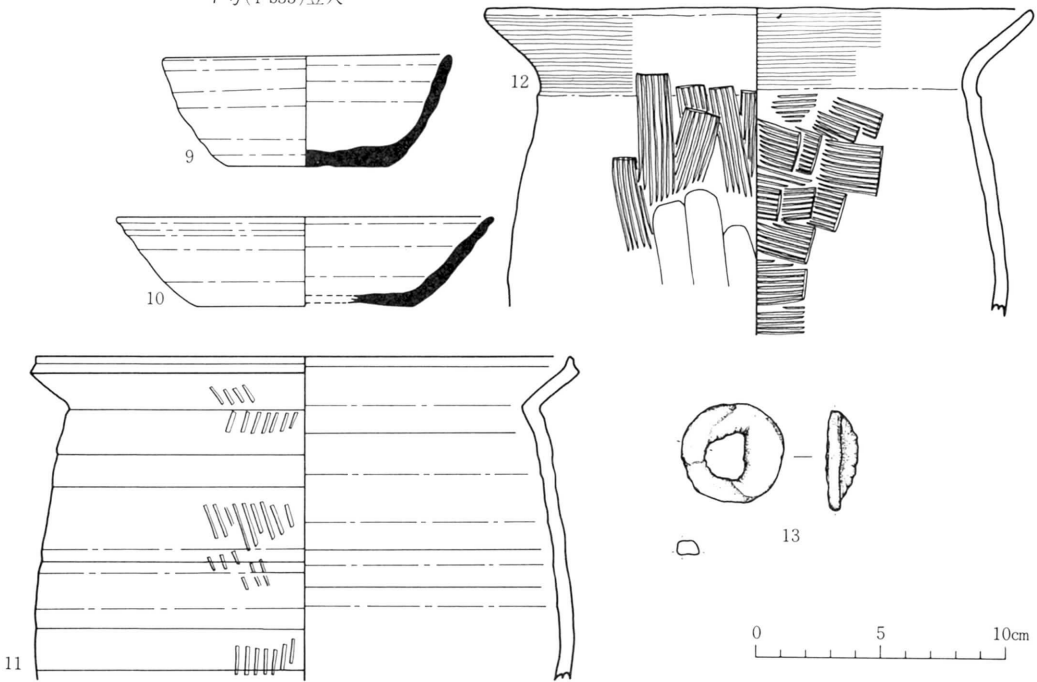
(規模 平面形 方向) 東西2.6m、南北2.1m、面積4.56㎡、西辺に対し東辺が短かくやや歪んだ形の東西に長い長方形を呈し、長軸方向は真北に対し約80°東を向く。

(堆積土) 1層と2層の黒色土; 3層の黒色土とシルトの混合土、4層・5層の黒色土、8



6号(Na27)竖穴

7号(Pb33)竖穴



第75—2图 6号(Na27)·7号(Pb33)竖穴出土遗物

層・9層の黒色土が主体になるが、1層・2層はほぼレンズ状の堆積を示し、8層・9層は床直上から壁へ自然堆積の様相をもつが、3層は多量のシルトブロックを含み、6層とした暗褐色粘質シルトが東壁寄りのみ堆積をみることに、3層の中に入り込む4層のあり方等も含め、3層～5層は人為的な埋土の可能性もある。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは50cm～60cmを計る。

(床) 中央から北東にかけて掘り方あり、他は地山シルトをそのまま床面としており、南西部分は非常に固い面をしている。北西隅に木炭が多量に検出された。なお、中央床面構築土下に現地性の焼土をもったピットを認め火の使用が推察できる。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 南東隅および西壁南半の壁沿いに周溝状の溝があり、幅5cm～10cm、深さ3cm～5cmを計る。

#### 出土遺物 (第75-2図No.9～13)

坏形土器2点、甕形土器2点、鉄製品1点、計5点の実測。他に床面からB類片が1点出土している。またピット内から外面にヘラ削り、内面に刷毛目調整を施す球胴体部片がある。後者の破片には朱塗り様の痕跡がみられる。

No.3は出土層位不明の環状鉄製品。3.9cm径前後のリング状を呈す。膨らんだ部分は錆であり、本来的な形状は断面に示した長方形の規模で構成されるものと思われる。止金具に具されたものであろう。

なお、本遺構からは「ナラ」を原料とした多量の炭化材が出土している。5cm径の円柱形を呈すもの、厚さ2cm弱で幅5cm位の板状を呈すもの等がある。前者については、木炭として生産されたものとみて大過ない。

また、これらの炭化材については分析・鑑定結果の5項を参照されたい。

第52-1表 坏形土器 一 覧

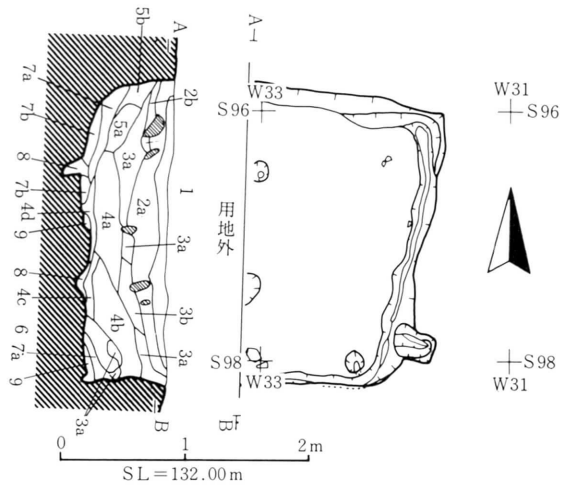
実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(θ°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
9	A 類	ヘラ切	無調整		11.4	6.4	4.5	1.8	2.5	61	完形品。(床面上)	
10	A 類	ヘラ切	磨滅顕著		(15.0)	(8.6)	3.6	1.7	4.2	48.5		

第52-2表 甕形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大胴径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
11		土師器	(22.0)	—	—	—	ロクロナデ ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ ロクロナデ	焼成良。赤褐色。(Q <sub>2</sub> 床面)	
12		土師器	(22.2)	—	—	—	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ	刷毛目 刷毛目 刷毛目	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ	肩部軽い段。灰黄橙色。(床面)	

A-B		
1	10YR <sub>2</sub> 黒色土	炭塵少、砂若干含む
2a	10YR <sub>2</sub> 黒褐色土	粒状焼土若干
2b	10YR <sub>2</sub> 黒色土	
3a	" " "	焼土粒と極少の炭
3b	" " "	3a層より暗い、他は同じ
4a	10YR <sub>2</sub> 黒褐色土	焼土粒あり、炭下部に多
4b	" " "	4a層よりやや明るい
4c	10YR <sub>2</sub> " "	4b層より明るく、しまりなし
4d	10YR <sub>2</sub> " "	4a層よりやや暗く、しまりなし
5a	10YR <sub>2</sub> " "	2a層に限る、やわく砂質シルト含む
5b	10YR <sub>2</sub> " "	" " "
6	10YR <sub>2</sub> " "	砂質シルト黒色土混合 炭若干
7a	10YR <sub>2</sub> 黒色土	シルト黒色土混合 黒色礫植土多量に混入
7b	10YR <sub>2</sub> 黒褐色土	シルト黒色土混合 焼土、炭多量
8	" " "	シルト黒色土混合 焼土粒子を含む
9	10YR <sub>2</sub> 褐色土	砂質シルト 腐植質土若干混入

※木根等による擾乱



第77図 8号 (Pb36) 竪穴

### 8号 (Pb36) 竪穴 (第77図)

(重複 増改築) 西側が調査区外のため詳細は不明だが現状では認められない。また、調査区外にカマドがある可能性もあり、竪穴住居跡になり得ることも否定できない。

(規模 平面形 方向) 東西は不明、南北2.4mあり方形と推察される。南北方向は真北に対しやや東偏する。

(堆積土) 五大別される。すなわち、1層、2層、3層、4層・5層、7層で、床面直上の7層が黒色土とシルトの混土で焼土と炭を多く含むが、他は黒色または黒褐色土で類似する土性であるが、混入物等に差異がある。

(壁) 垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは60cmを計る。

(床) 一部に掘り方をもつが、大部分は地山シルト面を床とし比較的凹凸がある。

(柱穴) P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の柱穴状小ピットがある。P<sub>1</sub>は径15cm深さ25cm、P<sub>2</sub>は径17cm深さ15cmを計るが、いずれも柱穴としての確証はない。

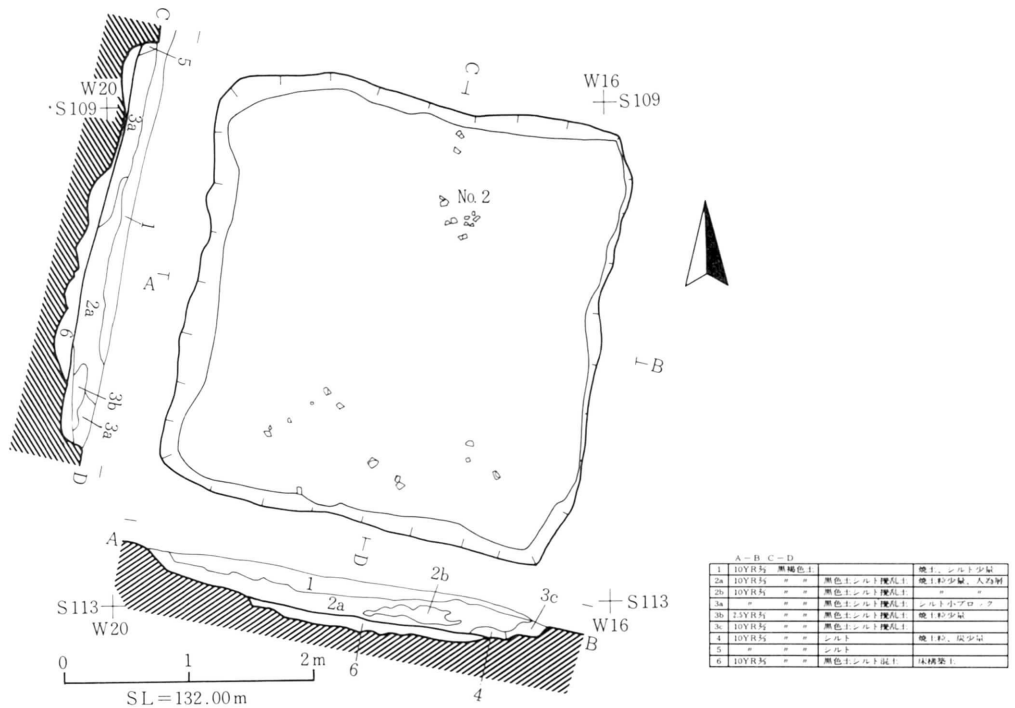
(周溝) 東壁と南壁沿いに幅10cm内外で深さ5cm～12cmほどで認められる。

(その他の施設) 南東隅に方形の張り出しピットがあり、短軸25cm長軸35cmの長方形で深さ40cmを計り、遺物等の出土はなく性格も不明である。

### 出土遺物

破片のみの出土であり、図示できる個体はない。床面からは外面にヘラ削り痕を有す非ロクロ土器器体部片が若干、また堆積土下層から底面にヘラ削り調整を加えるA類底部片が出土している程度である。甕類の破片で明らかにロクロ成形と思われる例はない。





第78-1図 9号 (Pg21) 竪穴

9号 (Pg21) 竪穴 (第78図 第53表 写真図版72)

(重複 増改築) 重複と増改築は認められないが、49号竪穴住居跡の南壁と本竪穴の北壁はほとんど接する状況にある。

(規模 平面形 方向) 東西3.3m、南北3.4m、面積9.60m<sup>2</sup>、ほぼ正方形の平面を呈し、南北方向軸は真北に対し若干東に偏する。

(堆積土) 1層および4層・5層は自然堆積とみられるが、2層・3層は黒色土とシルトの攪拌土で人為的埋土の様相を呈し、一部壁ぎわを除き1層下から床面まで認められる。

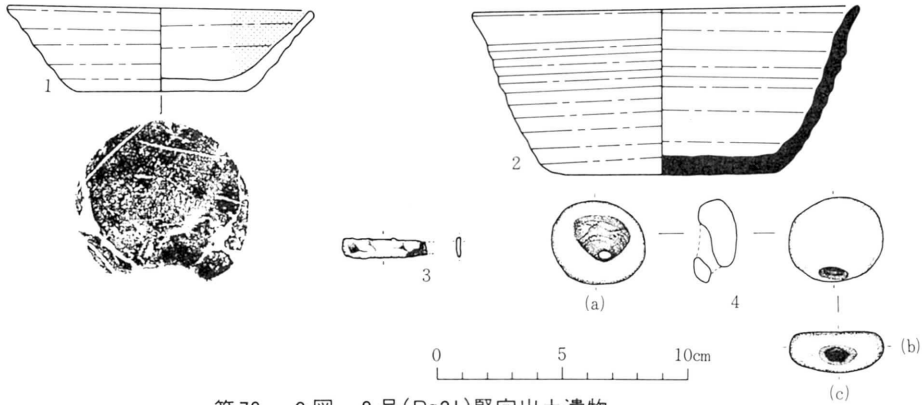
(壁) 南・北壁は比較的垂直に近いが、東・西壁は緩やかに外傾する立ち上がりであり、検出面までの高さは14cm～22cmを計る。

(床) 西壁ぎわは暗黄褐色の地山シルトをそのまま床面とする外は、掘り方をもちシルトと黒色土の混土を用い床面を構築している。南壁寄り中央部に投棄された黒色土混りの焼土を多量に認めた。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(その他の施設) 認められない。



第78—2図 9号(Pg21)竪穴出土遺物

出土遺物 (第78—2図 第53表)

坏形土器2点、石製品1点の実測。甕形土器は、床面乃至は掘り方埋土中に非ロクロを主とした破片が散在する。図示した以外の坏は、床面にヘラ切無調整のA類底部片(底径8cm・灰橙色・硬質)、B類の体部細片2点がみられ、C類は無い。

No.3は出土層位不明の石製品。偏平部分の中央付近から側面のやや上位方向に穿孔が為される。3.3×3.6cm径、厚さ1.7cmの大きさ。にぶい赤褐色を呈す石質細粒凝灰岩を素材とする。石錐と同様の用途に使用されたものであろう。

第53表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(θ°)	備考
						口径(a)	底径(b)	器高(d)				
1	225	C類	調整のため不明	手持ヘラ削り	底部	12.2	6.8	3.5	1.8	3.5	50	(床面)
2	226	A類	ヘラ切	無調整		15.3	9.0	6.8	1.7	2.3	60.5	底部外面に少量の赤色付着物。(床面)

10号 (Pi21) 竪穴 (第61図…P205 写真図版31)

(重複 改築) 52号竪穴住居跡の西壁と本竪穴の東壁が重複し、本竪穴の方が新しい。

(規模 平面形 方向) 東西3.4m、南北2.65m、面積4.94㎡の、ほぼ正方形に近い平面形を呈する。南北方向軸はN-10°-Eである。

(堆積土) 大別三層になる。すなわち、堆積土断面図の10層としたシルト小粒子を含む黒褐色土、11層の径2cm~5cm大のシルトブロックを多量に含む黒色土とシルトの混合土のにぶい褐色土、13層の黒色土とシルトの混合土にシルトブロックを含む暗褐色土とが主体となり、11層等では、シルトブロックの混在のあり方は攪拌状とも推察され、人為的な可能性もある。

(壁) 東壁に部分的にシルトを用いた貼り壁が認められた。全般に垂直に近い立ち上がりで検出面まで30cmの高さを計る。

(床) 全般に掘り方技法により、黒色土とシルトの混土を用いて構築し、床面の凹凸は認められないが西方へ若干低くなる。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 四壁沿いに認められ幅15cm深さ15cmほどである。

(その他の施設) 認められない。

### 出土遺物

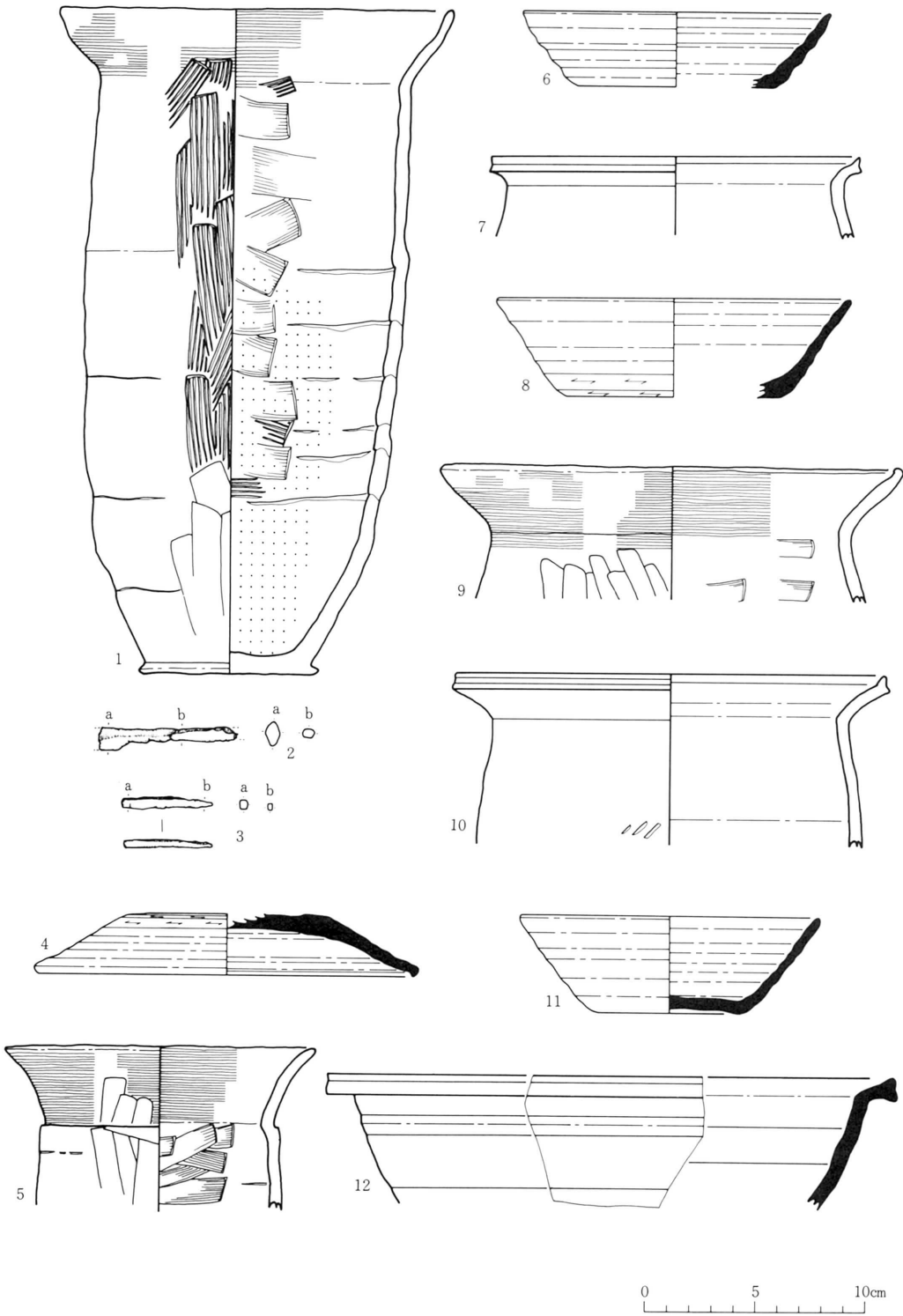
破片のみの出土であり、図示できる個体はない。外面に刷毛目を有す非ロクロ土師器片、叩目を有すロクロ成形土師器片等があるが何れも堆積土中からの出土である。非ロクロ土師片中には球胴形を呈すと思われるものもある。須恵器やその他の製品は皆無である。

### (3) 未精査遺構出土遺物 (第79-1・2・3 図 第54表)

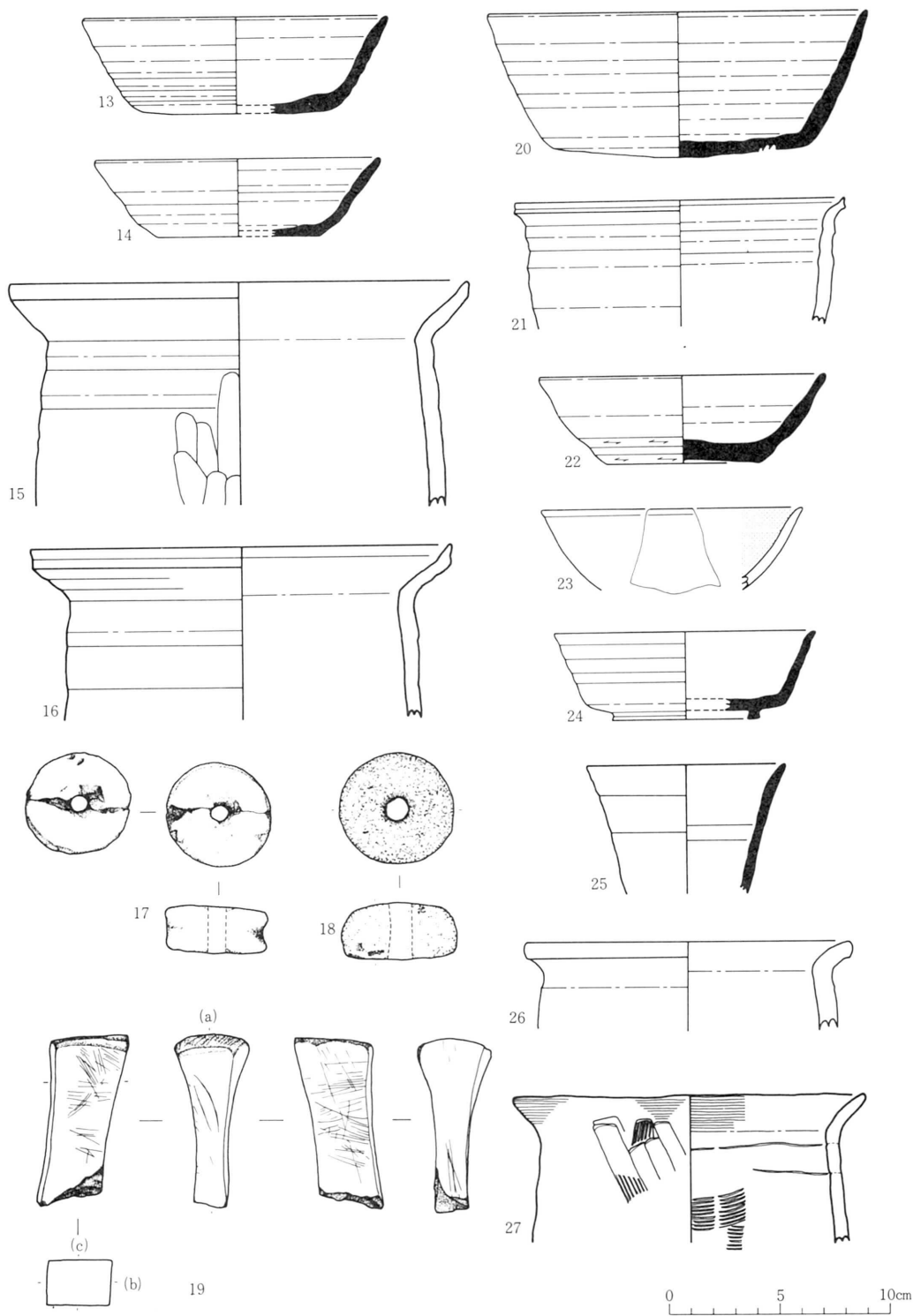
本遺跡内では、既述のように検出面まで表土を剥いだ段階で保存処理をした一部遺構がある。第79-1・2・3 図はその対象になった遺構のうち、住居跡内の堆積土上で採集可能な遺物分についてのみ掲載したものであるが、本項では未精査遺構出土遺物として一括記載する。また、図版上では、遺跡内北側遺構からの出土遺物から南側のそれまでの遺物を順に示しているが、説明の多くは一覧表を以って替えることとし、各遺構内のセット関係等の詳細については特に触れない。

なお、記載の遺物を出土している遺構は下記に示した竪穴住居跡22棟である。

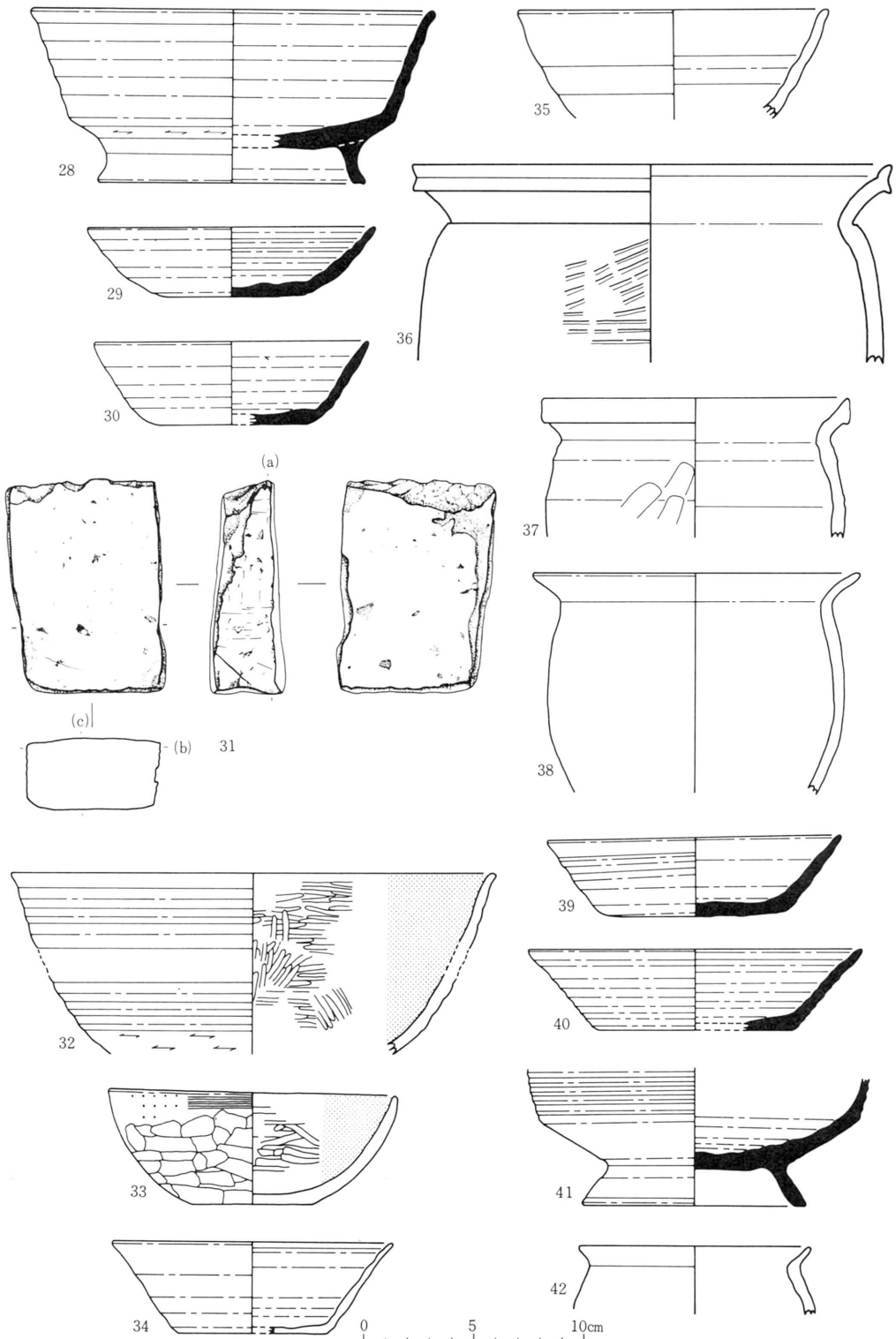
67号(Dc12) 竪穴住居跡…第79-1 図No.1～3	68号(Df15) 竪穴住居跡…第79-1 図No.4
70号(Dg12) 竪穴住居跡…第79-1 図No.5	73号(Dg24-2) 竪穴住居跡…第79-1 図No.6
72号(Dg24-1) 竪穴住居跡…第79-1 図No.7	71号(Dh15) 竪穴住居跡…第79-1 図No.8
76号(Di59) 竪穴住居跡…第79-1 図No.9・10	94号(Ff50) 竪穴住居跡…第79-1 図No.11・12
104号(Fi74) 竪穴住居跡…第79-2 図No.13～15	110号(He77) 竪穴住居跡…第79-2 図No.16
109号(Hf71) 竪穴住居跡…第79-2 図No.17～19	120号(Hj09) 竪穴住居跡…第79-2 図No.20
111号(Ia77) 竪穴住居跡…第79-2 図No.21	113号(Ic65) 竪穴住居跡…第79-2 図No.22～24
114号(Id71) 竪穴住居跡…第79-2 図No.25～27	118号(Ie06) 竪穴住居跡…第79-3 図No.28
147号(Jg06) 竪穴住居跡…第79-3 図No.29～31	130号(Jh33) 竪穴住居跡…第79-3 図No.32
144号(Ka15) 竪穴住居跡…第79-3 図No.33	143号(Kb09) 竪穴住居跡…第79-3 図No.34
142号(Kc06) 竪穴住居跡…第79-3 図No.35～37	138号(Ki12) 竪穴住居跡…第79-3 図No.38～41
152号(Jf65) 竪穴住居跡…第79-3 図No.42	



第79—1图 未精查竖穴住居跡出土遺物



第79—2图 未精查竖穴住居跡出土遺物



第79—3图 未精查竖穴住居跡出土遺物

第54-1表 坏形土器 一覧

遺構名	実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法決量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備考
							口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
73号(Dg24-2) 住	6	—	A類	ヘラ切	無調整		(14.0)	(9.0)	3.4	1.6	4.1	54	
71号(Dh15) 住	8	—	A類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	(16.0)	(9.8)	4.5	1.6	3.6	55	外面に多量のカーボン付着。
94号(Ff50) 住	11	—	A類	回転糸切	無調整		(13.6)	6.4	4.4	2.1	3.1	50.5	
104号(Fi74) 住	13	—	A類	ヘラ切	無調整		(13.6)	(8.6)	4.4	1.6	3.1	59	(堆積土)
	14	—	A類	ヘラ切	無調整		(13.8)	(7.4)	3.6	1.9	3.8	52.5	(堆積土)
113号(Ic65) 住	22	—	A類	回転糸切	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	(13.0)	7.0	4.0	1.9	3.3	53.5	底部調整外周のみ。
	23	—	C類	底部欠失	—	—	(11.8)	—	—	—	—	—	(堆積土)
147号(Jg06) 住	29	—	A類	ヘラ切	無調整		(13.0)	7.2	3.2	1.8	4.1	46	
	30	—	A類	ヘラ切	無調整		(13.4)	(7.0)	3.8	1.9	3.5	54	
130号(Jh33) 住	32	—	C類	底部欠失	回転ヘラ削り	体部下端	(22.0)	—	—	—	—	—	(堆積土)
144号(Ka15) 住	33	—	D類	非ロクロ	手持ヘラ削り	外面	13.0)	5.6	5.3	2.3	2.5	54	外面調整、口縁はヨコナデの後ヘラ削りか？
143号(Kb09) 住	34	—	B類	ヘラ切	無調整		(12.6)	(6.8)	4.2	1.9	3.0	55	色調10YR%浅黄橙色。(堆積土)
142号(Kc06) 住	35	—	B類	底部欠失	—	—	(14.0)	—	—	—	—	—	軟質。(堆積土)
138号(Ki12) 住	39	—	A類	ヘラ切	無調整		13.3	8.2	3.7	1.6	3.6	54	
	40	—	A類	ヘラ切	無調整		(15.2)	(8.8)	3.7	1.7	4.1	49.5	

第54-2表 甕形土器 一覧

遺構名	実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備考	
				口径	底径	器高	最大口径	口縁部	体部	口縁部	体部		
67号(Dc12) 住	1	—	土師器	(17.8)	8.0	29.9	(14.8)	ヨコナデ	刷毛目+ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部無段。巻上げ。内面黒変。煙道部に使用。%反転。	
70号(Dg12) 住	5	—	土師器	(15.0)	—	—	—	ヨコナデ 一部 ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部段明瞭。小型。	
72号(Dg24-1) 住	7	—	土師器	(16.9)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。	
76号(Di59) 住	9	—	土師器	(21.1)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部無段。内面黒変。胎土粗。	
	10	—	土師器	(20.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ+叩目	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土粗。反転復元。	
104号(Fi74) 住	15	—	土師器	(20.9)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土粗。反転復元。	
110号(He77) 住	16	—	土師器	(19.0)	—	—	—	ロクロナデ	木口利用のナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	木口利用のナデ	胎土粗。反転復元。	
111号(Ia77) 住	21	—	土師器	(15.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	凹凸目立つ。	
114号(Id71) 住	26	—	土師器	(15.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	小型甕。胎土精良。	
	27	—	土師器	(16.0)	—	—	—	ヨコナデ	刷毛目+ヘラケズリ?	ヨコナデ	刷毛目	反転復元。巻上げ。	
142号(Kc06) 住	36	—	土師器	(21.9)	—	—	—	ロクロナデ	横位叩目	ロクロナデ	ヘラナデ?	黒変部あり。	
	37	—	土師器	(14.0)	—	—	—	ロクロナデ	叩目+ヘラケズリ	ロクロナデ	一部カキ目	巻上げ。小型。	
138号(Ki12) 住	38	227	土師器	(15.0)	—	—	(13.3)	ロクロナデ	ヘラケズリ	不	不明	不明	反転復元。剝離・磨滅。

甕形土器については以上13点である。出土状況については、No.1を除き既述の通りである。No.1については若干の補則を加える。この遺物は67号(Dc12) 竪穴住居跡出土で、南壁東側寄りカマドに付属する煙道部内からの出土である。煙出し部分の起上がり部分に転用されていたもので、内面には多量の煤が付着している。また、遺物そのものも縦に割った形の残存状態であり、意図的に判割したものと推される。

須恵器蓋は、68号(Df15) 竪穴住居跡出土のNo.4がある。ツマミ部分を含めて1/2弱の欠損。反転復元に依る推定口径は17.5cm位。台付坏はNo.20・23・28・41の4点。小型・大型の2タイプがある。また、No.12は須恵器の鉢形土器である。破片からの復元であるが、硬質・精良の胎土。

鉄製品は、67号(Dc12) 竪穴住居跡内からの3点のみであるが、図示したのはNo.2・3の2点である。No.2は、鍬身端部が欠失した鉄鍬と推される。No.3は角釘のようでもあるが、不明製品である。

石製品は、109号(Hf71) 住より2点、147号(Jg06) 住より1点、合計3点の実測。No.18は輝石安山岩を素材とする紡錘車。No.19、31の2点は、斜長石流紋岩を素材とする砥石である。

土製品は、109号(Hf71) 住出土No.17の1点。4.6cm径の紡錘車である。

### 3 井戸

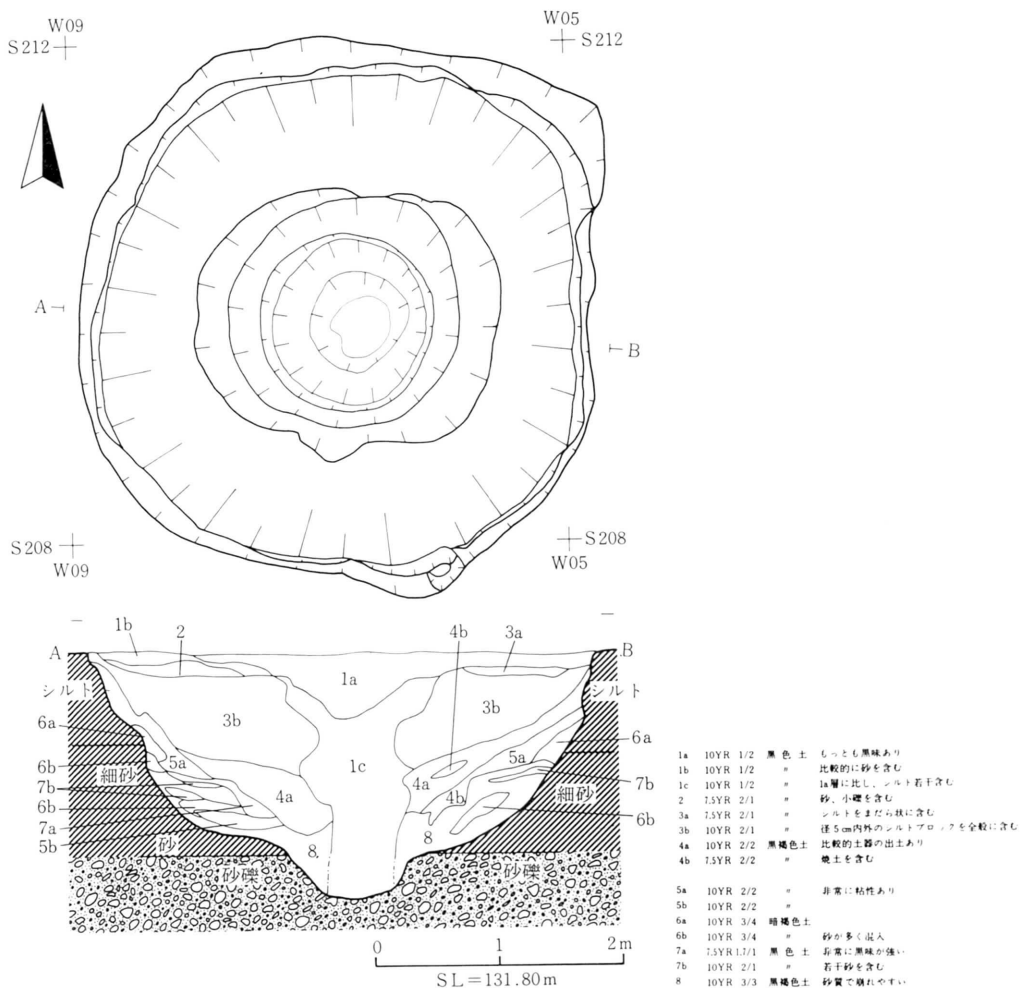
#### 1号(Sj09) 井戸 (第80図 第55表 写真図版36)

(重複) 他遺構との重複は認められない。

(規模 形態) 井戸掘り方の開口部は、東西4.30m、南北4.10m、底部は東西、南北ともに0.5mを計り、開口部、底部とも平面形は円形を呈し、検出面からの深さは2.0mで底部は砂礫層まで達している。掘り方は壁が比較的急傾斜を示し掃鉢状を呈するが、検出面から1.40m～1.50mで壁の緩傾斜部分があり、二段掘りの形跡が認められる。

(堆積土) 井戸埋没後の凹みに堆積したとみられるのが1 a層と1 b層の黒色土であり、井筒内の堆積土が1 c層の黒色土であって、ほぼ円筒状を呈するが壁の崩壊のためか出入りがある。1 c層の下層は湧水のため観察不可能であった。砂と小礫を含む2層、シルトを含む3層の黒色土があり、特に3 b層は大きなシルトブロックが全般に入る。4層は比較的土器片を含む黒褐色土で、5層は粘性の強い黒褐色土となり、6層から8層までの暗褐色土、黒色土、黒褐色土はほぼ一括される堆積で、7層を除き砂が多く混入する。なお、4層～8層は、中心へ流れこむ。





第80-1図 1号(Sj09)井戸

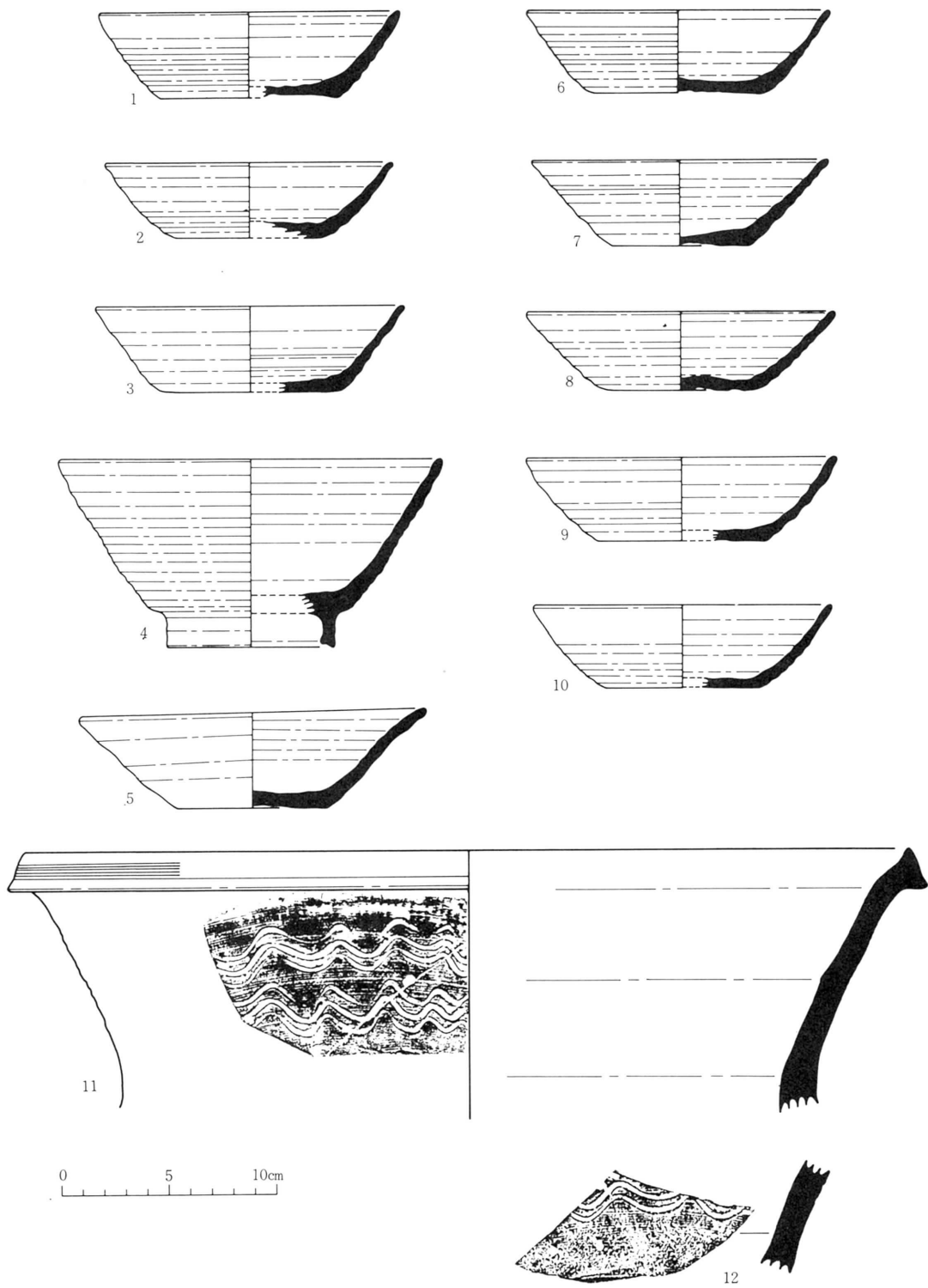
以上の堆積土は、1a層・1b層・1c層は自然営力による堆積で、3層～8層は、井筒を固定するための人為的埋土層と想定される。

(井筒と付属施設) いずれも認められない。堆積土1c層の状況から井筒の使用が想定される。

#### 出土遺物 (第80-2図・第55表)

環形土器10点(台付坏1)、須恵器甕拓影図2点を図示している。何れも還元焰焼成に依る須恵器である。このうちNo.11は埋土上部、No.12は底面近くからの出土であるが、同一個体と思われる。環形土器の出土は埋土中からのもので占められるが、壁際に寄っている場合や遺構中央部の下層に存在する場合等がある。

No.11は推定口径43cm大の口縁部破片である。頸部に三条の波状紋が二段に繞る。頸部と体部の接点近くの器肉は1.7cm前後の厚さとなる。他に須恵器大甕の体部片が多量に出土している。井戸内に投棄された遺物と思われる。



第80—2图 1号(Sj09)井戸出土遺物

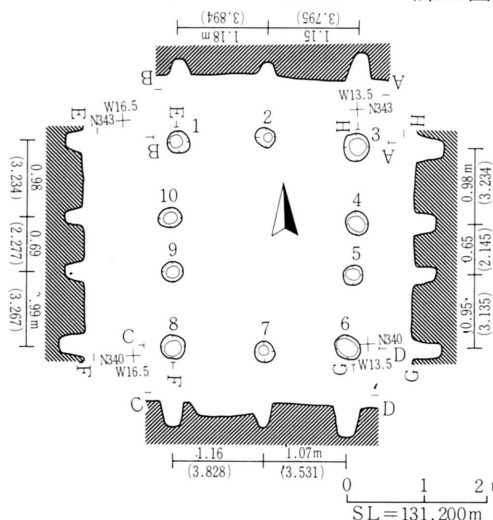
第55表 坏形土器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度 (θ°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.0)	( 8.2)	4.0	1.7	3.5	54.5	(埋土)
2	—	A 類	ヘラ切	底部残存小	—	(13.4)	( 6.8)	3.5	2.0	3.8	47	(壁面付近)
3	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.2)	( 8.4)	4.0	1.7	3.6	53.5	(壁面)
4	—	台付不	不 明	/	/	(17.6)	$\left\{ \begin{matrix} 8.8 \\ 7.8 \end{matrix} \right\}$ (脚径)	$\left\{ \begin{matrix} 8.8 \\ 1.6 \end{matrix} \right\}$ (脚高)	/	/	/	(埋土)
5		A 類	ヘラ切	無調整	/	16.0	7.0	4.6	2.3	3.5	45	やや軟質。(埋土)
6	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.0)	7.8	3.9	1.8	3.6	51	(壁面)
7	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	6.4	4.0	2.2	3.5	47	(埋土)
8	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.2)	7.6	3.7	1.9	3.8	46.5	(埋土)
9	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(14.4)	( 7.8)	3.9	1.8	3.7	50	磨滅気味。(埋土)
10	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	( 7.2)	3.9	1.9	3.5	49.5	(埋土)

#### 4 掘立柱建物跡

推定される建物を含めて16棟である。北側のA～Bブロックに7棟が集中し、他はI～Pブロックに点在する。以下はいずれも地山面に検出されるものである。なお遺物は本項の最後に一括する。

1号 (Af18) 掘立柱建物跡 (第81図 第56表 写真図版37)



第81図 1号 (Af18) 掘立柱建物跡

東西2.32m (7.640尺) 2間、南北2.48m (8.185尺) 3間のもっとも小規模な建物である。建物方向はN-4.0°-Eを計る南北棟である。柱配置は東面に僅かに広がるが、整然とした配列を示す矩形の建物である。

柱間は東西方向が1.07 (3.351尺)～1.18m (3.894尺)の等間である。南北方向では南北端各1間が0.95 (3.135)～0.99m (3.267尺)の等間となるが、中央1間が0.67m (4.422尺)でやゝ狭い。

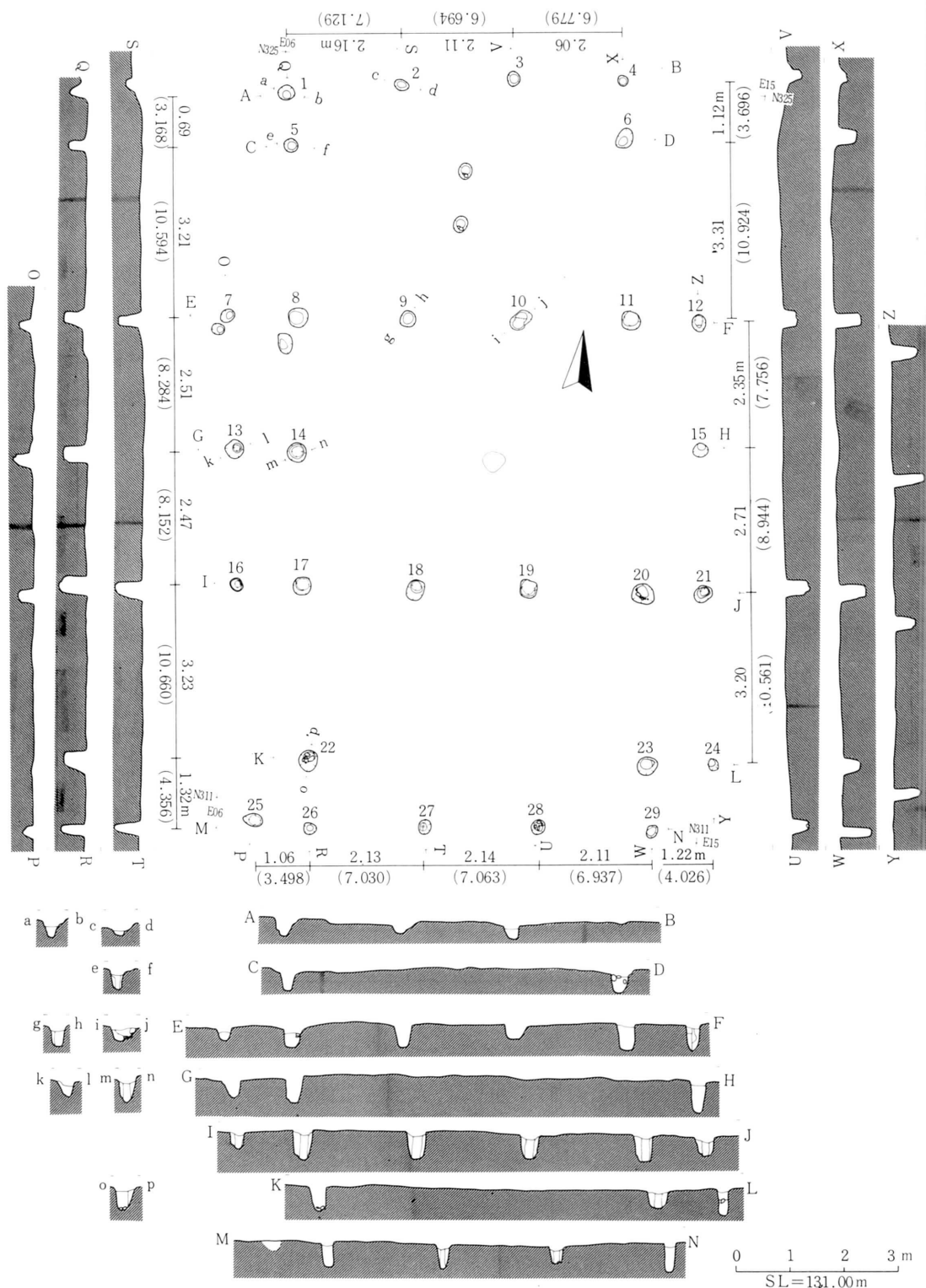
掘り方は径0.25～0.35mの円形をなし、深さは0.16～0.40mを計り、4隅に大きく深い。柱痕は2柱穴に判明し、径0.10～0.15mの円形である。柱穴の埋土は記載がなく、不明である。

第56表 1号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱径	備考	柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱径	備考
1	28×29cm	24cm	131.02m	130.78m	cm		6	32×30cm	40cm	131.06m	130.66m	cm	
2	26×24	16	131.00	130.84			7	25×27	32	131.08	130.76		
3	34×35	39	131.05	130.66	15		8	30×30	34	131.10	130.76		
4	30×30	29	131.06	130.77			9	28×28	27	131.10	130.83		
5	25×25	28	131.04	130.76	10		10	30×25	25	131.07	130.82		

2号 (Bb53) 掘立柱建物跡 (第82図 第57表 写真図版37)

東西8.74m (28.845尺) 5間、南北13.89m (45.825尺) 6間のもっとも規模の大きい建物である。建物方向はN-7.4°-Wの南北棟である。柱配置は全体に矩形をなすが、建物東・西面の北、または南北端に側柱が認められず、北2間は東西方向3間となって張り出す。内部は南北方向を3分して配列される。また、北2間の張り出しには東西を2分する柱穴があるが、伴う柱穴が明確でない。東西方向では側柱に沿って入側柱列がほぼ対応し、狭い柱間となる。これを底とみるならば身舎の東西方向は6.27m (20.693尺) 3間、同様に南北両端を除く南北方向は



第82图 2号 (Bb53) 掘立柱建物跡

11.59m (38.251尺) 4間となる。

東西方向の柱間は東・西両端の各1間が1.06 (3.498) ~1.26m (4.158尺)、他は2.06 (6.799) ~2.16m (7.129尺) である。内部3間の総長では6.26 (20.660) ~6.38m (21.056尺) でそれぞれ等間となる。

南北方向では南・北端各1間が0.96 (3.168) ~1.32m (4.356尺) でもっとも狭く、東・西端1間に一致する。中央2間は2.47 (8.152) ~2.71m (8.944尺)、他の2間は3.20 (10.561) ~3.31m (10.924尺) のそれぞれ等間である。そのほか、間柱の認められない2間相当の柱間では4.37 (14.422) ~4.58m (15.116尺) と4.94 (16.304) ~5.12m (16.898尺) で対応する柱間である。

掘り方は径0.17~0.45mの円形、または不整な楕円状を呈し、深さは0.16~0.59mを計る。比較的側柱柱穴に小さく、特に北面に浅い。P30~33は深さ0.12~0.14mでもっとも浅く、建物に伴う柱穴か疑問が残る。柱痕は径0.10~0.21mで極めて不揃いである。埋土や遺物については明らかでない。

建物敷地内に検出される遺構には22号焼土遺構がある。建物中央部に位置するが、共伴する遺構が明らかでない。

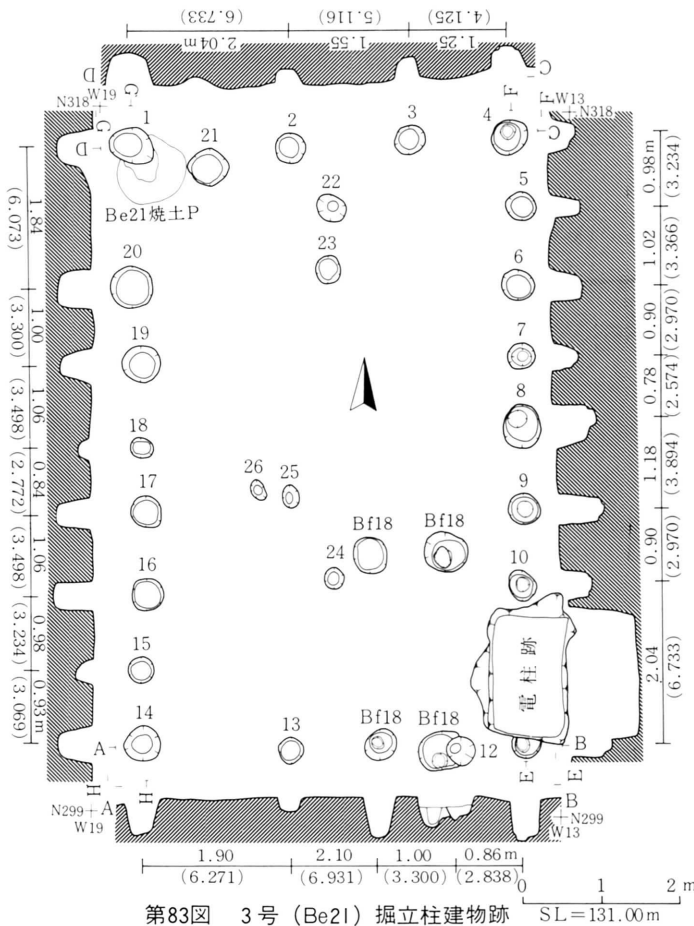
第57表 2号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱痕径	備考	柱穴番号	検出面の径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱痕径	備考
1	33×33cm	36cm	130.81m	130.45m	cm		18	34×36cm	48cm	130.81m	130.33m	19cm	
2	29×22	16	130.68	130.52			19	31×32	43	130.74	130.31	19	
3	22×29	26	130.67	130.41			20	42×39	48	130.74	130.26	19	
4	20×19	14	130.70	130.56			21	34×32	38	130.70	130.32	18	
5	30×25	37	130.80	130.43	10		22	35×37	46	130.81	130.35	21	
6	31×37	41	130.80	130.39			23	39×34	34	130.69	130.35	19	
7	25×30	23	130.77	130.54			24	17×25	48	130.72	130.24		
8	35×36	36	130.75	130.39			25	38×22	19	130.76	130.57		
9	29×29	42	130.78	130.36	20		26	24×21	46	130.72	130.26		
10	25×45	27	130.78	130.51			27	22×26	50	130.76	130.26	15	
11	32×33	49	130.81	130.32			28	25×30	35	130.65	130.30	15	
12	25×30	51	130.78	130.27	15		29	20×22	59	130.73	130.14		
13	33×33	35	130.76	130.41			30	24×20	14	130.71	130.57		
14	33×35	49	130.83	130.34	18		31	25×40	14	130.78	130.64		
15	29×26	59	130.73	130.14			32	27×29	12	130.80	130.68		
16	24×25	36	130.78	130.42	15		33	25×30	12	130.80	130.68	17?	
17	30×33	51	130.77	130.26	17								

3号 (第Be21) 掘立柱建物跡 (第83図 第58表 写真図版37)

東西4.85m (16.018尺) 3間、南北7.75m (25.578尺) 7間の南北棟である。建物方向はN-2.1°-Wを計る。柱配置は電柱敷設によって一部明確でないが、側柱が殆ど対称をなし、全体に矩形を呈する。内部柱穴は東西方向に2分する3柱穴とこれより西寄りに1柱穴が認められる。

柱間は東西方向3間のうち西2間が1.55 (5.116) ~2.10m (6.931尺)、東1間が0.86 (2.838) ~1.25m (4.125尺) で不揃いとなるが、総長では4.80 (15.842~4.93m16.271尺) で殆ど差異がない。また、内部柱穴の柱間ではP22-5、P20-23、P23-6、P16-24、P24-10の5



第83図 3号 (Be21) 掘立柱建物跡

間が2.39 (7.888) ~2.51 m (8.284尺) の等間をなす。そのほか、P17—25—9は1.82 (6.007) —3.04m (10.033尺) である。P25に近接するP26は0.42m (1.386尺) の柱間を計るが、不揃いで伴うものか明らかでない。

南北方向の7間は東面の北6間が0.78 (2.574) ~1.18m (3.894尺)、南端1間が2.04m (6.733尺) であり、西面では南6間が0.84 (2.772) ~1.06m (3.498尺)、北端1間が1.84m (6.073尺) である。狭い柱間12間の平均では0.97m (8.196尺)、これ

より広い南・北端2間では1.94m (6.403尺) となる。

柱穴の掘り方は径0.28~0.56mの円形、または楕円形を呈する。深さは0.17~0.54mを計り、東面を除く3面のP2、12、13、15、18では著しく浅い。柱痕は東面の柱穴によって径0.12~0.18m前後と推定される。

重複する建物には4号掘立柱建物があり、南面のP12を切って3号掘立柱建物より新しい。

第58表 3号掘立柱建物跡柱穴計測表

柱穴番号	検出面径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱痕径	備考	柱穴番号	検出面径	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	柱痕径	備考
1	55×45cm	44m	131.25m	130.81m	cm	Be21焼土Pitより新しい	14	45×45cm	46cm	131.13m	130.67m	cm	
2	37×40	21	131.28	131.07			15	32×34	22	131.16	130.94		
3	40×37	25	131.24	130.99			16	40×40	54	131.18	130.64		
4	45×45	29	131.17	130.88			17	38×40	46	131.16	130.70		
5	38×36	42	131.24	130.82			18	28×23	17	131.18	131.01		
6	42×39	39	131.22	130.83			19	50×47	41	131.21	130.80		
7	35×33	31	131.24	130.93			20	53×54	50	131.25	130.75		
8	45×56	56	131.27	130.71			21	55×50	16	131.28	131.12		
9	39×37	58	131.20	130.62			22	38×36	35	131.29	130.94		
10	35×40	37	131.16	130.79			23	33×34	33	131.29	130.96		
11	37	54	131.21	130.67		北半は破壊	24	25×27	11	131.19	131.08		
12	35×37	23	131.16	130.93		4号建物柱穴No.13より新しい	25	20×29	15	131.20	131.05		
13	32×34	19	131.14	130.95			26	20×25	14	131.20	131.06		